大濱喜作

△帝都診療界に於ける私立病院中、小兒科を以て斷然頭角を拔くは、歷史ある神田區駿河臺の瀨川小兒病院に亞ぐものなからん、院長は人も知る斯科の泰斗瀨川昌世博士にして、克く院長を補翼するに副院長として大濱喜作博士あり。博士は千葉醫專の出身にて、小兒科を以て立ち、慶大より學位を得たる少壯の名醫博也。玲瓏たる打診の評判は良好にして、院長の聲望と相俟つて益々人氣を博す。

△顧みて博士の學歷及び閱歷を公開すれば、博士は大正八年千葉醫專卒業後、直ちに瀨川小兒病院に勤務、大正十二年震災後同病院の副院長を勤め、大正十五年より慶應大學醫學部藥物學教室に入り、阿部教授指導のもとに研究し、昭和七年二月學位獲得後も引續き瀨川小兒病院副院長を勤務し現今に至る。

△主論文は『「アンチビリン」ノ反對作用ニ就テ』にして、參考論文は、(1)小兒結核症ノ臨床的觀察、(2)乳幼兒粟粒結核ニ就テ、(3)小兒特發性氣胸ニ就テの三篇なり。斯間、瀨川昌世博士及び阿部勝馬教授より受けたる指導薰陶に負ふ所多し。

△愛媛縣周桑郡壬生川町大濱嘉太郎の四男にして、明治二十八年生る、當年四十有一歲也。學究的溫厚の紳士、手腕今や壯熟の域に入り最も得意時代に在り。「醫は仁術也」を以て任じ、其の態度の眞摯にして溫味靄々たるは、好箇の臨味家として其の高邁なる人格を景仰せしむるの德を有す。博士に三兒あり、長兒石太郎は陸軍少將にて死亡、中兒龜太郎は實業肥料會社重役、末兒十龜盛治（妻の義兄）は住友銀行重役なり。神田區駿河臺二丁目八に住む。

◇

星直利

△大連市若狹町三五星小兒科醫院長として活躍し、手腕名望相俟つて嘖々たる好評を博し、當地診療界に於ける名醫博としての存在を認められつゝあるは星直利博士也。滿洲醫大出身の異才にして、小兒科を以て立ち、京都帝大教授鈴木正博士、及び同服部博士に師事して研究の結果、京都帝大より學位を得たる近來の少壯醫博也。

△博士は大正十三年滿洲醫大卒業、直ちに大連醫院小兒科勤務、昭和四年六月滿洲醫大より京都帝大醫學部小兒科教室に小兒科學研究の爲め留學を命ぜらる、同五年六月龍山鐵道醫院小兒科醫長に就任、同七年三月學位を受領す、次で現住地に開業今日に至る。

△主論文は「小兒赤痢及疫痢ニ關スル臨床的實驗的研究」にして、參考論文は、(1)小兒赤痢ニ關スル論文四篇、(2)小兒心臟疾患ニ關スル論文六篇、(3)細胞毒素免疫血清ノ特異性、(4)「レントゲン」線ノ發育ニ及ボス影響、(5)傳染性紅斑ニ就テ、(6)「アドレナリシ」ト「アセトシ」量トノ關係、以上十五篇なり。就中小兒の赤痢及疫痢に關する論文（臨床的五篇、實驗的五篇）は博士會心の作にして學界に重要せらる。又た「傳染性紅斑ニ就テ」は世界に誇る論文として既に定評あり。近時朝鮮人小兒發育に關する朝鮮最初の研究發表（四篇）あり。其の他部下の少壯醫師を指導して猩紅熱に關する研究、內分泌に關する研究、並に小兒赤痢等に關して研究發表多數の論文あり。

△福島縣若松市行人町星武次郎の三男にして、明治三十二年生る。當年三十有七歲、少壯精英にして手腕漸く壯熟の域に入る、特に小兒の赤痢及び疫痢は博士の最も得意とする所にして、博士獨特の評判嘖々たるものあり。文學趣味豐かにして音樂を好み、又た運動、旅行を樂しむ。學究的好箇の臨床家として更に將來の大成を期待す。

◇

高橋次郎

△東京市神田區駿河臺三樂病院小兒科に在る高橋次郎博士は、東京帝大の出身にて、小兒科界現代の權威、栗山重信博士門弟中の新智識として知られ、恩師の親しき指導を受けて斯學の蘊奧を究め、學位論文「赤血球新生機能並ニソノ刺戟ニ對スル反應ノ年齡的差異」（參考論文なし）を完成して、母校より學位を獲得せる少壯有爲の臨床家にして、軈て輝しき前途の展開を囑望すべき新人物たるを推奬すべき也。

也。

△博士は第一高等學校（大正十一年卒業）を經て、大正十五年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに副手として小兒科教室に入り、現職に就任する迄研究に從事す、昭和七年三月學位を受領せり。

△博士の出身地は東京市大森區東調布町にして、明治三十四年高橋本枝の二男に生る、年齒未だ三十有五歲の少壯也

△博士は宮城縣立佐沼中學を經て、臺北醫專に入り大正十五年卒業、直ちに臺北醫院小兒科に入り昭和四年二月迄勤務す、同年三月東北帝大醫學部副手として小兒科教室に勤務、同七年四月學位受領、同年五月同大學講師囑託となる同六月東京市醫員に任ぜられ廣尾病院勤務今日に至る。

△主論文『「ヴヰタミン」B缺乏症ト「ベルオキシターゼ」反應トノ關係ノ研究』原著は英文にして二篇より成る。

參考論文は、(1)幼兒ノ頑固ナル下痢ニ對スル「ヤクリトン」ノ効果、附「ヤクリトン」ノ「ヴヰタミン」動員作用、(2)含鉛膏劑ニヨル所謂腸膜炎ノ一例、(3)健康乳兒ニ於ケル荒川氏反應檢査成績、(4)幼小兒ノ十二指腸蟲病ニ關スル知見補遺、(5)小兒腸「チフス」及ビ「パラチフス」ノ統計觀察、外英文三篇あり。

△博士は宮城縣登米郡寶江村の人、千葉儀一郎の四男にして、明治三十七年生る。當年未だ三十有二歲の少壯なるが醫專出身の學徒にして、而かも三十歲未滿の年少を以て學位を獲得せるは、年來稀に見る所也。其の篤學に輝く不撓不屈の精神氣慨は頂門の一針として學ぶべき也。春秋頗る豐富にして、光る學位の前途は猶洋々として、博士の將來を語るに餘裕綽々たり。人と爲り眞摯にして、溫愛の情豐かなる打診の態度は、良く博士の人格を語るに足る。澁谷區代々木山谷町一七五に住む。

◇

岡崎正　△門司市新町三丁目に岡崎小兒科醫院を獨立經營して、日々診療に精進しつゝあるは岡崎正博士也。大正十二年長崎醫大專門部の出身にして、昭和三年九月迄福岡縣田川郡後藤寺町三井醫局に奉職、昭和三年より再び母校にて藥物學並に小兒科學研究、昭和七年七月長崎醫大にて學位授與せらる。

△學位論文は『血液中ノ「コレステリン」並ニ「カルミューム」ノ消長ニ及ボス卵巢「ホルモン」並ニ腦下垂體後葉「ホルモン」ノ影響ニ就テ』にして、參考論文なし。もと〳〵門司市の人、明治三十三年生る、當年三十有六歲也。

◇

室橋民衛　△東京市麴町區下二番町四八に歷史あり著名なる木澤病院あり、小兒科界に拔くべからざる勢力を有し成功の地位に在り、院長室橋民衛博士の經營にして內部の設備充實す。學系より見たる博士は、東京帝大派の名醫博にして小兒科の大家として其の手腕を認めらる。大正五年東大卒業、同九年より十二年迄歐洲に留學、歸朝後同十二年十一月より現木澤病院長として就任今日に至る、先是大正十二年八月東京帝大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は「石鹼便及乳兒糞便中ノ石鹼ニ就テ」にして、著書「乳兒石鹼便ニ就テ」あり。公職として市醫師會

豫備議員、區醫師會醫政部調査委員、麴町健康相談所顧問等にあり。戸外運動を趣味とす。群馬縣の出身、明治二十三年生る。年齢今や不惑有六歳、年壯の紳士也。現代的有爲の臨床家として玆に推奬す。

◇

岩井眞金　△東京市品川區上大崎四四四に岩井小兒科醫病あり、院長は岩井眞金博士也。氏は群馬縣の出身明治十九年生れにして、明治四十三年日本醫專卒業後、三井慈善病院小兒科勤務、次で大正九年より慶大醫學部小兒科に勤務の傍ら研究に從事し、同十三年十月慶大より學位を受領す、同年一月より慶大醫學部講師となり、昭和三年十二月辭任、同四年一月より現住所にて開業今日に至る。

△學位論文は『水素「イオン」濃度ノ冠狀血管及ビ心臟機能ニ及ボス影響ノ研究』なり。魚釣を趣味す。

◇

和田淺香　△東京市麴町區飯田町五ノ三九和田小兒科醫院長和田淺香博士は、東大の出身にて、學位は慶大より獲得せる名醫博として名聲を馳せ、開業拮据十年餘に及び、今や成功の地盤を固め、日々繁忙を極めつゝあり。氏は千葉縣の出身、明治二十二年生にして、大正五年東京帝大醫科大學を卒へ、東京和泉橋慈善病院內科及び小兒科に勤務、次で慶大醫學部小兒科教室に勤務の傍ら研究に從事し、昭和二年三月學位受領後、同年五月より現住所にて開業今日に至る。

△學位主論文は『「モルヒネ」ノ脫出時作用ニ就テ』なり。讀書家にして、運動と圍碁とに趣味を有す。壯齡今や不惑に入る七歳にして益々元氣也。臨床家としては最も重望せらるゝ時代に在り。

◇

鈴木外男　△金澤醫大派の名醫博たる名譽と責任を其の双肩に荷ひ、殊に小兒科醫としての使命を果たすべく奮起せる鈴木外男博士は、現に金澤市上胡桃町三〇に於て鈴木小兒科醫院を經營、同院長として活躍する所あり。博士は金澤醫專の出身にして、大正四年母校卒業以來、十有餘年內科、小兒科醫として臨床に携り居りしも、爾後感ずる處あり、身を衞生行政方面に投じ暫く臨床に遠り居り、再び臨床家殊に小兒科專門醫として立つに際し、其間日進月歩の醫學は奈邊に迄進み居るや、殊に治療醫學の趨勢を親知するには、夫々特長ある大學の臨床を見學するの要あるを痛感し、小兒科臨床家としての大家京都府立醫大齋藤教授、又地方病的研究を主とする母校泉教授の指導を仰ぐ事前後一年、玆に十有餘年經來りし臨床と新に親知せる兩大學の特長とにより、小兒科醫としての自信を得たるにより昭和八年五月より小兒科專門として獨立開業せり。博士曰く「余は終世の希望として第二の國民たる可憐の乳幼兒の友となり父となり健やかなる者はより健かに、病める者に對しては能ふ限りの努力を以て病魔を驅逐し次代に供ふべき健全なる日本國民を作らん爲め特に小兒科を選びたるなり、訴ふるに言葉なく敎ゆるに言を知らざる可憐なる小兒の病めるを見ては誰か營利や金錢のみ腦裡に置くを得んや、愛兒の死の床に侍る母を見る時一刻も早く此の苦難より母子を救はんと希ふは人の情なり、金錢を醫の末端に置く殊に小兒科醫としてこの尊き使命を懷ふ時、奮起自ら此後益々勉勵研究を誓ふ」云々、博士の意氣込や壯とすべく、各自自省の清涼劑として可也。

△更に其の學歴より觀たる博士の略歴を概括すれば、大正四年金澤醫專卒業後、自大正六年至十四年臺灣總督府病院醫官を勤め、自大正十五年至昭和七年六月臺灣總督府地方技師（臺中州衞生課長）兼中央研究所技師、自昭和七年五月至同年九月京都府立醫大小兒科、自同年九月母校金澤醫大小兒科に歸り、同七年五月母校にて學位を得、翌八年五月より開業現在に至る。斯間の指導教授は中川幸庵博士、横川定博士にして小兒科學を專修し、殊に寄生蟲學に長ず。

△主論文は「臺灣ニ於ケル肝蛭ノ分布並ニ發育皮ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)アツシウネル氏現象ニ就テ、(2)少年ノ肥度ト結核トノ關係、(3)肥大吸蟲卵子ニ對スル種々ナル物理的化學的刺戟ノ影響ニ就テ、(4)肥大吸

蟲包囊「セルカリヱ」ノ抵抗ニ就テ、(5)臺灣ニ於ケル肥大吸蟲蔓延狀況調査（豚ノ寄生狀況）、(6)臺灣ニ於ケル肥大吸蟲ノ人體寄生例ニ就テ、(7)肥大吸蟲ノ發育ニ關スル研究（中川幸庵共述）、(8)臺灣農村部落ニ於ケル人體寄生蟲ノ分布狀態ト年齒性職業及地勢的關係トノ考察、(9)「クロール」石灰（晒粉）ノ野菜附着ノ「チフス」菌屬ニ對スル防疫學的效果(10)臺灣ニ於ケル古來ヨリノ治療ニ關スル迷信風習、等九編なり。

△博士は石川縣の人、鈴木魁の次男にして、明治二十二年生る、年齒漸く不惑に入る七歳也。「校門を出で基礎醫學に於て學位を得、臨床に自信なくして單に學位を看板に開業するは醫師として愼むべき事なり」との持論者にして、今や學界を捨て小兒科專門の診療に堅き自信を以て獨立の地盤き開拓しつゝあり。賦性溫良にして高潔なる品格を具へ、殊に小兒科に相應しき性格の持主たるを見る。

◇

伊藤景一　△東京市田世谷區北澤町三ノ九五〇にて小兒科を標榜して開業せる伊藤景一博士は、茨城縣の出身、明治二十一年生にして、大正五年東京帝大醫科大學を卒へ、爾來和泉橋病院に勤務、內科小兒科擔任、次で朝鮮總督府元山府立病院長に就任、昭和三年五月母校小兒科教室に入り、同四年五月迄在勤、次で帝國女子醫專教授に就任、其間昭和三年十二月千葉醫大より學位を受領せり、爾來現住所にて小兒專門開業今日に至る。

△學位主論文は『「ツベルクリン」反應補遺』なり。洋畫を業餘の趣味とす。

◇

磯田仙三郎　△東京市小石川區同心町一一磯田小兒科醫院長磯田仙三郎博士は、埼玉縣の出身、明治二十九年生にして、一高を經て、大正十一年東京帝大醫學部卒業後、母校小兒科教室にて研究の後、日本醫科大學小兒科教授となり、昭和六年四月東京女子醫專教授に就任す、先是昭和四年三月母校より學位を受領し、同五年六月より現住所にて開業今日に至れり。公職としては小兒科學會評議員、東京日々新聞社々會事業團囑託醫たり。

△學位主論文は「乳汁ノ生物學的及化學的性狀ニ關スル研究」なり。擊劍、乘馬を趣味す。

◇

小西正孝　△神戸市立兒童相談所長として、多年斯道の啓發指導に當り、至誠公に奉ずるの熱心と、不斷の精進を續けつゝある小西正孝博士は、大阪醫大派の名醫博として其の手腕を稱せられ、神戸診療界に逸すべからざる小兒科の大家と爲す。氏は大阪の人、明治二十七年生にして、大正十年大阪醫大卒業後、神戸市技師に任ぜられ現職に在り、斯間、母校にて研鑽の結果、學位論文「腦脊髓液壓ニ關スル實驗的研究」を完成して、昭和四年五月大阪醫大より學位を受領せり。勵精恪勤家としての信望厚し。神戸市大井通一に住む。

◇

佐藤隆一　△釜山府幸町二丁目二五に佐藤小兒科醫院を經營して、レントゲン、太陽燈、細菌培養、其他內部諸般の設備を整へ、日々診療に勵精、刀圭甚だ多忙を極めつゝあるは佐藤隆一博士なり。博士は九大系の小兒科學者にして、小兒界の權威、現九大名譽教授伊東祐彥博士及び九大教授箕田貢博士の門弟中の一異才として知られ、多年恩師指導の下に研鑽の結果、母校より學位を得、所謂九大派の名醫博として其の獨特の手腕を稱せらる、殊に其の最も得意とする小兒科學領域に於けるX線の診斷に至りては、好評嘖々、他の追隨を許ざる所なり。

△更に博士の學歷より概括すれば、鄕里の小學校より三條中學に學び、新潟高等學校を經て、大正十五年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部小兒科教室に副手及び醫員として勤務、次で小兒科學教室レントゲン療法主任囑託、助手に任命せらる、昭和六年二月同大學を辭して、釜山府現住所に於て小兒科の專門醫院を開設し診療に從事す、同年七月學位を授與せられ今日に至る。

△主論文は「本邦小兒期生體心臟ノ發育ニ關スルX線學的研究」にして、參考論文としては、(1)鉛中毒ニ於ケル骨端X線像ト其症例、(2)小兒ノ自發氣胸ニ就テ、(3)先天性深在性食道憩室ノ症例、(4)植物性蛋白質ヲ以テ起シ得ル蕁麻疹ノ一例等あり。博士の出身地は新潟縣南蒲原郡三條町字大町にして、佐藤善太郎の三男、明治三十一年生る、年齒三十有八歳の學究的少壯の紳士也。臨床に多年の經驗を有し、手腕漸く壯熟して今は最も得意の時代に入る。將來有爲の臨床家として玆に推奬し、向後の活躍を期待すべき也。

◇

生地憲　△小兒科殊に乳兒科現代の大家としての生地憲博士は、大阪市立堀川乳兒院長としての位地と聲望とを保持し、多年斯界の爲に努力貢獻する所あり。氏は大分縣の人、明治二十八年生にして、大正九年大阪醫大卒業後、大阪市立兒童相談所技師、同部主任を歷て現職に在り。斯間、母校にて研究の結果、學位論文「肌絡膜細胞學的研究」を提出して、昭和四年五月母校より學位を得、所謂現大阪帝大派の一勢力を爲す名醫博たる一人物也。大阪市東淀川區十三東之町二ノ七九に住む。

◇

山下秀雄　△倉敷中央醫院小兒科の山下秀雄博士は、京大系の新進にして、小兒科醫として錚々たるもの、恩師鈴木正教授及び同服部峻治郎教授に就て小兒科學を專攻し、母校より學位を得たる少壯醫博中の新手腕家也。學歷よりすれば、愛媛縣立宇和島中學校より松山高等學校を經て、昭和二年京都帝大醫學部を卒へ、引續き小兒科教室に勤務の傍ら研究に從事し、昭和七年七月學位を授與せらる、爾來現職に在り。拮据勵精、向後の活躍と相俟つて、將來の發展を期待せらる。

△學位主論文は「赤痢及ビ疫痢ノ糞便ノ研究」にして、參考論文として、(1)赤痢樣症狀ヲ呈セル腸結核ノ一例、(2)腦出血ヲ併發セル出血性「チフス」ノ一例、(3)小兒先天性粘液水腫ノ一例、(4)小兒移動性長S字結腸症ニ就テ、(5)食餌性喘息ノ一例特ニソノ「アレルゲン」ニ就テ、(6)小兒下痢症特ニ小兒赤痢ノ林檎食療法ニ就テ、(7)小兒尿崩症知見補遺等あり。

△博士の出身地は愛媛縣南宇和郡船越にして、明治三十六年生る、年齒未だ三十有三歳の少壯也。經驗と共に手腕漸く壯熟して最も得意の時代に入り、熱心にして眞摯なる診療振りと、溫厚にして學生氣質の朗快さは人に好感を抱かしめ、患者の評判極めて良好なり。居常の趣味として特筆すべきものなしと雖も、研究と醫療そのものに趣味を集中して又他事を顧みざるの概あり。學究的有爲の臨床家として潑剌たる前途を有す、幸ひ健康にして、診療界淨化の爲め益々努力奮鬪あらん事を翹望して止まず。倉敷市高砂町に住む。

◇

田章吾　△東京帝大派の一新勢力と見るべき小兒科の新手腕家田章吾博士は、千葉縣の人、明治三十年生にして、大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに法醫學教室に入りて研究す、昭和二年以來小兒科教室に轉じ、東京帝大醫學部講師として勤務の傍ら研究を續け、兼ねて東京警察病院小兒科に勤む。斯間、學位論文「正常並ニ免疫抗體ノ性狀ニ關スル研究」を提出して、昭和四年五月母校より學位を受領せり。年齒漸く三十有九歳の少壯なれば、向後の活躍は大に期待せらる。赤坂區青山高樹町一二ノ一五を住む。

◇

關與一　△東京市神田區多町二ノ八に在る關小兒科醫院は、院長關與一博士の經營にして、牢固たる地盤の上に、堅實なる發展振りを示しつゝあるを見る。氏は新潟縣南魚沼郡三俣村の出身、明治十四年生にして、明治三十五年東京醫學專門學校濟生學舍卒業後、東京山龍堂病院に次で順天堂病院等に勤務の傍ら小兒科研究、明治三十六

年より臺灣高雄市にて開業、大正十二年より京都帝大醫學部小兒科教室にて研究、學位論文「狂犬病固定毒並ニ其發病機轉ニ關スル實驗的研究」を完成して、昭和四年五月京都帝大より學位を受領せり、其後同年十月より現住地にて開業今日に至れり。氏が開業試驗出身より奮起して、初志を貫行せる篤學は、氏の仁術に一段の光彩を放ちて見ゆ。年齒今や知命に入る五歲、益々元氣也。謠曲を業餘の趣味とす。

◇

大脇和夫　△名古屋市中區南桑名町五ノ六に於て小兒科專門を以て開業せる大脇和夫博士は、「小兒科專門として現今尙乳幼兒の保健に就て世人の餘りに無意識なるを深く憂慮し居り將來余は開業の傍ら小兒無料健康相談所を設置し此の方向の無智なる親達を啓蒙し度今より準備中なり」云々。の理想を以て、奮起獨立せる錚々たる小兒科醫たり。顧みてその學歷より見れば、博士は大正十五年愛知醫大第一回卒業、直ちに同小兒科へ入局し爾來研究、昭和五年小兒科醫局長を經て、同七年十月講師を拜命せり、此の間昭和七年六月名古屋醫大にて學位を授與せられ、翌八年三月辭職、現住所にて開業せり。專攻は小兒科學及び生化學にして小兒科を以て立てり。

△主論文は『皮膚及他臟器「エキス」ノ血糖量ニ及ボス影響ニ就テ』にして、參考論文は、(1)皮膚內血糖下降性物質卽皮膚「エキス」ノ「アドレナリン」及「インシコリン」トノ關係、(2)發作性血色素尿症ニ就テ、(3)猩紅熱ノ統計的觀察、(4)興味アル兩側性膿胸の一治療例、其ノ他二編あり。從來「インシスリン」ノ剔出困難にして膵臟より僅少に腎出されしが氏はこれを皮膚內に於て證明せり。

△名古屋市西區前ノ川町一ノ十一大脇英夫の長男にして、明治三十二年生る、當年三十有七歲也。少壯にして進取の氣象に富み、多量の分別を有す。殊に氏の長所とするはその事に熱心にして成し遂げずば止まぬ所にあり、若し强ゐて短所と云へば內氣の所位ならんか。賦性溫和にして敦厚、謙抑にして尊大振なく、寬厚能く人を愛す、其の態度の紳士的にして眞學なるを喜ぶ。親族には醫師多數あり、岳父は岡山醫師會議長、名大學友會の副會長たり。

◇

久保德彌　△北海道帶廣市島田病院小兒科に在る久保德彌博士は、京都市の人、明治三十年生にして、大正十年京都府立醫專卒業後、引續き京都府立醫大にて研究を續け、同醫大講師となり、學位論文「胃液乳酸ニ就テノ研究」を完成して、昭和四年七月學位を受領せり。所謂京都府立醫大派の小兒科醫として今や獨特の手腕を揮ひ、拮据勵精大に將來に期する所あらんとす、有爲の臨床家としての前途や洋々たり、折角の努力活躍を望むや切也。北海道帶廣市東三條十丁目に住む。

◇

小田美穗　△東京市京橋區築地一丁目十六ノ二に小田小兒科醫院あり、小兒科一般及び小兒外科を以て著聞す。院長小田美穗博士は、姬路市の出身、明治二十七年生る。當年不惑に入る二歲、年壯にして手腕漸く壯熟し、最も活躍の全盛時に在り。學系よりすれば、大正八年東京帝大醫科大學を卒へ、引續き近藤外科勤務二年の後、新潟縣南蒲原郡見附病院長として赴任し、二ケ年奉職の後、歐洲留學の途に上り、歸朝後大阪醫大小兒科教室にて研究生として小兒科專攻、次で慶大醫學部藥物學教室及び小兒科教室勤務中、學位論文『血液「カルチウム」調節中樞ニ關スル研究』を完成し、慶大醫學部へ提出して昭和四年七月學位を授與せらる、同年十一月より現住所に小田小兒科醫院を開設今日に至る。趣味としては漢藥「ブラジル」藥草の研究と、長唄及び旅行にあり。自宅は四谷區東信濃町二八に在り。

◇

稻留藤次郎　△中部醫療界、濱松市鳴江町一六八四に小兒科及び內科を標榜して獨立開業せる稻留藤次郎博士

は、東京市芝區新門前町に本籍を有し、大正十年長崎醫專卒業後日赤山口支部病院、東京市技師、久原鑛業會社醫局等を經て、昭和七年八月慶大にて學位を獲得せる名醫博にして、研鑽多年の間貴重なる經驗を積み、今や手腕全く圓熟の域に入り、打診の好評は益々人氣を集め、遠近よりの外來患者日々輻輳するの盛況を呈す。而も未だ三十有九歳の少壯、光る前途は益々有爲多望にして、向後の活躍は更に大に期待せらる。

△博士の專攻は內科、小兒科にして就中小兒科に長ず。岡山醫大內科の耆宿稻田進博士に師事して克く精學研鑽、又慶大教授寄生原蟲學の大家小泉（丹）理博の指導を受く。

△學位主論文は「經膚感染後筋肉內ニ移行セル十二指腸蟲仔蟲ニ就テ」にして、參考論文は、(1)土壤中ノ人十二指腸蟲仔蟲ニ對スル石灰窒素ノ毒性作用ノ實驗的研究、(2)十二指腸蟲仔蟲ト「メヂウム」ノ水素「イオン」濃度トノ關係ニ就テ、(3)蛔蟲成熟卵ノ感染機轉ニ及ボス二三驅蛔藥ノ影響ニ就テ、(4)鼻腔內ニ輸送セラレタル蛔蟲成熟卵ノ運命ニ就テ、(5)自然界ニ於ケル蛔蟲仔蟲ノ經膚感染アリヤ等なり。

△博士の感想に曰く「現今の開業醫の診療報酬は大多數の庶民階級の患者にとりては確かに過重の負擔であり苦痛であるに相違ないが、醫者側から（少くとも小生に）云はせれば寧ろ安過ぎて引き合はないのが事實である。此の大きな瞭らかな矛盾は所詮國家の眞摯な努力に須つにあらざれば他に解消の途はない、是小生が何時になれば實現するとも覺束ない醫業國營にかそけくも一縷の望を託して居る所以である」云々と。醫事多端にして醫師界刷新の前途渾沌たるの秋、博士の抱く積極的ネオ、アイデアを此處に紹介して諸賢の批判に俟つ。業餘の博士はスポーツ特にピンポン、庭球に興じ、又文學趣味深く藝術愛好家たり。玆に博士の健康を祝すると共に、診療界淨化の爲益々發奮盡力あらんことを切望して止まず。

◇

杉野龍藏　△東京市本所區龜澤三ノ一に小兒科專門の江東病院あり、院長杉野龍藏博士の經營也。氏は東京府の出身、明治三十年生にして、大正十三年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに小兒科教室に勤務の傍ら研究、昭和四年より同五年迄愛國婦人會の囑託にて歐米に留學し、昭和五年八月母校より學位を受領し、同年十月より現住所にて江東病院を經營今日に至る。學位論文は「表面汚性電解質溶液ノ表面張力ニ及ボス蛋白質添加ノ影響」なり。長唄、麻雀を業餘の趣味とす。自宅は小石川區表町一〇九に在り。

◇

繼　博　△東京市杉並區馬橋一ノ一〇に繼小兒醫院あり、院長繼博博士の經營、開業拮据十數年、牢固たる地盤有し、打診好評也。氏は山口縣の出身にして、明治二十同年生る、學系は千葉醫專に屬し、學位は慶大より獲得せる小兒科の名博士として其の手腕を稱せらる。大正四年千葉醫專卒業後、同十二年和泉病院及び日赤本社病院にて研究に從事し、同十三年七月鶴見淺野病院に勤務す、同十五年より大崎町にて開業の傍ら慶大醫學部にて研究、昭和五年瀨川小兒科病院にて研究の後、學位論文『「アボモルヒネ」ノ自宰神經末梢ニ對スル作用』を完成して、昭和五年十一月學位を受領せり、爾來現住所にて開業小兒科一般の診療に從事し今日に至れり。年齒四十有五歳にして多年の經驗に富み、手腕今や圓熟して最も重望せらるゝ時代に在り。業餘悠々として圍碁を樂しむの餘裕あり。

◇

井上一郎　△九州帝大派の名醫博たる新進の井上一郎博士は、現に八幡市製鐵所病院小兒科醫長として內外の信望を博し、該院の最高幹部の一員として九州診療界のため活躍奮盡する所あり。

△博士は大阪府立天王寺中學校、三高を經て、大正八年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部小兒科教室に勤め、十一年久留米市立病院小兒科醫長に就任、昭和二年再び母校小兒科教室に轉勤。六年十二月製鐵所病院小兒科醫長に任

ぜられ今日に至る。其間恩師伊東及び箕田兩教授の指導を受け七年八月九州帝大より學位を受領せり。

△主論文は「榮養素ノ發育期個體ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)乳兒生理的瓜線、(2)小兒腎炎、(3)早期「ヂフテリー」心臓麻痺屍心所見なり。

△博士は大阪市天王寺區逢坂下町の人、明治二十六年生れにして、當年不惑に入る三歳、年壯にして前進躍氣たる氣魂に富む。現代の醫界に對しては「此所で働いてゐると勞働都市乳幼兒のみぢめさを痛感する。急性傳染性疾患はもとより母親の不注意と無智により榮養障碍は夥しく多いのに驚く、托兒所や育兒健康相談所も他の大都市の如き積極的なものでなければならないとつくゞ〳〵考へさせられます」云々と、感想の一片を漏せり。賦性篤實敦厚、患者に接するに毫も不遜の態度に出でず、小兒科醫タイプの溫愛の情豐かなるは、人をして敬慕の念を深からしむ。音樂に趣味し藝術を愛好す。幸に自重加餐を祈る。八幡市高見町七丁目に住む。

◇

五島博

△帝都診療界に於ける私立小兒科病院としての一勢力たる、神田區裏猿樂町三輪延壽堂醫院に醫博五島博あり。同醫院は世人周知の如く、小兒科界の泰斗、三輪信太郎博士經營の私立醫院にして一流に在り。五島博士は副院長格にて克く院長を補佐し、院長多年の聲望と相俟つて博士獨特の打診好評にて、同醫院の拔くべからざる今日の隆盛を見るもの、博士の獻身的努力亦大に與つて力あることを見逃すべからず。

△學系より見たる博士は、東京帝大醫科大學の出身にして、大正五年卒業後直ちに整形外科教室に助手として勤務の後、同七年より三輪延壽堂醫院に勤務今日に至る、斯間、三輪院長の指導を受くる所厚く、勤務の傍ら多年研鑽の結果、學位論文「股關節運動（股位）ト血管走行トノ關係ニ就テ」を完成、母校に提出して昭和五年十二月學位を受領せり。所謂東大派の名醫輩出するに恥ぢず、多年の經驗に富み、今や手腕圓熟して最も得意時代に在り。石川縣の人明治二十年生にして、當年不惑に入る九歳、元氣益々旺盛にして、一意專心、診療に勵精して仁術の爲め忠實を盡しつゝあり、好箇の臨床家として敬意を表す。東京市杉並區阿佐ヶ谷一ノ八〇四に住む。

◇

齋藤眞文

△大正十一年一月以來、一介の小兒科開業醫として、無趣味、無道樂、唯孜々として働き、以て悠々たる心境を持して仁術の最善を盡すに餘念なきは齋藤眞文博士ならん。博士經營の齋藤醫院は堺市市ノ町西四丁目に結構なる陣容を構へ、小兒科を專門とし、博士獨特の手腕の評判は多年の聲望と相俟つて既に牢固たる地盤を有す。尙齒科には鶴田市藏（大阪齒科）醫學士ありて之を擔當す。略歷より觀れば、博士は大正四年熊本醫專を卒へ、京都帝大醫學部小兒科教室に入り、平井博士指導の下に小兒科學研究、大正五年八月小倉記念病院開設に際して就任同年十二月一年志願兵として熊本第六師團に入營、大正七年五月退營、再び小倉記念病院小兒科醫長就任、同十一年一月現住所に開業す、昭和五年五月より開業の傍ら大阪醫大より學位を受領せり。主論文は「痘毒ニ關スル研究」にして、外に參考論文として「痘毒ニ關スル研究」十篇及び「小兒腦膜炎ノ研究」三篇あり。

△熊本縣の出身にして、明治二十六年生る。當年不惑に入る三歳、眞面目なる學究的紳士にして、篤學者としての輝しき氏の閲歷は、既に博士の前半生史に盡きて餘蘊なし。專門的學識の該博なるは勿論、臨床的經驗に富み、手腕愈々圓熟して今は最も得意の時代に在り。而かも仁術を本領としての熱誠振りは、天資小兒科に相應しき溫厚なる性格と相俟つて益々信望を博す、好個の臨床家として崇高なる人格を尊ぶ。

◇

津田博通

△東京市淺草區駒形町一五に小兒科內科專門を以て著聞する津田診療所あり。ドクトル、メデチ

ーネ津田博通博士の私立醫院にして開業古く、博士獨特の手腕は多年の聲望と相俟つて益々人氣を蒐め、牢乎たる地盤を有し成功の位地に在り。博士は金澤醫專出身の篤學者にして、嘗て歐洲に遊び、獨逸クルリンシヤリテー及びハンブルグ大學卒業、同大學にてドクトル、メヂチーネの學位を得、クライネーシュツト教授に就て研究の後、墺國ウイン大學にてはビルケエー教授に師事し、次で瑞西のチュリツヒ大學にて研究の後、ベルリン大學にてはヂアリト教授に就て研鑽大に得る所あり、歸朝後論文提出の結果、千葉醫大より學位を獲得せる名醫博也。公職としては區醫師會理事、區醫政調査委員、府醫師會議員等に在り。

△更に學歷及び閲歷を概括すれば、明治三十九年金澤醫專卒業後、東京帝大醫科大學小兒科教室にて研究すること四ケ年、次で東京市醫奉職、米國ヱクキテーブル及びチヤイナ、ミュチュアル保險會社囑託醫たり、大正九年渡歐、主として前記獨、墺、瑞各國の諸大學に學び、佛、英、伊各國を視察して同十一年歸朝、爾來祖父の業を繼承して開業今日に至る、斯間、昭和六年四月學位を授與せらる。

△學位主論文は、(1)人工及天然榮養兒ノ統計的觀察、(2)「ヂフテリー」毒素ノ家兎ニ於ケル血糖ノ消長、(3)生蛋白ヲ加ヘザル淋菌特殊培養基、附同動物諸臓器肉水ノ比較の三篇より成り、參考論文としては「卵白ノ殺菌作用並ニ防腐作用ニ就テ强心劑ノ循環器ニ於ケル影響」あり。氏は東京市の人にて、明治十三年生る、當年知命に入る六歳也。篤學者としての輝しき閲歷は燦然として氏の仁術に一段の光彩を放ちて見ゆ。精力家にして元氣益々旺盛、「醫は仁術也」をモットーとして終始し、以て其の天分なるを樂しむ純眞の士也。趣味は著書と繪畫、今は悠々たる逸環に處して風流に親しむの餘裕を有す。

◇

竹内正明　△東京市淀橋區下落合一ノ五四七にて、小兒科、內科專門を以て開業せる竹內正明博士は、愛知醫大出身の篤學者にして、小兒科、內科を以て立つ。昭和二年同大學卒業後、京都帝大醫學部にて研究の結果、學位論文「毛細血管ノ臨床的研究」を完成して、昭和六年五月學位を獲得せる所謂京大派の一新勢力たる少壯醫博也。開業日尚淺くも、孜々營々、日々診療に勵精して倦むことを知らず、打診の好評は氏が篤實溫厚なる性格と相俟つて堅實なる發展振を示し、日增盛況に向ひつゝあり。氏は福井縣の出身、明治三十三年生にして、當年未だ三十有六歳、少壯の意氣と共に手腕漸く壯熟の域に入り、潑剌たる前途の大成を期待せらる。

◇

龜田瓏　△千葉縣館山北條町長須一〇五に龜田小兒科內科醫院あり、院長龜田瓏博士の經營にして診療室研究室、病室等々內部諸般の設備全く整ふ、開業拮据既に十有餘年、博士獨特の手腕は打診の好評と相俟つて遠近を風靡し、繁榮歳と共に牢乎たる地盤を有し、今や同地方診療界に卓然として一流の位地を占む。博士は千葉醫專出身の篤學者にして、千葉醫大專攻科學生として恩師松村毫博士に就きて衞生學を、同詫摩武人博士に就きて小兒科を專攻し、千葉醫大より學位を獲得せる新進の名醫博也。公職としては千葉縣立安房高等女學校校醫なり。

△博士は大正九年千葉醫專卒業後、直ちに千葉縣館山町館山病院に奉職し同十二年迄勤續す、同十三年獨立して現住所に開業し今日に至る、斯間昭和五年十二月千葉醫大專攻科入學、同八年五月卒業と同時に學位を授與せらる。

△主論文は「腸內菌叢ノ實驗的研究」にして、實驗動物（犬）に就き其の初生兒期、母乳榮養期或は牛乳榮養期、離乳期並に普通食餌榮養に於ける夫々の糞便及び消化器各部內容に就きて、其の、(1)肉眼的及び塗抹標本顯微鏡的檢査(2)細菌分離培養、(3)水素イオン濃度の測定を行ひ、(4)各分離菌株の形態學的並に生物學的檢査、(5)其の消化器各部に於ける分布狀態の觀察、(6)糞便菌と腸內細菌との比較を試みたるものなり。主論文中「各年齡ニ於ケル腸內菌叢ノ胃腸管內ノ分布狀態ト糞便細菌トヲ比較研究セル點」は博士會心の作にして最も得意とせる要點なるべし。

△千葉縣安房郡吉尾村龜田萬次郎の長男にして、明治二十七年生る。學究的溫厚の紳士にして篤學者たり、今は分別盛にて年齒漸く不惑に入る二、年壯の意氣と共に、學識、手腕、人格愈々圓熟の域に入り、今は最も重望せらるゝ時代に在り。殊に又著者の立場より觀たる博士は臨床家としての人格者にして、醫師の人格次第に低下するを常に憂ひ德操を堅持して博士自ら品性の陶冶に餘念なき事實は見逃すべからず、學位と共に人格の向上尊重を高調するの今日眞摯なる博士の態度は甚だ多とすべき也。研究以外の趣味としては謠曲を好む。東京府下小岩町開業靑木豹博士は義兄、千葉市開業川名晃博士は從弟の間柄也。博士の春秋猶豐富にして、洋々たる前途は益々輝かし、幸に健康と共に診療界淨化の爲め益々活躍奮盡あらん事を望む。

◇

平野忠七　△日赤本社病院小兒科主幹として內外の信望を博し、日々診療に勵しみつゝある平野忠七博士は東大派の小兒科の醫博として其の手腕を認められ、斯科の新進大家として逸すべからざる一人物たるを失はず。學系よりすれば、昭和二年東京帝大醫科大學卒業後、直ちに病理學教室に入りて研究の後、更に翌三年傳研にて研究を續け、學位論文「蔦口瘡齒ニ關スル知見補遺」を完成して、昭和六年七月東京帝大より學位を受領せり、爾來現職に就任今日に至る。氏は埼玉縣の人、明治二十年生にして、今は最も腕の冴盛なれば、氏の得意や想ふべき也。赤坂區靑山南町六ノ一四七に住む。

◇

高階修　△東京市本鄕區湯島新花町三四高階小兒科院長高階修博士は、東大系の小兒科醫として名聲を馳せ、院長自ら診療に勵精して日々繁忙を極めつゝあり。大正十四年東京帝大醫學部を卒ゆるや、直ちに同學部小兒科に入局、後ち又藥理學教室に轉じて專ら研究に從事し、學位論文『「アドレナリン」ノ吸收ニ關スル實驗的研究特ニ年齡的差異ニ就テ』を完成、母校に提出して昭和六年八月學位を受領せり、爾來現住所にて開業今日に至れり。埼玉縣の人、明治三十二年生にして、當年三十有七歲の少壯也。洋畫を趣味す。

◇

德丸喬　△松山市二番町六七に德丸小兒科醫院あり、院長德丸喬博士の診療所にして、病室六、其他の設備を整え內容充實す。博士自ら日々診療に努力精進して、仁術の最善を盡すに餘念なく、的確なる診斷の好評は、小兒科に相應しき氏が性格と相俟つて益々人氣を博し、堅實なる發展と共に日增盛況を呈しつゝあるを見る。△博士は岡山醫大（專門部）系の小兒科學者にして、大正十一年卒業後、日赤愛媛支部病院勤務、次で岡山醫大小兒科教室及び藥理學教室にて研究、昭和八年八月岡山醫大にて學位を授與せられ、現住地にて開業今日に至る。斯間主として好本教授に就て小兒科專攻、奧島教授に就て藥理學を專攻せり。△學位主論文は『芳香性「グアニヂン」誘導體ノ血糖作用』にして、外に參考論文五篇あり。△愛媛縣越智郡宮窪村大字宮窪の人、戶主德丸七五郎の孫にして、明治三十二年生る、年齒漸く三十有七歲也。少壯氣鋭にして研究心に富み、教室を勇退し診療界に躍進して以來、開業日尙淺くも、多年錬磨せる手腕と、不斷の熱誠努力とを以て、孜々營々として臨床に勵精しつゝある前途の發展は大に期待せらる。賦性篤實溫厚、好箇の臨床家としての特質を有し、高邁なる氣品を備ふ。趣味としてはテニスと和樂を好む。

◇

酒井潔　△臺北醫院小兒科醫長、兼臺北醫專教授として小兒科を擔任しつゝある酒井潔博士は、東大派の少壯醫博として學界に重きを爲す一人物也。略歷より觀れば大正九年東京帝大醫學部卒業後、直ちに小兒科教室に入りて研究に從事し、後ちに聘せられて支那漢口病院に小兒科部長として赴任す、次で昭和五年歐米留學の途に就き、

歸朝後現職に就任し今日に至れり。斯間、學位論文「酸鹽基平衡ノ變化ト白血球像ノ變化トノ關係ニ就テ」を母校に提出して、昭和六年十一月學位を授與せらる。兵庫縣の人、明治二十七年生る。年齒漸く不惑有二歲、年壯の意氣益々壯にして、今は醫育と研究とに沒頭しつゝあり。臺北市東門町七七に住む。

◇

八代武夫　△東京市本郷區駒込富士前町一八にて小兒科を標榜して開業せる八代武夫博士は、東大系の錚々たる小兒科醫にして、近藤乾郎博士を院長とせる近藤病院に副院長として久しく勤務し名聲を博せり。略歷より觀れば大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに附屬醫院小兒科に入局、次で支那天津日本病院に小兒科部長として赴任し、昭和三年再び東大に入りて研究の結果、學位論文「白血球ノ生理的狀態並ニ其ノ刺戟ニ對スル反應ノ年齡的差異ニ就キテ」を完成して、昭和七年三月東京帝大より學位を受領せり、先是同六年より前記の病院に勤務せるも、辭職後現住所にて開業今日に至れり。東京府の人、明治三十年生る。讀書家にして、音樂を趣味す。

◇

高木秀雄　△宮崎市旭通一丁目に高木醫院あり、小兒科を專門とす。院長高木秀雄博士は慈惠醫專（大正八年）の出身にして、卒業後東京慈惠會病院、東京市橋田內科病院、福田小兒科病院等に勤務後、宮崎縣に於て開業、昭和五年三月慈惠醫大研究科に入り、生理學、小兒科、物療科に於て研究、同八年十月慈惠醫大より學位を授與せられ、爾來現地に於て開業せり。病室は九名收容可能、レントゲン科の設置等々、相當の設備を有す。

△主論文は「不應期ニ關スル研究」にして、二篇より成り、參考論文は「スポーツ」醫學に關する研究なり。指導教授は慈惠醫大の高木喜寛博士、戶川篤次博士、樋口助弘博士及び九大教授箕田貢博士等にして、專門の領域に就ての造詣見るべし。

△博士の出身地は宮崎縣高岡町にして明治二十九年高木孝助の長男に生る。感想の一片を寄せて曰く「今少し大人物出でゝ醫師界を善導され度きもの。昔より醫者と坊主と申し居候へ共、坊主に比して膽小、人物小なるもののみ多く坊主の方大人物多き感有之候」云々と。之を理想とせる博士や其の人爲りの一端を窺はる、唯だ希くば自ら大人物たるの自覺と、發奮大に之が實現に向つて努力邁進あらんことを。業餘には刀劍、尺八を趣味し、酒を嗜むの風あり。年齒漸く不惑に達す、春秋猶豐かにして今は活動の盛期にあり、出でゝ診療界淨化の爲め一肌脫ぎ、醫師界善導の爲め奮盡あらんことを切望す。

◇

橋本秀樹　△東京市淺草區東三筋町一六に在る橋本醫院は、小兒科、內科を專門とし牢固たる地盤を有す。院長橋本秀樹博士は福島縣の出身、明治三十二年生にして、大正十四年東京帝大醫學部を卒へ、千葉縣湊病院を經營、昭和四年まで繼續す、同年四月より東大小兒科教室に入り同五年四月迄研究に從事し、續いて同醫學部藥理學教室に轉じ同七年五月迄研究に沒頭す、同年同月學位を受領せるに及び同教室を退學して開業今日に至る。學位論文は「諸種重金屬化合物ノ腎內排泄部位ニ就テ」なり。開業日尙淺くも、拮据黽勉、診療に餘念なき前途は大に囑目せらる。俳句と撞球を業餘の趣味とす。

◇

吉川吉次　△大阪市東成區林寺町三一〇に小兒科、內科專門の吉川醫院あり、院長吉川吉次博士の自己經營にして、開業日尙淺くも、氏の診療に臨む態度の眞摯にして熱心なると、打診の的確にして明快なりとの好評とは、兩々相俟つて益々人氣を吸收し、漸次獨自の地盤を獲得して堅實なる發展振りを示しつゝあるを見る。博士は金澤醫專出身の小兒科及び內科學者にして、細菌學の造詣深く、殊に最も得意とするは小兒科なるが、指導教授は主として

前京大教授、現神奈川縣第二衞生試驗場長渡邊邊博士、慶大教授川上澥博士、京大教授木村廉博士等にして、學位は京都帝大より獲得せり。今や少壯醫博としての手腕を認められ、獨特の領域に向つて向上發展しつゝある前途は更に大に期待せらる。

△博士の學歷及び閱歷を概括すれば、大正十一年金澤醫專卒業、昭和二年五月金澤醫大助手拜命、同年十月横濱醫師會病院小兒科主任勤務、同三年八月神奈川縣立第二衞生試驗場勤務、同四年日赤囑託、同七年横濱稅關囑託、高等官七等待遇、同八年十一月學位授與、同年叙從七位、次で開業今日に至る。學位主論文は『「バクテリオフアーヂユ」ニ關スル研究』にして、三篇より成れり、外に參考論文として八篇あり。細菌學、化學、特に「インドール」に關する研究は博士の最も得意とせるものと見らるべき也。

△感想に曰く「將來臨床家たらんとする者は、學生時代より處方等の研究を忘る可からず」云々。氏の出身地は金澤市觀音町にして、明治三十一年生る、當年三十有八歲也。秀峯は其號にして、繪畫、魚釣、乘馬等を趣味す。意志强固にして研究心に富み、殊に我慢强きことは氏の長所と見るべきか、平生人に對して城壁を設けず、應待懇切にして好感を抱かしむ、又應答禮を重ずる人也、其の紳士的態度は自ら其の人格を敬慕せしむるの德を有す。樞密顧問官、美術院長淸水澄博士、大阪府立鳳中學校長友永謙二氏等とは近親の間柄なりと聽く。

◇

內藤和三郎　△東京市本鄕區根津八重垣町二六小兒科內藤醫院は、內藤和三郎博士の經營にして、開業古く、牢乎たる地盤を有し成功の位地に在り。略歷より觀れば、日本醫專の出身にして、大正四年卒業後、神田區駿河臺瀨川小兒科病院勤務、同八年九月より現住地に開業、斯間、昭和二年二月より東京帝大醫學部解剖學教室にて研究、同九年八月東京帝大より學位を受領せり。學位論文は「邦人上肢ノ外皮ニ分布スル神經ニツイテ」なり。靜岡縣の出身明治二十一年生る、年齡今や不惑に入る八歲、手腕愈々圓熟の域に達して一段の貫祿を備ふ。讀書家にして精研修養相俟つて書見を唯一の樂しみとす。

◇

山縣汎　△東京市本鄕區東片町二二に小兒科專門のウツノ病院あり、院長は宇都野研學士にして隔離室完備す。山縣汎博士は副院長格にして克く院長を補佐し、日々診療に勵精打診の評判良好也。博士は山梨縣の人、明治三十五年生る、北海道帝大醫學部出身の小兒科醫にして、昭和二年同大學卒業後、東京帝大醫學部藥理學教室にて研究を續け、學位論文「新陳代謝毒ニ對スル感受性ノ年齡差異ニ關スル實驗的研究」を完成し、東京帝大醫學部に提出して、昭和九年八月學位を受領せり。學究生活を離れて日尙淺く、向後の活躍を期待すべき也。本鄕區駒込東片町一三六に住む。

◇

森岡信太郎　△千葉市寒川九八九、小兒科開業醫としての森岡信太郎博士は、千葉醫專出身の錚々たる小兒科臨床家としての名聲を馳せ、開業拮据旣に十年以上を閱す、斯間開業の傍ら研鑽多年、母校の恩師松村教授、大田博士、小山博士等の指導を受けて學位論文を完成し、千葉醫大より學位を獲得せる篤學の士也。臨床多年の經驗に富み旣にして牢乎たる地盤を有し、今や光る學位と共に博士の仁術に一段の光彩を放てり。

△學系よりすれば、氏は大正七年千葉醫專卒業後、同十三年一月迄六年間、千葉醫大附屬醫院小兒科に勤務、爾來現住所にて開業今日に至れり、斯間昭和九年十月學位を受領せり。學位論文は「母乳榮養兒ノ糞便ノ細菌學的檢索、主トシテ大腸菌族ノ態度ニ關スル研究」なり。氏の出身地は三重縣南牟婁郡南輪內村にして、森岡仙藏の長男、明治二十四年生る。學究的年壯の紳士にして篤學者たり、其の今日ある輝しき厚志篤學は、氏の面目を語るに充分也。庭園

に趣味を有し、平生刀圭多忙の裡に園藝を樂しむの餘裕を存す。年齒今や不惑有五歳、精力家にして年壯の意氣と共に手腕圓熟の佳境に入り、好箇の臨床家として悠々たる位地に在り。

◇

岩淵　要　△東京市荒川區町屋二ノ二六六に岩淵小兒科醫院あり、院長岩淵要博士の經營する診療所也。開業拮据十有餘年に及び、打診の好評は大衆の人氣を集め門前常に賑ふ。學系よりすれば慈惠醫大の出身にして、大正十三年卒業後、日本橋區吉松小兒科病院に次で聖路加國際病院に於て小兒科擔任の傍ら東京市の囑託を受く、同十五年八月より現住所にて開業の傍ら、母校の研究科にて研究に沒頭し、昭和九年八月慈惠醫大より學位を受領せり。學位主論文は「大腦垂體ノ硫黄代謝ニ及ボス影響」なり。茨城縣の出身、明治三十四年生る、年齒漸く三十有五歳也。スポーツに趣味を有す。

◇

俣野純夫　△函館市立中ノ橋病院長たる俣野純夫博士は、大正十四年東京醫專出身の小兒科醫として錚々たるもの也。同校卒業後、同年四月より七月迄傳染病研究所にて研究、同年七月より小兒科木澤病院（麴町區）副院長として勤務、昭和三年七月辭職、同年同月函館市立中ノ橋病院醫員に任命、昭和五年一月北海道帝大醫學部專攻生として入學、同七年四月函館市立中ノ橋病院醫長に任ぜられ、病院長に補せらる、同十年一月北海道帝大にて學位を授與せられ、同醫學部專攻生退學、今日に至る。斯間、北大教授井上博士の指導の下に學位論文を完成す。主論文は、「乳糖非分解性大腸菌族ニ關スル知見補遺」にして、參考論文として「色素ニアル細菌凝集現象ニ就テ」外十七篇あり。

△博士は鹿兒島縣肝屬郡大姶良村南の人、明治三十三年生る、年齒漸く三十有六歳の少壯也。篤學者としての博士の研學の跡は燦として今や輝かし、而かも年齒未だ少壯、春秋猶頗る豐富なれば、向後の活躍と相俟つて博士の將來を語るに餘裕綽々たるものあり。孤石はペンネームにして、俳句が得意なり、學生時代よりの讀書家にして今猶卷を放たず、精研修養相俟つて書見を唯一の樂しみとし、又運動に趣味を有す。幸ひ健康にして、須く小事に拘泥せず、拮据黽勉、益々努力奮鬪あらん事を望む。函館市中島町一五九に住む。

◇

飯田三郎　△東京市日本橋區本石町三ノ六ノ三に小兒科專門を以て名聲を博せる飯田醫院あり、院長飯田三郎博士の經營にして日々繁盛す。學系より見たる博士は、東京帝大系の小兒科學者にして、大正十年卒業後、三ケ年間傳研にて研究の後、東大小兒科に入局、次で内田小兒科病院副院長として勤務の傍ら東大解剖學教室にて研究を續け、學位論文「邦人頸部淋巴管系統ニ關スル解剖學的研究」を完成して、昭和九年九月東京帝大より學位を受領し、爾來專ら自己經營の醫院に於て小兒科一般の診療に從事しつゝあり。東京市の人、明治二十八年生にして當年不惑に入る一歳也。向後の發展を囑目せらる。

◇

村田廣次　△日本赤十字社病院小兒科に新進の村田廣次博士あり。北海道帝大出身の小兒科醫にして、東京帝大より學位を受領せる新博士中の逸物也。大正十五年北大醫學部を卒業後、直ちに日本赤十字社病院小兒科に勤務今日に至る、斯間、東京帝大教授、傳染病研究所々員河本禎助博士に就き生化學の指導を受け、學位論文「哺乳動物血液ノ一、二單糖類分解作用ニ關スル研究」を完成して、昭和十年一月東京帝大より學位を受領せり。

△博士の出身地は横濱市中區常盤町にして、明治三十三年生る、年齒未だ三十有六歳也。少壯の意氣旺盛にして研究心に富み、多年日赤病院に勤務の傍ら不斷の精進を續け、研學切磋、終に克く初志を貫徹せる篤學は、氏の今日ある

閲歴に一段の光彩を放てり。而かも謙遜なる氏は自抑して誇らず、名利に恬淡として一意專心公に奉じ、仁術の爲め孜々として倦まざるの勤勉家たるを見る。從つて研究と醫療そのものに趣味を集中して努力勵精する所に、氏の居常を窺はれ其爲人を知るに足る。横濱市中區根岸町二ノ一〇八に住む。

◇

泉　仙　助　△泉小兒科の今日あらしめたる、金澤醫科大學教授泉仙助博士は、獨り學内の重鎭たるのみならず、少兒科界現代の一權威たるべし。博士は明治四十二年仙臺第二高等學校卒業、大正三年東京帝大醫學部卒業、同五年任東北大學醫學專門部教授、同七年任東北大學醫學部助教授、同十三年任金澤醫科大學教授、同年三月東京帝大にて學位授與、以て今日に至れり。

△主論文は「孵化鷄卵ノ血清學的生物化學的研究」にして、參考論文は、(1)感作赤血球ノ酸素瓦斯飽和度ニ就テ、(2)植物性色素「カロチン」ノ動物體内ニ於ケル運命ニ就テ、(3)簡單ナル微量「クロール」定量法(佐藤彰共著)等なり。他の論著中、(1)酵酶「ヌクレイン」酸ノ分離方法ニ就テ、(2)「ヌクレイン」酸ノ金屬鹽類ニ就テ、(3)「グリコプロテイド」中ノ含水炭素屬ニ就テ、(4)小兒骨髓性白血病ニ對スル「レントゲン」線ノ作用其他夥多あり。

△博士は茨城縣行方郡潮來町潮來の出身、明治二十一年生る、壯齡今や不惑有八歳、純正なる學者肌の人、年壯愈よ爛熟して一段の貫祿を加え、猶春秋に富む前途は益々有爲多望にして、小兒科界の將來博士の努力精研に俟つもの大なるを思ふ。金澤市下本多町六番丁一八に住む。

◇

志摩次郎　△和歌山市屋形町四ノ三に於て、小兒科を標榜して堂々の陣を張り、多年の聲望と相俟つて、好評嘖々の裡に今や成功の位地にあるは志摩次郎博士也。博士は五高を經て、大正元年十一月京都帝大醫科大學卒業、同二年一月同大學小兒科教室副手囑託、同五年五月滿鐵安東醫院小兒科醫長就任、同七年三月岡山醫學專門學校教授任命、小兒科學講座擔任、岡山縣病院小兒科醫長囑託、同九年五月滿鐵撫順醫院小兒科醫長就任、同十二年十月滿鐵より内地留學を命ぜられ、京都帝國大學大學院に入學、藤浪、平井兩教授指導の下に小兒に關する病理學研究、同十四年八月京都帝大にて學位受領、同年十二月日本赤十字社滋賀支部病院副院長兼小兒科醫長を命ぜらる、其後職を辭し現住地に開業今日に至る。

△學位主論文は『「ペンツオール」ニ關スル實驗的研究、特ニ其年齡的差異ニ就テ』にして、(1)血液ノ形態學的研究(2)骨髓ノ組織學的研究の二篇より成る、參考論文は、(1)萎黄病ノ一症例、(2)マリー氏型肺性肥大性骨關節疾患ノ一例ニ就テ、(3)「デーレ」白血球包含體ニ就テ、(4)高度ノ「エオジノフイリー」ヲ有スル一例、(5)流行性耳下腺炎ノ血液所見(6)小兒期ニ於ケル正常血液所見ニ就テ、(7)本邦健康小兒ノ白血球像ニ就テ、(8)溫泉聚落ノ兒童ニ及ボス影響、(9)一種ノ乳兒發疹性疾患ニ就テ、(10)大正十二年撫順ニ流行セシ痲疹ニ就テ、等なり。其他論著夥多。

△博士は滋賀縣滋賀郡堅田町の人、明治十八年生る。臨床家としての氏が前半生史より見れば、經驗豊富にして今や壯齡と共に手腕愈々圓熟して佳境に入り、溫厚篤實なる氏が性格と相俟つて益々信望を高め、氏が仁術に一段の貫祿の備はりたるを見る。業餘の趣味としては運動、競技を好む。

◇

大月齋庵　△福井市足羽下町九四に小兒科、産科專門を以て多年の聲望を扶植し、當地診療界の重鎭を以て敬慕せられ、公衆より多大の信望と尊敬とを受け、嘖々たる名聲を博しつゝあるは大月齋庵博士也。現に福井縣醫師會長、同縣結核及び性病豫防協會各副會長、同縣コドモ研究會長、福井市足羽學院長、若越醫學會副會頭等々の幾多公職を負ひ、獨り醫師界乃至醫學界のみならず、社會公共事業の爲め努力貢獻する所あり。

△博士は一高醫學部の出身にして、現地に開業以來、拮据奮勉、不覇獨立の精神を以て起ち、漸く成功を贏ち得たる裡にも興學の念に燃え、常に臨床の餘暇幾星霜かの間、春風秋雨の努力研鑽を重ね、終に克く多年の宿志たる、(1)百日咳ノ一新治療法、(2)百日咳恢復期血清ノ應用ニ就テの學位論文を完成して、大正十五年三月慶應義塾大學より學位を獲得せり。其の輝しき奮鬪の跡を顧みれば、感慨無量にして語ること尠しとせず、少くとも其の精神氣慨と、堅忍不拔の努力とは、立志傳的篤學の士として範を示すに足り、後學の採つて學ぶべき頂門の一針として銘すべき也。而かも謙遜なる博士は、その今日あるも自己の識學を衒はず、學者として尊大振るなく、功名榮達を意に介せず、一意專心、唯だ仁術の爲め誠意誠實を盡して以て自己の天職なるを樂しみ、淡々として己を虛うして人に篤く、又克く社會公共の爲め力を盡す態度の奥床しき美德は、學德兼備せる醫博人物として敬意を表すべき也。氏は現住地の人にして、明治八年生る。高齡今や耳順に入る一歲、元氣旺盛にして、內外甚だ多忙なるに拘はらず、克く努力勵精する所あり。著者は更めて、切に博士の自重加餐を祈る者也。

◇

林　務　△京都市御幸町御池上ルに小兒科を以て著聞する林小兒科醫院あり、院長林務博士の經營せる診療所なり。開業拮据不斷の熱誠努力と、爛熟せる打診の好評とは、年々歲々繁榮をいや增して堅實なる地盤を築き、今や一流の名醫として、成功の位地を占む。博士は岐阜縣立大垣中學校を經て、明治四十四年六月京都府立醫學專門學校卒業、同四十四年十二月一年志願兵として步兵第三十三聯隊入營、大正二年六月愛媛縣町立宇和島病院醫員、同三年六月辭任す、同三年六月より同四年六月迄、滋賀縣長濱病院勤務、同四年七月京都府立醫學專門學校附屬療病院醫員、同十年九月京都府立醫科大學助手、同十五年六月京都帝國大學醫學部專修科入學、昭和二年二月醫學博士の學位を受領す、其後現住地にて開業今日に至る。

△主論文は「肝臟機能障碍ガ抗體生成ニ及ボス影響ニ就テ」にして、參考論文は、(1)黴毒患者ノ尿中ニ於ケル不透析性物質ノ造坑原作用ノ研究（第一報告）、(2)「コブラ」毒素ノ黴毒患者血液ニ及ボス作用ニ就テ、(3)二、三急性傳染病ニ於ケル尿ト免疫血清トノ關係ニ就テ、(4)「ストロフルス、インフアンツム」ノ臨床的觀察、(5)興味アル總輸腸管囊腫ノ一例、(6)小兒期ニ於ケル肝臟膿瘍ニ就テ、(7)「コブラ」毒素溶血作用ノ本態ニ就テ、(8)結核兒ニ於ケル假性腦膜炎ノ二例等なり。其他論著夥多。

△博士は滋賀縣犬上郡彦根町の出身、明治二十年生なれば、當年不惑に入る九歲也。學究的溫厚の紳士にして、熱心なる研究家を以て知られ、臨床家としては多年の經驗に富み、手腕圓熟して愈々獨特の精彩を放ち、今や斯科界の重鎭を以て囑目せらる。

◇

宮崎森治　△福岡縣行橋博多町に在る宮崎小兒科醫院は、院長宮崎森治博士の診療所也。開業既に古く、當地方診療界に於て小兒科を以て斷然頭角を拔き、好評嘖々の裡に年々歲々繁榮を持續しつゝあるを見る、蓋し近來の成功と云ふべき乎。氏は福岡縣立豐津中學校を經て、大正四年大阪府高等醫學校を卒ゆ、其後鄕里たる現住地に於て開業今日に至れるが、斯間大阪醫大生理學教室に於て故中川知一教授指導の下に研究の結果、昭和八年四月大阪帝大より學位を獲得せる名醫博として名聲を馳せ、氏が仁術に一段の光彩を放てり。

△學位主論文は「心肺標本ニ於ケル心臟ノ糖消費ニ及ボス諸影響」にして、參考論文は、(1)瀉血ノ腦脊髓液糖量ニ及ボス影響、(2)藥液腔內ニ注入セル「アドレナリン」ノ血壓ニ及ボス影響、(3)尿素「クレアチン」及ビ「クレアチニン」ノ蛙腓腸筋疲勞曲線ニ及ボス影響、(4)胃腸管ノ色素排泄ニ及ボス其自律神經截斷ノ影響等なり。

△殊に特筆すべきは、氏が名譽ある學位を獲得せる迄には、幾星霜かの久しき間、開業の傍ら研學切磋常に學を錬り

腕を磨くに餘念なく、懸命の努力精進を續け、獨力貫行、開業醫としての面目と位地とを保持しつゝ、終に克く其の興學の初志を貫徹せる點にあり。その今日ある成業と篤學とは、氏が奮鬪の跡を物語るものにして氏が前半生史に光彩陸離たらしめたり。氏は現住地の出身にて、宮崎彌平の二男、明治二十年生る。學究的溫厚の紳士にして、當年四十有九歳、多年の經驗と共に手腕愈々圓熟して最も重望せらるゝ時代に在り。努力主義の人にして、意氣を以て起ち、終始診療に忠實を盡すの外、何等の道樂を求めず、專念仁術を以て任ずる好箇の臨床家たるを見る。

◇

小原芳樹　△東京市神田區錦町三ノ四に著名なる小原小兒科醫院あり、院長小原芳樹博士は東大系の小兒科醫として錚々たるものにして、開業古く、既に牢乎たる地盤を有し、玲瓏たる打診の好評は多年の聲望と相俟つて年々歳々繁榮をいや增し今や拔くべからざる盛況を呈す。博士は長野縣立諏訪中學校、二高を經て、大正七年東京帝大醫科を卒へ、同八年一月より十三年三月迄同醫學部小兒科教室副手として弘田長教授及び栗山重信教授に師事す、此間同八年一月より九年十一月迄同醫學部醫化學教室副手として柿内三郎教授に師事し、又同十一年十月より千葉醫大附屬專門部講師及同附屬醫院小兒科醫長拜命、同十三年五月同教授拜命、同年十二月辭任、同月東京女子醫專教授となり小兒科を擔任す、同時に自宅開業今日に至る、其間大正十四年三月東京帝大より學位を受領せり。

△學位主論文は『「レガール」ノ反應及コレヲ應用シタル尿中既成「アセトン」及「アセト」錯酸ノ定量法ニ就テ』にして、參考論文は、(1)東京市養育院在院者營養研究、(2)注射用重曹水ノ製法ニ就テ等なり。其他論著夥多。氏は長野縣諏訪郡湊村の人、花岡嘉助の次男、明治二十五年生にして當年四十有四歳也。號西湖、乘馬、圍碁を越味す。學究的溫厚の紳士にして、臨床家として多年の經驗を有し、今は手腕圓熟の域に入り、最も得意の時代にして多大の信望を博せり。

◇

大行慶雄　△東京市中野組合病院小兒科に大行慶雄博士あり。氏は千葉醫大派の新進にして、大學卒業後母校の教室に留り、專ら生理學の研究に沒頭し、學位獲得後教室を勇退して以來、實地診療界に進出して獨特の新手腕を揮ひ、其の熱心なる診療振りは躍如として新人の意氣を示せり。更に其の學歴を詳說すれば、長岡中學校、第七高等學校造士館を經て、昭和五年千葉醫大を卒業し、引續き同大學生理學教室副手に次で助手となり、同十年八月同大學に於て學位を受領せり、爾來同教室を辭して濟生會乳兒院に勤務し、現在にては頭書の現職に在り。斯間母校にては恩師酒井卓造、鈴木正夫兩博士の指導を受け專ら生理學を研究せり。

△學位主論文は「剔出腸管ニ於ケル内壓ノ刺激効果」にして、外に參考論文として、(1)家兎腸管ニ於ケル葡萄糖ノ吸收ト水分ノ移動ニ就テ、(2)迷走神經切除家兎腸ニ於ケル葡萄糖ノ吸收ト水分ノ移動ニ就テ等二篇あり。

△感想に曰く(一)かつて醫は仁術と云はれたが、現今に於てはそれ等の封建的のヴェールははぎ取られて醫は正に一ケの商品と化した觀がある。かくの如く個化した醫に對して我々の一考を要する事は醫も又社會的分業の一つであると云ふ事ではあるまいか。(二)學位問題について諸說フンプンとしてゐるが、醫者に於て博士號を有つ者の多いと云ふ事は學の爲慶すべき事であると思ふ。個々の個人の學位獲得の動機及目的は如何樣にもあれ、その課程と結果とに於て學は進歩の方向をたどるであらう。そこに所謂理性の絞智がある。個人の利己的行爲はその個人の利害とは別個の無意識的の社會的結果を導く云々と。

△出身地は新潟縣南魚沼郡中之島村大字中子にして、明治三十五年生れ、當年三十有六歳也。少壯の意氣潑剌として研究心に燃え、漸く學究生活より轉向して治療界に精進するや日尙淺く、向後の修養活躍と相俟つて有爲の將來を期待せらる。性來實直にして阿諛迎合を好まず、謙遜にして自己の識學を衒はず、誠意、誠實を以て臨床に當り、親切

にして愛嬌に富む、蓋し小兒科に相應しき性格の持主たるを見る。研究以外には哲學、劇、映畫、水泳などに趣味を有す。家庭には母トシ、妻ミヨ、長男良知、次男黎治、長女眞理あり。東京市杉並區荻窪三ノ一三五に住む。

◇

中井叔夫　△朝鮮木浦府常盤病院小兒科に中井叔夫博士あり。氏は京大派の臨床醫博として多年の經驗に富み、獨特の手腕を有す。今や多年の蘊蓄を傾倒して益々其の特色を發揮し、打診の好評と相俟つて內外の信望を博す。更に氏の學歷及び閱歷より言へば、大正十三年京都帝國大學醫學部卒業、同年四月より同十五年二月まで同學部小兒科教室に勤務、それより昭和三年まで横須賀海軍共濟會病院、日本赤十字社岩手支部病院の各小兒科を擔當、其後再び母校の小兒科教室に入りて研究、昭和十年三月木浦府常盤病院小兒科就任、同年十月學位を授與せられ今日に至る。斯間主として平井毓太郎教授、故鈴木正教授、服部峻治郎教授の指導を受け、小兒科學を專攻せり。

△學位主論文は「結核補體結合及反應ニ關スル研究」にして二篇より成る。參考論文は、(1)一般患兒ニ於ケル鹽基嗜好性顆粒赤血球ノ發現ニ就テ、(2)結核患兒血清中ノ正常溶血素含有量ニ就テ、(3)ウイルソン氏病(伏木卓也共著)。

△感想に曰く「醫が眞に仁術であり得る日の到來を翹望す」云々。氏の出身地は愛知縣多名郡旭村大字目長三六四にして、明治三十年中井貞三の五男に生る。學究的溫厚の紳士にして、臨床家に相應しき品格を備へ、志想健實也。今は奮鬪活躍の働盛にて、當年漸く不惑に入る一、體軀小柄なるも少壯の意氣益壯にして、臨床方面には「醫は仁術也」を理想として臨み實行を主義とす、又研究方面に對する態度の眞劍にして常に精研修養に餘念なき前途は、多大の期待を以て氏が將來の大成を待望せらる。强ひて性癖の一端を指摘すれば、氣の弱きこと、無口のこと、無精のことなどは、或は氏の短所と見るべきか。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、外に何等の道樂なきが如し。家庭には妻と子供三人あり、團欒の裡は常に靄々たり。朝鮮木浦府常盤町二ノ三に住む。

◇

渡邊德之助　△中華民國漢口日本租界に在る、財團法人同仁會漢口醫院に小兒科醫長として渡邊德之助博士あり。氏の學歷及び閱歷より見れば、大正六年三月茨城縣立下妻中學校卒業、昭和三年三月北海道帝國大學醫學部卒業直ちに東京帝國大學醫學部附屬泉橋慈善病院小兒科入局、同九年十月退局するまで太田孝之博士に師事して小兒科專攻、同九年十月同仁會漢口醫院小兒科醫長就任今日に至る、斯間學位請求論文を東京帝大醫學部へ提出して、同十一年九月學位を授與せらる。其の深遠なる學識は言はずもがな、研鑽多年の經驗に富み、その蘊蓄を傾けて診療界へ躍進して以來、氏獨特の手腕を發揮するに自由の立場に起ち、拮据勤勉相俟つて內外の信望を博す。

△學位主論文は「乳兒脚氣ニ於ケル皮膚毛細血管ノ研究」にして、參考論文六篇あり、(1)乳兒脚氣ノ主要臟器ノ病理組織學的研究、(2)穀粉榮養障碍症脚氣型ノ重要臟器ノ病理組織學的研究、(3)人乳中毒症(腦型乳兒脚氣)ノ重要臟器ノ病理組織學的研究、(4)小兒期ニ於ケル血液疾患知見補遺、第一篇ヤクシュ・ハイエム氏貧血ノ六例、(5)同、第二篇再生不能性貧血、(6)同、第三篇特發性血小板減少症ノ一例等なり。

△氏は明治三十三年生れの少壯にして、茨城縣結城郡飯沼村大字古間木一〇一に本籍あり。學究的眞摯なる臨床家として、その今日あるは既に博士の輝しき閱歷にあるが如く、躍如たる氏の面目を語るに足る。而かも年齒未だ三十有八、漸く圓熟せる手腕は淸新の意氣と共に益々冴え、今は奮鬪活躍の全盛時にて、最も得意の時代に入り、洋々たる前途は層一層期待せらる。氏の特徵と見るべきは、小兒科に相應しき性格の持主にして、溫情に富み親切也。中華民國漢口日本租界中街一〇三に住む。

◇

毛塚好忠　△東京市大森區雪ヶ谷町二四〇に新築成り、新裝せる內容の充實と相俟つて、近時著るしく評判

を高め、日增向上發展の活氣を呈しつゝある毛塚小兒科內科醫院は、院長毛塚好忠博士の經營にかゝり、博士自ら日々診療に精進して仁術の本分を盡し、着實と親切とをモットーとして診療界淨化の爲め奮盡活躍しつゝあり。學系より觀たる氏は、慈惠醫專出身の錚々たる臨床家にして、その專門たる小兒科及び內科に關しては特に多年の經驗に富み、研學切磋の結果、學位は慈惠醫大より獲得せる臨床醫博として一段の名聲を博し、今や多年蘊蓄せる博士獨特の手腕を益々發揮せんとする獨自の舞臺に在り、向後の活躍と相俟つて、洋々たる前途の向上發展は頗る刮目に値す。

△學歷及び閱歷を概括すれば、大正三年栃木縣立栃木中學校卒業、同八年東京慈惠醫專卒業、同年四月より同九年一月迄鎌倉養生院勤務、同九年二月西伊豆土肥溫泉に開業、村醫、土肥金山株式會社(住友)鑛醫を囑託せらる、昭和八年四月慈惠醫大生理學教室に入室、浦本政三郎教授指導の下に生理學專攻、同十一年九月學位を授與せらる。

△學位主論文は「刺激生理學」にして、筋及神經の乳酸量に就ての研究なり。參考論文は「運動醫學」にして、オリンピツク選手清川正二、拳闘の堀口恒男及本大學生をマテリアル(高山醫學)として研究せり。

△感想に曰く「目下醫業難の聲大です、着實、親切をモットーとして進み、幾分なりとも病者を慰め度いと思つてゐます」云々。氏は栃木縣下都賀郡赤津村大字大柿の出身、明治二十九年生にして、父は伊代吉、母はマツと呼ぶ、その五男也。學園を巢立ちて以來、主として臨床方面に活躍し、更に刺激生理學及び運動醫學の研究を志して一生面を啓き、今は專ら眞劍味を以て忠實なる國手として起ち、その理想とせる着實と親切とをモットーとして躬行實踐を主義とす。人と爲り溫厚篤實にして、小兒科に相應しき性格を備へ、人に接し患者を待つに懇篤克く誠實を盡す。年齡よりすれば當年漸く不惑に入る二、年壯の意氣と相俟つて、多年蘊蓄せる手腕は益々冴え、今は奮闘盛にて最も得意の時代に入る。濤聲は其號にして、俳句を能くし、圍碁を好む。實兄は實業家にして、從兄弟に醫博二名あり、家庭には妻マサノとの間に二男一女ありて朗らかなり。

耳鼻咽喉科

脇田政孝　△耳鼻咽喉科界現代の大家として重きを爲し、浪速診療界に於ける中堅人物として活躍しつゝあるは脇田政孝博士也。博士の經營主宰する耳鼻咽喉科脇田病院は、大阪市南區長堀橋南詰東入に結構堂々の陣を構へ、特に中耳炎、蓄膿症、鼻鞴科、扁桃腺病等、獨特の特色を發揮して斯科界に嶄然頭角を顯はし、好評嘖々の裡に其の大なる存在を認めらる。博士は京都府立醫專出身の耳鼻咽喉科學者として錚々たるものにして、斯科界の權威京大教授和辻春次博士指導の下に斯學を專攻し、次で歐米各國を視察して新知見を博め、京都帝大より學位を獲得せる名醫博として其の名聲を馳せ、その今日あらしめたるは博士の成功を物語りて餘蘊なし。

△博士は鳥取縣八頭郡下私都村の人、明治二十二年生にして、京都同志社普通校を經て、大正二年京都府立醫專を卒へ、直ちに京都帝大附屬醫院醫員介補を命ぜらる、翌三年一年志願兵として入營、同七年任陸軍三等軍醫、同年日獨戰役に出征、翌八年召集解除と共に京都帝大醫學部研究科に入學、同十一年まで耳鼻咽喉科教室にて和辻教授の指導を受く、日獨戰役の功に依り叙勳六等、同十一、二年歐米へ外遊を試み、同十二年六月學位受領、歸朝後間もなく倉敷中央病院耳鼻咽喉科醫長として就職し、同十三年任二等軍醫、同十五年同院を辭し大阪扁桃腺病院を開設して同院長となり昭和二年まで勤務す、爾來現住地にて開業、一般耳鼻咽喉科の診療に從事して今日に至る。

△學位主論文は「電氣刺戟ニ因スル聽器ノ病理實驗的研究」にして、參考論文は、(1)細菌ニ因スル中耳炎ノ實驗的研究補遺、(2)扁桃腺ノ生體染色及其淋巴細胞濾出ニ關スル知見補遺、(?)顆顆葉皮質ノ所謂聽中樞部ヲ破壞シタル後ノ神

經系統及內耳迷路ニ於ケル實驗的病理等、他に論著夥多あり。

△感想に曰く「今から丁度二十年、私が始めて醫者になつた當時扁桃腺の手術といへば大てい切除する位であつて、扁桃腺の全摘出するといふことなどは全く亂暴極まることだ、特に發熱してゐる急性炎症のある扁桃腺に對しては外科的處置を講ずるなど以つての外だといふのが一般醫界の認識であつた。然し自分が專門醫の立場にあつて日常診療に從事してゐると咽頭や口盍の扁桃腺の病氣又はこれから起因してゐる病氣が頗る多いのに一驚を呈したと同時に思ひ切つて扁桃腺の全摘出を施行して見ると世人のいふが如き心配も顧慮もないのみならず、扁桃腺自體の疾病はそれ限り根絶されて仕舞ふ計りでなく、爾後に於ける被術者の保健的狀態は從前と全く雲泥の差であつて殆ど比較にならぬ位好結果を得られるといふ事實である。私は已に十數年來確固たる信念の下に罹患扁桃腺の全摘出を推奬し、且つ實行してゐる一人である。蓋し將來は身體虛弱なる小兒に對してはこの扁摘第一主義を以て臨む時代も遠きことではあるまいと感ずるものである」云々。

△博士の年齒今や不惑有七歲、貴公子然たる學究的溫厚の紳士にして、圓熟せる手腕、人格相俟つて一段の貫祿を備へ、今は最も奮鬪活躍の全盛時に在り。若しそれ臨床家としての經歷よりすれば、博士の前半生史よく之を語りて餘蘊なし、殊に博士の感想にもある如く、此の十數年來確固たる信念の下に罹患扁桃腺の全摘出を推奬し、且つ實行しつゝある先覺者として、博士獨特の手腕に對しては既に斯界に定評あるが如し。博士に面識ある著者をして言はしむれば、先づ第一の印象として脇田耳鼻科に對し好感を抱かしめたるは、玄關子（女子取次）の親切にして躾の善きこと、第二に來院患者輻輳し診療甚だ多忙なるにも拘はらず、著者を歡待せる博士は破顏溫笑を以て迎へ、その態度悠容として迫らず、又敢て學者として尊大振るなく、談論風發、話題に富み頗る痛快、凛々とした風貌は落着ある平和の裡に威嚴を存し、敬慕の念を深からしめたる點にあり。著者は古き記憶を呼び起し、茲に更めて敬意を表する者也。

◇

西田文治　△京都市東山區繩手四條下ル大和町に新裝せる西田病院あり、耳鼻咽喉科を以て斷然頭角を拔くの概あり。院長西田文治博士の經營する所にして、鐵筋コンクリート四階建にて和洋兩樣の病室、レントゲン機械、エレベータ、日光浴室、娯樂室、各室ラヂオ設備、電氣暖房の外、各種衞生設備等完備して一流病院たるの本質を具備す。博士は京都府立醫專の出身にして、陸軍三等軍醫正の印綬を帶び從六位勳五等を有す。陸軍々醫學校にては時の校長岩田敎授に師事し、後ち又た京都帝大にては耳鼻咽喉科學の泰斗和辻春次敎授の指導を受けて京大より學位を得、研學切磋、多年の經驗と相俟つて圓熟せる手腕は益々獨特の技能を發揮して餘す所なく、好評嘖々の裡に拔くべからざる信望を博し盛況を極む。

△博士は石川縣能美郡川北村の人、明治十九年生にして、同四十年京都府立醫專を卒へ、同年仟陸軍三等軍醫、同四十二、三、四年の間兩回陸軍々醫學校に學ぶ、同四十三年任二等軍醫、大正二年任一等軍醫、同十年任三等軍醫正、同年京都帝大耳鼻咽喉科敎室にて研究、同十二年伏見桃山にて開業、同十三年一月學位受領、昭和七年夏現住地に新築落成と共に移轉せり、同時に伏見桃山の舊病院は仁科病院と改稱し、令弟仁科亨に經營を委ね、耳鼻咽喉科の診療は從來通り博士自ら擔任し居れり。

△學位主論文は「聽神經終末器官ト同神經聽器トノ相對的及其續發的各變化ノ病理實驗」にして、參考論文は、(1)化膿性腦膜炎ニ於ケル聽器ノ病理實驗的研究、(2)涙囊炎ノ鼻內手術療法ニ就テ、(3)歐氏管軟骨部ニ成立スル他覺的耳鳴症ニ就テ、なるが他にも論著多種あり。

△顧みて氏が偏窟者を以て自ら任じ、同僚よりは世間見ずとも言はれたる學生時代より、少くも京都私立病院中に拇指

を屈せらるゝ今日の成功と其の位地とに想到せば、知るものをして轉た今昔の感を深からしむるものあらむ。著者の打診果して正か否か、著者をして言はしむれば、多年の軍隊生活にて鍛へ上げたる不撓不屈の精神と、秩序ある生活の様式とは、氏が大學に於ける研究と、實地家としての活動に少からざる寄與を爲したることは爭はれざる事實にして、其の克く今日の境遇を生めるものは學校の成績（首席卒業）、素行、軍隊に於ける教養、帝大に於ける研究態度の眞劍さ、活社會に於ける眞面目さ、從來の研究の續行、將又不言實行主義等の現はれが即ち其の礎を爲せる第一の原因と見るべし、又以て頂門の一針として學ぶべきものあるを信ず。博士の如きは眞面目なる好箇の臨床家として、學德兼備の點に於て推奬に値し敬意を表す。

◇

山口　競　△自己の專門たる耳鼻咽喉科を標榜して、長野市千歳町に開業せる山口競博士は、世人周知の如く耳鼻咽喉科醫長として久しく日赤長野支部病院に勤め、十年一日の如く孜々として其の職に勵しみ、終始診療界の爲め貢獻せる努力は酬ひられ、多年扶植せる信望と共に、今や拔くべからざる獨立の地盤を確保するに至れり、蓋し近來の成功と言ふべき乎。博士は東大系四十四年組の出身、恩師岡田和一郎教授に就きて耳鼻咽喉科學を專攻し、母校より學位を獲得せる後ち歐洲に遊びて新知見を廣め、學識該博にして臨床的經驗の豐富なる點に於て、其の地方に拇指を屈せらる、亦當然なりと云ふべし。

△博士は栃木縣河内郡雀宮村山口爲重郎の五男、明治十六年生にして、縣立宇都宮中學校、二高を經て、同四十四年東京帝大醫科を卒へ、副手として耳鼻咽喉科教室に勤め、大正二年日赤長野支部病院耳鼻咽喉科醫長に就任し、同十三年一月學位を受領す、同年同院より海外留學を命ぜられて渡歐、同年末歸朝復職す、昭和二年辭職、現住地にて開業今日に至れり、その今日あるもの良く之を物語りて餘す所なし。

△學位主論文は「金屬鑄型ニ依ル日本人ノ乳腐竇及迷路ノ形態的研究」にして、參考論文として、(1)骨性迷路ノ「レントゲン」像ニ就テ、(2)深部氣道異物ニ就テ、(3)直達鏡下抽出或ハ自然道排出ニヨル食道異物ノ四十一例ニ就テ、の三篇ある外、他に論著多種あり。

△游浩は其の號にして洋畫を能くす、又た園藝に趣味を有し業餘の樂しみとす。溫厚の紳士にして、篤實謙讓、阿附迎合を好まず、人に篤く患者を待つに親切を以てし、居常又能く應答の禮を重んず、以て其の爲人を知り圓熟せる人格を敬慕せしむ。博士の年齒今や知命に入る三歳、元氣益々旺盛にして學識、手腕、共に練達の佳境に達し、好箇の臨床家として最も信望せらるゝ時代にして一段の貫祿を有す。春秋猶豐富なるの秋、折角の自重加餐を祈るや切也。

◇

富田治郎　△中京の醫博界は多士濟々として群雄割據の奇觀を呈す。此間に介在して、富田耳鼻咽喉科病院（名古屋市中區南吳服町二丁目）院長富田治郎博士の盛名は斯科の大家として推され、多年の聲望と相俟つて斷然其頭角を拔き、牢固として侵すべからざる地盤を有す。殊に先年新築竣工せし病院は宏大ならざるも實用的にして內部の治療設備は完備し、入院患者の收容と共に來院患者の診察治療上間然する所なく院內常に繁忙を極む、尙近來市內布池町に住宅を新築し此所にても治療に從事しつゝあり。

△博士は愛知縣西枇杷島町醫師富田泰造の次男、明治十七年生にして、同三十九年愛知醫專を卒へ、直ちに愛知縣立病院醫員として勤め、同四十二年京都帝大醫科耳鼻咽喉科教室に愛知縣より留學を命ぜられ和辻（春次）教授の下に研究する事一年半、同四十五年より母校の耳鼻咽喉科學授業擔當二ヶ年半、大正三年以來名古屋市に於て耳鼻咽喉科開業、傍ら同十年より一年半の間愛知醫大病理學教室にて林（直助）教授指導の下にて研究す、同十二、三年渡歐、西歐各國を巡視見學す、歸朝以來一般の診療に從事し今日に至る、其間大正十三年三月京都帝大にて學位受領、同十

四年富田耳鼻咽喉科病院を現住地に新築移轉せり。

△學位主論文は「扁桃腺ノ細菌學的並ニ病理學的研究補遺」にして二篇より成る。參考論文は、(1)氣管創傷ノ治痊機轉ニ於ケル實驗的病理、(2)動物及人類ノ喉頭粘膜ニ於ケル腺樣組織ニ就テ、(3)內耳諸臟器ハ動物ノ死後ニ於テ如何ニ變化スルヤの外七篇あり。

△和歌、俳句、漢詩、書を能くす、尙多年碧松軒盧山禪師に親交ありて禪道を修め、靜山居士と號す、時に又圍棋に親しみ、謠曲に耽ける事あり、殊に圍棋は初段の棋品を有す。博士の年齡漸く知命に入る二歲、日常醫務多忙にして席を暖むるに暇なしと雖、一意倦まざるの氣慨を有し元氣甚だ旺盛なり。人と爲り好學溫厚の紳士にして高潔なる人格を備へ、其學識、專門的技術は年と共に圓熟して一段の重きを加ふ。醫博界の中堅人物として推奬するを多幸とし、併せて自重加餐を祈るや切也。

◇

鳥居惠二

△新潟醫科大學耳鼻咽喉科學主任敎授鳥居惠二博士は、京大系大正六年組の逸才にして、母校より學位を得、久しく母校の敎壇に起ち、後歐洲に遊び、主として獨逸にて耳鼻咽喉科學を研究せるが、就中聽器と航空病との關係を明にしたる航空生理の研究に關しては著名にして學界既に定評あり。其眞摯にして純潔なる性格は其豐富なる學識と相俟つて、內外學界に多大の信望を博し、今や學內の重鎭たるのみならず、耳鼻咽喉科界現代の一權威たる貫祿を有す。

△博士は德島縣脇町の人逢坂政太郎の二男にして、明治二十四年を以て生れ現姓を嗣ぐ。大正六年京都帝大醫科を卒へ、直ちに同大學助手として外科學敎室に勤務、同九年任助敎授、同十二年文部省在外研究員として獨逸に留學を被命、後佛、英、米、各國を視察して、同十四年歸朝す、同時に新潟醫大敎授に任ぜられ、今日に至る、其間大正十三年三月京都帝大より學位を受領せり。

△學位主論文は、(1)航空生理ノ統計的觀察、(2)航空生理ノ實驗的研究（其一、其二）にして、參考論文は、(1)麻痺ヲ伴ヘル結核性脊椎炎ト其療法、(2)「インフルエンザ」耳炎ニ就テ、(3)所謂後筋麻痺ノ原因補遺、(4)上氣道特ニ鼻腔並に喉頭組織ノ生體色素攝取、(5)「クロールアミン」Tノ耳鼻的、特ニ眞珠腫ニ對スル應用ニ就テ等なり、他に內外にて發表せる論著夥多。

△純眞なる年壯の學者にして、學者タイプの風貌に威嚴を有し、謹嚴そのものゝ性格を表示して餘蘊なし。醫育と研究とは博士の最も趣味とするところにして、讀書の外他に道樂を求めず、研學切磋、常に品性の陶冶と相俟つて修養怠らざるを見る、又時には旅行を樂しむの風あり。近來博士人物の人格に對する紛々たる世論益々喧しからんとする の秋、世論を正しく導く上に能く之を戒めて、指導薰陶の宜しきを得んことを、著者は更めて博士の力に待望して止まざる者也。新潟市濱田中町に住す。

◇

神尾友修

△帝都診療界の重鎭にして、耳鼻咽喉科界現代の大家として嘖々たる名聲を馳せつゝある、神尾友修博士の經營せる神尾耳鼻咽喉科醫院は、小石川區鶯籠町二五三に結構なる陣容を構へ、古き歷史と共に內容充實し、既に獲得せる地盤は牢乎として動かず、年々歲々向上發展の上に超然として頭角を拔き成功の位地に在り。博士は東大系の耳鼻咽喉科學者として逸色せる一異才にして、嘗て獨逸に留學するや、ウユルツブルグ大學マナツセ敎授に耳鼻咽喉科學を、グライスワルド大學フリドベルゲル敎授に血淸學を專攻し、歸朝後母校より學位を得たる大家として既に斯界に定評あり。

△更に其の學歷及び閱歷を概括して觀るに、會津中學校、一高を經て、明治四十二年十二月東京帝大醫科大學を卒へ、

翌四十三年一月より四十五年四月迄東大大學院在學、傍ら東大耳鼻咽喉科學教室副手として、耳鼻咽喉科學の研究に從事す、同四十五年五月大學院退學と同時に副手を辭し、根岸養生院々長就任、大正八年一月より神田に開業、同十年四月養生院を辭し、私費渡歐留學の途に上り、同十三年一月迄獨逸滯在、主として前揭の大學にて研究、同十三年三月歸朝、爾來專ら開業に從事し今日に至る、斯間、大正十三年七月學位を受領せり。

△學位主論文は『「オトスクレローゼ」ニ關スル實驗的研究』にして原著は獨逸文なり。參考論文としては、(1)扁桃腺ノ機能補遺、(2)喘息ト過敏症トノ關係ヲ海猽ニテ實驗的ニ證明シ得ルカ（獨文）あり。他の論著中、(1)初生兒哺乳兒ノ中耳炎（單行本）、(2)上顎竇皮膚樣囊腫其發生及治療ニ就テ、(3)鼻腔內硬化性乳嘴腫ノ一例的鼻粘膜上皮細胞ノ化生ニ就テ、(4)「サルヴアルサン」注射後ニ來ルメニール氏症ニ就テ、(5)血淸療法ニ就テ、其他夥多。著書としては

△福島縣若松市屋敷町に本籍を有し、明治十七年福島縣耶摩郡金田村に生る。溫厚なる學究的紳士にして、年齒知命に入る二歲也。臨床醫家として起ちて以來幾星霜、幾多の難關を突破して獨力貫行、克く今日の位地と聲望とを贏得たるは成功と云はざるを得ず。而かも謙遜なる氏は自己の識學を衒はず、恬澹として功名榮達に介意せず、克く自抑して人に厚く、又能く社會公共の事に盡す。平生醫療と研究とに趣味を集中して他に道樂を求めず、一意專心、仁術の爲め唯だ、誠意誠實を盡して自己の天職なるを樂しむの士也。

◇

辰巳　庄太郎　△大阪帝大の前身たる大阪醫大派の一勢力と見るべき、耳鼻咽喉科界の重鎭辰巳庄太郎博士の經營する辰巳耳鼻咽喉科醫院は、大阪市南區鰻谷東之町十五に在り、開業已に古く、多年聲望を扶植して動かすべからざる堅き地盤を有し、卓然として群を拔き悠々たる位地を占む。氏は大阪市の人、明治十八年を以て生る、大阪醫大系（明治三十九年卒業）の先輩にして、耳鼻咽喉科を以て起ち、卒業後久しく母校に在りて研究に從事し、大正十四年二月大阪醫大にて學位を受領せり、斯間大阪醫大講師兼附屬醫院醫員たりしが、辭職後現住所に開業今日に至れり。

△學位主論文は「舞踏鼠聽器ノ解剖學的研究補遺」也。本論文は十章より成る。要之、本論文中前人の謬見を正し、新知見として、殊に興味を覺ゆるは、舞踏鼠聽器の病的變化の主體が、蝸牛殼神經領域、並に正圓窓聽斑に於ける高度の萎縮にして、然も、生後十日、乃至十五日にして、蝸牛殼基底廻轉起始部の螺旋神經節の二三細胞の消失、並に染色性の不平同等、原發性病變の端緒を發現し、之が時日の經過と共に、縱斷的には漸次上方廻轉の螺旋神經節に蔓延し、又同時に、橫斷的には骨螺旋板神經纖維に、次でコルチ氏器感覺並に支柱細胞に、續發性病變を發來し、時日の經過と共に蔓延增進して、二ヶ年の終り（老衰期）に達するも、其病變尙ほ進行を示して、停止する所なき推移を、示せるの事實なり。其他論著夥多あり。

◇

小野鑛造　△東京市神田區駿河臺四丁目二ノ六に耳科鼻喉科專門を以て著聞する小野病院あり。院長小野鑛造博士は東大系の耳鼻咽喉科臨床家として錚々たる名聲を馳せ、多年恩師岡田和三郎博士に師事する所ありて母校より學位を受領せり。博士の略歷より觀れば、一高を經て、明治四十二年東京帝大醫科大學を卒へ、翌四十三年より四十四年迄日本赤十字社病院外科に奉職、同四十四年七月より東京帝大耳鼻咽喉科醫局に入り副手として、大正三年三月迄勤務、直ちに耳鼻咽喉科小此木病院に副院長として勤務、同七年二月辭職と同時に神田區表神保町に私立耳鼻咽喉科病院設立、同十二年震災に罹り同十三年三月より牛込區筑土八幡町に移轉開業、同十四年三月學位受領、昭和二年再び神田區駿河臺なる現住所に移轉開業今日に至る。

△學位主論文は「聽器半視管ノ機能ヨリ强迫現象ノ成立ヲ論ズ」の一篇にして參考論文なし。要するに一側迷路の刺

戟若しくは破壞の際に現はるゝ所謂强迫現象成立の原因に關し、東西未だ定說なかりしを遺憾とし、氏は此現象を以て迷路平衡器關の生理的機能と密接の關係を有し一見不可解なる現象も仔細に之を觀察すれば半視管が身體の平衡器として作用せる必然の結果に過ぎざる事を推論し得たり、これ本論文の骨子なり。

△博士は福島縣伊達郡桑折町小野玄海の長男にして、明治十四年生る。壯齡今や知命に入る五歲、臨床家として多年の經驗に富み、手術的獨特の手腕を有し、今は最も重望せらるゝ時代にて成功の位地を占む。趣味としては銃獵を好む外他に道樂なく、「醫は仁術也」を以て任じ終始努力勵精する人也。

◇

高木　愼　△東京市神田區駿河臺二ノ三ノ五に著名なる高木耳鼻咽喉科醫院あり、高木愼博士の經營せる診療所也。博士は東大系の耳鼻咽喉科臨床家として錚々たるものにして、今や斯科の大家を以て囑目せられ、帝都診療界に重きを爲す一人物たり。學位は慈惠醫大より獲得せるが、主論文は『歐氏管「カテーテル」通氣ニ關スル研究』なり。要するに歐氏管通氣法は耳疾患の診斷及び治療上缺く可からざるものとして、既に十八世紀の初めより臨床に應用せられ來りたるものにして、爾來幾多の學者に依つて研究せられたる處多しと雖、尙未だ其機械的作用及治療機轉に關して闡明せられざる處尠からず、氏は歐氏管「カテーテル」通氣法に關し模型、死體及生體の三方面より精細なる科學的研究を施行せり。

△參考論文としては、(1)扁桃腺黴毒ニ就テ、(2)聽覺ニ關スル音響學的觀察、(3)聽能檢査ニ就テ、(4)鼻翼ニ發生セル癌腫ノ一例、(5)歐氏管狹窄或ハ閉塞ノ原因及ビ狹窄或ハ閉塞歐氏管ニ對スル「カテーテル」通氣法操作ニ關スル注意事項等あり。他の論著中、(1)炎症ト其處置ニ就テ、(2)巨大ナル上顎囊性後鼻腔「ポリープ」ノ一例、(3)耳根治手術後療法ノ一新法、其他枚擧に遑なし。

△一高を經て、大正八年十二月東京帝國大學醫學部卒業、直ちに同醫學部耳鼻咽喉科教室に於て副手として岡田和一郎博士に師事す、同十一年一月同教室を辭し東京神田駿河臺金杉病院に副院長として就任、同十二年二月東京帝國大學醫學部生理學教室に研究生として橋田教授に師事す、同十三年七月東京神田永富町東京一般病院耳鼻咽喉科部長兼任、同十四年六月學位を受領せり、其後辭職以來現住所に開業せり。

△東京市赤坂區仲町に本籍を有し、明治二十六年本籍地にて生る、士族高木作藏の五男也。溫厚なる年壯の紳士にして當年不惑に入る三歲、臨床家として多年鍛へ上げたる腕は愈々冴え、年壯の意氣と共に今は最も活躍の全盛時にて多大の信望を博し、悠々たる位地を占む、博士の得意や想ふべき也。趣味は音樂と旅行とにあり。

◇

本田　雄五郎　△帝都殷賑の中心にして醫院割據の環境たる京橋區銀座西五ノ五に本田耳鼻咽喉科病院あり、ドクトル、メヂチーネ本田雄五郎博士の經營するところ、其の堂々たる陣容振りと、充實せる內部の設備とは、慥に斯科一流の名病院としての特徵を表示して餘す所なし。診療には院長自ら手術的獨特手腕を揮ひ、他に斯科專門の新進平龜二郎、西端驥一博士、佐竹結實、伊東茂治氏等、各々分擔して異彩を放つところにまた博士の偉大さを髣髴せしむるの感を深うす。現に東京府醫師會常任理事たるの外幾多の公職に關與す、亦以て氏の社會的位地の評價を知るべし。

△顧みて氏が今日の地盤と聲望とを築き上げたる成功の奮鬪史を繙き見れば、轉た懦夫をして起たしむるものなしとせず。卽ち博士は長崎縣東彼杵郡上波佐見村故本田同俊の次男として、明治十年生れ、十二歲にして早くも父を喪ひ、家貧うして正規の學校に入學するを得ず、十五歲早崎高等小學校を卒業するや、同鄕醫師澁谷正雄の門に入り獨學自習、十八歲の時長崎に於て醫術開業前期試驗合格、二十歲にして熊本に於て同後期試驗に合格す、二十一歲の夏靑雲

の志を抱いて上京、日本橋病院長岡本武次の知遇を得、入りて外科部に勤務、明治三十五年東京帝大醫科大學耳鼻咽喉科第一期專科に入學、岡田和一郎教授に師事して研究し、同三十六年修業す、次で北里研究所に於て細菌學の講習を受く、同四十一年獨逸に自費留學、エルランゲン大學耳鼻咽喉科教室にてデンケル博士に就て研究、同四十二年ドクトル試驗に合格す、同四十三年歸朝と同時に日本橋病院耳鼻科主任となる、同四十五年之を辭し自宅開業に從事す、大正六年放射療法及び耳鼻咽喉科研究の爲め米國に遊學し同七年歸朝す、同十四年三月東京帝大にて學位受領、以て今日に至れり。

△學位主論文は「種々ナル細菌ニ依ル腦膜炎性內耳炎ノ實驗的研究」にして獨逸文の原著なり。參考論文なし。他に論著夥多、主として獨逸文より成る。主論文は聾症研究に益する所甚だ大なりとして學界に認められ既に定評あり。

△想ふに田舍醫師より奮起せる氏は、年少笈を負ふて早く鄉關を出でゝ上京し、會々醫界の先輩岡本武次翁の知遇を得、日本橋病院を頂天立地の踏み臺として以來、獨力貫行、學術の研鑽に一路邁進して倦むことを知らず、既にして獨逸留學より歸朝せる當時の博士は、專攻の耳鼻咽喉科學には一廉の蘊蓄を備え、歸朝後三年間は報恩の爲め日本橋病院に部長として働きながら臨床的實地の經驗を積み、愈々開業醫として獨立以來、二十有餘年一日の如く春風秋雨、日夜不斷の努力精進を續け、開業の傍ら常に研究に志し、日新醫學を魁として月步の設備に余念なく、遂に克く今日の隆盛と地位とを贏ち得たるもの立志傳的成功者としての範を示すに足る。今や獨り臨床家としてのみならず、京橋區醫師會を始め府の重鎭として社會的衆望が氏の一身に集まりつゝあるを見るも、如何に多大の尊敬と囑望とを受けつゝあるかを窺はる。一面又性格より見たる博士は、流石苦勞人だけに同情に富み能く後進を世話す、又人と接するに敢て城壁を設けず、應待懇切にして好感を抱かしむ。

◇

關川一郎　△日赤和歌山支部病院耳鼻咽喉科長として關川一郎博士の名聲は久しく其地方に著聞し、斯科の大家として民衆より多大の信賴と尊敬とを以て囑望せられつゝあり。博士は九州帝大系の一先輩にして、斯界の耆宿現九大名譽教授久保猪之吉博士の愛弟子として知られ、母校より學位を得たる錚々たる人物也。嘗て獨逸に留學するや伯林大學耳鼻喉咽科教室にてアイケン教授に師事し、又伯林コツホ研究所にて研究せるなど、既にして學識の該博なるは勿論、臨床に堪能にして手術的手腕の圓熟せる點に於ては既に批判の餘地なし。

△博士は日本中學、二高を經て、明治四十三年京都帝大福岡醫大を卒へ、同四十四年前記大學副手囑託、耳鼻咽喉科勤務、大正二年九州帝大助手、引續き耳鼻咽喉科教室勤務、同年九月依願免本官、日本赤十字社和歌山支部病院耳鼻咽喉科長として赴任、同九年病院長事務取扱を命ぜられ、同十二年四月より十三年六月迄獨逸留學、歸朝後復職、同十四年五月學位を受領せり。

△學位主論文は『肺炎球菌ニ於ケル「オプトヒン」耐性ノ本態』にして、獨逸文の原著なり。參考論文は、(1)乳嘴突起用鑿術後早期縫合ニ就テ、(2)血管神經鼻炎ノ一療法、治療新法、(3)巨大ナル舌乳嘴腫ノ一例、(4)最近氣管食道異物ノ直達鏡治驗例、(5)咽喉腫瘍ノ觀ヲ呈セル咽頭護謨腫ノ二例、外獨逸文原著一篇あり。

△博士は千葉縣香取郡米澤村の人にして、明治十四年生る、當年五十有五歲也。老熟の期に入り今は最も重望せらるゝ年輩にして、氏の仁術に一段の貫祿を加ふ。學究的敦厚の紳士にして、殊に臨床家としての特質を具備し、人に對し患者を待つに懇篤親切也、又應答禮を重んじ時務を欠ぐことなし、其の眞摯なる態度を多とし崇高なる人格を尊ぶ。業餘の趣味としては花卉園藝を親しむ風あり。和歌山市小松原町通四ノ一二に住す。

◇

田中達三郎　△大東京市の中央醫療界に於て、耳鼻科殊に鼻整形科の大家として仰がれ、今や大方より多大の

信望と尊敬とを受けて衆望を集め、又た一面には詩人樂山の名を恣にして醫文壇を賑はしつゝあるは田中達三郎博士也。博士が經營する田中耳鼻咽喉科醫院は京橋區木挽町一丁目に在り、結構宏大ならざるまでも整然として療器内容共充實し好感を覺えしむ。殊に又た博士の立志傳的異彩に富む篤學に至りては、學界の美談として人の皆賞する所也。

△千葉縣一宮町の人、慶應二年生にして、明治十五年より東京外國語學校に於て露語を四ケ年、傍ら獨逸語を兼修す又英語はイーストレーキ教師に、獨逸文學及び羅甸語は龜井藤太郎教師に、獨逸語及び獨文速記術並に佛蘭西語を獨人シャツマイヤ教師に就て學ぶ。明治二十三年濟生學舍に入り同二十八年醫學全科卒業、同年醫術開業試驗合格、同三十一年以降京橋區内に於て開業、大正五年北里研究所第一回講習を了へ同所研究生となり、同八年以降同所正助手となる、同十四年七月東京帝大より學位を授與せられたる篤學の士也。

△學位論文は『肺炎双球菌ノ免疫學的分類並ニ米國型トノ比較研究』が主論文なるが、本論文は肺炎病原双球菌に付「ロツクフエラー」教室の學者が之を免疫學的四型に劃然分類せるに對して、米國以外の學者間には多少の異論あるに鑑み、本邦に於ては果して之を如何なる型に分類し得べきかを研究したるものなり。外に參考論文として『肺炎双球菌ノ研究』の一篇あり、其他にも論著夥多。著書としては「内科類症診斷學、(上下)」『外科類症診斷學」、「臨床藥物學」等あり。

△感想に曰く「現代に於ける法律家は學位の有無に拘はらず、就中辯護士などは自己の權利義務を尊重して道德心の上に立つてゐる、そして同等の行動をとり同等の待遇をうけてゐる、即ち一の法人が引受けた法律問題の圖を他の法律家はこれを自分の圖にせんと申出ない、同業者間に於ける共同心、道德心が非常にかたい、醫師會に於てもかくあるべきなのに如何、開業醫の同志打ち、妬み合ひ、嫉み合ひ、僻み合ひ等々熾にしてこの樣な精神の缺けてゐることは實に憐むべきことである。淨化すべき明日の醫師會を作るべき殘された研究の餘地あるプロブレムだと信ずる」云々。

△樂山は號にして別に京齋とも稱す。詩作家にして歌道の嗜しみあり、殊に人生と詩に就て多大の趣味を持ち一家を成す。曩に「樂山詩集」第一輯（昭和七年五月）を自費刊行して同好の士に頒布せり。その詠ぜるものは雪月花の詩に非ずして、博士が常に燃ゆるが如き愛國の至誠より發露せる時事詩なれば、讀者をして轉た感激の念を深からしめたるものあり。聽く所に據れば、和漢の漢詩集は勿論、英譯獨譯に至るまで、凡そ漢詩の歐米に紹介せられたるものは、努めて之を購讀し研究しつゝありと。又たその趣味に至りては單に之に止まらず、寫眞術並に園藝に於ても夙に高級技術家の手腕を有し、博士の令閨も亦小禽の飼育に巧みにして其技に長ぜりと。博士一流の研究癖も亦以て之を窺はる。

△顧みれば博士は世の紈袴子弟の如く、悠々大學生活をなす所なくして、忙中刻苦力行、螢雪の功を積んで學位を獲得し、耳鼻科の領域に於ては鼻整形外科術に一新生面を開いて、社會に多大の貢獻をなしつゝ克く今日の地位と名聲とを贏ち得たるものにして、其の立志傳的異彩は陸離として氏が奮鬪の前半生史に輝き、眞に後學誘掖の好資料ともなり、博士界中特に推奬すべき一人物たるを囑望して止まざる也。

△附言す、著者は二度博士を訪問したることあり、玄關子の態度甚だ曖昧にして博士の在否を明言せず、暫く待たした上に只今御留守ですと、二度とも玄關拂に遭ひたることあり、平生能く懇篤なる書信を貰ひ居る博士としてはよもあるまじき事と信じ居るも、或は博士に此の事を通ぜず、訪問者に對して誰彼の區別なく、追拂主義を取りたる玄關子の勝手の振舞ひかと善意に解し居るも、獨り博士のみと言はず、名士の内には往々にして同樣の噂さを聽くこと屢次あり、訪問するものにとりては之れほど不快の念を起さしむることなし、一言附して一般識者の注意と反省を促さんとす。

◇

鰐淵源　△熊本醫科大學の新進鰐淵源博士は、耳鼻咽喉科學主任教授として重きを爲し、我國耳鼻科界現代の一權威たるを失はず。博士は東大系にして、恩師現東大名譽教授岡田和一郎博士に就きて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。學位論文は潜水夫並に「ケーソン」内勞働者に見る聽器傷害の實驗的研究なるが、所謂潜水夫病なる物は高壓空氣呼吸に依るものにして、身體の諸器官中聽器は最も傷害を受け易し、博士は即ち其の病理的變化を闡明せんとして、之れが實驗的研究を行へるものにして、『潜水夫並ニ「ケーソン」内勞働者ニ見ル聽器傷害ノ實驗的研究』と題する主論文即ちこれなり。外に參考論文としては、(1)腫瘍ノ壓迫ニヨル氣管及喉頭狹窄ノ剖檢四例、(2)バセドウ氏病患者ニ見タル氣管黴毒及黴毒性甲狀腺炎ニ就テ、(3)音響刺戟ニヨル聽器障碍ト氣壓トノ關係ニ就テの三篇あり、他にも論著多し。

△福井縣大野郡荒土村鰐淵源太郎の長男、明治廿七年生にして、福井縣立大野中學校、四高を經て、大正七年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學耳鼻咽喉科教室に入り、同十三年四月迄岡田教授指導の下に研究に從事す、先是同十二年九月海軍々醫學校耳鼻咽喉科教授を囑託され、同十三年五月縣立廣島病院耳鼻咽喉科部長就任、同十四年八月學位受領、昭和二年一月任熊本醫大教授、耳鼻咽喉科學擔任今日に至る。

△學究的年壯の紳士にして、當年不惑に入る二歳、新進の氣象に富み、研究心潑剌として精研甚だ勉むる所あり、學者タイプの風貌は凛々として謹嚴そのものの性格を物語りて余蘊なし、而かも寛厚能く人を容れ、學生を指導するに厚く、謙遜自抑、淡々として己を虚する態度は人をして敬慕の念を深からしむ。文藝趣味豊富にして文才あり、スポーツ、音樂を好む。熊本縣大江町本に住む。

◇

原田三杉　△東京市牛込區市谷田町三ノ一に耳鼻咽喉科を以て著聞する原田醫院あり、原田三杉博士の診療所にして、開業拮据十餘年、今や牢乎として拔くべからざる地盤を築き、繁榮歳と共に日增盛況を呈す。博士は東大系の耳鼻咽喉科學者にして、現東大名譽教授岡田和一郎博士の門弟として知られ、恩師指導の下に研究の結果、母校より學位を獲得せるは人皆識る所也。學位論文たる「骨傳導に關する研究」論文に對しては、嘗て大日本耳鼻咽喉科會總會（大正十五年四月第十七分科）に於て賞金を授與せられ、又右論文は帝國學士院記事（大正十五年二月）に採錄せらるゝなど、如何に精研の優秀なるかを語り、博士の面目の躍如たるものあるは此間に窺はる。

△博士は一高を經て、明治四十四年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學副手囑託せられ附屬醫院耳鼻咽喉科教室に勤務、大正五年一月依願副手解囑、同十四年八月學位受領、前記學位論文は三部より成り、參考論文なし。但し他に論著夥多あり。

△博士は明治廿一年、千葉縣東金町に生る、原田貞夫の長男也。溫厚の紳士にして壯齡不惑に入る八歳、學究的臨床家として早く診療界に進出し、獨自の舞臺に活躍して以來、拮据黽勉克く今日の聲望を博せるもの、博士の最も得意時代なるを思はしむ。研究は博士の最も趣味とする所にして、業餘孜々として精研に余念なき前途は猶洋々たり。海及之れに關する一切の事項に多大の興味を有し亦唯一の道樂とす。

◇

岩田誠久　△名古屋市中區若松町大須ホテル西隣に在る岩田耳鼻咽喉科醫院は、ドクトル、メヂチーネ岩田誠久博士の診療所にして、好評嘖々、斯科界に斷然頭角を拔きて一流に在り。博士は愛知醫專の出身にして、現東大名譽教授岡田和一郎博士に就きて耳鼻咽喉科學の蘊奥を究め、嘗て歐洲に遊學するや、瑞西ベルン大學チンメルマン教授に就て耳鼻咽喉科に關する解剖、組織、發生學を、ルワシェル教授に就きて耳鼻咽喉科學を、次で獨逸ベルリン大學パツソー、アイケン兩教授に就きて耳鼻咽喉科學を研究し、歸朝後東北帝大より學位を獲得せる篤學の士也。

△名古屋市の人、明治十五年生にして、明治卅八年愛知醫專卒業後、同年十一月より三十九年十二月迄愛知縣立病院熊谷外科介補勤務、同四十年一月より大正十年三月迄名古屋市中村耳鼻咽喉科病院副院長勤務、同六年九月より同年十一月迄東大耳鼻咽喉科教室にて岡田教授の指導を受く、同十年四月歐洲へ留學、主として瑞、獨にて研究、ベルン醫科大學にてドクトルの學位受領、同十三年四月歸朝後再び前記中村耳鼻咽喉科病院副院長勤務、傍ら同院研究室に於て研究作業に從事す、同十五年三月學位受領、昭和二年一月前記病院を辭し現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「蝙蝠內耳殊ニ其靜定器ノ組織的研究」にして、獨逸文の原著なり。參考論文は、(1)蝸牛殼螺旋靱帶外螺旋溝ノ上皮細胞所謂上被ニ就テ、(2)人體涙道ノ形態特ニ其發生學的研究補遺、(3)弱年者ニ於ケル副鼻腔惡性腸瘍ノ臨床的及病理解剖學的知見補遺、(4)鼻中隔前端ニ於ケル分葉狀肥大ニ就テ、(5)外聽前壁ヨリ發生セル「チリンドローム」ニ就テなり。

△學究的溫厚の紳士にして、篤學者として其の今日ある閱歷は博士の面目を語るに充分なり。當年知命に入る四歲、學者タイプの風貌の持主にして體軀强健、元氣甚だ旺盛也。其の專門に亘る學識、手腕は言はずもがな、今は最も重望せらるゝ年輩にして圓熟せる人格と相俟つて一段の貫祿を加ふ。幼より繪畫を好み業餘畫筆を弄す、夫人須磨子亦繪畫を能くす。當世博士界中の中堅たる醫博人物として敬意を表す。

◇

富岡末吉　△京都府立醫大助教授にして、附屬醫院耳鼻咽喉科副部長たる富岡末吉博士は、岡山市小橋町富岡豐吉の長男、明治二十一年生にして、大正三年京都府立醫專を卒へ、直ちに同校附屬療病院醫員、大正六年任同校助教授、十三年京都府立醫大講師を囑託せらる、十五年三月京都府立醫大にて學位を受領、同年京都府立醫大助教授に任ぜられ、兼ねて附屬醫院耳鼻咽喉科副部長を命ぜられ今日に至る。

△學位主論文「化學的刺戟ニ對スル耳迷路ノ生理學的並ニ病理學的反應現象ニ關スル實驗的研究」、參考論文(1)乾酪性副鼻竇炎ニ就キテ、(2)迷路開放術施行後治癒機轉ニ關スル實驗的研究、(3)再ビ乾酪性副鼻竇炎ニ就キテ、(4)所謂出血性鼻中隔鼻茸ノ再發ニ就キテ、(5)舌咽神經切斷後ニ於ケル味蕾ノ觀察補遺、外三篇あり。眞面目なる學究の士にして、研究を唯一の趣味として切磋琢だ勉むる所あり。平生學生を愛撫し克く提撕に力む。京都市左京區泉川町二番地の一に住む。

◇

西端驥一　△東京市瀧野川區西ケ原町二五四に新設せる瀧野川耳鼻咽喉科院は西端驥一博士の私立病院也。博士は東大系の大正九年組の一異才にして、曩に助教授として京都帝大醫學部に在勤中、論文を提出して京都帝大より學位を獲得せる新進の耳鼻咽喉科學者として錚々たるもの也。學位受領後象牙の塔を勇退するに及び、倉敷中央病院を經て日本醫大教授に就任して以來私學隆興の爲め努力する所ありしが、昭和七年渡歐に先だちて之を辭し、歐洲視察より歸朝後前記に開業せり。現に大日本耳鼻咽喉科學會評議員にして此の方面にも盡力する所あり。

△博士は一高を經て、大正九年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學附屬小石川分院助手に任命、十二年十月長岡市長岡病院耳鼻咽喉科醫長として赴任、十三年四月新潟醫大講師囑託、十四年十月任京都帝大醫學部助教授、十五年六月岡山縣倉敷中央病院耳鼻科醫長として赴任す、同年七月學位受領、昭和六年四月日本醫科大學教授、附屬第一、二醫院耳鼻咽喉科部長に就任、同七年四月之を辭し同年十月歐洲視察の途に就き翌八年四月歸朝す、爾來頭書の現住所に醫院開設一般の診療に從事す、同八年四月大日本耳鼻咽喉科學會評議員に推選せらる。

△學位主論文は「鳥類ニ於ケル體位均衡生理學補遺」にして、參考論文は(1)鳥類ノ大腦摘出後ノ態度ニ關スル研究、(2)鳥類ノ耳迷路破壞後ノ態度ニ關スル研究、(3)鳥類耳迷路破壞ノ一改良法、(4)左側上眼窩神經痛及ビ左側後口蓋弓缺

損ヲ伴ヘル畸形腫様鼻咽腔混合腫瘍の三篇なり、他にも論著夥多あり。

△博士は東京市小石川區大塚坂下町西端學の長男、明治二十七年生にして當年漸く不惑に入る二歳也。年壯氣鋭にして研學心に富み、平生刀圭甚だ多忙なるに拘らず、孜々として新智識の吸收に努め精研に餘念なし。診療に臨むや熱と力とを以て懇篤親切を盡す、其の態度の眞摯にして溫情あるは博士の特徴として傳へらる。好箇の臨床家としての高邁なる人格を尊ぶ。讀書家にして精研修養相俟つて業餘の趣味とす。

◇

笠井經夫

△岡山市東中山下に耳鼻咽喉科笠井病院あり、院長笠井經夫博士の經營にして、病室十四、病床十七を有し、其他内部の設備整ひ、診療手術の好評と相俟つて當市診療界に於ける私立病院中の一流を占む。岡山醫大派の名醫博として其の手腕を認められ、斯科界の大家として一家を成す。往年助教授として暫く岡山醫大の教壇に起ち、學生の指導に務むる所ありしも、象牙の塔を勇退して以來、診療界に精進するや、不覇獨立を貫行して、克く今日の地盤を築き得たるもの、其の卓越せる手腕と、篤き聲望の然らしめし所あるを思はしむ。

△岡山縣上道郡富山村の人、明治廿五年生にして、岡山縣立津山中學校を經て、大正五年岡山醫專を卒へ、直ちに岡山縣病院助手醫として耳鼻咽喉科勤務、十年任岡山醫專附屬醫院助手、十一年任岡山醫大助手、同年岡山醫大附屬醫學專門部耳鼻咽喉科講師囑託、十三年依願免本官、岡山醫大耳鼻咽喉科講師囑託、十四年任岡山醫大助教授、十五年十月學位受領、昭和二年依願岡山醫大を辭し爾來現住地にて開業今日に至る。斯間、昭和七年七月渡歐、スペイン、マドリツドに於ける第二回萬國耳鼻咽喉科學會出席を兼ね、主として獨逸國内著名の耳鼻咽喉科教室を見學、旅行を終へシベリヤ經由歸朝せり。

△學位主論文は「腦膜炎性迷路炎ノ實驗的研究」にして、第一報告腦膜炎性迷路炎ニ就テ、第二報告腦膜炎性迷路炎ノ治癒機轉ニ就テ、の二篇より成れり。參考論文は、(1)喫煙ノ氣道粘膜ニ及ボス影響ニ就キテノ實驗的研究、(2)咽頭内ニ達セル莖狀突起ノ二例、(3)再ビ長大ナル莖狀突起ニ就キテ、(4)鼻腔骨腫ニ就キテ、(5)「ヒステリー」性聾ニ就テ(6)實扶拏里性軟口蓋麻痺ノ食鹽水注射療法、(7)頰粘膜下ニ發生セル淋巴管内皮細胞腫ノ一例なるが、其他の論著少からざるものあり。

△博士の年齒今や不惑に入る四歳、年壯の意氣益壯んにして、多年の經驗と共に手腕愈々圓熟の域に入る。趣味としては研究と醫療そのものに集中して亦他事を顧みるなく、終始その事に勵精克く勉むるの概あり。學究的好箇の臨床家としての人格を尊重す。

◇

森川政三

△高田市財團法人知命堂病院に院長兼理事長として森川政三博士あり、兼ねて得意の耳鼻咽喉科を擔當す。同病院は内科、外科、産婦人科、耳鼻咽喉科の四科目に大別し、各科夫れ〳〵敏腕の學位所有の篤學の實地家を部長に置き、各科に醫員一二名を配し、設備は凡ゆる診療に不便を來さゞる樣完備し居り。博士や明治二十三年以來の歴史に耻ぢざる樣不斷の努力精進を續けつゝあるは、地方診療界の爲め欣幸とする所なり。博士は新潟醫專の出身にして、耳鼻咽喉科を以て立ち、京大教授星野貞次博士に就きて斯學の蘊奥を究め、京都帝大より學位を獲得せる篤學の名醫博也。

△博士は大正四年新潟醫專卒業後、直ちに任同校助手、耳鼻咽喉科勤務、同八年六月同校講師囑託、同九年五月任同校助教授、同十年七月財團法人知命堂病院耳鼻咽喉科醫長に就任、同十三年六月同院辭職、同年七月京都帝大醫學部專修科入學、耳鼻咽喉科教室にて星野教授指導の下に研究、同十五年十二月學位受領、昭和二年一月より再び知命堂病院に復任し、同四年五月より同病院長の要職にあり理事長を兼ぬ。

△學位主論文は「顳顬骨ノ外科的解剖學補遺」にして、(1)乳嘴部ノ外科的解剖學、(2)鼓室部及岩樣部ノ局所解剖學、(3)顳顬骨ノ耳科的手術ニ緊要ナル局所解剖學的研究、の三篇より成れり。參考論文は、(1)耳根治手術ニ於ケル歐氏管部ノ處置改變ニ就テ、(2)顳顬骨鱗狀部頭蓋面ニ於ケル中硬腦膜動脈溝ノ研究、殊ニ其外科的局所解剖的觀察、(3)副鼻腔内ニ發生セル癌腫ノ二例、(4)耳性腦膿瘍ノ手術治驗二例、(5)後頭骨ニ於ケル二三形態異常ニ就キテ、外三篇あり。其他にも論著夥多。

△感想に曰く「本年（昭和九年）の醫學總會に出席し、毎年の事ながら同一の感想を繰り返へさせられます。格別進歩の狀態を認め得られず、各科目の爲め「行き詰つてゐる」の感を新たにせしめらるゝのみです、然して此の裏面には演題の選擇に情實に支配さるゝ誤りが特に本年吾が科目に多かりし事を知つて、尙更ら不快の感を深くせざるを得ませんでした」云々。

△博士は新潟縣東頸城郡菱里村の出身、明治十九年生る。學究的溫厚の紳士、年壯の意氣壯にして、當年知命に達す圓熟せる學識、手腕、人格共に一段の貫祿を備え、好箇の臨床家として多大の信望を博す。殊に氏は熱心なる研究家にして忍耐力强く、常に學を錬り腕を磨くに余念なく、診療と研究とを唯一の趣味として他に道樂を求めず、精研修養相俟つて新智識の吸收に務め、又克く學會などにも力めて出席する風あり。性格は短氣なるも、情にもろく慈善心に富み、後進思ひにて又克く人の世話を爲す美德を有す。高田市西城町三ノ一二〇に住む。

◇

中村萬里　△京城府長谷川町一一二にドクトル、メヂチーネ中村萬里博士經營の中村耳鼻咽喉科病院あり。斯科專門を以て當地診療界に超然として頭角を表はし、博士獨特の診療手術の好評と相俟つて日々繁盛を極む。氏は明治三十一年福岡縣糸島郡怡土村三雲にて生る。大正九年京城醫專卒業、直ちに九州帝大耳鼻咽喉科教室（主任久保教授）入局、十一年瑞西國ベルン醫大入學、細菌學教室ゾーベルンハイム教授に就く、十二年同學よりドクトル、メヂチーネの稱號を受く、同年墺國ヴヰン市國立血淸治療研究所に入り、レエヴェンスタイン教授の下にて聽器結核研究、十三年同市醫大神經學教室マールブルヒ教授の指導にて研究を續く、十四年歸朝、九州帝大耳鼻咽喉科教室へ再入局、久保教授並に細菌學教室小川教授の指導を受く、同年滿鐵鞍山醫院耳鼻科醫長として赴任、昭和二年三月九州帝大より學位を受領す、其後職を辭して現住所にて開業せり。

△學位主論文は「肺炎双球菌ニ依ル聽器炎症ノ實驗的研究補遺」にして、參考論文なし、本實驗に於て神經系に主變を見たるは毒素によるものにして、臨床上熱性傳染病の經過中或は經過後に目擊せらるゝ神經症狀を說明するに足るものとして學界に重要せらる。氏は音樂趣味の人也。

◇

中村桂　△大阪市北區櫻橋交叉點に中村桂博士の經營せる中村耳鼻咽喉科あり。氏は茨城縣の人、明治十五年生、明治四十年東京慈惠醫專出身の耳鼻咽喉科學者にして、大阪醫大耳鼻咽喉科教室にて研究の結果、學位論文『動物體内ニ於ケル「メチールキサンチン」體ノ「メチール」基脫ニツイテ』を完成、大阪醫大へ提出して、昭和二年四月學位受領後、引續き同教室に於て研究を繼續せり。其後耳鼻咽喉科を以て診療界に躍進するや、拮据經營今日に至り、堅實なる發展振りを示しつゝあり。壯齡今や知命に入る四歲、手腕圓熟、臨床家としては最も重望せらるゝ年輩なり。而かも放任主義の人にして、約束を無視し他人の迷惑を意に介せざる人の如し、人格の尊重を高調する今日獨り博士のみと言はず一部識者の反省を促すや切也。私宅は大阪市北區曾根崎上四ノ二六に在り。

◇

牧野敏雄　△多士濟々たる福岡診療界に進出して、其の專門とせる耳鼻咽喉科を以て近時擡頭せるは牧野敏

雄博士なるか、現に福岡市下東町四〇に自己經營の牧野耳鼻咽喉科醫院あり、新裝の結構と相俟つて內部の設備整ひ好評嘖々、門前常に賑ひ、拔群の盛況を極む、蓋し近來の成功といふべき乎。博士は熊本醫專出身の篤學者にして、耳鼻科界現代のオーソリチー九大名譽教授久保猪之吉博士に就きて斯學の蘊奧を究め、又解剖學界の泰斗九大教授進藤篤一博士の指導をも受けて學位論文を完成し、九州帝大より學位を獲得せる名醫博として既に其の手腕を認めらる。

△顧みて博士の今日ある學歷及び經歷を考査するに、熊本縣立玉名中學校を經て、大正四年熊本醫專を卒へ、直ちに九大耳鼻咽喉科教室に入局、久保博士指導の下に同五年七月まで勤務、同六年一月より三ケ月間東大傳研にて細菌學の講習を受く、同七年より十三年六月まで福岡市にて開業、同十四年五月九大解剖學教室にて(進藤教授擔當)發生學の研究に着手、久保、進藤兩教授の指導を受く、同十五年三月九大耳鼻咽喉科醫員となる、昭和二年八月學位受領、爾來福岡市にて再び開業今日に至る。

△學位主論文は「鷄ノ喉頭並ニ下喉頭（鳴器）ノ發生學的研究」にして、參考論文は「ヴイタリ氏器ニ就テ」なり。其他論著夥多。

△博士は明治二十四年生る、熊本縣玉名郡有明村尾山水哉の二男、大正五年牧野姓を冒す。銀水は其號にして文學趣味の人、文才あり、書畫を能くす、又骨董好にして鑑識あり、多く珍品を藏す。賦性敦厚篤實、圓滿主義の人にして和氣溫情に富み、風姿自ら其の性格を表はし、溫容の裡に又威嚴を藏す。特に診療に臨む態度の眞實にして熱意ある點は評判にて、博士の特徵として見逃すべからず。思ふに博士の篤學にして今日ある閱歷は、既に博士の前半生史に盡きて餘蘊なしと雖も、而かも日頃德操の堅持を心掛け日夜精神の修養を怠らざりし事實は認むべき也。

◇

稻見光　△東京市芝區札の辻電停前に新築せる稻見病院あり、院長は稻見光博士にして、新裝せる病院は宏大ならざるまでも洋館の結構體裁よく、內部の設備は理想的にして快き印象を與ふ。博士は新潟醫大出身の耳鼻咽喉科學者にして、京大教授清野謙次博士に就きて微生物學を、同星野貞次博士に就きて耳鼻咽喉科學を研究し、京都帝大より學位を獲得せる斯科界の新進大家として錚々たるもの也。曩には歐米各國を視察して專門的知見を廣め、該博なる學識と共に實地の經驗に富み、今や獨特の技術、手腕を發揮して益々人望を集め、診療手術の好評と相俟つて年次成功の地盤を築きつゝあるは頗る囑目に値す。

△博士は大正十一年新潟醫大卒業後、引續き同大學副手として衞生學細菌學教室勤務、宮路重嗣教授に師事して專ら細菌學、血淸學の研究に從事す、同年六月京大醫學部に轉じ、淸野及び星野兩教授の下に微生物學及び耳鼻咽喉科學兼修、昭和二年十一月學位受領、同時に京大醫學部講師を囑託せられ耳鼻咽喉科學教室に勤務、同三年四月學術研究の爲め歐米各國へ出張を命ぜられ、同五年二月歸朝後職を辭して以來、現住地にて開業今日に至れり。

△學位主論文は「加熱凝集性細菌ニ關スル研究」にして三篇より成れり、猶參考論文としては、(1)免疫學的見地ヨリ觀タル淀腸ノ意義（第一、二、三回報告）、(2)流血中ノ「チフス」「パラチフス」菌簇証明ニ關スル實驗的研究補遺(3)岐阜縣高山町ニ勃發セル中毒患者ノ綜合的考察、(4)急性中毒性胃腸炎病原ニ關スル知見補遺（第一、二、三四回報告）、(5)黃疸症ニ見ル血淸ノ性狀變化特ニ其ガ免疫的考察（第一、二、三回報告）の五篇あり。

△栃木縣河內郡明治村の人、明治三十一年生る。年齒未だ三十有八歲にして、少壯の意氣に燃え研究心に富む、學究的溫厚の紳士也。今は分別盛にして手腕壯熟、最も活躍の奮鬪時に入る。殊に臨床家としての態度の熱あり力ある誠實と親切とは、博士の長所として傳へられ評判極めて良し。一面又人と接するに穩健にして篤實、和氣溫情に富む。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、研究以外、自ら品格の陶冶に力むるの概あらしむ、又乘馬を愛好するの風あり。當世博士界中の中堅たる新進人物にして、好箇の臨床家として推奬するに吞ならざる也。

◇

荻野朝一

△日赤長野支部病院に耳鼻咽喉科部長として荻野朝一博士あり、その名聲は、同地方診療界に嘖々たるを聞くや既に久矣。博士は愛知醫專の出身、學位は愛知醫大より獲得せる新進の名醫博にして、學位論文の指導教授は八木澤文吾博士（耳鼻科）及び勝沼精藏博士（內科特に血液學）の二恩師也。主論文は耳鼻咽喉科領域に於ける急性炎症性疾患の血液像特に其豫後關係を研索せるものにして、特に臨床上の參考資料として既に學界に其學問的價値を認めらる。外に參考論文として、(1)「ヂフテリー」治療血淸注射後ニ見タル高度ノ「プラスマチトーゼ」ニ就キテ、(2)糖尿病ヲ伴ヒ高度ノ壞疽性扁桃腺炎ヲ主訴トセル不成形性貧血ノ一例、(3)所謂實驗的「ケーソン」病家兎ノ血液像、(4)本邦ニ於ケル氣管並ニ氣管枝異物ノ統計的觀察附興味アル四症例、(5)炎症性鼻粘膜特ニ甲介粘膜副鼻竇粘膜鼻茸ニ於ケル「グリコゲーン」ニ就テの五篇あり。研鑽多年、既に其の蘊蓄せる學識は言はずもがな、經驗豐富にして其の今日あるも亦偶然ならざるを思はしむ、殊に博士は手術そのものに對しては全部興味を有するも、特に專門科中の癌とも稱すべき副鼻膜炎、即ち蓄膿症の治療特にその手術に最も興味を有し、之れに全精力を注ぎつゝ Dr. Halle（ハルレ氏）の下に於ける研究以來該手術法の改善に苦心しつゝあり。

△顧みて博士の學歷及び閱歷を考査するに、大正八年愛知縣立醫專卒業後、同年六月任海軍々醫少尉、同九年五月休職被仰付、同九年九月愛知醫大勝沼內科教室にて研究、同十年一月同大學耳鼻咽喉科教室に轉じ、昭和二年二月任同大學助手、同年三月日赤長野支部病院耳鼻咽喉科醫長に就任今日に至る、同年十二月學位を受領せり。次で昭和七年一月より一ケ年間の豫定にて長野日赤より歐米留學を命ぜられ、主として伯林大學耳科教授フオン、アイケン教授の下にて見學し、尙ほ耳鼻咽喉科手術學の大家ドクター、ハルレ氏及び耳鼻科鞏型の大家ヨゼフ教授の下にて實地的研學をなし、尙ほ全歐米各地大學の見學をなせり。

△感想として「留學中吾が醫學の發達せる紹介機關の缺如否極めて貧弱なるを痛感す、思ふに之れは各大學、各學會其他幾十幾百の機關雜誌、研究雜誌等あるも纏りて本邦醫界を紹介すべき適當且つ完備せる雜誌無之に因るにあらざるかと思考す、依つて日本醫學界として完備せる發表機關（歐文にて）を設けられんことを望む。醫師會に對しては大都市のみならず小都市にも完備せる施療病院を設置、國民保健に更に努力する必要あるを痛感す、第一着手として日赤病院を全部施療機關としては如何と思考す」云々と述べらる。

△福島縣石城郡下小川村の人、明治廿八年生る。篤學者にして其の今日ある閱歷は博士の前半生史に盡きて躍如たるものあり。凜々しき風貌に常に笑顏を浮べ、溫容の裡には何んとなく威嚴を藏す。人と爲り穩健篤實、謙遜克く自抑して人を愛し部下を親しむ、淡々として己れを虛うするその奧床しき態度は、眞に德操の士に非ればこゝに至るを得ず。業餘野外運動を趣味とし殊に乘馬及び寫眞を好む。前愛知醫大教授八木澤文吾醫博は義兄（妻の兄）、佐波古直明博士、高野安茂博士は從兄弟なり。長野市南縣町德永一〇四九に住む。

◇

林外男

△金澤市高岡町に耳鼻咽喉科專門の林醫院あり、院長林外男博士は東大系の錚々たる斯科の專門大家にして、母校の恩師岡田和一郎教授の指導を受くる所厚く、學位は助教授として千葉醫大に在職中、千葉醫大より獲得せる名醫博として其の手腕を認めらる。學位論文は「支那山東省ニ原發セシ鼻硬化腫ノ三例並ニ組織學的知見補遺」にして、其の學問的批判は既に學界に定評あり。專門智識の該博なるは言はずもがな、臨床に堪能にして多年の經驗に富み、今や斯科の大家と仰がれ、獨特の手腕を發揮して益々遠近の人望を集め一流に在り。

△博士の今日ある學識及び閱歷を公開すれば、博士は大正四年東京帝大理學部動物學科を卒へ、更らに大正八年同大學醫學部を卒へ岡田和一郎博士教室に入り耳鼻咽喉科を研究、大正十一年靑島病院耳鼻科醫長就任、大正十五年千葉

醫大助教授となり、昭和三年六月千葉醫大より學位受領、同四年八月辭職現地に開業今日に至る。

△「新興滿洲國は勿論日支間の眞實なる共存共榮が將來必要缺くべからざる事と思ふ、これが爲めには現今同仁會醫院等あれど猶一層擴大して醫術の恩惠に浴せしめる事等は親善に非常な効果ありと思惟す、少壯醫學者がどん〳〵滿洲支那へ行かゝ事を切望する」云々とは、氏の感想の一片なり。

△金澤市の人、明治二十二年生る、元氣旺盛にして當年の意氣益壯也。今は最も得意時代にて臨床に熱心勵精し、患者を待つに誠實親切を以てす、其の態度の眞摯にして熱情あり溫味あるところに、今日の聲望ある所以を窺はる。

◇

加藤直吉　△朝鮮醫界近來博士人物に富む、而かも各科博士に就ての認識を得んとするも亦た容易ならんや玆に品隲を試みんとする加藤直吉博士に就て少しく語らしめんか、釜山本町二丁目に在る加藤耳鼻咽喉科こそ博士自營の小醫院也。結構宏大ならざるまでも入院の要意あり、諸種內部の設備整ふ。學系より見たる博士は九州帝大系の耳鼻咽喉科の專門家として錚々たるもの、斯科の耆宿九大名譽教授久保猪之吉博士の愛弟子にして、恩師の親しき指導の下にて研究の結果、母校より學位を得たる年壯の名醫博として既に其學識手腕を認められ、半島診療界に重きを爲す一人物たり。既にして其の圓熟せる手腕は玲瓏たる診療、手術の好評と相俟つて一流に在るは成功と言ふべき乎。

△豊橋市の人、加藤平吉の次男、明治廿二年生れにして、大正十年九州帝大醫學部卒業後、直ちに同大學耳鼻咽喉科教室久保猪之吉教授の門に入り專ら臨床的方面を研究せる後、高知市楠病院耳鼻咽喉科々長、大分縣立病院耳鼻咽喉科部長、滿鐵撫順病院耳鼻咽喉科醫長を歷任して、昭和二年八月母校大學院に入學し、恩師久保猪之吉、高山正雄兩教授の指導の下に研究を終り、昭和四年二月釜山府立病院耳鼻咽喉科長に就任し、同年五月九州帝大より學位受領、翌五年七月現住地に開業せり。

△學位主論文は「坑夫眼球震盪症ノ原因ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文十二篇あり、(1)坑夫眼球震盪症ノ統計的觀察（撫順炭坑ニ關スルモノ）、(2)坑夫眼球震盪症ニ關スル研究（第五回報告）、（撫順並ニ平壤寺洞炭坑ニ於ケル研究）(4)坑夫眼球震盪症ニ關スル研究（第六回報告）、（炭山坑內稼働者以外ノ者ニ關スル研究）、(5)採炭坑夫ノ先天性眼球震盪症ニ就テ、(6)急性酸化炭素中毒ニ因ル眼球震盪ノ實驗的研究、(7)家兎ノ酒精眼球震盪ニ關スル知見補遺、(8)聽器機能障碍ヲ訴ヘタル貧血患者ノ一例、(9)種痘ニ繼發セル廻歸神經麻痺ノ症例ニ就テ、(10)外聽道異物（便所ノ蛆）ノ一例、(11)唾石ノ二例、(12)三十六日間食道內ニ介在セル一錢銅貨、等。其後の著述としての重なるものは、(1)實驗的バルロー氏病ニ於ケル聽器病變ニ關スル知見、(2)右側廻歸神經麻痺ノ一例、(3)食道ヨリ鼻咽腔ニ移行シタル異物例、(4)下鼻道ヨリ發生セル出血性鼻茸ノ一例、歐文論文としては、(5) Ueber die pathologischen Veränderungen am Gehörorgan bei der experimentellen Möller-Barlow'schen Krankheit, 等、以て學術方面の一班を窺はる。

△當年不惑に入る七歲、年壯の意氣益壯にして、手腕愈よ圓熟し一段の重望を加ふ。精力主義の人にして誠實と熱情とを以て仁術の本分を盡し、患者をして信賴と尊敬との念を起さしむるの德を有す。學究的溫厚の紳士にして、好箇の臨床家として其の態度の眞摯にして靄々たる情味あるを尊ぶ。

◇

片山一良　△帝都私立病院中儼然たる一大勢力として著名なる聖路加國際病院に、臨床研究部長として信望を博しつゝある片山一良博士は、京都府立醫專出身の耳鼻科及び內科學者にして、特に醫化學を最も得意とす。嘗て米國に留學するや研鑽多年、臨床に次で教壇に起ち、後には研究室主任として大に活躍する所ありしが、歸朝後現職に就任して以來、その蘊蓄せる學識手腕を傾倒して專ら臨床方面の研究に努力精進しつゝあり。

△博士は大正十一年京都府立醫專を卒へ、直ちに同附屬病院耳鼻科に入り、翌十二年六月渡米、紐育醫科大學院入學耳鼻科專攻、同年十二月同大學院附屬病院副手として內科に勤め、同十三年九月同大學院醫化學助手、同十四年四月同大學院醫化學講師となり、昭和四年四月迄勤務、同年同月紐育市コロンビヤ大學醫學部神經科及精神科病院研究室主任に任ぜられ、同五年八月迄勤務、其間同五年四月京都府立醫大より學位受領、同年九月東京聖路加國際病院臨床研究部長として就任今日に至る。斯間指導教授は主として中村登教授（耳鼻）、フォーブス教授（鼻）、マツクフアーソン教授（耳鼻）、モーゼンタール教授（內科）、シヤタツク教授（內科）、アインホルン教授（胃腸）、マイヤース教授（醫化學）、キリヤン教授（醫化學）等なりと聽く。

△學位主論文は、(1)膽汁酸定量法、(2)黃疸ニ於ケル膽汁酸ノ消長、の二篇にして原著は何れも英文なり、外に參考論文として英文の原著九篇あり。就中「含水炭素ノ研究」は博士の最も得意とする論文にして、既に學界に定評あり。

△博士の感想に曰く「大日本醫師會をして尙一層權威あるものとしたい、少くとも米國に於けるA、M、A、の如く醫學校、病院、開業醫者等を徹底的に調査監督し醫師會に於て文部省又は內務省の掣肘を受けぬ樣にしたい」云々。著者曰く至極同感なり、一般識者の自覺發奮を促すや又切也。

△岡山縣苫田郡鄕村大字下原片山壽平の長男、明治三十一年生る。年齒未だ三十有八歲にして少壯の意氣に燃え、研究心潑剌として精研甚だ勉むる所あり。其の篤學にして在米八年、奮鬪的研學の跡は歷然として博士の面目を物語るものあり、今や其の蘊蓄せる新智識を傾倒して熱誠克く斯道啓發の爲め盡しつゝあるは甚だ多とせざるを得ず。研究以外の趣味としてはスポーツを好み、又た音樂を樂しむ風あり。學究的少壯の好紳士として高邁なる人格を具へ、淸廉高潔にして溫情に富む、但だ强ひて言はしむれば、好人物過ぎて他人の言を直ぐ信用して度々騙される事あれば、時に思はざる損害を蒙る外に或は他に迷惑を及ぼすかの嫌なきか、而かも眞面目なる性格の反映するところ亦諒とすべき也。猶春秋に富む前途洋々たり、切に自重加餐を祈る。東京市澁谷區幡ヶ谷笹塚町一〇五五に住む。

◇

倉田包雄　△大阪帝大醫學部講師として耳鼻咽喉科教室に在る倉田包雄博士は、大阪醫大出身の新進にして、嘗て歐米醫學界を視察して新知見を弘め、今は專念學生の指導と自己の研究に沒頭しつゝあり。大正十四年大阪醫大を卒ゆるや、副手を歷て專修生として耳鼻咽喉科教室にて村田教授の指導を受け研究に從事す、昭和四年歐米視察の途に上り、各國の醫學界殊に耳鼻咽喉科教室其他を見學す、歸朝後母校の耳鼻咽喉科教室に復歸し、副手、助手講師として勤務の傍ら研究に餘念なく、五年四月大阪帝大より學位を受領す。

△主論文は『「ヴイタミン」Bノ吸收及ビ排泄ニ關スル研究』なり。其他論著夥多あり。

△兵庫縣西宮市越水の人、明治三十年生る、當年三十有九歲也。學者肌の人にして、進取の氣象に富み、潑剌たる研究心を有す。精研に熱心、孜々として倦む事なき前途は、今後の努力研鑽と相俟つて大に期待すべきものあるを待望す。人と爲り謹直にして志操堅實、淸淡にして功名榮達を意に介せず、專心醫育と研究に沒頭する以外又た他事を顧みざるが如し。西宮市越水に住す。

◇

小田大吉　△岡山醫科大學助教授にして耳鼻咽喉科學を講じつゝある新進の醫博小田大吉は、東大系の耳鼻咽喉科學者にして、岡山醫大教授田中文男博士の指導を受くる所厚く、岡山醫大より學位を獲得せる名醫博としての新人物也。未だ少壯にして向學的精神に燃え、學生の指導と相俟つて自己の研究に餘念なき前進は、潑剌として更に大に期待せらる。會々感想の一片を寄せて曰く『「溫古知新」は醫人終生の義務にして名譽と存居候』云々と、世はく「澆季といふに、博士の斯言や心を强からしむ。

△博士は六高を經て、大正十四年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに岡山醫大助手拜命、昭和二年同大學講師となり、翌三年同大學助教授に任ぜられ今日に至る、同五年五月岡山醫大にて學位を授與せらる。主論文は獨逸文の原著にて、「Pathologische Veränderungen des Gehörorgans, dedingt durch galoarinsche Reizsung」と題し、參考論文は「扁桃腺ノ病理ニ關スルモノ」此外十一篇あり。他の論著中「耳性化膿性腦膜炎ノ療法ニ關スル研究」は博士會心の作にして最も主要なるものなり。

△博士は鳥取市西町小田芳造長男、明治三十三年生る、年齒未だ三十有六歳、少壯氣鋭にして志操堅實也。學究的學者タイプの年少紳士にして、教壇に起つや熱誠克く學生の撕提に務め、他面又自己の研究に沒頭して他事を顧みざるの概あり。讀書家にして書見を唯一の樂しみとし、又乘馬を趣味とす。因に石井俊次醫博とは義兄の間柄なりと。岡山市門田八二七に住む。

◇

村上幸次　△秋田市土手長町末丁貳〇をトとして獨立開業し、其の專門とせる耳鼻咽喉科を以て特異の精彩を發揮し、年次院務の發展と共に今や成功の地盤を築き、名聲嘖々として他の追隨を許さゞるは村上幸次博士也。博士は東北帝大出身の耳鼻咽喉科學者にして、恩師和田德次郎博士に就き耳鼻科を、同布施現之助博士に就き解剖學を造詣する所深く、獨逸文を以て著はせる主論文「日本人硬口蓋ノ研究」及び參考論文「日本人口蓋皺襞ノ研究」を完成して、母校より學位を得たる所謂東北帝大派の名醫博として其の英才を認めらる。曩年某市に醫學專門學校創立せられたるに際し、恩師の命默し難く解剖學教室に教授として赴任したるも、私學校の「××××」に憤慨し、滿二年にして辭表を提出したるが博士の開業に轉向せる動機なりと聞く、今にして想へば博士の賢明にして潑剌たる其の精神氣慨は大に多とすべき乎。

△博士は四高を經て、大正十二年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部助手拜命、耳鼻咽喉科教室に入り、和田德次郎教授に師事す、居ること三年にして解剖學教室に轉じ布施現之助教授の指導を受く、昭和三年岩手醫專教授として赴任し解剖學を擔任すること滿二年、同五年六月學位受領、辭職後秋田市に於て開業今日に至る。

△感想の一端を寄與して曰く「學界、學者の西洋（白人）崇拜思想を改めたし。醫師界を見渡すと「イクヂナシ」と申上げ度くなる、當縣は全國に知られたる組合病院の多き土地、醫師諸君は何れも血眼になつて組合病院を潰し、自己の生活安全確保のために狂奔してゐる、それもよからう、然し乍ら開業醫は全國に五萬位ときく、同胞は九千萬ある、どつちが生きればよいのか、醫師も國民も眞劍に考へねばならぬ問題だ、當秋田縣からは醫師にして救世思想家佐藤信淵大人が出てる、大醫は國を癒すとか、醫家もモツト國家の大局に目をつけねばならぬ時代になつたと思ふ」云々。又た曰く「左座金藏博士の體格縮小の如き消極的な考は大嫌ひ、そんな消極的な世界平和がほしければ頭とべニスだけの人間でも作ることを考へたらどうか、日本建國以來の大願は皇道を四海に宣布して世界人類の平和を招來せしむるにある。今の學者、科學にのみ走り日本國民たるの自覺と使命とに冷淡ではないか」云々。

△博士は山形縣鶴岡市鳥居町村上喜次郎次男、明治二十七年生にして少壯の意氣益壯也。學究的好箇の臨床家にして一面又た熱心なる皇道精神の鼓吹家にして一死以て君國に奉ずる熱血の士也。賦性高潔にして毀譽褒貶に恬澹たり、和氣情味に富みて能く人を愛す、但だ短氣なることは或は博士の短所と見るべきか。運動好にして殊に武道を愛し劍道四段なり、否石を號とす。因に村上幸太博士と兄弟なるかの如く思ふ人あるも全く赤の他人なりと。

◇

河野敏之　△京都醫大派の一新勢力たる河野敏之博士の經營する河野耳鼻咽喉科醫院は、京都市烏丸四條下に在り、開業拮据數年、既に堅實なる地盤を築き、進出の英氣潑剌として日々診療に勵精し、診療手術の好評は益々

民衆の信望を博するに至り、近來著るしく院務の發展振りを示し居れり。博士は京都府立醫專出身の耳鼻咽喉科學者として一家を成し、京都府立醫大より學位を獲得せるが、斯間恩師京都府立醫大教授中村登博士に就て研鑽大に得る所あり、既にして多年の經驗に富み獨特の手腕を有す。

△博士は大正九年四月京都府立醫專卒業後、直ちに耳鼻咽喉科學教室入室、專ら臨床に携はる、同十五年四月京都府立醫大研究科に入り、昭和五年論文を提出し同年七月學位受領、同年五月同學講師に任ぜられ、同年十月辭職開業。

學位主論文は「內耳ノ循環障碍ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文九篇あり。

△感想に曰く「專門科名を標榜するに當り一定の審査機關により審査許可せしむる事の必要あり」云々。學界淨化の叫び喧々たるの秋、興味ある問題として傾聽すべき乎。京都市の人、明治三十一年生る。年齒未だ三十有八歳、學究的少壯の紳士也。思慮あり識見に富む、臨床家として當年の意氣を以て起ち、造詣する所深く、治療方面に於ては獨特の手腕を存分に發揮し、今は最も奮鬪活躍の時代に在り。趣味としては演劇を好み、又愛煙家との評あり。

◇

宮島靖

△臺灣診療界近時又た頗る醫博人物に富む、臺北市京町二ノ二一に宮島耳鼻咽喉科醫院あり、院長宮島靖博士の經營にして內部の設備整ひ、超然として一流を占む。博士は臺北醫專出身の篤學者にして、恩師上村教授指導の下に斯學を專攻し、九州帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博としての新人物也。斯科專門醫として立ちて以來、日尙淺きも、熱心なる不斷の勵精振りと、博士獨特の手術的治療の好評とは、兩々相俟つて益々人氣を集中し、繁榮歳と共に日增成功の地盤を築きつゝあり。而かも年齒未だ少壯にして潑剌たる前途を有す、將來有爲の臨床家にして、臺灣醫博界に重きを爲す一人物たるを囑目す。

△博士は大正十三年臺北醫專を卒へ、直ちに同校助手を命ぜられ、同十五年同校講師となり、昭和七年三月同校教授に任命せらる、共間同五年十二月學位受領、同七年七月職を辭して以來現住所にて開業今日に至る。

△主論文は「水癌病竈部各種微生物ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)口蓋扁桃腺ノ發育學的研究補遺、(2)水癌ノ血液像ニ關スル臨床並ニ實驗的研究、(3)急性上氣道疾患發生ニ對スル氣溫氣壓並ニ濕度ノ影響ニ關スル統計的觀察(4)腦底腫瘍ニヨル偏側混合性咽喉麻痺の四篇なり。

△長野縣北安曇郡陸郷村小泉、宮島喜世の四男にして、明治三十三年生る、年齒三十有六歳。其の今日ある篤學は博士の前半生史に輝きて躍如たるものあり、今は少壯氣鋭にして多量の分別を有し、最も活躍を要する時代に在り。孜々營々、診療に餘念なき前途は大に刮目に値す。

◇

福田美信

△帝都私立病院中、耳鼻咽喉科を以て斷然頭角を顯はし、名實共に伴ふ名病院たるは本郷區本郷元町二の三七に在る小此木病院なり。院長は小此木寰治にして、福田美信博士は副院長として共に日々診療に勵み院長を輔佐する所あり。博士は金澤醫專出身の俊才にして、耳鼻咽喉科學者として既に其の手腕を認められ、學位は慶大より獲得せる名醫博たる一人物也。研鑽多年の經驗に富み、其の玲瓏たる診療手術の好評は益々人望を博し、歷史ある同病院をして昔日の名聲を永らへ、今日の繁榮を持續しつゝあるもの、博士の力亦與つて大なりと云ふべし。

△博士は大正十一年金澤醫專を卒へ、直ちに九大醫學部耳鼻咽喉科教室に入り斯界の世界的權威たる久保猪之吉教授に就き臨床的研究を修める事滿三年、大正十四年現小此木病院に就職、昭和元年より傍ら慶大醫學部解剖學教室にて岡嶋教授指導のもとに研究を續け、昭和六年四月學位を得、且つ小此木病院副院長となる。

△主論文は『「ハンザキ」ノ舌骨鰓骼ノ形態並ニ發生』にして、參考論文は、(1)「ハンザキ」ノ喉頭側軟骨ノ發生並ニ形態、(2)箱根山椒魚ノ變態時ニ於ケル舌骨鰓骼ノ變化なるが、以上論文は何れも獨逸文の原著なり。

△感想に曰く「現代の醫師たるもの醫師たらんと思ふ者學究にのみならず、人格の修養にもお互に努力すべき時季だと思ふ」云々、以て其の人と爲りを窺はる。博士は富山縣の人、明治三十二年生れにして、當年三十有七歳也。學究的溫厚の紳士にして、新進大家としての手腕漸く壯熟、今は最も得意の時代に入り、「醫は仁術也」を以て任じ一意專心臨床に勵精し、努力奮鬪日も猶足らざるの概あり、好箇の臨床家として洋々たる前途は頗る春秋に富む。牛込區赤城元町三四に住む。

◇

花田清　△福岡縣田川郡後藤寺町三井田川鑛業所醫院に外科部長として花田清博士あり。博士は長崎醫專出身の耳鼻咽喉科學者として錚々たるものにして、外科學の造詣あり、耳鼻咽喉科學は斯科界の權威九大名譽教授久保猪之吉博士に親炙して研究する所あり、學位は九州帝大より獲得せる斯科界の名醫博として名聲を馳せ、多年炭坑治療界の爲め努力貢獻する所あり、今や博士の仁術に一段の貫祿を備へ、大衆より多大の信望と尊敬とを受け、一意專心、唯だ誠意誠實を盡して公に奉ずるの信念を以て、其の職務に努力勵精し不斷の精進を續けつゝあり、博士の努力を多とすると共に炭坑診療界の爲め將來博士の力に俟つもの甚大なるものあるを思ふ。

△博士は大正五年五月長崎醫專卒業後、直ちに福岡縣田川郡後藤寺町三井田川鑛業所醫院に奉職、當時の院長眞島隆輔學士及び外科部長隈鎭雄博士の指導を受く、昭和二年十二月九州帝大醫學部專攻生として耳鼻咽喉科學教室に入り久保教授の指導を受く、昭和五年九月現職に復歸し、同六年四月學位受領、以て今日に至れり。

△學位論文は「頭蓋側面加壓ニヨル頭蓋底骨折ノ實驗的研究特ニ聽器トノ關係ニ就テ」にして、(1)頭蓋側面加壓ニヨル頭蓋底骨折ノ實驗的研究、(2)實驗的頭蓋底骨折ニ於ケル聽器ノ病理組織學的研究の二篇より成る。參考論文は、(1)耳鼻科ニ關係ヲ有スル頭蓋底骨折ノ二例、(2)下顎骨體部骨折ニ於ケル金屬線副子固定法及余ノ考案セル一方法ニ就テ(3)熱湯誤嚥ニヨル咽喉頭火傷ノ二例ニ就テ、(4)家兎ノ後頭下穿刺ニ就テ、(5)ワイル氏病ノ血液像ニ就テ、(6)腸管皮下破裂ノ三例、(7)食道異物例等あり。最近業績の内「耳性化膿性腦膜炎ノ治驗」は博士會心の作にして、近著中の最も重要のものと見るべき也。

△感想に曰く「私の長い炭坑醫生活を顧るに過去に於て炭坑醫(又は鑛山醫)に對して世間の見る所は侮蔑でない迄も頗る輕視せられた事は事實である。それは事業經營者の無理解にも原因したのであるが、多く又醫師自身の罪でもあつた。此點最近著しく改善向上せられた所謂鑛山醫に新進氣鋭の士多く其業績は陸續發表せられ、本邦に於ける幼稚なる災害醫學の開拓及不幸なる勞働者の救護に向つて勇躍するかの觀がある。從つて各地鑛山に附屬する病院は漸次其地方に於ける信用と權威とを獲得しつゝある樣である。さあれ諸鑛業の發展益々盛なるの時、幾十萬の鑛山勞働者を背景として立つ鑛山醫は無盡の研究題目を前に常に偷安と怠惰から目覺めて居らねばならぬ」云々。

△福岡縣宗像郡河東村山田、花田庄三郎の三男にして、明治二十六年生る、年齒漸く不惑に入る三歳、當年の意氣や益壯にして今猶鑛山醫學に就いての研究を捨てず、精研相俟つて斯道の啓發指導に貢獻する所多し、殊に博士が鑛山醫として其の一生面に躍進して以來、幾星霜かの間幾多の改善向上に盡くせる功績の偉大なるものあるかは、博士の發表せる業績其他能くこれを語りて餘す所なし。性來謙遜家にして、自己の識學を衒はず、又功名榮達を意に介せずして其の功に居らず、恬澹として自己の職務に忠實を盡すの外他事を顧みず、至誠一貫、勵精恪勤の士と見るべき也。一面又自己の長所を誇りとせず、短所の矯正に汲々として自ら修養に力むる人也。研究以外の趣味としては俳句を好み、業餘又克く讀書するの風あり。福岡縣田川郡後藤寺町三井社宅に住む。

◇

西村義太郎　△名古屋市の中央、中區上前津町三四に西村耳鼻咽喉科醫院あり、院長西村義太郎博士の私設經

營する所にして博士自ら之を主宰す、開業拮据、二十年餘の努力空しからず、漸く圓熟せる博士獨特の技倆と德望とは、兩々相俟つて信望益々高く、今や拔くべからざる地盤を有し、中京耳鼻咽喉科界に第一流を以て推さる。博士は愛知醫專の出身にて愛知醫大教授淺井猛郎博士指導の下にて解剖學を專攻し、主論文「ブローマン氏ノ所謂鼻中隔下腺ノ組織並組織發生學的研究」(獨文)、及び參考論文「歐氏管咽頭開口部ニ對スル計測的觀察」を完成の結果、愛知醫大より學位を得たる近來の名醫博也。特に整鼻科は博士の最も得意とする所にして、玲瓏たるメスの好評は益々其の異彩を發揮して餘す所なし。

△博士は大正二年愛知醫專卒業、直ちに愛知病院耳鼻科勤務、五年辭職開業、十五年四月より愛知醫大解剖學教室に於て研究、昭和六年四月學位受領、其間大正十三年愛知縣指定愛知理髮學校々長兼設立者たり。

△感想の一片を書に寄せて曰く「現代の世相が非か將又その非が醫界に存するかは識らざれども困つた相なり。然し大厦の傾かんとするや一木の……云々、我は超然として空想的たりとも小說的文學或は歌に親めば可しと思ふ」云々と、以て博士の理想の一端を察せらる。名古屋市南區波寄町に本籍を有し、明治二十二年生る。年齒將に不惑に入る七歲、勵精家にして年壯の意氣を以て立ち、診療に臨むや熱心甚だ務め誠實と親切とを以てす。今は圓熟せる腕の冴え盛にして、新進大家として多大の信望を博しつゝあるも又偶然ならざる乎。研究以外には文學趣味豐富にして、殊に小說を能くす、書に於ては不堂、文學的には桂峰をペンネームとして既に發表せるもの尠からず、文壇に其の盛名を謳はるゝや既に久矣。一面には又た武術にも多大の興味を有し、文武相俟つての趣味は亦その居常の一端を窺はる。若し夫れ其の性格より打診すれば、餘りに世相に超然たるは長所なると共に、半面に於て又たそれが確かに短所ともならんか。

◇

田中芳次郎　△名古屋市民病院に耳鼻咽喉科部長として田中芳次郎博士あり。愛知醫大系の新進にして、耳鼻咽喉科の泰斗、元愛知醫大教授八木澤文吾博士の愛弟子として、多年恩師の指導を受くる所あり、學位は母校より得たる所謂愛知醫大派の名醫博として其の手腕を認められ、今や斯科の大家として民衆より多大の信頼と尊敬とを以て迎へらる。

△博士は大正十五年愛知醫大を卒へ、引續き同大學耳鼻咽喉科教室に於て八木澤教授指導の下に研究に從事す、副手を歷て昭和三年三月助手に任ぜられ、同六年四月學位を受領す、同年五月更に名古屋醫大助手に任ぜられ、同年六月名古屋市民病院耳鼻咽喉科部長に就任今日に至る。

△學位主論文は「中耳炎膿汁ノ細胞學的研究並ニ其ノ血液像トノ關係ニ就テ」にして、參考論文は、(1)口腔、咽喉頭熱傷患者ニ於ケル血液像、(2)本邦ニ於ケル氣管枝異物ノ統計的觀察　附興味アル四症例、(3)慢性鼻炎ニ對スル次硝酸若鈑(「ヘミシン」)注射療法ノ臨床的並ニ組織學的研究、(4)上顎骨骨體側面及前面ニ發生セル「プラスマチトーム」ノ一例なり。

△感想の一片を披瀝して曰く「日々學位獲得者の增加するは邦家のためにも醫界の爲めにも祝福致す次第に候得共、臨床にある者にとりては如何なる研究にて學位を獲得されしや、又その履歷は臨床の力と比例致すものには候はねど大體を伺ひ知るにも力あるものなれば今回貴社の御計畫は小生等の等しく切望致し居る處にて一日も早く御完成の程祈上候」云々と、感激に堪えざる所也。博士の出身地は群馬縣佐波郡赤堀村にして、明治三十一年田中喜七の二男に生る。當年三十有八歲にして少壯の意氣益壯也。學究的溫厚の紳士にして、今は手腕漸く壯熟の域に入りて最も得意の時代に在り、勵精恪勤の人にして臨床に甚だ熱心なり、其の眞摯にして親切なる態度は評判極めて良し。人と爲り眞面目にして誠實、快活にして人を愛す、又應答禮を厚ふして時務を缺ぐことなし。名古屋市中區池田町一八に私宅あり。

◇

上田隼人　△最近朝鮮治療界に進出して、新進の意氣と、獨特の新手腕とを振ひ、耳鼻咽喉科界に斷然頭角を拔きつゝあるは上田隼人博士也。博士の經營にかゝる上田耳鼻咽喉科醫院は京城府北米倉町に在り、病室ベツト九其他內部の設備整ひて遺憾なし。博士は名古屋醫大系愛知醫專時代の出身にして、母校の恩師小林靜雄博士に師事して造詣する所深く、開業日猶淺少なるにも拘はらず、評判良好にして年次向上發展の進境に在るは、玲瓏たる技術と相俟つて博士の德望の致す處あれば也。博士の心境を打診すれば、曰く「體天地好生心」、「醫人は常に眞摯にして朗らかでありたいもの」と言はんのみ。

△博士は大正十一年愛知醫專卒業後、專ら耳鼻咽喉科を敎授小林靜雄博士に就て研究、昭和二年渡鮮、朝鮮總督府醫院醫員兼京城醫專助敎授奉職、三年依願免官、京城帝大醫學部耳鼻咽喉科敎室助手に任ぜらる、六年八月名古屋醫大より學位を得、同年十二月依願免官、爾來現住所にて開業今日に至る。

△主論文は原著獨逸文より成り、Experimentelle Untersuchungen über die Labyrintherschütterung bei Kopfverletzungen と題す。參考論文は、(1)「モルヒネ」ノ聽器ニ及ボス影響、(2)化濃性中耳炎兼ベツオルド氏乳嘴突起炎ニ續發セル眼窩膿瘍ニ就テ、(3)鼻腔血瘤腫ニ就テの三篇なり。其他自著論文中の「迷路震盪症ノ成因竝ニ本態」は博士會心の名篇にして學界に重要せらる。

△博士の出身地は廣島縣賀茂郡廣村にして、明治三十三年生る、當年三十有六歲也。讀書家にして精研今猶卷を放たず、業餘の趣味としては邦樂殊に長唄及び尺八を樂しむ風あり。性格は嚴正謹直にして眞面目なる處に博士の面目の躍如たるものあり、但だ或は多少小心の處なきかと思ふ、而かも人に對し患者に接するに眞摯にして親切なる博士の德とする處を喜ぶ。年齒未だ少壯にして發剌たる前途の大成亦た期して待つべき也、至囑々々。

◇

立木豐　△長崎醫大敎授にして耳鼻咽喉科擔任たる立木豐博士は、九州帝大系の新進、現九州帝大名譽敎授久保猪之吉博士の愛弟子にして、恩師の親しき薫陶を受け、母校より學位受領後、獨逸に留學して更に斯學の蘊奧を究め、歸朝後新知見を披瀝して母校の敎壇に起ちしも、最近現職に轉じて專ら學生指導の爲め孜々として勵精甚だ務むる所あり。年齒未だ少壯にして發剌たる前途は、最高學府に最も囑望せらるゝ將來有爲の一權威たるを至囑す。

△博士は大正十三年九州帝大醫學部を卒へ、同年八月任九州帝大醫學部助手、昭和二年三月九州帝國大學醫學部講師囑託、同五年一月任九州帝國大學助敎授、敍高等官七等、敍從七位、同六年三月九州帝大より學位受領、同七年二月敍高等官六等、敍正七位、同十年十月現職に轉任せり。

△學位主論文は「實驗性前庭器性眼球震盪ノ中樞性成立機制ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)黴毒性腦基底腦膜炎ノ一區分現象トシテ小腦腦脚隅腫瘍症候群ヲ示シタル一症例、(2)「ラヂウム」照射ニヨリテ治癒シタル扁桃腺肉腫ノ一例、(3)猩紅熱カ「ヂフテリー」カ特ニ其ノ診斷上ノ疑義ニ就テノ一考察、(4)抽出後死ノ轉歸ヲトリタル氣管枝異物（義齒ノ一例）、(5)隨意性眼震ニ就テ、(6)實驗性前庭器眼震ノ異常型及其ノ中樞成立機制ニ就テ、(7)猩紅熱性口峽炎ノ診斷等なり。

△博士は靜岡縣田方郡三島町の人、明治三十一年生る。當年三十有八歲の少壯にして新銳の意氣益壯也。學者肌の人にして研學の念彌勃として禁ぜず、切磋卓勵甚だ勉むる所あり、賦性高潔にして志操堅實、淸淡にして名聞利祿を求めず、只管醫育の爲め專念し學生の提撕に力む、居常又た人に對するに應答の禮を重んじ時務に缺ぐことなし、其の態度の眞面目にして寬容なるは、現代的學者の執るべき常道として、其の人格を尊ぶ。長崎市上西山町一五八番地に住す。

◇

寺本嘉範　△四日市市濱田一八二八に新設せる寺本耳鼻咽喉科病院あり、院長は寺本嘉範博士にして、開業日尙淺少なるにも拘はらず、完備せる內部の設備と相俟つて博士の診療、手術は的確にして評判良く、鄕人より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは、地方診療界の爲め多幸とす。博士は千葉醫專の出身にして、陸軍一等軍醫の印綬を帶び、陸軍々醫學校及び母校の恩師久保護躬博士指導の下にて多年研究の結果、主論文「魚類大腸菌屬ノ研究」及び參考論文、(1)稻麴中ノ一新桿菌ニ就テ、(2)所謂脚氣菌ト蔗糖分解性大腸菌トノ鑑別ニ就テを完成して、千葉醫大より學位を得たる篤學の名醫博也。

△博士は大正八年千葉醫專卒業後、陸軍々醫生活に入り、同十五年一等軍醫に進級、陸軍々醫學校にて耳鼻科を專攻し陸軍耳鼻の爲め盡力せしが、昭和四年退役し、千葉醫大衞生學次で耳鼻科敎室に入りて研究し、同六年九月千葉醫大より學位を受領せり、翌七年千葉縣銚子市岩井耳鼻科病院の留守院長となり、次で前記の現住所に於て耳鼻咽喉科病院を建設して開業今日に至る。

△博士は三重縣桑名の人、明治三十年生る、當年三十九歲にして手腕漸く壯熟の域に入り、今は最も得意時代にして其の診療に臨むや熱心甚だ努め、誠意誠實を以てし親切を盡す、現代的臨床家として篤き人望を博する所以なるべし學究的溫厚の紳士にして、人と接するに愛想よく快恬なり、居常又た應答の禮を厚ふして時務を缺ぐことなし。晩近博士の人格に對する世論の紛々たるの秋、學德兼備せる博士の如きは歡迎すべきを也。

◇

岩田惣七　△福島縣郡山市燧田八五に新築落成、堂々たる新興の岩田耳鼻咽喉科院あり、院長岩田惣七博士の經營にして、外構宏壯、內容充實、私立病院中斷然此の地方に一頭地を拔く。博士は金澤醫大派の名醫博中の新進にして、研鑽多年の經驗に富み、深奧なる學問と共に臨床的獨特の手腕を有す。今や其の玲瓏たる診療手術の評判は、既にして當地方を風靡し遠近よりの外來患者日々輻輳すと云ふ、著者は更めて博士の成功を祝福する者也。

△博士は大正十四年金澤醫大を卒へ、直ちに附屬醫院耳鼻咽喉科に入り、久保敎授の指導を受け、後ち東京帝大醫學部耳鼻咽喉科に入り增田敎授に師事す、辭職後は再び金澤醫大に歸學し解剖學敎室にて岡本敎授指導の下に研究、次で再び耳鼻咽喉科に復歸し山川敎授に就き臨床的方面の研究に從事す、昭和六年十二月高知市武田病院耳鼻咽喉科長として赴任、同七年一月母校にて學位を得、八年春武田病院を辭し頭書の私立病院を新築經營今日に至る。斯間の指導敎授は久保護躬博士、增田胤次博士、岡本規矩男博士、山川强四郎博士等なるが、學位論文は「邦人顳顬骨ノ研究」が主論文にして、外に參考論文八篇あり。本論文は博士會心の著にして、人類學人種解剖學並に局所解剖學的方面より邦人顳顬骨の解剖學樹立に貢獻せる處大なり。

△博士は埼玉縣入間郡堀兼村靑柳の人、岩田銀藏の長男にして、明治三十四年生る、年齒三十有五歲の少壯也。新鋭の意氣壯んにして、その臨床にのぞむや專念その事に從ひ、孜々として熱心倦むことを知らず、患者を待つに親切にして誠意、同情を以てす、その篤き人望を博する所以、亦以て博士の德とする處あるを窺はる。學究的溫厚の紳士にして臨床家としての特徵を具備し、學德兩全の醫博人物たるを多幸とす。多趣味の人にして特別に記すべきことなしと雖も、人の成すことは何んでもやると云ふ風な主義と聞く。

◇

神林悌一　△帝都診療界に躍進して、其の專門とする內科、耳鼻咽喉科を標榜して、豐島區西巢鴨四丁目四〇四番地（市內電車新庚申塚下車、又は王子電車庚申塚際）に自營の昭和醫院長として日々診療に精進努力しつゝある神林悌一博士は、日本醫專の出身にて、入澤達吉博士の門下生として恩師及び藤井暢三博士指導の下に內科學を專

攻し、又た耳鼻咽喉科學は西端驥一博士に就て研究し、主論文「耳迷路ト內分泌臟器竝ニ植物神經トノ關係ニ就テノ實驗的研究」及び外參考論文八篇を完成、京都帝大醫學部に提出して昭和七年一月學位を獲得せり。篤學の士にして博士獨特の手腕は名醫博たるの名に耻ぢず、玲瓏たる診療手術の好評は多年の聲望と相俟つて、益々人氣を集中し、日增隆盛に向ひつゝある前途は矚目に値す。

△博士は新潟縣刈羽郡北條村大字舊廣田の出身にして、明治二十年生る、當年四十有九歳也。年壯銳氣、學究的溫厚の紳士にして、其の閲歷は博士の前半生史に精彩を放ちて見ゆ。殊に學園を出でゝより頂天立地、幾星霜かの間、臨床の傍ら時には毀譽褒貶の中に拮据奮迅して專念研究に沒頭し、凡有ゆる辛酸難苦を嘗めて遂に克く初志を貫行して、學位を獲得せる篤學は特筆に値し博士の面目を語るに充分なり。今や手腕圓熟の域に入りて一段の貫祿を加へ、働盛にて最も得意の時代に在り。精力主義の勤勉家にして「醫は仁術也」を以て本分となし、平生臨床に在るや熱心克く誠實と親切とを盡す、其の眞摯にして和氣溫味に富む態度は、現代的好箇の臨床家としての人物を推奬す。

◇

大藤敏三

△關東廳醫院醫官にして、關東廳旅順醫院耳鼻咽喉科醫長たる大藤敏三博士は、九州帝大系の名醫博たる新人にして、耳鼻咽喉科界の耆宿久保猪之吉教授、生理學界の泰斗石原誠教授等、母校の恩師に親炙して造詣する所あり。既にして研鑽多年の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なし。

△博士は東京府立一中、一高を經て、大正十五年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに附屬醫院醫員囑託、副手として同學耳鼻咽喉科教室に勤務、助手、醫局長、聲音障碍言語障碍部主任補助となり、昭和六年三月同大學講師拜命、次でX光線療法主任囑託、同年十二月同大學を辭し、關東廳醫院醫官に任ぜられ今日に至る、同七年一月母校より學位を受領す。

△學位主論文は『「パラトグラフイキ」ノ實驗醫音學的、並ニ臨床學的意義』にして、外に參考論文として、(1)馬鼻疽類似症、(2)敗血症ニ到レルウンサン氏口峽炎、(3)實驗的「アンギーナ」ト蟲樣突起炎ノ實驗研究、參考論文は、(1) Ueber das Kindesstammeln und den familiären Koppezismus (2) Ueber die Bedeutung der neuen Ergebuisse der palatographischen Kurven bei offenem palatum durch Rhinolalia clausa palatina zunctionalis. 其他十二篇あり。

△博士曰く「臨床醫學を離れない研究を切望する者である。研究のための研究も勿論惡くはありませんが臨床的研究を餘り喜ばない風潮に對して自分は餘り贊成出來ない者であります。醫學の對照は人間であり、人間の疾病治療にあるからであります。重要なる臨床的諸問題は家常茶飯事の物でも未だ未解決の者がある以上夫に向つて研究する事は敢て怪しむに足りないと思ふ。徒な動物實驗以上に臨床問題に留意する事は人類の幸福增進に益多く醫學の根本問題にふれる者と思ふ」云々とは、現代學界に對する博士の感想の一片なり、三思傾聽すべきに値す。

△博士は東京市麻布區笄町二七大藤敏太郎の長男にして、明治三十四年生る、當年三十有五歳の少壯也。文學趣味豐富にして、和歌に堪能、また繪を能くす、スポーツとしてはゴルフを好む、時に又た旅行を樂しむ風あり。精力家にして少壯の意氣益々壯んなるは多幸とす、その臨床にのぞむや熱心にして亦他事を顧みず、患者を待つに同情と親切とを以てし大に人望を集む、好個なる臨床家として學德兼備の人物たるを尊ぶ。順旅市大津町二四に住す。

◇

豐田邦二

新時代に相應しき耳鼻咽喉科界の新人豐田邦二博士は、名古屋醫大の出身にて、曩年母校の耳鼻咽喉科教室の恩師八木澤文吾博士の膝下を巢立ち、一躍して山梨縣病院耳鼻咽喉科部長の椅子に納まり、爾來孜々として地方診療界の爲め精進して倦むことなく、玲瓏たる診療手術の好評は益々嘖々たる人氣を集め、今や新進大家と

して多大の聲望を博しつゝあるは、地方診療界の爲め多幸とす。

△博士は豊橋中學を經て、大正十一年愛知醫專を卒へ、更に同十五年愛知醫大を卒業す。此間母校の耳鼻咽喉科教室にありて、八木澤博士の指導を受けて研究に從事す、一度び學窓を出づるや、直ちに山梨縣立病院耳鼻咽喉科部長を命ぜられ、昭和七年二月名古屋醫大にて學位を授與せられ今日に至る。

△主論文は「日本住血吸蟲病知見補遺」にして、(1)日本住血吸蟲「セルカリア」ノ聽器感染ニ就テ、(2)日本住血吸蟲「セルカリア」ノ鼻腔感染ニ就テ、の二篇より成る、參考論文は、(1)意識消失ヲ伴フ外傷性半身不隨症ノ一例、(2)右側耳性顳顬葉膿瘍ノ一例、(3)左氣管枝異物ノ一例、(4)鼻性視神經炎ノ稀有ナル一例等なり。

△博士の感想の斷片を披瀝せば、「墮胎公認せよ」のスローガンを掲げて、産兒制限位では駄目との氣焔を仄めかす一方「百萬圓以上の私有財産を認めず、餘金の一部を醫療機關に廻して貧つて貧乏人を助けて頂き度いものだ」など〻述べ「醫者も段々食へぬ様になること」を吐露せり。愛知縣八名郡三上村の人、明治三十一年生れの少壯にして、年齒未だ三十有八歳。多趣味の人、性格は剛毅にしてユーモアに富み、磊落にして樂天主義なれば居常甚だ快活なり、患者に對しては親切者の評判なり、「勿論長所なんてないが、此頃御多分にもれず、精力が減つて來て殘念に思つて居る。從つて勉强も多く出來ないのが殘念だ」云々とは、著者に寄せられたる書簡の一節なるが、氏の性格の一端を窺はる。春秋猶頗る豊富なれば、益々奮鬪斯界の爲に折角の努力貢獻あらんことを囑望して止まず。甲府市穴切町二〇七に住む。

◇

北野　伊八郎　△日赤兵庫支部姫路病院耳鼻咽喉科醫長北野伊八郎博士は、京大派の新進にして、多年恩師星野貞次博士に師事して大に造詣する所あり、今猶現職の傍ら本院病理科に於て研究に餘念なき博士の前途は、實地と學理と併せて大に囑目すべきものある可し。

△大阪府立八尾中學卒業、大阪高工中途退學、第三高等學校を經て、昭和二年京都帝大醫學部を卒業、直ちに同大學附屬醫院副手囑託として耳鼻咽喉科教室に勤め、同四年三月高知市楠病院耳鼻咽喉科々長として赴任、翌五年八月現職に就任、同七年三月京都帝大より學位を受領して今日に至れり。

△學位主論文は「日本人胎兒ノ中耳及其ノ隣接器官ニ於ケル彈力纖維ノ發生ニ就テ」にして、外に參考論文七篇あり、(1)流行性耳下腺炎性腦膜炎ノ一例、(2)口腔底皮膚樣囊腫、(3)急性副鼻腔炎ヨリ惹起セシ眼窩蜂窠織炎ニ就テ、(4)水癌病竈組織ニ於ケル細菌學的所見、(5)喉頭下腔ニ發生セシ内被細胞腫ニ就テ、(6)鼻咽腔惡性腫瘍ノ神經症狀ニ就テ、(7)家兎中耳腔ニ石炭「テール」ヲ注入シ惹起セシメタル慢性炎症ノ組織學的觀察、要するに博士の研究は中耳殊にその音傳導裝置を研究するには間質組織就中彈力組織の研究必要なるに和辻前京大教授以外これに關するものなく、然かも胎兒に就てのこの發生に關しては全く未知なるを以て先づこれを明かにし次で彈力纖維發生に關する所見を述べて從來の學說を批判せるものなり。

△理想としては學閥による爭鬪、健康保險制度の改善を高唱する共鳴者の一人にして、多分の思慮を有し識見に富む趣味としてはスポーツ（漕艇）を好む風あり。大阪市東淀川區天神橋筋八の一八、北野伊三郎の長男、明治三十五年生れにして、年齒未だ三十有四歳の少壯紳士也。氣は長いが、研究に對する熱心と執着力に强きこと敢て人後に落ちず、强ひて短所を云へば、餘り社交的の事を好まず、或は世才に缺ぐる所ありて會々世の誤解を招くことなきか、而かも眞面目にして親切なるは又た患者に對する忠實なる所以にして、篤き信望を博するも亦偶然ならざるを思はしむ

姫路市柿山伏町八一に住む。

◇

岸祐雄

△桐生市本町六ノ三五に耳鼻咽喉科を以て著聞する岸病院あり、院長は岸祐雄博士也。千葉醫專の出身にて、千葉醫大教授松村及び久保兩博士指導の下に研究の結果、學位論文「普通大腸菌ノ研究」、（參考論文なし）を完成して、千葉醫大より學位を得たる近來の名醫博也。學識豐富、臨床に堪能にして、獨特の手腕を有し、嘖々たる好評と共に日增繁榮の域に在るは、地方診療界の爲め多幸とす。

△博士は大正九年千葉醫專卒業、卒業後一年志願兵として入營、除隊後大正十一年四月より大正十三年十月まで東京日本赤十字社病院耳鼻科勤務、大正十三年十一月桐生市に開業、昭和四年九月開業を止め千葉醫大衞生學教室に入り、松村教授の元にて研究、次で千葉醫大久保教授及び東京同愛記念病院細谷博士の元にて耳鼻科を研究、昭和七年三月千葉醫大にて學位受領、同年八月現地に開業今日に至る。

△博士の出身地は群馬縣群馬郡金古町にして、明治二十八年生る、當年四十有一歳也。學究的溫厚の紳士、年壯氣鋭にして手腕圓熟し、今は最も奮鬪活躍の時代に入る。臨床に勵精、熱心克く誠實と懇切とを盡し「醫は仁術也」をモットとす。好箇の臨床家として相應しき性格の持主にして、患者より多大の信望と尊敬とを受けつゝあるは高邁なる爲人を窺はる。讀書家にして精研修養相俟つて克く勉む、又劍道を趣味して心神の鍛錬に力め健康の增進を計る。

◇

片山正一

△群醫割據の大阪診療界に進出して、自己の專門とする耳鼻咽喉科を標榜して獨立の地位を占めんとして、現に大阪市西成區粉濱東之町四丁目に醫院新築開業せる片山正一博士は、京都府立醫大系の名醫博にして初め增田胤次教授に手解を受け後、母校の恩師中村登博士に師事して斯學の研鑽を重ね、臨床に堪能にして、手腕愈よ圓熟の域に入り、今や斯科の大家と仰がれ、大衆より多大の信望を博しつゝあり。聞說、學位論文としての研究の中には、蓄膿症方面に多分の自信を得たるが、現在の臨床に於ては耳疾にヨリ以上の興味を有すと。

△博士は京都府立二中を經て、大正四年京都府立醫專を卒へ、爾後十年まで陸軍々醫として在職す、次で私立大阪住友病院耳鼻咽喉科長として就任、昭和二年十月より七年三月迄、京都府立醫大にて研究、同七年二月同大學より學位を授與せらる。

△主論文は「藥物ノ作用ニ關スル實驗的聽器病理知見補遺」にして、參考論文は、(1)比較的高度ノ氣溫ガ聽器ニ及ボス影響ニ就テ實驗的研究、(2)比較的高度ノ氣溫ガ上氣道ニ及ボス影響ニ就テ實驗的研究、(3)徑口的喉頭內手術創ノ治癒機轉ニ關スル實驗的研究、蓄膿症ニ關スル研究三篇外二篇あり。

△博士曰く「巷間醫博粗製濫造の聲あり。往時の學位論文と近時のものとを比較するに毫も遜色あるを想はしめず、寧ろ研究機關及び設備の完備に伴ひ益々進歩の徵あり、又研究者の數も昔日の比にあらず、醫博輩出するは當然にして素質の下落なしと云ふべし。然れども稀に內部より親ふて疑を感ずるものなしと云ひ難く、尙ほ殊に學位受領後に於ける學究的態度には遺憾の點多し。彼我共に大に戒心して世評を排擊すべきなり」云々と。又曰く「現代の醫師會は既成政黨の如し。幹部の情實、積惡枚擧の遑なし。多額の醫師會費を强要するが如きは醫師會設立の本旨に反す」云々と、現代學界及び醫師界に對する感想一片を吐露せり、三思傾聽に値す。

△京都市左京區下鴨宮崎町片山正夫の長男にして、明治二十四年生る、當年四十有五歳也。性格より打診すれば、恪勤にして眞面目なるが故に、病院勤などには歡迎せらるゝ方ならん、而かも餘りに正直過ぎて敢て阿諛るを好まざれば、或は開業醫としては萬人向せざるやも知れざれど、その親切にして卒直なる點は却つて患者をして信賴せしむる德を有す。博士は動物愛好家にして、業餘の趣味としては之を樂しむ風あり。

◇

阿久根睦

△海軍々醫中佐阿久根睦博士は、名古屋醫大教授兼海軍々醫學校教官として耳鼻咽喉科學を擔任

し、學生指導の任に當り熱心甚だ務むる所あり。博士は東京帝大系の耳鼻咽喉科學者として錚々たるものにして、東大耳科教授增田胤次博士及びベルリン大學講師フリツツシツフ氏に就て研究の結果、母校より學位を得たる名醫博也。該博なる學識を備え、能く臨床にも通曉して卓越せる手腕を有す。耳鼻咽喉科界現代の一權威たるべき新進教授として推奬し、猶輝しき前途の大成を期待せんとす。

△顧みて博士の今日ある學歴及び閲歴を公開すれば、博士は七高造士館を經て、大正八年東京帝大醫學部卒業後、直に海軍に入り、大正十五年四月より二ケ年東京帝大大學院に入り耳鼻科專攻、昭和四年三月より二ケ年間獨逸國駐在、同六年五月歸朝、直に伊勢軍醫長、同年十二月海軍軍醫學校教官兼名古屋醫大教授となり、昭和七年三月母校より學位を受領す、翌八年六月名古屋醫大教授專任、海軍軍醫學校教官を兼ぬ。

△學位主論文は「人血A型亞型ノ研究」にして、參考論文は(1)血清型MNノ知見補遺、(2)血清學的人類學ヨリ見タル日本人、外一篇あり。

△博士の出身地は鹿兒島縣薩摩郡高城村麓にして、明治廿七年阿久根助市の次男に生る、當年四十有二歳也。漸く不惑に入りて年壯の意氣に燃え、志操堅實にして思慮あり識見に富む、清淡にして名聞を求めず、利祿に介意せずして只管育英と研究とに專念し又た他を顧みず、診療に臨むや熱情と誠實とを以てす。賦性高潔、高邁なる人格を備へ、最高學府に逸すべからざる名教授として敬意を表す。趣味、閑を得ば旅して自然の美をたのしむ。名古屋市東區千種町北畑七八ノ二に住む。

◇

山本肇

△在岡崎市愛知縣立岡崎病院に耳鼻咽喉科部長として活躍し、内外の信望を博しつゝあるは山本肇博士也。名古屋醫大系愛知醫專の出身にして、耳鼻咽喉科學を專門とし、母校の恩師愛知醫大教授八木澤文吾博士の指導を受け研究の結果、名古屋醫大より學位を得たる名醫博也。

△博士は大正七年愛知醫專を卒へ、同十五年一月より昭和六年四月迄愛知醫大耳鼻咽喉科教室に於て研究（指導教授八木澤文吾博士）、先是昭和二年五月愛知縣立岡崎病院耳鼻咽喉科部長拜命現在に至る、同七年四月名古屋醫大にて學位受領。

△學位主論文は「人類胎生期ニ於ケル鼻腔竝ニ副鼻腔ノ組織學的研究」にして、參考論文は、(1)人類扁桃腺ノ「グリコゲーン」ニ就テ、(2)健康者及ビ急性咽頭炎患者ノ唾液水素「イオン」濃度竝ニ各種含嗽劑ノ之ニ對スル影響ニ就テ(3)上顎骨ニ發生セル多形細胞肉腫ノ生體色素攝取ノ一例ニ就テ、(4)實驗的急性炎症性舌及ビ口腔粘膜ノ「グリコゲーン」分佈所見、(5)流行性耳下腺炎ノ血液像、(6)上顎癌腫ヲ疑ハシムル擴張性上顎竇炎ニ就テ、(7)慢性鼻炎ニ對スル次硝酸蒼鉛乳劑「ヘミシン」注射療法ノ臨床的竝ニ組織學的研究なり。

△感想の一片を述べて曰く「誰しも等しく抱く感ならんも、現今簇出する新藥も玉石混同にして、往々誇大廣告あるは見苦しき限りなるも、是れを實驗せし文獻も是等新藥會社に迎合する傾向あるを遺憾に思ふ、正直なる實驗報告こそ望ましきものなり。次に醫藥分業論に對して吾人の實生活に立脚し、經濟方面を除外するも現今の制度こそ適當ならんと思はる」云々と、三思傾聽すべき也。

△博士は愛知縣岡崎市岡町字北石原の人、山本宇三郎の長男にして、明治二十六年生る、當年不惑に入る三歳也。年壯氣鋭、手腕圓熟の期に在り、診療に臨むや自信を以て熱心甚だ力む、性來物に熱し易く、熱中すれば他を顧みず徹底的に成遂ぐる長所を有す、併し意に滿たざれば怒り易き癖なしとせず。スポーツマンのファンとして知られ、運動競技の見物を唯一の趣味とす。又た時に旅行をも好む風あり。岡崎市岡町字北石原三三に住す。

◇

岡田　清之輔　△名古屋市中區吾妻町十八に岡田耳鼻咽喉科醫院あり、耳鼻咽喉科界にては斷然頭角を現はし、近時岐阜縣多治見町に更に分院を開設せり。院長岡田清之輔博士は益々繁忙、其の圓熟せる診斷と治術の好評とは、博士の高潔にして、溫厚なる人格と相俟つて益々遠近に著聞す。名古屋醫大系の英才、多年克く自重して研鑽を重ね、漸く治療界に乘り出して早くも臨床家としての最高目的たる良醫の評を獲得し、年壯醫博の全盛時代を釀出せり。昭和八年仲秋の頃、たま〳〵著者に寄せられたる博士の書簡の一節に曰く「天佑か昨年夏以來分院開設し每日午後出張診察いたして居るも身體に何んの違和も生ぜず益々奮鬪努力し經濟非常時を切りぬけんものと勉め居り候」云々。博士の努力主義を如實に物語るものにして、その今日の成功あらしめたるも亦偶然ならざるを思はしむ。

△博士は明倫中學を經て、大正八年愛知醫專を卒業す、同年五月名古屋市中區南園町中村耳鼻咽喉科病院に就職、同九年四月同病院より一ヶ年間東京帝大醫學部へ留學を命ぜられ岡田和一郎教授の指導の下に耳鼻咽喉科を研究す、同年七月東京帝大耳鼻咽喉科教室介補を囑託せられ、翌十年五月介補を辭す、同年六月中村耳鼻咽喉科病院に復職し、同十二年九月同院副院長を辭職後、翌十月愛知醫大解剖學教室に入り淺井猛郎教授指導の下に研究、其餘暇自宅にて耳鼻咽喉科の診療に從事す、昭和六年五月再び名古屋醫大解剖學教室にて長松英一教授指導の下に研究を續け、翌七年六月名古屋醫大にて學位を得て今日に至る。

△學位主論文は『「マウス」葉狀乳頭ニ就テ（組織學的並ニ發生學的ニ研究セリ）』にして、參考論文は、(1)「ラツテ」葉狀乳頭ニ就テ（組織學的並發生學的研究）、(2)舌繫帶部ニ發生セル巨大ナル乳嚢腫ノ一例の二篇なり。

△博士は前記現住地の人、明治二十八年生れにして當年四十有一歲也。手腕漸く熟し年壯氣鋭の時代を控へ潑剌たる氣魄に富む、學究的溫厚の紳士にして、好箇の臨床家としての特徴を具備す。業餘高山植物の栽培を無上の樂しみとせり、曾て昭和七年の夏華氏百三度の酷暑に見舞はれ、博士が六ヶ年屋上に栽培せし苦心の結晶たる高山植物は殆ど全部枯死し博士を非常に落膽せしめたり、現在猶山地帶に繁生するものゝみ僅かにあり、後日餘裕を得て庭園廣き所に移轉の曉は再び栽培に着手ししたき希望を有すと云ふ。

◇

只木　良信　△京都市上京區大宮通今出川角只木耳鼻咽喉科醫院は、院長只木良信博士の經營也。開業日猶淺少なれど既に診療手術の好評は人氣を獲得して、斯科治療界に於ける地盤を蠶食しつゝあり。博士は東京市澁谷區金王三一の人、明治二十九年生にして、東京府立一中を經て、大正九年京都府立醫專卒業、直に同學附屬病院耳鼻咽喉科醫員として勤務、次いで京都府立醫大助手となり、引續き研究科に入りて研學多年、其間教授中村登博士の指導を受く、其後京都府立醫大講師となり、昭和七年六月京都府立醫大にて學位を得、同年九月大學講師を辭して頭書の如く開業今日に至る。

△學位主論文は『「レントゲン」放射線ノ鼻部組織ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究』にして、參考論文としては、(1)喉頭癌發生ニ關スル實驗的研究、(2)家兎顎下腺ノ人工的「テール」癌發生ニ關スル實驗的研究、(3)家兎中耳胞內「テール」注入ノ影響ニ關スル實驗的研究、その他五篇あり。年齒未だ三十有八歲、少壯にして手腕漸く壯熟の域に入り、臨床家として最も活躍重望せらるゝ時代にあれば、幸に健康と共に益々發奮大成あらん事を望むや切也。

◇

田久保　茂樹　△東京市品川區大井寺下町一四二〇に、田久保耳鼻咽喉科醫院を經營して一家を成すは慶大派の田久保茂樹博士也。內部諸般の設備を整へ、一般耳鼻咽喉科及び耳鼻顏面整形科を標榜し競爭激甚なる帝都醫療界へ躍進して、努力奮勵、日も尙足らざるの概を示し、既に牢固たる地盤を開拓して漸次堅實なる發展振りを示しつゝあるは囑目に値す。

△博士は大正十五年慶大醫學部卒業後、直ちに北里研究所員となり病理、細菌學及一般內科傳染病學を醫博草間滋部長に就いて學び、後慶大醫學部教員となり耳鼻咽喉科教室に轉じ、耳鼻咽喉科學を小此木修三教授に師事して研修し、昭和七年七月慶大にて學位を得、爾來頭書の如く開業して一般診療界に活躍しつゝあり。主論文は「流行性耳下腺炎ノ實驗的研究」にして、外參考論文多數あり。

△感想を吐露して曰く「現代醫學界は歐米の模倣の大多數なり。されども本邦醫學者の頭腦及び手先は確かに歐米の先進國學者を凌駕するもの尠からず。然共本邦に於ける研究組織乃至は學者待遇は極めて貧弱にして大學の教授は內職するに非ずんばその體面を保てず眞に學究的の徒をして素貧に甘んぜしめ、折角の良能を挫折せしむること數限りなくあり。醫業の民衆化と現代經濟組織（資本主義）の行詰りのため、開業醫の生活を脅かすもの頻々たり。之れ一は醫師の現代社會組織に對する認識不足と一般民衆の醫療に對する誤れる觀念其の基調をなすものと信ず。且醫業の最終目的は治療に非ずして其の豫防にあり。宜しく當局者は非文明病たる結核、癩等をして其の豫防的見地よりして之を驅逐するの覺悟と絕大の努力を要すべきものなり」云々と。要するに博士の言は學者擁護の論熾烈なると同時に當局に何物かを訴へて止まず、傾聽すべき也。

△博士は東京市麻布區霞町一の人、田久保節造の次男にして、明治三十二年生る。當年三十有七歳の少壯也。讀書家にして業餘研究に終始し、臨床多忙の裡に之れに親しみ樂しむの風あり。而して其の診療に臨むや熱心にして誠意、親切を以てす、その手術的手腕は漸く壯熟して最も得意の時代に入る、篤き今日の聲望ある所以知るべき也。耳鼻咽喉科界の前途益々多望なるの秋、爲斯界益々努力奮盡あらんことを翹望して止まず。醫博松本本松、醫博故眞家眞は親戚の間柄と聞く。

◇

矢野原乃武　△宇治山田市に在る日赤三重支部山田病院に耳鼻咽喉科醫長として矢野原乃武博士あり。學系より觀たる博士は京都帝大醫學部、大正十二年の出身にして、卒業後直ちに島薗內科に入り斯學專攻、同十三年星野教室に轉じ耳鼻咽喉科研究、助手を拜命す、同十四年愛媛縣今治市今治病院耳鼻科部長として赴任す、同十五年日赤三重支部山田病院に轉任して今日に至る。此間昭和五年四月より同七年三月まで二ケ年間內地留學を命ぜられ京都帝大星野教室に研究し、同七年八月京都帝大にて學位を授與せらる。主論文は「腦脊髓液壓ト前庭迷路機能トノ關係ニ就テノ實驗的研究」にして、外に參考論文五篇あり。

△出身地は岐阜縣稻葉郡島村にして、明治二十九年生る、當年四十歳也。學究的好箇の臨床家として、其の專門的學識は勿論、多年の經驗と共に臨床的手腕今や壯熟の域に入り、只管診療界の爲め精進しつゝあるは多とす。淸淡にして名聞を願はず、利祿を求めず、一意專心、唯だ至誠以て其の職務に勵み、勵精恪勤の人として內外の信望を博す。宇治山田市八日市場町に住す。

◇

桑原良一　△岡山縣兒島郡味野町に耳鼻咽喉科專門を以て名盛を博せる桑原良一博士あり。學系は岡山醫大に屬し、現代耳鼻咽喉科界の泰斗、岡山醫大教授田中文男博士の愛弟子にして、恩師の指導を受くる所厚く、母校より學位を得たる新進の名醫博として其の手腕を認めらる。久しく母校にて學術の研鑽と共に實地の經驗を積み、教室を退いて診療界に躍進するや、獨特の手腕を振ひ、拮据黽勉、孜々營々として獨自の地盤を開拓して、年次堅實なる發展振りを示しつゝあり。

△博士は岡山縣立第一岡山中學校、六高を經て、昭和四年岡山醫大を卒へ、引續同大學副手として附屬醫院耳鼻咽喉科教室に勤め、同七年任同大學助手、同年九月母校より學位を受領す、次で現住地にて開業せり。

△主論文は「口蓋扁桃腺内ニ於ケル放線狀菌ニ就テ」にして二篇より成る、參考論文は、(1)小兒口蓋扁桃腺並ニ咽頭扁桃腺ニ於ケル放線狀菌塊ニ就テ、(2)口蓋扁桃腺ト「アクチノミコーゼ」、(3)口蓋扁桃腺窩穴ニ見ル重層氈毛上皮ニ就テ、(4)扁桃腺囊腫ニ就テ、(5)聲脣ノ先天性上皮囊腫ニ就テ、(6)總頸動脈破裂ヲ來セル食道周圍瓦斯蜂窠織窕ノ一例なり。

△岡山市五番町の出身、明治三十七年生にして、當年未だ三十有二歳の少壯也。學究的臨床家として當年の意氣を以て起ち、努力奮鬪日も尙足らざるの概を示す。而かも年齒未だ年少なれば、輝しき學位の前途は多事益々多望にして博士の將來を語るに餘裕綽々たり。有爲の新人物として向後の活躍を待つや切也。殊に特筆すべきは博士の發表せる論文中「放線狀菌ノ研究」は著名にして學界に重要せらる、本論文は博士會心の著作にして、博士の最も得意せるもの也。研究以外業餘の趣味としては運動殊に庭球を好む風あり。

◇

窪田主一

△九州醫學專門學校教授にして同附屬病院耳鼻咽喉科醫長たる窪田主一博士は、九州帝大系耳鼻咽喉科界の耆宿、現名譽教授久保猪之吉博士の愛弟子にして、恩師の親しき指導を受くること多年、又た九大教授武谷廣博士に師事して內科學を研究せる結果、母校より學位を得たる、所謂九大派の一新勢力たる名醫博也。該博なる學識と共に臨床的實驗に富み、而も圓熟せる手術的快腕に至りては自他共に許す所、今や斯科の大家として其の手腕を認められ、診療界の爲め努力精進しつゝあり。翻て一たび學生指導の任に當るや、平素の寡默吶辯に似もやらず、熱辯滔々學生をして理解せしめざれば已まざる所、他の追隨を許さずとは、門下生の評なり。

△博士は中學迄は鄕里村上にて修め、四高を經て、大正三年九州帝大醫科大學卒業後、直ちに同學耳鼻咽喉科教室に入り久保教授の指導を受け、次て後一年武谷內科に入り武谷教授の指導を受く、其後八幡製鐵所病院耳鼻咽喉科醫長となり、居ること五年、九州醫專の設立せらるゝや聘せられて同校教授となる、昭和七年九月母校にて學位受領、以て今日に至る。學位論文は「外鼻ノ計測的研究、特ニ鼻中隔異形ト顏面骨骼トノ關係ニ就テ」にして副論文なし。

△博士が追憶としての感想に曰く「現代の學界に於ては實力よりも肩書とか資格とかに重きを置き過ぐる傾向がありはしませんか知ら、私が鄕里の村上中學に居つた時分のことですが、村上の人で藤山銀太郎先生と云ふ學者がありました、先生は漢文歷史には造詣深く、鄕里村上の沿革史などには隨分精進して居られたものです、從來村上には私學校（中學程度）と云ふのがあり舊藩士の子弟を養て居つたので、先生は其校長をして居られたのですが村上に縣立の中學が出來るに及んで聘せられて村上中學の先生となられました所が、惜哉先生には中學教諭たる資格がなかつたので囑託であつた譯です、夫で先生より實力はなくとも資格のある所謂教諭、先生の下風に立たるゝのを不本意否な寧ろ憤慨してをられたのが、私達少年の眼にも立つた樣に思はれます、夫で私達の卒業後先生は遂に憤慨の餘り中學教員の檢定試驗を受けられたそうですが身體に無理がいつた爲ですか健康を害はれ遂に早世せられました、實に惜しいことです、私達は寧ろ藤山先生の學力と當時の試驗官の實力と何れか勝れたるかを疑ふものであります、斯くの如き學者を遇するの道を知らざるの甚だしきものではありませんか、惜しき村上の至寶は無慘にも碎かれて了つたのです、之は昔の話ですが現今の學界にも此弊風が依然として存在する樣です」云々。

△博士は新潟縣岩船郡村上本町窪田玄辰長男、明治十九年生る。年壯銳氣、學究的溫厚の學者にして、又た好箇の臨床家たり、其の輝しき閱歷は博士の前半生史に盡きて餘蘊なし。賦性高潔にして事に當るや熱意と熱情とを以てす、併し學生の指導に當り、博士の長所たる餘り熱心と親切とが過ぎて、却つて不良學生の爲め嫌はれることなしとせず、以て博士の眞劍味あり熱心振りを察せられ、同時に其の崇高なる人格を敬慕せらる。圍碁其他室內遊戲を業餘の趣味とす。久留米市櫛原町一丁目一ノ四に住す。

◇

增田芳次　△近來私學の一勢力たる慶大派は新進の人物に富む、玆に紹介品隲せんとする、東京市向島區吾嬬町西六ノ一〇七增田耳鼻咽喉科增田芳次博士の如きも、亦た此の勢力圏内に逸すべからざる少壯の名醫博たるに耻ぢず。卽ち博士は昭和三年慶大醫學部出身の新智識にして、耳鼻咽喉科を以て立ち、母校より學位を獲得せる後ち、慶大附屬病院耳鼻咽喉科教室に勤め、孜々として研究に沒頭しつゝありしが、一度び教室を勇退して以來、診療界に躍進して獨特の手腕を振ひ、誠意誠實以て仁術の最善を盡しつゝ獨立の舞臺に活躍し、診療手術の好評と相俟つて年次堅實に發展しつゝある前途や囑目に値す。

△博士は昭和三年慶大醫學部を卒へ、直に同校耳鼻科教室に助手として入り、同四年七月大阪高等醫學專門學校耳鼻科講師に赴任、同七年七月まで同耳鼻科、病理兩教室に於て研究し、滿三ケ年母校慶應と大阪高醫の爲になす所あり、同年八月より再び母校に助手として勤務の傍ら研究に從事し、同七年十月母校より學位を受領す、其後辭職して開業今日に至る。主論文は「喉頭ノ癲性變化並ニ間質纖維ノ態度ニ就テ」にして、參考論文は「咽頭扁桃腺ノ病理組織學的研究」前篇、後篇の外五篇あり。

△感想に曰く「大阪高等醫學專門學校が完成した始めての學位だ母校の川上、小此木教授等の御教授もあつたが、高醫の江口、山崎兩教授の御指導に深謝してやまない」云々、子弟情誼の溫かさを想はしむ。博士は埼玉縣北埼玉郡下忍村の人にして、明治卅一年生なれば、年齒未だ三十有八歳也。少壯の意氣潑剌として今も猶研究心に富む、開業日尙淺きも、拮据勤勉、刀圭甚だ多忙を極めつゝあり。賦性快活、寛厚能く人を容れ、恬澹として能く話し好感を與ふ、また人に對するに應答禮を以てし、時務を見るに同情と理解とを以て處理す。學究的溫厚の紳士として其の眞摯なる態度は人に親しまるゝ德を有す。

◇

山下憲治　△臺灣總督府臺北醫院耳鼻科醫長兼臺北醫專教授として、耳鼻咽喉科學を擔任しつゝある山下憲治博士は、京大系の新進にして、恩師星野貞次博士に就きて耳鼻咽喉科學を、同舟岡省五博士に就きて解剖學を研究して、母校より學位を獲得せる少壯醫博也。殊に博士の年少二十八歳を以て學位を得たるは近來稀に見る所にして、頭腦の明晰と潑剌たる研究心の旺盛なるを想はしむ。而かも未だ少壯にして精研に餘念なき前途は洋々として、將來有爲の學究的人物として囑望せらる。

△博士は鹿兒島一中、七高を經て、昭和三年京都帝大醫學部卒業後、直ちに耳鼻咽喉科教室に入る、同年五月任同學部助手、昭和五年二月大學院入學（特選給費學生）、同六年九月文部省自然科學研究奬勵金を受く、同七年三月京都帝大醫學部講師となり、同年四月大阪女子高等醫學專門學校教授に任ぜらる、同年十二月京都帝大より學位を受領す、同九年六月現職に赴任す。

△主論文は「顳顬骨蜂窩ニ就テ」にして獨逸文六篇より成る、參考論文は、(1)耳石形成機轉ニ就テ（獨文）、(2)耳性脊髓合併症ニ就テ、(3)迷路周圍及岩樣骨錐體尖端蜂窩化濃ニ就テ、(4)人間ノ音響性耳殼運動ニ就テ、(5)消化性潰瘍ニ由ル癜痕性食道狹窄ノ一例、(6)「ヤトコニン」ニヨル淋巴腺結核治療等なり。論文中「顳顬骨含氣蜂窩ノ解剖及ビ其臨床的手術學的意義」は博士の最も得意とするものなり。

△感想に曰く「醫學的論著は毎月毎月山の如く產生せられるが、內容の充實した眞面目な研究は比較的少い。殊に長年月を要する如き業績の發表は甚だ寥々である。之れは現今の醫學研究の大部分は單に博士獲得の手段であつて數年間に小器用にまとめ上げるからである。研究室を辭してから後にも診療の余暇を割いて自己の題目に就て研究を續行する學究が今少しく多くあつてもよいと思ふ。しかし之は望み難い事だから、博士號授與を論文のみならず、一定年

間の研究と其研究經過報告（まとまつた成績に達せぬ場合でも）を條件とすればよい。後進の研究者が之を續行する事にすれは之が重つて大きな業績が出來上り、此所に世界に誇る日本醫學が出來るだらう」云々。

△博士は鹿兒島市加治屋町山下平藏次男、明治三十八年生る。年齒未だ三十有一歳にして少壯の意氣に燃え、向學の精神欝勃として禁ぜざるものあり。其の今日ある閲歴は躍如として輝き、今は學生の指導と自己の研究に沒頭して亦他事を顧みず、其の態度の眞劍にして熱あり力あるは、博士の將來を表徵するものとして更に大に期待せらる。人と爲り穩健にして、志操堅實、淸淡にして功名を求めず、恬澹として街はず、人を容れ克く學生を愛撫する點は、博士の長所と見るべきか。若し强ひて言はしむれば、眞正直にして交際下手の傾きなしといへず。趣味としてはスポーツを好む。山下秀之助醫博は叔父（父の弟）に當る。臺北市東門町六に住む。

◇

梶浦　毅四郎　△朝鮮釜山府立病院醫長にして耳鼻咽喉科を擔任しつゝある梶浦毅四郎博士は、九州帝大の出身にて、現九州帝大名譽教授久保猪之吉博士の門弟中の新進として知られ、大學院在學中恩師久保、小川兩教授指導の下に研究の結果、母校より學位を獲得せる少壯の名醫博也。

△博士の感想に曰く「特に朝鮮に來り衞生的設備の不完全なるを認むると共に、一般人士に衞生學並びに豫防醫學に對する知識の普及を計る事急務なりと痛感せり。醫者として醫學の發達進歩に貢獻すべく患者の治療に從事するは勿論なるも、更に百尺竿頭一歩を進め衞生學、豫防醫學の普及により疾病を未前に防ぎ健全なる身體精神を有する國民を作り上げる事なりと思惟す」云々。

△博士は昭和三年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに九州帝國大學耳鼻咽喉科副手として久保猪之吉教授に師事す、昭和五年四月同大學大學院に入り、久保（耳鼻）、小川（細菌）兩教授指導の下に、粘液性連鎖狀球菌の臨床的並びに細菌學的研究をなす、昭和七年五月釜山府立病院耳鼻科長として赴任す、同年十二月九州帝大にて學位を授與せらる。主論文は『「ムコーズス」中耳炎患者ヨリ分離シタル粘液性連鎖狀球菌ノ研究』にして、參考論文として、(1)ガアレル氏双眼寫眞機ニ依ル喉頭寫眞撮影法ニ就テ、(2)「ムコーズス」中耳炎の二篇あり、其他論著夥多。

△出身地は愛媛縣新居郡西條町にして、明治三十五年梶浦鎌次郎の四男に生る、當年三十有四歳也。勵精恪勤の人にして、其の診療に臨むや當年の意氣を以て熱心甚だ力め、誠意親切を以てす。賦性溫厚篤實、學究的少壯の紳士としての品格を具へ、又た臨床家として相應しき性格の持主たるを思はしむ。研究以外にはスポーツを趣味し、特に水泳乘馬を好み、又音樂を愛好す。釜山府土城町二丁目十六番地に住す。

◇

金野　巖　△新潟醫大派の一新勢力と見るべき新進の耳鼻咽喉科學者たる金野巖博士は、現に岩手醫專教授として耳鼻咽喉科學教室の首席を占め、學生指導の爲め多年の蘊蓄を披瀝して教壇に起ち、諄々と說き懇々と講義す、其の態度の眞摯にして熱あり力ある所に一段の貫祿を有し、常に學生間に其の英才と德とを敬慕せらる。氏の醫專學府への躍進は獨り學内の中堅たるのみならず、今や耳鼻咽喉科學界に重きを爲す新進教授としての前途を更に期待せらる。

△博士は岩手縣立盛岡中學校（第四學年修了）、新潟高等學校を經て、大正十五年三月新潟醫科大學卒業、同年四月財團法人岩手病院醫員となる、同年同月耳鼻咽喉科學研究の爲東京帝國大學醫學部耳鼻咽喉科教室に派遣せらる、昭和二年四月岩手病院耳鼻咽喉科部長を命ぜらる、同四年四月岩手醫學專門學校教授に任ぜられ、耳鼻咽喉科學擔當を命ぜらる、同五年六月内地留學を命ぜられ新潟醫科大學に於て鳥居教授指導の下に研究に從事す、同七年四月歸任、同八年一月新潟醫大にて學位を授與せらる。斯間、東京帝大教授增田胤次、新潟醫大教授鳥居惠二、新潟醫大教授川

村麟也博士等の指導を受け專ら耳鼻咽喉科學を研究す。

△學位主論文は「可性化膿性腦膜炎ノ診斷及治療ニ關スル研究」にして、參考論文は「正常聽力ノ時間的動搖ニ就テ」なり、其他論著夥多あり。

△博士は岩手縣東磐井郡千厩町北方の人、金野九十郎の長男にして、明治三十六年生る。學究肌の少壯紳士にして、年齒未だ三十有三歳、潑剌たる研究心を有し、研究と醫育とに趣味を集中して他に道樂を求めず、研學切磋、孜々として倦まず、希望ある將來に期する所大なるものあるは、博士の前途を語るに綽々たる餘裕を存す。賦性謹直にして溫厚、謙遜にして衒はず、物事に熱心にして意志强固なり。盛岡市内丸三六に住む。

◇

吉原大輔　△佐賀縣立病院好生館に耳鼻咽喉科部長として吉原大輔博士あり。博士の嘖々たる名聲は九州診療界に聞くや既に久矣。博士や十數年一日の如く勵精恪勤、孜々として倦むことを知らず、至誠以て民衆治療界の爲め努力貢獻せる功績は言はずもがな、今以て不斷の精進を續け大に將來に俟つ所あらんとする、稀に見る勤勉熱誠の士也。氏は九大系耳鼻咽喉科界の權威現九大名譽教授久保猪之吉博士の愛弟子にして、恩師指導の下に斯學を研鑽すること多年、又副鼻腔の病理學的研究は、九大教授田原淳博士の指導を受け、母校より學位を獲得せる所謂九大派の名醫博として其の學識手腕を認められ、今や九州診療界に於ける斯科界の重鎭として最も嘱目せらる一人物たり。

△博士は七高造士館（大正五年）を經て、大正九年七月九州帝大醫學部を卒へ、同年十月より同十年九月迄同學部第一外科教室に外科學研究、大正十年十月より耳鼻咽喉科教室に歸り久保教授の下に指導を受く、同十一年六月現佐賀縣立病院に赴任、昭和四年二月より學術研究の爲佐賀縣命を以て九大醫學部に派遣せられ、耳鼻咽喉科學及び病理學教室に研究、同六年三月研究を了して現病院に歸任す、同七年六月九州帝大にて學位を受領し現在に至る。

△學位主論文は「副鼻腔ニ於ケル囊腫ノ發生ニ就テ」にして、參考論文は、(1)食道異物ニ就テ、(2)「ヂフテリー」ニ關スル臨床的觀察、(3)官能性障碍ニヨル氣管套管拔去困難症ニ就テ、等なり。就中特意とする所は「副鼻腔問題」なり、其他論著中「上顎竇蓄膿症」に關するもの、及び「食道異物」に關するものは最も重要のものと見るべき也。

△感想に曰く「我國は明治維新以來諸外國と交通し、海外の文明を吸收するに孜々として怠りなく、玆幾十年の久しきに及び、今や世界の舞臺に大飛躍を演ずるに至つた。一般文物の發達と共に我邦醫學も亦未曾有の進運を遂げ、正に歐米醫學を凌駕するとも劣らざるの域に達した。さり乍ら醫學の奥底は究めて悉し難きものがある。方今概ね歐米醫學に心醉せるが如きも、彼の東洋固有の醫學、即ち和漢醫學の眞髓は又靈妙であり、民間醫學と雖決して輕視すべきに非ず。宜しく比較的等閑視せられたる此方面を攻究して、更に歐米醫學とも對照し、長短相補ひ、有無相通じ、世界醫學の殿堂を築くべきだ。これ實に人類救濟の大使命を全ふする所以と思ふのである」云々。

△博士は三重縣名賀郡比奈知村大字瀧之原の人、吉原熊太郎の長男、明治二十五年生にして、當年不惑に入る四歳也學究的溫厚の紳士にして、勵精恪勤の士を以て稱せらる。その今日あるは既に氏の閲歴よく之れを語りて餘蘊なからしむ。性格より打診すれば、頭腦緻密にして何事にも用意周到、萬事に几帳面の方なり、人情味に富み、特別涙もろき方にて可愛想のものに對しては同情と愛とを以て接す、又人に對するに應答禮を厚うして時務を缺ぐことなし。以て其爲人を窺知すると共に、高邁なる人格を景仰す。研究以外の趣味としては圍碁（二、三級位）を愛し、其他景勝の地に旅行を好み、又芝居も好む。殊に特筆すべきは、氏は子供の時分より書に堪能にして、よく展覽會等に出品して愛賞せることありし點なり。有爲の臨床家として猶春秋に富む、折角の自重加餐を祈るや切也。佐賀市水ケ江町中橋小路一八一に住む。

◇

遠藤秀雄　△大阪市東區淡路町四ノ四六に新興せる遠藤耳鼻咽喉科院あり、遠藤秀雄博士の經營せる診療所にして、新裝せる內部の設備整ひ、博士自ら日々診療に勵しみ、誠意誠實を以てモットーとして醫は仁術也の本分を盡すべく努力精進しつゝあり。氏は愛知醫專出身の耳鼻咽喉科學者にして、大正十年卒業後、新潟赤十字社病院（元長岡市病院）耳鼻咽喉科醫長を勤め、その後大阪大同病院耳鼻咽喉科醫長を歷任して、昭和七年十二月辭職、現住所に於て耳鼻咽喉科院を獨立開業せり。斯間、昭和六年四月京都帝大にて學位受領、斯科界近來の名醫博として名聲を馳せ、今や多年蘊蓄せる學殖と相俟つて實地の經驗に富み、獨特の手術的技能を發揮するに獨自の立場に在り、開業拮据日尙淺きに拘はらず、卓越せる診療手術の好評は益々民衆の人氣を獲得して漸次地盤を開拓し、近來著るしく堅實なる發展振りを示しつゝある前途は大に囑目に値す。

△學位主論文は「第八對神經節細胞ノ病變ニ對スル網狀織內被細胞系統ノ態度ニツイテ」にして、他に論著夥多あり本論文に對する學問的價値に就ては旣に學界に定評あれば玆に贅せず。氏は大阪市の人遠藤三吉の嗣子にして、明治二十八年生る。嚴父三吉氏は辯護士にして、大阪成器商業學校々主兼校長として名聲を馳せ、德望家を以て知らる。博士や嚴父の衣鉢を承けて篤實溫厚、禮儀節文を重ずる人、平生時務を缺ぐことなく、患者に接し人に對するに誠實親切を以てす。稀に見る篤學者にして、學究的溫厚の紳士として高邁なる品格を備ふ。年齒漸く不惑に入る一歲、學識、手腕共に圓熟の域に入り、臨床家としては今が最も活躍の全盛時にて、一般社會より最も重望せらるゝ年輩に在り、博士の得意や想ふべき也。而かも春秋猶豐富にして、前途洋々たるの秋、折角の努力奮鬪を望むや切也。

◇

宮本種美　△岡山醫大派の名醫博として其の學識手腕を認められ、自己專門の耳鼻咽喉科を以て起ち、今や斯科新進の大家と仰がれつゝある、宮本種美博士の經營主宰する宮本耳鼻咽喉科醫院は、德島縣三好郡池田町本町に在りて其の地方を風靡するの盛況を呈す。氏は岡山醫大出身の耳鼻咽喉科醫として錚々たるものにして、多年の經驗に富み獨特の手腕識見を有す。大正十三年大學卒業後、直ちに母校の耳鼻咽喉科教室に入り、田中文男教授指導の下に實地研究に從事し、昭和六年七月岡山醫大にて學位を受領せり。

△學位主論文は「藥劑中毒ニ因ル聽器障碍ノ病理ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)迷路內淋巴腺ノ由來ニ就テ、(2)聽神經節細胞內ノ色素顆粒ニ就テ、(3)聽神經節細胞內ノ脂肪顆粒ニ就テ、(4)海猥聽器ニ見タル前庭副終末裝置ニ就テ、(5)耳下部ヨリ發生シテ頭蓋內竝ニ內耳ニ侵入セル癌腫ノ一症例等なり。

△氏は香川縣綾歌郡飯野村の人、明治三十四年生れにして、當年未だ三十有五歲也。多年恩師田中教授に師事して實地の研究に勉め、臨床的技能に長じて今は手腕漸く壯熟の域に入る、殊に氏は精力主義の人にして、日夜診療に努力勵精して倦むことを知らず、其の熱誠振りと、患者に對する態度の眞摯にして懇篤なるは極めて評判良く、篤き信望を博する所以と見るべき也。趣味としては醫療と研究との外何等の道樂なく、一意專心、唯だ誠意誠實を以て其の事に一路邁進し、以て自己の天職なるを樂しむの仁也。賦性溫厚篤實なる紳士としての氣品を備え、學究的有爲の臨床家として、其の高邁なる爲人を敬慕す。

◇

漆原滋雄　△日赤岐阜支部斐太病院に耳鼻咽喉科醫長として漆原滋雄博士あり。氏は金澤醫大（專門部卒業）系の耳鼻咽喉科臨床家として一家を成し、斯科界の泰斗京大教授星野貞次博士に就て研究の結果、京都帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博として其の學議、手腕を認められ、今や斯科新進の大家と仰がれ、當地方診療界に逸すべからざる一人物として囑望せらるゝ所あり。而かも年齒未だ少壯にして、潑剌たる前途は猶頗る春秋に富む、學

究的有爲の臨床家として博士の將來を語るに綽々たる餘裕を存す。

△博士は大正十四年金澤醫大醫學專門部卒業、直ちに同大學須藤教授指導の下にありて醫化學の研究をなす、昭和二年十一月京都帝大醫學部耳鼻咽喉科教室に入室、同三年九月同科研究室に入る、同六年四月日赤岐阜支部斐太病院耳鼻咽喉科醫長として赴任し現在に至る、斯間同七年七月學位を受領す。學位主論文は「迷路ト體溫」にして、參考論文は「溫熱中樞ト前庭迷路機能トノ交渉ニ就テノ實驗的研究」外九篇あり。

△博士は香川縣木田郡三谷村漆原文五郎の三男にして、明治三十三年生る。學究的溫厚の紳士にして、高邁なる品格を備え、當年未だ三十有六歳也。臨床家としての經驗に富み、蘊蓄せる學識と相俟つて手腕漸く壯熟し、少壯の意氣益壯にして、今は最も活躍奮鬪の全盛時代に在り。恪勤精力主義の人にして、一意專心、至誠以て公に奉ずる信念の下に、不斷の勵精努力を續け、民衆より多大の信望を博しつゝあり。性來謙遜家にして、偏に恩師先輩の助力を說き淡々として己を虛うして自己の識學を衒はず、人に對し患者に接するに誠意誠實を盡し、眞摯にして能く親切を以てす。趣味としては研究と醫療そのものに集中して他に何等の道樂を求めず、拮据黽勉、精研に餘念なきが如し。折角の努力奮鬪を望むや切也。岐阜縣大野郡大名田中花里に住む。

◇

松森明　△前の吳海軍共濟組合病院耳鼻咽喉科々長として、多年海軍診療界に活躍しつゝありし松森明博士は、曩年辭職後民間診療界に躍進して自己專門の耳鼻咽喉科を標榜して起てり。氏の獨力經營せる松森耳鼻咽喉科醫院は、吳市本町通七丁目に在りて內部の設備を新裝し、開業拮据未だ數年ならざるも、氏が熱誠なる活動振りと、博士獨特の手術的技能の好評とは、兩々相俟つて遠近の人氣を吸收し、門前常に賑ひ、近來著るしく盛況を極めつゝありとの評判也。

△博士は福井中學校、山形高等學校を經て、昭和三年岡山醫科大學を卒へ、同六年十二月同大學耳鼻咽喉科教室助手勤務、爾來吳海軍共濟組合病院耳鼻咽喉科々長として勤務、昭和七年十一月岡山醫大にて學位を受領し、其後職を辭し現住地にて開業せり。斯間母校の恩師田中文男教授の指導を受け專ら耳鼻咽喉科を研究せり。

△學位主論文は「內耳結核ニ就キテノ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)耳血腫ノ病理ニ關スル實驗的研究、(2)耳性化膿性軟腦膜炎患者ニ於ケル迷路病變ニ就テ、(3)耳性化膿性軟腦膜炎患者ニ於ケル迷路病變ニ就テ、(4)耳性頸顳葉膿瘍ノ二例、(5)鉛中毒ニ因ル聾兒ノ二例、等なり。論著中の「內耳結核ニ就テノ實驗的研究」は氏の會心の作にして、最も得意とせるもの也。

△氏は福井縣足羽郡酒生村梅野の人、松森佐一の三男にして、明治三十四年生る。學究的少壯の紳士にして、年齒未だ三十有五歳也。スポーツを趣味し、身體强健にして少壯の意氣に燃ゆ、樂天家にして厭味なく、天眞爛熳、恬澹として朗快なるところ人に好感を抱かしむ。技術方面にては多分の經驗を有し、手腕漸く壯熟して最も得意時代に入り、臨床家として相應しき性格と相俟つて多大の聲望を博し、前途益々向上發展の道程に在り。和歌山市開業（耳鼻科）御前慶造博士とは近親の間柄なり。

◇

坂元直夫　△金澤市西町三番丁八に坂元耳鼻咽喉科醫院あり、院長坂元直夫博士の經營せる斯科專門醫院にして、病室十、レントゲンの設備あり、其他內容充實す、博士自ら日々診療に從事し刀圭甚だ多忙を極む。博士は九大系の學流を汲み、耳鼻咽喉科界の權威現九大名譽教授久保猪之吉博士の愛弟子にして、學位は金澤醫大より獲得せる名醫博として其の學識手腕を認められ、今や金澤診療界に於ける斯科新進の大家と仰がれ、博士獨特の手腕と相俟つて多大の信望を博し、好評嘖々の裡に日增繁盛を續け、堅實なる地盤を有す。

△博士は七高を經て、昭和二年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同大學耳鼻咽喉科教室副手囑託、同年十月金澤醫大助手に任命、同四年四月講師に進み、同七年五月辭職、現住所に開業、同七年十一月學位受領、以て今日に至れり。斯間九大教授久保猪之吉博士、元金澤醫大教授久保護躬博士、同山川强四郎博士、金澤醫大病理學教授杉山繁輝博士等に就きて研究、耳鼻咽喉科學を專攻せり。

△學位主論文は「內耳生體染色ノ實驗的研究」にして、三篇より成る。參考論文は(1)耳性小腦膿瘍ニ就テ、(2)急性中耳炎ニ繼發セル誘導性漿液性內耳炎ニ就テ、(3)鼓膜裂傷ノ鑑定一例、(4)鼻中隔癌腫ノ治驗例等なり。

△宮崎縣都城市姫城町、坂元重俊の三男にして、明治三十四年生る。多年學究生活に沒頭し、一度びは講師として教壇に起ち、將來を囑望せられつゝありしが、象牙の塔を勇退し實地診療界に起ちて以來、日尙淺きも、醫は仁術也を以て任じ、一意專心、唯だ醫療に渾心の身力を盡し、孜々營々として奮鬪的活動を續け、一路邁進して亦他事を顧みざるの概あり。年齒三十有五歲にして、少壯の意氣と共に手腕漸く壯熟し、不斷の熱誠努力と相俟つて篤き聲望を博しつゝあり。而かも猶春秋頗る豐富なれば、潑剌たる前途の大成は更に大に期待すべきものあるべし。將來有爲の臨床家として玆に推奬し敬意を表す。

◇

原田雄吉

△縣立鹿兒島病院に耳鼻科部長として名聲を馳せ、縣下診療界の爲め努力奮勵しつゝあるは原田雄吉博士也。博士は京都府立醫專出身の耳鼻咽喉科學者にして、特に喉頭聲帶運動に關する疾患に關する領域に就て獨特の手腕を有し最も得意とす。學位は九大より獲得せる名醫博として其の學識手腕を認められ、今や九州診療界に最も囑目せらるゝ中堅人物と爲す。

△大正六年京都府立醫專卒業、同年十二月一年志願兵として步兵第十一聯隊入營、八年三月陸軍三等軍醫に任官、同時に正八位に叙せらる、同八年一月より九大小兒科醫員となり、同年十一月辭して鄕里にて小兒科開業、同十四年三月九大耳鼻科醫局に入り臨床研究、昭和二年七月函館室本病院耳鼻部長として赴任、同四年九月より九大專攻科に入學研究に從事し、同八年三月學位受領、昭和七年六月縣立鹿兒島病院耳鼻科部長として赴任今日に至る。

△學位主論文は「喉頭廻歸神經吻合ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)アイヌ人ニ於ケル耳鼻咽喉科領域ニ於ケル臨床的觀察、(2)アイヌ及函館學齡兒童ニ於ケル懸應垂披裂症ニ就キテノ統計的觀察、(3)四肢運動障害ヲ來セル稀有ナル鼻性反射神經症ノ一例、(4)再發性兩側扁桃腺周圍膿瘍ニ於テ兩側摘出後複雜ナル合併症ヲ伴ヒタル一治驗例、(5)アイヌ雜談、(6)届出「ヂフテリー」患者ト知ラズシテ診療セル時吾人臨床醫家ハ如何ナル處置ニ出ヅベキカ、(7)上顎竇內遊離骨片ニ就キテ、其他十一編あり。主論文中殊に迷走神經より回歸神經終末に至る迄の喉頭聲帶開大、閉鎖神經束の分離及諸實驗に成功せること、並に乳兒脚氣及其の類似症に於ける嗄聲成立機轉に關する立證は注目に値す。

△「現在醫業の進步發達は實際驚異に價して各方面への研究至れり盡せりの感ですが、只一つ實際醫學卽ち臨床上の治療方面に至りては簡單なもの程その治療難く眼科に於ける開眼術の如く、我が領域殊に聾又は難聽者に對しても、之に比敵する晴天霹靂の施術又は補聽器の發明なきかと嘆ぜらるゝもの多きを遺憾とす」云々とは、氏の感想の一片なり。

△山口縣吉敷郡秋穗村大字秋穗西本鄕の人、明治二十五年生る、年齒今や不惑に入る四歲也。讀書家にして精研修養克く讀む方なり、又旅行を好み暇を得れば之を樂しむ。何事にも熱中する代りに寢食時間をも忘るゝ事あり、診療に臨む態度の熱意あるほども亦窺はる。米子病院產婦人科醫長西島義一博士及び大阪築港病院相原義一博士とは兄弟にして、兄弟三博士としての美談も旣に世間に喧傳し、世人より羨望せらる。著者は更めて三兄弟の健康と成功とを祝

し敬意を表する者也。鹿兒島市清水町一〇に住む。

◇

山本哲

△開業二十周年新築落成記念を擧行せる鹿兒島縣薩摩郡川内町に在る耳鼻咽喉科山本病院は、院長山本哲博士の經營にして新裝成り、威風堂々たる現代式洋風の建物也。開業既に古く、多年聲望を其の地方に扶植して多大の好評を博し、今や名實相伴ふ名病院として拔くべからざる勢力を有す。博士の出身校は長崎醫專にて、現九大名譽教授久保猪之吉博士に就て耳鼻咽喉科學を專攻し、學位は九州帝大より獲得せる斯科界の大家として錚々たるもの也。

△博士は明治四十二年長崎醫專卒業、同年一年志願兵として久留米聯隊に入隊、兵役を終へて後、東京菊池耳鼻咽喉科病院に勤務、二ケ年の後同病院を辭し、現住地に於て專門開業今日に至る、其間昭和五年六月より同七年十月迄九州帝大醫學部耳鼻咽喉科教室に於て臨床の外、別項問題に就て研鑽し昭和八年三月學位を得。

△學位主論文は「前額竇性腦膜炎ノ實驗的研究」にして、論文中主要の點は鼻性頭蓋内感染特に前額竇よりの感染經路並に感染機轉を闡明した點にあり。參考論文は、(1)軟口蓋麻痺ノ療法ニ就テ、(2)腫脹性鼻炎ノ療法特ニ「マグネシン」ノ効果ニ就テ、(3)上顎竇ヨリ下眼瞼結膜ニ現ハレタル異物竹片摘出例ニ就テ、(4)氣管及氣管枝異物（杉葉、川ゑび）二例、(5)約十年間鼻腔ニ介在セル異物（キルク）及ビ之ニ由テ來レル後鼻孔閉鎖ノ手術式ニ就テ、(6)歐氏管逆通氣療法ニ就テ等なり。

△感想に曰く「今や世を擧げて非常時／＼の聲を聞くが之はたゞに國際關係、經濟狀態のみの言葉ではない、文明逆轉の兆あることを云つておるのである、我が醫學界に於ても確かに其兆が濃厚であると云へる。一例を擧げて云へば保健、簡保から進んで國民保險も布かれようとしておるのも、其一つで之は醫療普及の上から云へば誠に結構なことではあるが一面確かに醫學の進歩を阻害する方法であると觀るべきである、何となれば現に保健に於て感ぜらるゝ如く治療が面倒で意の如くやれぬと云ふことは、此の種の治療に嫌氣がさし易く勢ひ研究的治療法を避けて無難な平凡療法となつてしもうので治療學上進歩と云ふことがなくなつてしもう恐れがあることである。之は保險加入者の治療のみではなく、之が習性となつて一般患者の治療も自然斯かる狀態になつて來るのは明らかなことで醫學進歩の上から觀て識者の大に考ふべき點ではあるまいか。次に又博士濫造と云ふ言葉は終には博士制限、廢止、或は其他の方法で博士の價値を低下する方法となつて來るかも知れぬが、之は青年學徒好學の目標を取り去るようなもので之も大に考へておかねばならぬことゝ思ふ」云々。

△鹿兒島縣薩摩郡高城村の人、山本家治の長男にして、明治十八年生る、學究的溫厚の紳士也。臨床家として多年奮鬪せる跡を追想せば、其の今日ある學識、手腕の練達玉成せるもの當然と云ふべく、今や壯齡漸く熟して一段の貫祿を備へ、最も重望せらるゝ全盛時と見るべし。讀書家にして書見を唯一の趣味とし、今猶研究に對するに甚だ熱心にして、精研修養相俟つて克く勉む。又弓道の達人だけに身體强健にして元氣益々旺盛也。人と爲り穩健篤實にして、誰彼を問はず親切なるは、其の德望の歸因する所以たるを見逃すべからず。東京西巢鴨に開業の鵜木秀二博士は從弟に當る。

◇

岩田龍生

△長崎醫大派の一新勢力と見るべき新人岩田龍生博士は、近代耳鼻咽喉科界の臨床家として錚々たるもの也。博士の獨力經營する岩田耳鼻咽喉科醫院は現に延岡市北小路に在り、新裝せる結構と相俟つて内容充實し、開業早々躍進せる奮鬪振りと、經營のモットーとする誠意誠實と、博士獨特の新手腕とは、兩々相俟つて遠近の人望を吸收し、漸次隆興の氣勢を示しつゝある前途の發展は頗る矚目せらる。

△博士は大正十四年長崎醫科大學專門部卒業、昭和四年長崎醫科大學解剖學教室助手、同八年同大學耳鼻咽喉科教室勤務副手、同年九月長崎醫大にて學位授與、同九年九州帝大醫學部耳鼻咽喉科教室勤務、同十年延岡市北新小路にて開業今日に至る、斯間長崎醫大解剖學教授國友鼎博士、及び現九州帝大名譽教授久保猪之吉博士に就きて、耳鼻咽喉科を專攻せり。

△學位主論文は「聽聹腺ノ發生學的研究」にして、參考論文は、(1)彈力纖維ノ發生學的研究、(2) Zur Frage der trophischen Zentren der Radialisfusern in den Spinalganglien mit Rücksicht auf die Art des innervierten Organ 外三篇あり。

△大分縣大野郡川登村大字清水原の人、岩田直記の二男にして、明治三十五年生る、學究的少壯の紳士にして、年齒未だ三十有四歳也。學究生活を脱して診療界に奮起するや、努力勵精日も猶足らざるの概あり、而かも當年の意氣を以て起ち刀圭甚だ多忙なるに拘はらず、日進醫學の研究を怠らず、精研修養相俟つて克く勉む。流星は其の號にして、スポーツに趣味を有し、又圍碁に親しむ。將來有爲の資に富む好箇の臨床家としての前途の大成を期待す、折角の發奮活躍を望む。

◇

須小明　△臺北醫專系の一異才にして、九州帝大派の名醫博として四國診療界に躍進せる須小明博士は、曩に高知市町田病院に迎へられて耳鼻咽喉科長の椅子に着き、拮据勵精、孜々として其の職務に忠實を盡し、誠意親切を以て仁術の本分を盡すに餘念なく、明快にして犀利なるメスの好評と相俟つて内外の信望を博し、今や同地診療界に最も囑望せらるゝ一人物と爲す。

△博士は大正十五年四月臺北醫專卒業後、一年志願兵として兵役に服務除隊後、母校研究科に入り耳鼻咽喉科專攻、昭和八年十一月九州帝國大學醫學部教授會にて學位論文通過、同九年一月學位受領、同年二月町田病院耳鼻咽喉科長として赴任今日に至る。斯間、上村新一郎教授及び久保猪之吉教授に就て耳鼻咽喉科學を專攻せり。

△學位主論文は「急性鼻副鼻腔炎ノ腦脊髓液ニ及ボス影響ニ關スル研究、附、鼻性腦膜炎ノ感染經路ニ關スル知見補遺」にして、參考論文は、(1)呼吸困難ト血液ノ變移、(2)舌軟性下痢症例追加、(3)稀有ナル鼻腫ノ一例、(4)人肥大扁桃腺「エキス」ニ關スル實驗的研究、等なり。

△感想に曰く「醫師會員は結束して宜敷僞醫政者を排すべきを痛感す、現醫師會は僞醫政者の爲め壓迫を受けつゝあり」云々。山口縣厚狹郡吉野村の人、須小俊藏の長男にして、明治三十五年生る。學究的少壯の紳士にして、其の今日ある篤學は氏の閲歴に一段の異彩を放ち光彩陸離たらしめたり。而かも年齒未だ三十有四歳にして、光る前途は猶洋々たり。物事に熱中する人にして、意志强固、忍耐力强く、何事によらず貫徹的に成遂ぐる長所を有す。一面又同情心に富み餘り人を信じ過ぎる方なり、强ひて言へば或はそれが短所とも見られる、研究以外には自然を樂しむ風あり。前途有爲の資に富む少壯醫博、切に自重加餐を祈る。高知市帶屋町二丁目に住む。

◇

田中一弘　△大分縣立病院耳鼻咽喉科部長田中一弘博士の盛名は、當地診療界に於ける大なる存在として嘖々たり。博士は九大系、耳鼻咽喉科界の權威たる現九大名譽教授久保猪之吉博士の門弟中の新人にして、多年恩師の膝下に親しき指導と薫陶とを受け、學究生活を巢立ちて現職に赴任するや、至誠以て公に奉ずるの信念の下に努力奮勉日も猶足らず、好評の裡に博士獨特の手腕は愈々展び、今は奮闘活躍の全盛時にて、氏の得意や想ふべき也。

△博士は中學修猷館、五高を經て、九州帝大醫學部に入學、昭和二年同學卒業、直ちに耳鼻科教室に勤務、副手助手を經て、同六年三月講師を囑託せらる、此の間九州齒科醫學專門學校講師を兼ね耳鼻咽喉科學を講義し、又福岡縣立

聾學校校醫を兼ぬ、同八年十二月現職に轉じ今日に至る、同九年一月學位を授與せらる。

△學位主論文は「日本人聾啞ニ關スル遺傳生物學的研究」にして、參考論文は十一篇あり、聲音言語障害方面や遺傳に關する論文多し。目下久保猪之吉博士監輯「日本耳鼻咽喉科學全書」に「耳鼻咽喉科ト遺傳及體質」執筆中なり。

△福岡市の人、明治三十七年生にして、年齒未だ三十有二歳の年少也。少壯の意氣に燃え、研究心潑剌として今猶精研に餘念なし。一光は號にして、俳句を能くす。他に道樂を求めず、研究と醫療に趣味を集中して一路邁進する學究的臨床家たる熱誠の士也。賦性溫厚の紳士にして、學生氣分未だ去らず、居常甚だ快活にして人に厚く、功名榮達には恬澹なり、又能く應答禮を重ずる人也。大分市中島浦四條通に住む。

◇

曾木時夫　△當世醫博界中の最年少にして、熊本醫大派の學風に薫陶されたる曾木時夫博士は、現に熊本遞信診療所醫員として活躍し、民衆治療界の爲め努力貢獻する所あり。研究室を勇退後診療界に躍進して以來、日尚淺く、素より未だ特筆すべき功績の著るしきものなしと雖も、勵精恪勤の人として其の職務に忠實を盡し、診療に對する熱心振りと、臨床的手術の好評とは內外の信望を博し、將來有爲の臨床家として最も囑望せらる。

△博士は鹿兒島縣立川內中學校を經て、大正十一年熊本醫科大學豫科入學、昭和四年熊本醫科大學々士試驗合格、直に同大學耳鼻咽喉科教室に入り、副手、助手を經て、同八年七月同大學を辭し、現職に轉ず、其間昭和五年二月より十一月に至る幹部候補生として步兵第十三聯隊入營、後に陸軍三等軍醫に任ぜらる、同九年七月母校より學位を受領す。斯間熊本醫大教授鰐淵源博士に就て耳鼻咽喉科を專攻せり。

△學位主論文は「口蓋扁桃腺剔出ノ家兎骨發育並ニ之ガ內分泌臟器ニ及ボス影響ニ就テノ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)「カルミン」ノ咽頭粘膜下注射或ハ一二操作ニ依ル咽頭潰瘍形成ノ「モノチトーゼ」ニ及ボス影響、(2)熊本縣立盲啞學校聾啞部生徒ニ就テノ聾啞ノ統計的並ニ臨床的觀察其一統計的觀察、(3)同右其二臨床的觀察、(4)小腦腫瘍患者ニ見タル側方凝視性特發性頭震盪ニ就テ、(5)鼻前頭管ノ形態學的研究、(6)先天性側頸囊腫、之ニ續發セル胸瘻、喉頭狹窄症並ニ喉頭軟骨軟化ノ一症例、(7)「キニーネ」ニ因ル聽器障碍ニ就テ、(8) Pfaiffer 氏腺熱ニ就テ。

△鹿兒島縣薩摩郡川內町西手の人、曾木吉之進の三男、明治三十七年生にして、年齒未だ三十有二歳の年少也。學生氣分未だ去らず、恬澹として自己の識學を衒はず、舉措甚だ快活にして天眞爛熳たる所、人に親しまるゝ德を有す。研究以外には圍碁を好み、撞球を趣味す。洋々たる前途は猶頗る春秋に富み、益々努力を要するの切なるを思ふの秋希くば小事に拘泥せず、折角の發奮活躍あらん事を、著者は更めて望む者也。熊本市手取本町三九に住む。

◇

一丸輝宏　△大阪市西區靱南通四ノ二五に耳鼻咽喉科を以て開業し、久しく診療に從事しつゝありし一丸輝宏博士は、昭和十年一月都合に依り醫業は令弟加藤哲宏氏に繼承せしめ、故山に歸鄉して悠々たる環境に在り。

△博士は現住地たる大分縣東國東郡國東町の人、明治十七年を以て同地に生る、同四十三年大阪高醫の出身にして、耳鼻咽喉科を以て立ち、爾來大阪市にて開業一般の診療に從事しつゝありしが、斯間大阪帝大醫學部にて研究の結果學位論文「硅酸曹達溶液注射ガ血清沃度酸値ニ及ボス影響ニツイテノ研究」を完成して、昭和九年十二月大阪帝大より學位を受領せり。

△耳鼻咽喉科臨床家として一家を成し、既にして成功の裡に幾星霜かの間、開業の傍ら春風秋雨の努力研鑽を續け、獨力貫行して終に克く學位を獲得せる厚志篤學は特筆に値し、立志傳的醫博人物として頂門の一針たる範を示すに足る。博士の年齒今や知命に入る二歳、健康にして元氣旺盛、今は故鄉に錦を飾りて樂天地に在り、氏の得意や想ふべき也。篤實溫厚の紳士にして、謙抑克く自ら持し、學者として衒はず、寬厚能く人を愛し後進を親しむ。大分縣東國

東郡國東町に住む。

◇

池田初一　△九大派の少壯醫博として新進の氣勢を揚げ、今や臺灣診療界に於ける耳鼻咽喉科の新手腕家として重きを爲し、最も囑目せられつゝあるは池田初一博士也。現に博士は臺灣總督府醫院醫長にして、嘉義醫院に勤務、耳鼻咽喉科を擔任して內外の信望を博す。

△博士は三重縣宇治山田中學校、第八高等學校を經て、昭和五年九州帝國大學醫學部卒業、直ちに同學部耳鼻咽喉科教室に入り、昭和十年迄勤務す、斯間同七年より九年迄大學院學生として研學、同十年一月九州帝大にて學位を授與せられ、臺灣總督府醫院醫長に任ぜられ嘉義醫院勤務を命ぜらる。斯間現九大名譽教授久保猪之吉博士に就て耳鼻咽喉科學を專攻せり。

△學位主論文は「神經吻合ニ因ル廻歸神經麻痺療法ノ實驗的研究」にして、參考論文四篇あり、其他の論著夥多。

△博士は三重縣志摩郡畔名村の人、池田傳藏長男、明治三十五年生にして、年齒未だ三十有四歲の少壯也。學究生活より實際診療界に奮起して以來、日尙淺きも、拮据奮勵日も猶足らず、一意專心、其の職務に忠實を盡し、至誠以て仁術の爲め努力貢獻する處あり。研究に對する態度は今も猶變らず、精研に餘念なく切磋卓勵甚だ勉むる所あり。賦性溫厚篤實なる學究的紳士にして高邁なる品格を備え、臨床家として相應しき性格の持主也。研究以外には魚釣と園藝とを趣味す。臺灣嘉義市南町に住む。

◇

三宅等　△濟々多士たる朝鮮治療界に躍進して、現在平安北道立新義州醫院に耳鼻科部長とし活動し、民衆より多大の信望を以て、斯科の新進大家として名聲を博しつゝあるは三宅等博士也。博士は長崎醫大派の一勢力と見るべき新智識にして、今や新手腕を發揮して獨特の領域に一路邁進しつゝあり、而かも年齒未だ少壯にして溌剌たる前途は猶洋々たり。

△博士は松江高等學校を經て、昭和四年長崎醫大卒業、直ちに同醫大耳鼻咽喉科教室に入り、副手より助手、講師となり、同九年十二月依願免官、同十年一月平安北道立新義州醫院耳鼻咽喉科部長として赴任、同年二月母校より學位を受領し今日に至る。斯間故長崎醫大教授小室要博士に就て耳鼻咽喉科學を專攻せり。

△學位主論文は「鼻疾患臓器ノ化學的研究」にして、(1)下甲介及ビ鼻茸ノ化學的研究、(2)上顎竇粘膜ノ化學的研究の二篇より成る。參考論文は、(1)口蓋扁桃腺及咽頭扁桃腺ノ化學的研究、(2)耳鼻咽喉科領域ノ疾患ニ於ケル血中「ヒョレステリン」ノ消長、(3)黃疸ヲ誘發セル眞珠腫性中耳炎ノ一剖檢例、(4)慢性上顎竇炎ニ於ケル分泌膿汁ノ硫黃ノ消長(5)聽器結核知見補遺等なり。

△博士は德島縣の人、三宅彌之次郎二男、明治三十四年生にして、學究的少壯の紳士也。研究室を離れて實地臨床家として起ちて以來、日尙淺きも、拮据黽勉、一意專心、至誠公に奉ずるの信念を以て天職と爲し、民衆治療界の爲に不斷の勵精努力を續けつゝあり、恪勤の人と云ふべき也。性來謙遜家にして自己の識學を衒はず、偏に恩師先輩の助力を說き報恩の念に燃ゆ、又人に對しては溫情に富み、己を虛うして淡々たる態度を持す。趣味としては研究と醫療とに集中して他に何等の道樂を求めず、精研に餘念なき前途は大に囑望せらる。朝鮮新義州府常盤町五丁目五ノ一に住む。

◇

佐藤イクヨ　△十五番目の女醫學博士として內外學界に氣勢を揚げ、現代醫博人物界に異彩を放ちたるは佐藤イクヨ博士也。現在東京女子醫專助教授として母校の教壇に起ち、得意の耳鼻咽喉科學を講じ、女子醫育界の爲め多

年の蘊蓄と不斷の努力精進を續け、專心學生指導の任に當り、至誠以て大に將來に期するところあらんとする熱誠振りは敬服すべき也。而かも晩學にして學位を獲得せる女史の厚志篤學は、近來醫博界の美談として推奬に値し、女醫界の爲め頂門の一針として後學の範とすべき也。

△女史は大分縣西國東郡中眞玉村の人にして、十人兄弟の一番末ツ子に生れ、十八歳にて鄕里の大分高等女學校を卒業するや、爾來滿九年間慈母の許にて家事を手傳ながら女子大學の講義錄に依りて獨學自修し、たま〳〵慈惠醫大を卒業して歸鄕せる長兄が鄕里にて醫術開業するに際して以來、長兄の仕事をも手傳ながら臨床の事をも傍より念入りに看取れて居る內に、醫學に對する向學心興り東上遊學の意を決し、長兄の贊助を得、次で母堂の許しをも得て、二十七歳の時雀躍として笈を負ひて東上し、東京女子醫專に入學して一生懸命に勉强の結果、三十二歳を以て同校を卒業するや、學校附屬病院の耳鼻科助手を振出しに、講師に進み、更に助教授となり、五年後には內地留學生として九州帝大醫學部の專攻科に研究生として入學し、耳鼻咽喉科教室にて努力研鑽の結果、學位論文『「ムタチン」（聲破又ハ聲變リ）ニ就テノ醫學的考察』を完成、同學部に提出して、昭和十年六月學位を受領せり。

◇

今道　四方爾　△大阪市旭區今市町千四番地に於て、昭和十年以來耳鼻咽喉科專門を以て開業せる今道四方爾博士は、大正十四年東京醫專の出身にして、大正十四年四月より昭和三年三月末日まで東京市四谷區武藏野病院耳鼻咽喉科勤務、昭和三年四月より同五年十二月末まで大阪市北區大阪回生病院耳鼻咽喉科勤務、昭和六年一月京都帝大醫學部專修科入學、病理學教室にて淸野謙次教授指導の下に病理學研究、昭和七年二月副手囑託さる、同十年二月大阪帝大にて學位を授與せられ、同年九月同學部を辭し開業す。斯間大阪帝大教授富田朋介博士に就て、解剖學を研究せり。專門は耳鼻咽喉科とす。開業日尙淺きも、多年理想とせる「醫は仁也、仁は智德勇也」との主義を實行して、大衆より多大の信賴と尊敬とを享け、打診手術の好評と相俟つて近來著しく向上發展の順境に在り。

△學位主論文は「太田貝塚人々骨ノ人類學的研究、第一部頭蓋骨ノ研究」にして、外に參考論文として、(1)十四ケ年間挿入シ居タル氣管套管拔去困難症ノ一例ニ就テ、(2)急性蟲樣突起炎ニ併發セル急性化膿性耳下腺炎ノ一例ニ就テ、(3)太田貝塚人々骨ノ外聽道骨腫ニ就テ、(4)日本石器時代人々骨ニ於ケル畸形性關節炎ニ就テ、(5)太田貝塚人々骨ノ人類學的研究、第二部下肢骨ノ研究(其一、其二)、(6)同、第三部上肢骨ノ研究、(7)「オロツコ」人女性ノ一全身骨骼ニ就テ等あり。

△感想の一片を吐露して曰く『「醫は仁術なり、仁は智德勇なり、この三者兼備へて始めて醫者仁者たり」を座右の銘とし常に修養せんことに努むる外他を顧みて云ふ遑なし』云々、三思傾聽すべきに値す。氏は長崎縣西彼杵郡面高村本鄕千七百十二番地士族戶主今道徹哉の弟（父幹吉の五男）にして、明治三十三年生る。學究的溫厚の紳士にして、眞面目なる臨床家としての人格者たるに敬意を表す。研究と醫療そのものに熱中して最善を盡し、又克く自ら品性の陶冶に努むるの餘暇、俳句、登山等の趣味を養ふ。親戚關係には從兄に二名の醫博あり、家庭には一男一女あり。

◇

藤田辰男　△天津日本租界春日街天津醫院に新進の藤田辰男博士あり、耳鼻咽喉科醫長として重きを爲し、特に氏が最も得意とする聲音言語治療方面に關する氏獨特の手腕に至りては、他人の追隨を許さずとの評あり。氏が學歷及び閱歷より言へば、大正十五年九州帝國大學醫學部入學、昭和五年卒業後直ちに同學部耳鼻咽喉科學教室へ入局、同六年十二月助手となり、同八年五月講師拜命、同十年六月學位受領、同年七月九州醫學專門學校耳鼻咽喉科教授に就任、次で現職に轉じ今日に至る。斯間の指導教授は現九州帝大名譽教授久保猪之吉博士にして、恩師の親しき指導と薰陶とを受け、久保教授直門の愛弟子として知られ、今や耳鼻咽喉科界に於ける九大派の少壯醫博として其

の學識、手腕を認められ、猶洋々たる前途の飛躍と相俟つて將來の大成を囑望せらる。

△學位主論文は『「ムタチオン」ニ就テ醫學的考察』にして、外に參考論文七篇あり。

△氏は兵庫縣加西郡九會村の出身にして明治三十七年生る、三宅慶次の次男にして九大卒業と同時に大分縣速見郡川崎村藤田語郎の養子となる。年齒未だ三十有四、少壯の意氣に燃え、熱心なる研究家として知られ、學究生活を勇退して診療界へ進出以來、日尙淺少なれども忠實なる醫師としての態度の眞摯にして熱心なるは、氏の性格の表徵にして一般民衆より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあり、亦以て其の人格を窺はる。生來純情にして熱意あり誠實也、謙讓にして誇らず、人に對するに自抑淡々として愛情を以てす。趣味としては診療と學究以外何等の道樂を求めず、常に精研修養相俟つて自ら品性の陶冶に力む。前途一層の奮勵努力を要するの秋、幸に健康と共に折角の自重加餐を祈るや切也。

◇

園田四郎　△群雄割據の地たる浪速診療界の中樞、大阪市西區京町堀通三丁目一三番地に新興せる園田耳鼻咽喉科あり、斯科の新進園田四郎博士の診療所にして、建坪三十坪、鐵筋洋風三階建、地階に診療用諸施設を有し、二階三階に病室を有し、入院手術に應ずるの設備整ふ。博士は京都府立醫大派の耳鼻咽喉科學者にして、研鑽多年、母校の恩師中村登教授に就きて斯學の蘊奥を究め、學位受領後、學究生活を勇退して診療界に躍進し、開業拮据日尙淺きも、獨立舞臺に起ちて自ら日々診療に勵しみ、其の堅實にして熱心なる經營振りと、親切にして的確なる手術の好評とは、近時著しく發展振りを示し大に前途を囑目せらる。

△更に氏の學歴及び閲歴を略述すれば、大正十一年三月兵庫縣立第二神戸中學校卒業後、直ちに京都府立醫科大學豫科に入學、昭和四年三月同大學卒業後、母校耳鼻咽喉科教室に在勤、副手及び助手を經て、昭和六年十二月同教室研究科生に轉ず、同十年六月同大學教授會に於て論文通過、同年八月學位受領、同年九月同教室を辭し現住所に移轉開院現在に至る。

△學位主論文は"Experimentelle Studien über die Pathologie der chronischen Labyrinthanämie"にして、原著は獨逸文より成る。外に參考論文七篇あり、(1)老人性難聽ニ關スル實驗的研究、特ニ實驗的動脈硬化症ニ於ケル聽器病理、(2)鼻組織ノ貧血ニ關スル實驗病理學的研究、(3)回歸神經痲痺ノ療法、特ニ聲帶內ぱらふいん注射ノ實驗的研究、(4)囁語聽能ノ檢査用語ニ關スル知見、(5)咽頭淋巴輪トLymphocytom、(6)氣胸ヲ續發セル食道異物症例、(7)耳鼻咽喉科領域ニ於ケル黴毒性初期硬結ニ就テ、附舌ニ發生セル硬性下疳症例　等なり。就中主論文たる「慢性迷路貧血ノ病理ニ關スル實驗的研究」は博士會心の作にして、老人性難聽の研究を以て論著の主要なるものとす。

△出身地は滋賀縣野洲郡北里村大字野にして、明治三十六年生る、園田仁左衞門の長男也。年齒未だ三十有五、學究的少壯の紳士にして、潑剌たる意氣と共に研究心に富み、學識、經驗相俟つて漸く壯熟し獨特の手腕を有す。賦性篤實溫厚、眞面目にして阿諛迎合を好まず、誠意誠實を以て「醫は仁術也」の本分を盡さんとするところに氏の人格を窺はる。趣味としては學術の研究と醫療そのものの外何等の道樂なく、家庭に在りては七人家族の善きパパとして朗らかなり。

◇

河田政一　△九州帝大派の新人にして、耳鼻咽喉科を專門とし、特に耳科學就中聽覺生理を最も得意とする河田政一博士は、現九州帝大名譽教授久保猪之吉博士の愛弟子として知られ、久保教授停年退職後も引續き副手として教室に殘留し、現に九州帝國大學醫學部講師として專ら學生指導の任に當り、耳鼻咽喉科臨床に於て勤務の傍ら、市立某病院に於ける診療をも囑託せられ勤務中なり。年華未だ少壯なる學究にして、潑剌たる研究心に燃ゆる氏が熱

心と不撓の努力とは、軈て躍進せんとする診療界に期待せられ、洋々たる前途の展開を嘱望せらる。

△氏の學歴及び閲歴より言へば、昭和二年三月第八高等學校理科を卒へ、同年四月九州帝國大學醫學部に入學、同六年三月同學部の學士試驗に合格し、直ちに同學部耳鼻咽喉科學教室に入局し、久保猪之吉教授の門下に加はり、同八年春迄は專ら臨床醫學の指導を受け、其後は大學院學生として恩師指導の下に騒音問題につき研究する所あり、同十年春該問題に關する業績を完了して學位請求論文を提出し、教授會審査の結果、同十年十一月學位を授與せらる、久保教授停年退職後も副手として教室に居殘り、主として臨床方面に研學中なりしが、同十二年一月九州帝大醫學部講師を囑託せられ現在に及ぶ。

△學位主論文は「騒音ニヨル聽器障礙ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は「螺旋神經節細胞ノ檢索ニ就テ」外二篇あり。要するに氏の論文は、職業性難聽問題を音響學的研究を基礎として、聽覺生理的並に病理學的二方面より探求せるものにして、騒音問題に寄與するところ大なるものあり。

△感想に曰く「醫學は確かに躍進日本の代表的科學として目覺しき興隆を遂げたれども、醫育機關の不自然なる擴張により、醫業に於ては改善自戒の餘地尚多々あるを憂ふ。醫師たる者は須く質的に充分なる向上を計り、社會的優位を失はざる樣努力し、他の例へば大學に於ても法、文、理、工、農に比し修學に多大の時間的經濟的のハンデイキヤツプを負ひたる償ひとすべきなりと思惟す」云々。

△氏は東京市世田谷區代田二丁目八五三に本籍を有す。河田市也の長男にして明治三十九年生る。父は遞信方面の技術官たる人なりしが、氏は醫學を志してその今日あるは、既に博士の前半生史よくこれを語りて餘蘊なからしむ。生來潔癖家にして正義を重んじ、廉恥を尊びて自ら品性の陶冶に力め、學究的少壯紳士としての品格を備ふ。但だ氏の性格より觀て、强ひて其の缺點とも言はゞ、或は押しの弱きと、粘り强さに乏しき點にあらざるか。趣味としては模型船を好み、短歌を能くす、短歌は中學時代より八高、九大を通じて愛好し、卒業後もこの道にいそしみ、現在對馬完治の門下にして「地上」同人たり、窪田空穗系統たり。家庭には妻みやよとの間に一男一女あり。福岡市藥院露切町二二に住む。

○

相澤義雄　△耳鼻咽喉科界に於ける慈大派の一勢力たる相澤義雄博士は、師範出身の小學校訓導より蹶起して克己奮鬪、克く今日の位地と聲望とを贏得たる立志傳的篤學者なるが、「醫は病める人を救ひ、教育は心の病みを救ふ、政治の要諦は人類福祉の招來にある、人生の價値の最大發揮の爲めにも青年醫家は發奮せねばならぬ」との一大抱負を堅持して、躍進治療界の爲め不斷の活動を續けつゝあり。氏の經營する相澤耳鼻咽喉科醫院は、本院を東京市本郷區駒込坂下町二四一(道灌山下)に、分院を荒川區三河町四ノ三に置き、なほ舊荒川區役所を買收して近く一大綜合病院を建設すべく準備を進めつゝあり。軈て實現せんとする此の一大計畫は、多大の期待を以て注目せられつゝあるは言ふまでもなく、氏が獨特のメスの評判は、氏が性格と相俟つて益々人氣を煽り、今や牢乎たる地盤と共に日々盛況を呈しつゝあり。

△學歴及び閲歴を概括すれば、大正十三年三月神奈川縣師範學校卒業、直ちに横濱市青木小學校訓導拜命、同十四年三月休職となり、東京慈惠會醫科大學豫科に入學、昭和六年三月同大學學部卒業、引續き同大學研究科に入學、永山武美教授指導の下に醫化學專攻、同年四月聖路加國際病院小兒科勤務、同年同月醫師登錄、同七年十月聖路加國際病院小兒科退職、同九年十一月東京慈惠會醫科大學助手拜命、東京慈惠會醫院耳鼻咽喉科勤務、同年同月慈惠醫大研究科修了、同十年九月學位を授與せらる、爾來現住地にて醫院開業今日に至る。

△學位主論文は原著英文にして 1) On the Content of Fatty Acid, Cholesterol, Unknown Unsaponifiable Substance

and Nitrogen in the Faeces of Guinea Pigs Fed on a Vitamin C Free Diet. 2) On the Acid Number of Petroleum Ether Extract of the Faeces of Guinea Pigs Fed on a Vitamin C Free Diet. 3) On the Content of lipase in the Serum of Guinea Pigs Fed on a Vitamin C Free Diet. 4) On the Amount of Bile Secreted, and its Bile Salts and Cholestorol Contents in Guinea Pigs Fed on a Vitamin C Free Diet の四篇より成る。參考論文は(1)實驗的壞血症ニ關スル研究(第二十九回報告)「ヴイタミン」C缺乏食飼養もるもつとノ血清 Antitrypsin ニ就テ、(2)同(第三十回報告)「ヴイタミン」C缺乏食飼養もるもつとノ血液及ビ尿ノ Amylase 量ノ消長ニ就テ、(3)扁桃腺ニ關スル研究(第一回報告)口蓋扁桃腺ノ還元 Glutathione 量ノ分布ニ就テ 等なり。

△感想に曰く「慈惠醫大の研究室生活と耳鼻科醫局生活を續けてゐると案外專門以外の學問に目を通す事が出來ない今回鎌倉師範學校の講師に任命せられ、一ケ月一回二時間の學生講義を受持つと醫學全般の知識が必要となり、大學時代のノートが戀しくなつて來た、社會は總ての角度に於て非常時を叫ばれてゐる、醫界に於ても將來の開業醫制度に根本的な修正を餘儀なくされて居る、此の時に當つて國民保健の立場より醫學出身代議士が一人でも增加する事を痛感してゐる、學生時代學生會議長を勤め、慈大の代議士で通つた筆者は、社會人となつた以上政治界に一大飛躍致し度い希望であるが目下自重基礎確立時代の苦惱と闘つてゐる、醫は病める人を救ひ、教育は心の病みを救ふ、政治の要諦は人類福祉の招來にある、人生價値の最大發揮の爲めにも青年醫家は發奮せねばならぬ」云々。

△氏は神奈川縣の出身にして、明治三十七年生る。年齒未だ三十有四歳なる少壯紳士にして、學究的臨床家として獨特の新手腕を有し、潑剌たる意氣と共に診療界に躍進して奮闘を續け最も得意時代に入る。生來着實にして熱心克く診療に勵しみ、誠心誠實をモットーとして患者に親切丁寧を盡す點に、氏の特徴を見出され多大の信望を博す。研究と醫療とは氏の最も趣味とする所にして、寧日なき勵精努力と、精研に餘念なき前途は、綽々たる氏が將來を語るに足る。春秋猶頗る豐富なるの秋、幸に自重加餐を祈るや切也。

◇

天野景康　△東京市麻布區新龍土町一一に於て開業せる天野景康博士は、耳鼻咽喉科を專門とし、特に咽喉科殊に小兒扁桃腺、無痛全摘出手術を最も得意とする錚々たる臨床家也。開業拮据日尙淺少なれども、博士の經營せる診療所は、純米國式の設備を施し理學療法科を置き、多年研磨錬熟せる博士獨特の手腕は、適確にして鋭利なるメスの好評と相俟つて益々人氣を煽り、いや增す繁榮と共に日々堅實なる地盤を獲得擴大しつゝあり。學系より見たる氏は、愛知醫專の出身にして、夙に米國に留學し、切磋研學十年餘、ペンシルヴニア大學よりドクトル・オブ・メヂカル・サイエンスの學位を授與せられ、歸朝後我が醫學博士の學位は名古屋醫大より受領し、多年蘊蓄せる學識手腕と相俟つて、今や名實相伴ふ名醫院長たるの名に恥ぢず、群雄割據の間を横行して大に氣勢を昂げつゝあり。

△學歴及び閲歴を總括して見れば、大正十年五月愛知縣立醫學專門學校卒業、引續き愛知醫科大學耳鼻科及び解剖學教室にて同十三年迄研究、同十三年六月渡米、同十四年一月米國華州醫師檢定試驗合格、シアトル市にて開業、昭和二年六月米國耳鼻咽喉科學審査院檢定試驗合格、同四年二月ペンシルヴニア大學醫科大學院附屬病院耳鼻咽喉科醫局長任命、同四年十月米國眼科及び耳鼻咽喉科學士會々員推薦、同四年十月より三ケ年間ペンシルヴニア大學より耳鼻咽喉科研究員任命、同七年二月ペンシルヴニア大學りドクトルの學位を得、同七年九月第二回國際耳鼻咽喉科學會議(アドリツド)出演、同七年十一月より同九年十月迄米國加州ロスアンゼルス市にて開業、同八年一月エヴンゼリス醫科大學耳鼻咽喉科講師任命、同九年十一月歸朝、同十一年六月より九月迄信州輕井澤に夏季診療所經營、同十一年五月名古屋醫科大學にて學位授與、同十一年十月東京市麻布區新龍土町にて開業今日に至る。斯間名古屋醫大教授淺井猛郎及び日戸苅近太郎博士に解剖學、同八木澤文吾博士に耳鼻咽喉科學の指導を受け、米國にてはスキラン博士、コ

ーツ教授、ジヤクソン博士等に耳鼻咽喉科、ジョン・エ・コールマー博士に免疫學の指導を受けたり。

△學位主論文は「本邦產蟾蜍迷路外淋巴腔ニ就テ」にして、第一篇本邦產蟾蜍迷路外淋巴腔發生ノ形態學的研究、第二篇本邦蟾蜍蝌蚪迷路、特ニ外淋巴腔ノ聽囊並ニ膜性迷路トノ形態學的關係の二篇より成り原著は英文なり。外に參考論文五篇あり、(1)副鼻腔炎ノ局所免疫治療法、(2)副鼻腔炎ノ造影劑置換診斷法、(3)肺炎双球菌及ビ連鎖狀球菌性腦膜炎ノ特異性豫防法、其一血淸豫防法(ジョン・エ・コールマー共著)、(4)同、其二「ワクチン」豫防法、(5)肺炎双球菌性腦膜炎ノ經口的免疫法等にして原著は全部英文なり。他に內外にて發表せる原著、史料、飜譯、講演及び抄錄等三十數篇あり、就中「非觀血的口蓋扁桃腺壓出摘出術、附、自家考案口蓋扁桃腺壓出摘出器」及び『近世日本醫學史(英文)、昭和九年富士川游著、ジョン・ルーラ譯「日本之醫學」第十一章及年表(一九〇七年ー一九三二年)追補(紐育出版)』等は最も主要のものと見るべき也。

△感想に曰く「米國に於ける扁桃腺問題は既に醫師全般のみならず一般國民が充分なる理解の下に解決されたるが如く、本邦の夫に比較して三十年の先進の觀がある。余は先年歸朝と共に本邦に於ける扁桃腺問題が依然として十數年前と同樣の狀態にあるに鑑み、本邦醫師諸家に對して、(一)扁桃腺摘出術をば成人は勿論小兒にも施行し以て一般健康狀態增進のみならず、手術時の出血其他の危險を防ぐ事、(二)扁桃腺摘出術をば病院又は夫に相當する設備ある醫院にて施行し、小兒には全身痲醉を使用し手術の完全を期する事、(三)耳鼻咽喉科醫はその手術室を改善し、少くとも全身痲醉器及び强力なる吸引器の設備を爲す事、(四)耳鼻咽喉科醫は熟練せる痲醉助手並に手術室看護婦の介補の下に施術を爲す事、(五)扁桃腺問題の趨勢に鑑み、扁桃腺と全身的疾患との關係を考慮し、一般普通醫は耳鼻咽喉科醫との協力を圖り診療の大本を決定する事等の諸點に關して熟考を促せる所以である」云々。

△氏は名古屋市東區百人町書家東畊天野景福の三男にして、明治三十二年名古屋市に生る。氏の輝しき前半生史を繙けば在米奮鬪十年餘、研鑽の結晶たる氏が米國に於ける扁桃腺問題に就ての先覺者たるを想はしむるものあり、その今日あるも亦偶然ならずとせず。年齡より云へば未だ不惑に達せず、意氣揚々頗る元氣にて奮鬪活躍に耐へ、今は最も得意の全盛時に在り。標準式ローマ字の鼓吹者にして、之れが奬勵と指導とに力む。妻文子は米國醫學士(エール)にして婦人科、小兒科を專門とし、米國コロンビヤ大學文學士たり。妻との間に一男一女ある家庭は平和也。

◇

富山要宜

△堺市綾之町大道に耳鼻咽喉科を專門とせる富山醫院あり。院長富山要宜博士の經營にかゝり、耳鼻科的醫院としての設備完全に整ひ、內容の充實と相俟つて診療手術の評判良く、外來患者數一日二百人內外を算し一流の位地を占む。診療に從事する醫師は院長共三人にして、院長は午前中及び夜間診療に精進して刀圭甚だ多忙を極め、日常殆んど席を暖むるの暇なきが如し。學系より觀たる博士は、長崎醫專出身の臨床家として錚々たるものにして、耳鼻咽喉科を專門とし、研鑽多年、實地の經驗に富み獨特の手腕を有す。學位論文は大阪帝大敎授富田朋介博士指導の下に完成し、大阪帝大より學位を獲得せる臨床醫博としての氣を吐き、今や名實相伴ふ名院長として嘖々たる名聲を博せり。

△更に氏の學歷及び閱歷を槪括すれば、大正十二年三月長崎醫專卒業、同年五月より翌十三年十一月迄京都鐵道省診療所勤務、大正十四年十月より昭和三年九月迄堺井上病院勤務、昭和三年十月より同七年九月迄大阪日本赤十字社病院耳鼻科勤務、昭和七年九月大阪帝大醫學部解剖學敎室に專攻生として入學、富田朋介敎授の指導を受く、同十一年三月同敎室退學、同年五月學位を授與せらる。

△學位主論文は「內耳生體染色ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文六篇あり、(1)「マウス」腎臟ノ生體染色ニ及ボスH.P.ノ影響ニ就テ、(2)骨基質ノ等電位點ニ就テ、(3)鼓膜ニ於ケル纖維性結締織ノ等電信位點ニ就テ、(4)鼻性腦膿瘍ノ

一例並ニ其剖檢所見、(5)內耳畸形ニヨルト思惟シ得ベキ難聽症例、(6)大腦皮質穹窿部ニ護謨腫ヲ伴ヘル梅毒性內耳炎症例等なり。

△感想に曰く(一)醫者はその天職を樂しむべきものと思惟す、難症の患者を苦心して治癒せしむる所、患者の家族と共に無限の樂その中にあり。(二)醫師は相互にその人格を尊重し、社會人をして信賴せしむるに足る社會的常識を涵養することも現代の世相に於いて必要なりと思惟す。當今往々醫師にして物質萬能のものあり、又全く非常識にして徒らに退嬰的にして、その正當なる權利を行使する勇氣を缺如すること、醫師界の權威を日に月に落しつゝある最大の原因なりと思惟す。

△氏は現住地たる大阪府堺市綾之町二三に本籍を有し、富山要良の長男にして、明治三十二年鹿兒島縣古仁屋町に生る。年齒漸く三十有九にして未だ不惑に入らず、その今日あるは既に博士の前半生史よくこれを語るが如く、學究的少壯の臨床家として今は最も得意の時代に入り、學識、手腕、人格共に愈々圓熟して博士獨特の特色を發揮せんとす。殊に氏の臨床方面に對する態度の眞劍にして、誠意誠實を以て人事の最善を盡し、以てその天職なるを樂しむ點は特筆に値し、氏の長所と見るべき也。學究と醫術との趣味以外には笊碁を樂しむ位か。不斷の奮鬪努力と相俟つて、猶精研に餘念なき前途は、洋々として將來の大成を期待せらる。家庭には夫妻との間に一男三女ありて、團欒裡は常に靄々たり。

◇

榎本誠三　△和歌山縣田邊町中屋敷に榎本耳鼻咽喉科醫院あり。院長榎本誠三博士の經營にして新裝せる入院室五を有する外、內部の設備を整へ、孜々營々として日々診療に勵しみ、氏が獨特の手腕に俟つ診療手術の好評は、開業日尙淺きに拘はらず、益々人氣を吸收して近時著るしく向上發展の盛況を呈しつゝあり。氏は京都府立醫大の出身にて、學位は京都帝大より獲得せる新進の臨床醫博にして、長兄に產婦人科、內科、榎本秀治及び次兄に榎本秀雄の兩醫博あり、兄弟三博士共各々自己の本分を發揮して治療界に活躍しつゝあるは學界近來の美談とす。

△氏の學歷及び閱歷を概括すれば、昭和六年三月京都府立醫科大學卒業、卒業後直ちに同大學附屬病院耳鼻咽喉科敎室副手勤務、同七年三月任同學助手、同年六月日本赤十字社大阪支部病院醫務囑託、同八年三月任京都帝國大學醫學部助手、同十年四月同醫學部講師を囑託せられ、同十一年五月學位を受領す。斯間京都府立醫大敎授中村登博士に就て耳鼻咽喉科學を、京都帝大敎授小南又一郎博士に就て法醫學を研究せり。

△學位主論文は「神經組織ノ死症變化ニ就テ」にして、第一神經細胞內「ニツスル」小體、第二神經細胞內原纖維、第三神經膠生細胞、第四線衝性色素液ヲ以テセル不染點ノ移動の四篇より成る。外に參考論文として、(1)「モルヒネ」ノ化學的證明、(2)窒息時ニ於ケル血液「グルタチオン」ノ消長ニ就テ、(3)流行性惱炎後ニ來レル性格異常ト犯罪ニ就テ、(4)諸種中毒時ニ於ケル血液還元「グルタチオン」ニ就テ　の四篇あり。就中『諸種中毒時ニ於ケル血液還元「グルタチオン」ニ就テ』は氏の最も得意とせる業績と見るべき也。

△氏の本籍は和歌山縣田邊町大字南新町一四七にして、明治三十七年醫師榎本貞雄の三男に生る。兄弟三博士の一人として氏の今日あるは、既に博士の前半生史よくこれを語りて餘蘊なく、年齒未だ三十有四の少壯にして、精研修養相俟つて益々手腕冴え、今は最も得意の時代に入り、刀圭多忙にして努力奮勵常に寧日なし。賦性篤實溫厚にして、臨床家に相應しき性格を備へ、人に敬慕せらるゝ德を有す。學究以外にはテニスと碁に趣味あり。同胞七人にして次弟彰は京大法科の出身、末弟幹雄は京大醫學部に在學中、長女光枝子は森四郎吉に嫁し、二女照枝は京大理學部講師脇村利一郎に嫁す。

◇

毛利吟吉　△濱松市元目町に院長園田繁章博士の經營する園田病院あり、當地唯一の耳鼻咽喉科專門病院として著名也。當病院に副院長として新進の毛利吟吉博士あり、氏は慈惠醫大派の新勢力たる臨床醫博にして、耳鼻咽喉科を得意とし、慈惠醫大研究科に於て永山武美教授指導の下に醫化學を專攻して學位を得、現職に就任以來日尙淺きも、拮据勤勉、氏獨特の診療手術の好評は、氏が篤實溫厚なる性格と相俟つて、益々內外の信望を博しつゝあり。而かも年齒未だ少壯にして、精研修養に餘念なき前途は、洋々たる氏が將來を語るに餘裕綽々たるものあり。

△氏が學歷及び閱歷より言へば、大正十年三月廣島縣立福山中學校卒業、同十一年四月東京慈惠會醫科大學豫科入學昭和三年三月同大學學部卒業、同時に同大學助手に任ぜられ耳鼻咽喉科教室に勤務、同年十月聖路加國際病院耳鼻科勤務、同七年三月辭職、同年四月東京慈惠會醫科大學研究科に入學、醫化學教室に於て永山武美教授に就き醫化學專攻、同十年六月研究科修了、同年八月聖路加國際病院に復職、同十一年四月濱松市園田病院に副院長として招聘せらる、同十一年七月學位を授與せられ今日に至る。

△學位主論文は「くれあちん及ビくれあちにんノ生化學的研究」にして、(1)くれあちんくれあちにんノ相互移行ニ就テ、(2)網狀織內皮細胞系統塡塞トくれあちん體代謝、(3)くれあちん及ビくれあちにんノ母體ニ關スル研究補遺、(4)甲狀腺製劑(Thyroxin)ノくれあちん體代謝ニ及ボス影響の四篇より成る。參考論文は「二三植物神經毒ノ筋ノ代謝（特ニ燐酸化合體）ニ及ボス影響（矢澤督三郎共著）」なり。

△氏は廣島縣世羅郡東大田村毛利隆の長男にして、明治三十七年生れの少壯也。一研究學徒として起てる氏の今日あるは、既に博士の輝しき閱歷に盡きて餘蘊なく、年齒未だ三十有四、淸新の意氣益々壯にして研究心に富み、今は最も得意時代にて、唯々至誠以て、終始眞面目なる學究的臨床家として、與へられたる賦職に忠實ならんことを念じ、以て醫道の本分を盡す上に寧日なし。謙遜家にして自己の識才を衒はず、人に親切にして自抑淡々たる態度は人に好感を與ふ。學究以外にはスポーツ、演劇研究等に趣味を有す。家庭に一男あり。濱松市元目町二八に住む。

◇

龜田神三寶　△大阪市東區大手通二ノ一六に在る龜田耳鼻咽喉科院は、院長龜田神三寶（カノダジンザボ）博士の經營にして、一般診療の外研究設備を有す、特に組織學的研究に對し充分の考慮を拂ひ、臨床と相俟つて常に日進月歩の醫學研究に努力邁進しつゝある點は特筆に値す。氏は金澤醫專出身の臨床家として錚々たるものにして、耳鼻咽喉科を專門とし、特に解剖學の造詣深く、學位は大阪帝大より獲得せる臨床醫博として其の學識、手腕を認められ、今猶同大學の耳鼻咽喉科學教室に在りて研究を續行しつゝあり。

△學歷及び閱歷より言へば、奈良縣五條中學校を經て、大正九年金澤醫學專門學校を卒へ、卒業後直ちに日赤兵庫支部姫路病院耳鼻咽喉科に勤務、大正十四年九州帝大醫學部耳鼻咽喉科教室に轉じ、翌十五年大阪市弘濟病院耳鼻咽喉科主任として赴任す、昭和六年大阪帝大醫學部解剖學教室專攻生として入學、同十一年一月同醫學部耳鼻咽喉科學教室に轉じ引續き研究中、同十一年八月學位を授與せらる。斯間主として久保猪之吉教授、高木耕三教授、山川强四郎教授の指導を受く。

△學位主論文は(1)副腎髓質ノ細胞學的研究（正常時所見）、(2)同（片側剔出時所見）の二篇にして、外に參考論文五篇あり、(1)同（去勢時所見）、(2)同（姙娠時所見）、(3)口蓋扁桃腺ト上行口蓋動脈ニ就テ、(4)余ノ扁桃腺分類法ヨリ見タル扁桃腺周圍膿瘍、(5)「ムコーズス」中耳炎性乳嘴突起炎治療苦驗等なり。就中「余ノ扁桃腺分類法ヨリ見タル扁桃腺周圍膿瘍」は氏が得意とせる力作にして、最も主要なるものと見て可也。

△感想に曰く「醫學は元來生理的及病的の生物を對照とすべきものなれば、其間殊に後者に起る現象又は之に對する必要に歸因して研究の緒となさゞるべからず、卽ち最も急務の問題より出發すべきなるも、現代の狀況は動もすれば

末に走りて本を忘れたるが如き憾無しとせず、また臨床醫學より更に基礎醫學を見直ほす必要あり、卽ち兩者を渾然融合せしめて並び親しむべき必要を痛感す」云々。

△祿蔭は氏のペンネーネにして、讀書を唯一の趣味とし、熱心なる研究家として知らる。殊に氏の長所と見るべきは意志堅固にして持久力强く、徹底的に成遂げ得る熱と力、及び獨創的に生きんとする點に在り。强ひて其の缺點を指摘すれば、必要逼迫前豫め一定の步調を以て進み難く、動もすれば仕事の進行に遲々たるを免かれざる嫌なしとせず。氏が尊き使命に向つて、常に臨床と並行して獨創的研究に拍車をかけ、精研と修養に餘念なき前途は、輝しき希望に滿つ氏が將來を語るに餘裕綽々たるものあり。氏は奈良縣吉野郡賀名生村大字津野四六八龜田長太郎の三男にして、明治二十九年本籍地に生る。當年漸く不惑有二にして、眞摯なる學究的臨床家としての特徵を有し、溫厚の紳士としての品格を備ふ。家庭には妻及び二男二女ありて圓滿也。

◇

三宅正一　△橫須賀市海軍水雷學校軍醫長たる海軍軍醫中佐三宅正一博士は、岡山醫專及び海軍軍醫學校の出身にして耳鼻咽喉科を專門とし、名古屋醫大より學位を獲得せる臨床醫博として其の學識、手腕を認められ、海軍軍醫界に於ける醫博人物として囑目せらるゝ一人物也。

△氏の學歷及び閱歷より言へば、大正九年岡山醫學專門學校卒業、直ちに海軍軍醫に任官、同十年軍艦鹿島に乘組み東宮殿下御外遊供奉、爾後艦船部隊軍醫長、海軍病院部員歷任、德山海軍共濟組合病院及び海軍軍醫學校に於て耳鼻科專攻、次で橫須賀海軍病院耳鼻咽喉科長に補せられ、累進して昭和十年海軍軍醫中佐に任ぜられ現職に轉補せらる、同十一年八月學位受領。斯間德山海軍共濟組合病院に於て現岡山醫大助敎授小田大吉博士、海軍軍醫學校に於て敎官（現名大敎授）阿久根睦博士に就て耳鼻咽喉科學を專攻せり。

△學位主論文は「聽性瞳孔反射ニ關スル知見補遺」にして、參考論文四篇あり、(1)橫須賀軍港ニ多發セル猩紅熱ニ於ケル耳鼻咽喉科的檢索（吉田太助共著）、(2)咽頭、口腔及頸部ノ半側ヲ侵シタル「ヂフテリー」後痲痺ノ一例、(3)軟聽聹ノ遺傳ニ就テ、(4)腋臭及ビ軟聽聹ノ臨床的統計的觀察（廣田棄夫共著）等なり。

△岡山縣淺口郡連島町の出身、三宅幾次郎の長男にして、明治二十九年本籍地に生る。海軍軍醫よりスタートせる氏が今日ある閱歷は、旣に博士の前半生史よくこれを語りて余蘊なく、斯間多年の功績は言はずもがな、當年漸く不惑に入る二、志操堅固にして奉公の精神に燃え、健康にして今は元氣最も橫溢せる働盛なれば、向後の活躍と相俟つて大に將來に期待せらるゝ所多し。思想高潔なる人にして溫情に富み、人に厚く後進を能く愛撫す。趣味としては謠曲（觀世流）を好み、常に德操の堅持を心掛けて自ら品性の陶冶に勉む。家族は父、妻、三女ありて家庭は睦じい。神奈川縣鎌倉町材木座二六六に住む。

○

大森守　△仙臺市靑葉病院副院長にして得意の耳鼻科を擔當しつゝある大森守博士は、東北帝大派の新進醫博にして、母校の恩師藤田敏彥敎授に就て生理學を、同和田德次郎敎授に就て耳科學を專攻し、研鑽多年、實地の經驗に富み獨特の新手腕を有す。學究生活より診療界に轉向して以來、日尙淺きも、蘊蓄せる技倆を發揮するに自由の立場に居り、診療手術の好評は、溫厚篤實なる氏が性格と相俟つて益々內外の信望を博し、耳鼻咽喉科界に於ける未來の大家として、更に大に期待せらるゝ所に氏の尊き使命あり、氏の希望ある將來ありと云ふべし。

△學歷及び閱歷より言へば、小學校二年生迄は鄕里山梨縣に在住、其後は全部東北地方に轉住、大正十五年山形高等學校を卒へ、同年東北帝國大學醫學部入學、昭和五年同醫學部卒業、同年同醫學部生理學敎室副手囑託、同七年助手に任ず、同九年再度副手を囑託せられ、研究の餘暇、實父開業醫大森守胤に就き臨床方面の敎を受く、同十年生理學

教室を辭し、耳鼻咽喉科教室副手を囑託せらる、同十一年九月以來仙臺市青葉病院耳鼻科を擔當す、同年十一月學位を授與せられ今日に至る。

△學位主論文は「熱痛感覺ノ閾溫度ニ關スル研究」にして、外に參考論文二篇あり。殊に主論文は氏が最も得意とせる力作にして、氏が業績中の主要論文と見るべき也。

△感想に曰く『「生活が安定である」即ち「金廻りが良い」と云ふので醫師になつた人が割に少くない故か、醫者には金錢に感受性の強い人が多い。醫は仁術とばかりと言つて居られないけれ共、儲けやう〳〵とすることは戒めなければならぬ。現在醫師の弱點は此處にあると思ふ。醫師人格の向上も從つて得られると考へる」云々。

△山梨縣北巨摩郡穗足村醫師大森守胤の長男にして、明治三十六年生れの學究的少壯紳士也。臨床家に相應しき性格の持主にして、篤實溫厚、德操の堅持を心懸け、常に品性の陶冶に力む、人格自ら高邁にして圓滿也。文學趣味豊かにして、學生時代には醫學部雜誌の編輯委員たり、日本心理學會々員にして日本心理學會にて研究發表せることあり又醫史學に多大の興味を有し、東北帝大醫學部醫史學同好會員たり。年齒未だ三十有五、少壯の意氣益々壯にして、拮据黽勉、精研に餘念なき前途は洋々たるものあり。家庭には母堂と妻と自分との三人にて、一家は平和也。仙臺市北四番丁一三四に住む。

皮膚科　泌尿器科

花柳病科　性病科　生殖器病科

大和田　政實　△帝都診療界の山手方面に於て、醫院の最も集中せる環境たる四谷區新宿三光町卅七に皮膚科、花柳病專門を以て嶄然異彩を放ちつゝある大和田病院あり、正五位勳五等大和田政實博士の經營する所、開業拮据既に十餘年を越え、小ざつぱりした陣容まことに結構にして、充實せる內容の設備整ひ、書齋兼診療室に於ける博士の橫顏を覗く時、その玲瓏たる打診振と、メスを持つ周到なる態度とは、流石は老大家としての練熟さを首肯せしめ、又一面には自ら親切本位を以て治療の方針とする博士の性格の反映の尊さを想起せしむ。宜なる哉、日々遠近より外來患者の輻輳するもの多く、門前常に賑ひ院內活氣を呈す。

△長野縣小諸町の人、明治十四年生る。明治三十五年千葉醫專の出身にして、卒業後直ちに縣立千葉病院外科、皮膚科の助手として勤め、同三十六年より四十年迄內務省血淸藥院及び傳研（當時院長及所長北里博士）助手勤務、同三十八年日露戰役に於ける陸軍衞生幇助員として東京豫備病院に勤務し、同四十年より大正十一年迄長崎、福岡、兵庫の各縣港務醫官を歷任す、其間大正七年孟買へ出張、同九年より十一年迄大阪醫大皮黴科見學、同十一年任東京市技師、衞生試驗所部長として性病に關する調査研究を行ひ、同年より十三年迄慶大醫學部病理細菌學教室にて研究、同十三年十月學位受領、其後同大學皮膚科泌尿器科を見學、同十四年東京市衞生試驗所辭職、翌十五年より頭書の住所に於て開業今日に至る。專門中性病にては淋疾、皮膚科にては濕疹を最も得意とす。

△學位主論文は「下水ノ細菌學的研究」にして、五篇より成り、參考論文は、(1)凝集反應ノ研究殊ニ「アグルチノイ

ド」ニ就テ、(2)凝集反應及沈澱反應ニ就テ外六篇あり。

△學界に對する感想を述べて曰く「近來學位授與數は非常に多く夫々研究の賜物である事は國家の爲め喜ばしき現象なるも受領者の人格と云ふ事が全々無視せられて居る故、論文審査に當り此點も調査して貰ひ度いと考へると同時に今少しく何かの方法で審査を嚴重にしては如何かと思ふ」云々。著者も頗る同感にて、此點に關しては既に多年私見を吐露して機會ある毎に識者の反省を促し居れり、殊に輓近博士の人格に對する世論の益々紛々たるの秋、世論を正しく導く上に正當なる要求として博士の此說に著者も又共鳴する一人也。

△一度び其の嚬咳に接せんか、虛心坦壞、諄々とし說く所熱あり、又た人情味に富む、會々博士が將來の抱負として其の意見を叩けば、曰く「現在の法科萬能を廢し衞生省を大々的に新設し其の首腦者は醫科出身の衞生細菌學者を以てし吾國を以て世界第一の衞生國たらしめたし」云々と、萬丈の氣焰甚だ壯とすべく、又以て其潑剌たる意氣を愛す讀書家にして業餘の書見を樂しみ、古香を號とす、また觀劇と旅行を好み、魚釣を趣味し時に太公望を極め込む事ありと聞く。

◇

久保山　高敏

△大阪市立市民病院の中堅、皮華科長久保山高敏博士は、大阪府立高醫の出身、斯道の元老櫻根（孝之進）教授の高弟也。學位は大阪醫大より獲得せるが、其の博士論文は母校の恩師佐多（愛彦）及び村田（宮吉）兩博士の指導を受くる所多し。皮膚科、泌尿器科、特に泌尿器疾患の治療は博士の最も得意とする所にして、將來の醫師は疾病治療も必要であるが、疾病豫防に進出する事が最も必要なりとの主張の下に機會ある毎に、實際醫學の臨床的經驗及び成績に對する講演及び論著の發表に努めつゝあるは世人周知の如し。

△博士は佐賀縣三養基郡基里村久保山厚長男、明治十六年生にして、同四十二年大阪府立高醫を卒へ、直ちに助手兼醫員として附屬病院皮華科に勤め櫻根教授に師事す、同四十五年辭職大阪市にて開業す、大正九年大阪醫大病理學教室に研究生として入學し佐多、村田兩教授の下に泌尿器及生殖器病を研究す、同十三年十一月學位受領、同十四年新設の大阪市立市民病院皮華科長に就任し今日に至る。

△學位主論文は「軟性下疳性横痃ノ生物的及免疫學的研究」にして、參考論文は、(1)大阪府下郡部ニ於ケル痘瘡ノ統計的觀察、(2)軟性下疳性横痃ノ毒性及其「ワクチン」療法の二篇なるが、他に論著夥多あり。

△「人生は絶えざる緊張と職業に對する趣味とを必要とす此が自ら保健にも適し、又安心立命幸福至上なるものと思ふ、要するに診療の如き職業は科學的智識以外に常に溫き同情と謙遜の德を有せざるべからずと思ふ」云々とは、博士の感想の一片なり。經驗と學術的手技と、溫き同情、要するに國家のため「よき醫師」でありたいといふのが博士の抱負であり、又常に自ら努めて之を實行しつゝある處に博士の特徵を見出さる。生來蒲柳の體質なるも保健に注意し時に太公望を極め込みて悠々淸遊す。又た讀書に趣味を有し常に學術上の新智識の吸收に力め、又克く人格の陶冶に怠らざる概あり。大阪市此花區上福島一ノ四八に住す。

◇

生駒　寅彦

△名古屋市東區鶴重町四ノ三に生駒醫院あり、院長生駒寅彦博士の診療所にして皮膚科、泌尿器科を專門とす。博士は愛知醫專出身の篤學者にして、嘗て墺太利に遊學し、ウイン大學教授マーレツシュ博士の許にて泌尿器病理、同藥物學教授ハンス、マイヤー博士の許にて泌尿器の藥物學的研究をなし、クロイス並にルブリチウス教授の教室にて泌尿器科の臨床的見學をなし、歸朝後慶大より學位を獲得せり。開業拮据數年を越えたるに過ぎざれども、臨床家として多年の經驗を有し、圓熟せる技術的手腕の好評は、氏が熱心なる診療と併せて多大の聲望を博し近來著るしく院務の發展を遂げ日增繁榮の盛況を呈しつゝあり。

△博士は三重縣南牟婁郡尾呂志村生駒定右衛門四男、明治二十三年生にして、和歌山縣立新宮中學校を經て、大正二年愛知醫專を卒へ、引續き同校皮膚科教室にて研究、同四年廣島縣立吳診療院に勤務、同八年之を辭し、名古屋市楠病院副院長として就任、同十年院費を以て渡歐留學の途に上り、主として墺國納維大學にて研究し、同十三年歸朝す翌十四年二月學位受領、昭和三年十月辭職、現地に開業せり。

△學位主論文は「尿路ノ所謂蛋白結石ニ就テ並ニ一般結石成立問題ノ補遺」にして、參考論文は、(1)「モルヒネ」ニヨリテ起ル膀胱括約筋痙攣ノ實驗的研究、(2)膀胱憩室內癌腫ニ就テ、(3)腎臟胞蟲病ノ病理、(4)淋菌培養器ノ反應ニ就テ、(5)「バクテリオフアーゲン」作用ニ就テ、(6)淋毒性副睾丸炎ノ「サルヴルサン」療法なり。

△屋外運動を居常の趣味とし、又撞球を好む。貴公子然たるタイプの持主にして、凜々しき風姿の裡に溫威を藏し、人に對する穩健自持し、親切と同情とを以てす。

◇

片山武一

△横濱診療界の中堅として、中區山下町に有名なる村山病院あり、院長は村山小七郎博士にして自ら外科に當り、片山武一博士は皮膚科、性病科長として斯科を擔當す。片山博士は愛知醫專の出身にして、東京帝大より學位を獲得せる篤學の士也。主論文は「實驗的ワイル氏病ノ血液像殊ニ血小板ニ就テ」にして、參考論文は、(1)赤血球ノ溶血素吸收（所謂感作）ニ就テ、(2)健康家兎ノ血小板數ニ就テ、(3)鹽酸「フエニールヒドラチン」貧血家兎ノ血小板並ニ白血球核推移ニ就テ、外獨逸文一篇あり。他にも論著夥多にして枚擧に遑なし。

△三重縣四日市市の人、片山嘉平の六男、明治二十五年生にして、三重縣立第二中學校を經て、大正五年愛知醫專を卒へ、直ちに助手として母校の衛生細菌學教室に勤め、同十二年三月愛知醫大助手となり同教室に勤續す、其後同大學附屬醫院皮膚科に轉じ實地研究、同十四年六月學位を得、同十五年九月以來頭書の現職に在り。專攻は皮膚科、泌尿器科、性病科にして、又た衛生細菌學に關する造詣深し。

△讀書家にして書見を唯一の趣味とし、今猶精研修養に餘念なし。學究的溫厚の紳士にして、患者に對し又た人と接するに懇篤親切なるは、圓熟せる手腕と相俟つて今日の聲望を博する所以、而かも猶年壯銳氣にして春秋に富む前途は、洋々として更に大に期待せらる。横濱市中區本牧和田九七に住す。

◇

安達　與五郎

△小樽市稻穗町西八丁目五番地に堂々陣を張り、皮膚科、泌尿器科專門を以て著聞する安達病院は安達與五郎博士の經營にして、洋館コンクリート三階建二百坪餘、敷地三百坪を有し、結構宏壯にしてX光線、人工太陽燈、水銀石英燈其他內容の設備整ひ、打診手術の好評は年と共に繁榮をいや增し、牢固たる地盤は依然として私立病院中の一流に在り。一面又た日本黴毒學會評議員、日本皮膚科學會評議員、全國猪乃鼻會評議員、北海道廳立小樽中學校同窓會副會長等の要職に在りて公事に盡す所あり。學系は千葉醫專出身にして、學位は京都帝大より獲得せる篤學の士として既に江湖に知られ、特に其の最も得意とする泌尿科（診斷及治療）に至りては獨特の定評あり。

△博士は廳立小樽中學を經て、大正五年千葉醫專を卒へ、直ちに小樽市愛生病院に醫員として奉職す、同六年小樽市に開業し安達醫院を經營す、同十一年開業を中止し、京都帝大醫學部研究科に入り皮膚科教室に於て、松本教授指導の下に皮膚、黴毒、泌尿器科學を專攻す、同十四年退學、同年八月學位受領、同年より小樽市に於て再び開業、安達病院を經營して今日に至る。

△學位主論文は『實驗的家兎黴毒ニ於ケル再接種ニ就テ』にして、(1)黴毒ノ再感染ニ關スル實驗、(2)黴毒ノ重感染ニ關スル實驗、(3)黴毒ノ再接種ニ就テ實驗追補、(4)角膜ノ免疫獲得ニ關スル實驗、の四篇より成る。參考論文は、(1)所謂「スピロヘーテ、クニクリ」ノ研究、(2)實驗的家兎鼠咬症ノ初期硬結ニ就テ、(3)家兎胎生的腎臟腫瘍ニ就テ、(4)家

兎眼瞼ニ於ケル實驗的初期硬結ニ就テ、(5)家兎陰脣ニ於ケル實驗的黴毒初期硬結ニ就テ、(7)男性生殖腺脱落ニ關スル外的性徴特ニ陰莖ノ變化ニ就テ、(8)蒼鉛劑ノ家兎實驗黴毒ニ對スル効果ニ就テの八篇なり。其他論著夥多。

△現代の學會に對しては「毎春の學會が御祭り騒ぎになるのを避けたい」云々。又た業界に對しては「醫師が自覺して自己の使命遂行のため團結して欲しい。例へば社會保險に對しては當然な業權を主張すると同時に被保險者に對する完全なる（一般人と同樣な）治療をなし得るやう主張すべきである。このためには業者が結束して政府に當るべきである、恰も軍部の結束の如く」云々との感想を吐露せり。

△博士は小樽市錦町安達龍太郎の長男、明治二十六年生にして當年四十有三歳也。壯鋭の意氣潑剌として多量の分別を有し、臨床家としては今が最も腕の冴え時なれば博士の得意や想ふべき也。學生時代よりの讀書家にして今猶研鑽克く新知識の吸收に力め、行く〳〵は病院内に研究所を併置して從來の研究事項を續行せんとするの計畫ありと聞く。時に芝居を樂しみ以て業餘の趣味とし乘馬を日課とす。人と爲り篤實溫厚にして正義感に強く、臨床家としての特徴を具備する高邁なる人格者たるを尊ぶ。

◇

伊藤實　△金澤醫科大學に於ける皮膚科泌尿器科の新進教授として重きを爲すは伊藤實博士也。博士は東大系大正九年組の一秀才にして、皮膚泌尿器科界の先覺たる恩師故土肥慶藏博士に就きて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる少壯醫博なるが、學位論文は東大皮膚科教室に於て經驗せる類「ペラグラ」患者十二例に就き、臨床的、血液學的並剖檢的所檢を叙述し、尚ほ我國に於て報告せられたる「ペラグラ」或は類「ペラグラ」の症例を綜覽し、更に歐米に於ける「ペラグラ」の文獻就中病因論に關するものを渉獵して彼我の病理を對比觀察し論究せるものにして、(1)我國ニ於ケル「ペラグラ」及類「ペラグラ」ニ就テ附其療「ヱキス」療法、(2)類「ペラグラ」症ニ對スル糖越幾斯治驗追加の二篇より成る。參考論文は、(1)類「ペラグラ」症ニ於ケル實驗的研究、(2)被角血管腫ノ病理並分類特ニ結核トノ關係ニ就テ、(3)皮膚癌ニ於ケル彈力纖維ニ對スル「ラヂウム」線ノ影響ニ就テ、(4)懐爐火傷癌、(5)膀胱全摘出ニ就テの四篇、他に論著夥多あり。

△更に其の略歴を概括すれば、東京府立一中、一高を經て、大正九年東京帝大醫學部を卒へ、引續同學部副手囑託として皮膚泌尿器科教室に於て土肥教授指導の下に斯學研究、同十二年八月任助手、同月「ひの病」研究のため長野縣上清内路村に出張を被命、同十三年十一月任金澤醫大助教授、同十五年三月學位受領、昭和二年一月文部省在外研究員を命ぜられて渡歐、主として佛蘭西巴里に於て斯學を研究す、昭和六年四月同大學教授に昇任今日に至る。

△博士は東京市京橋區越前堀一丁目に本籍を有し、伊藤寅之助の長男にして明治廿七年生る。學究的溫厚の紳士として高邁なる氣品を備え、靄々たる裡に學者らしき威嚴を藏す。當年漸く不惑に入る二歳、年壯の意氣に燃え研究心潑剌たるものあり。今は專念醫育界の爲め精進し、其の蘊蓄を披瀝して教壇に起ち、諄々として說くところ熱あり力あり、其の態度の眞劍にして誠意誠實なるは其の人格を敬慕せしむ。研究以外業餘の趣味としては俳句を嗜む。春秋猶豐富にして洋々たる前途を有す。金澤市廣坂通八二に住む。

◇

竹内讓　△名古屋市中區老松町三丁目に陣容堂々たる竹内皮膚泌尿器科病院あり、院長竹内讓博士の經營にして、新築の落成と共に專門科目の設備は遺憾なく整ひて居り、病室に洋室と和室とを備へ入院患者の好むところに任せ、又た恢復期患者の爲めに小運動場をも設備せり。博士の圓熟せる技術的手腕に至りては斯界既に定評あり、加ふるに篤き德望と相俟つて益々人氣を吸收し、今や中京診療界に斯科を以て斷然一頭地を拔くの概あり。一面又た

公共方面にては現に日本皮膚科學會評議員にして、社團法人愛知性病豫防協會理事を兼ね、同協會雜誌「性の友」主幹として斯道の爲め盡す所あり。

△博士は愛知醫專の出身にして、明治四十四年卒業後直ちに同校病理學教室副手たり、大正二年十一月東京帝大醫學部皮膚科教室附介補となり、同六年四月迄勤續、それより阿久津三郎博士に就て泌尿器病學研究、同七年七月一日名古屋市に開業、同十四年九月渡歐、墺國維納大學神經學教室主任マールブルグ教授指導の下に末梢神經組織を研究し、次で伊、瑞、獨、和、白、英、佛、露の各大學を見學し、同十五年二月西伯利亞線經由歸朝す、同年六月愛知醫大より學位受領と共に現住所へ移轉今日に至る。

△學位主論文は「癩ノ末梢神經組織研究」にして、參考論文は、(1)東京醫科大學皮膚科ニ於ケル「レントゲン」療法ノ統計的研究、(2)肘腺腫脹トワ氏反應補遺（獨文）、(3)二三皮膚疾患ノ尿中防衞酵素ニ就テ、(4)「ニンゼリン」ノ批判及ビ防衞酵素ノ各種狀況ニ於ケル作用ノ變化ニ就テ、(5)各種膀胱患者ノ膀胱容量ニ就テ（獨文）外十一篇あり、他に論著夥多。著書としては、(1)生殖器の結核、(2)皮膚病講話、(3)性病豫防管見、(4)毛髮の話、(5)內務大臣の花柳病豫防諸問に關する余の性的考察及び其對策、(6)僕の觀た歐羅巴、(7)異國秘話人肉異香等あり。

△現代の醫界に對して、博士の感想を叩けば曰く「昨今の如く無料乃至實費診療所相亞で新設されては開業醫は早晩行きつまるに相違なし、寧ろ醫師を官公吏として各要所に設置の診療所に就かしむべきのみ」云々と。又たその抱負の一端を吐露して曰く「余は年少文學者たらんとし中途志を變じて父の業を繼ぎ遂に凡醫に了らんとす、余の抱負は單に醫文の提携あるのみ」云々。

△博士は石川縣士族醫師竹內壽三郎の長男、明治二十一年生にして、當年不惑に入る九歳也。其の閱歷は既に博士の前半生史に盡きて餘蘊なく、年齒漸く壯熟して最も得意の時代に入る。文學趣味の人にして忙中閑を得れば自ら筆を執り、臨床の傍ら醫文化貢獻の爲め精進努力する所あり、その號東峯、老松子、木外等は醫文士として文壇を賑はし既に同僚の間に識らる。また音樂、乘馬等も趣味の一なるが如し。性格より打診すれば、猪突的なる特質は博士の長所にして、或はまた短所とも見るべきか。一面には又た善と知らば直ちに迎へ、惡と知らば則ち仇敵の如く憎惡する謹直の士也。從つて今日まで利せしこともあり、また失ひしことも多くあらんかと察せらる。學德兼備せる好箇の臨床家にして、當世博士界中異彩に富む一人物たるを失はず。

◇

津留壽船　△久留米市日吉町四八に皮膚科泌尿器科を以て著聞する津留病院あり、院長は斯科の大家ドクトル、メヂチーネ津留壽船博士にして、博士の經營に成り、開業古く、既に牢固たる地盤を獲得して名聲遠近に及び當地方を風靡す。博士は久留米市の人、津留壽德の長男、明治十四年生にして、明治三十八年大阪府立高醫を卒へ、直ちに任京都帝大福岡醫大助手、宮入慶之助博士に就き細菌學原蟲學を研究する事二ケ年、四十年任母校助手、櫻根孝之進博士に就き皮膚病黴毒科研究す、四十一年獨乙留學、グライフス、ソールド大學にてレフレル教授に就き細菌學研究、四十二年同校にて「ドクトル」の學位受領、引續き同校ナイセル教授、ウキンナ大學にてクラウス教授に就きて黴毒學及血淸學研究、四十三年歸朝、四十四年久留米市に開業、大正十四年大阪醫大細菌學教室に研究生として入り福原義柄博士の指導を受け免疫學血淸學研究、十五年十月大阪醫大にて學位を受領す。

△學位主論文は『細菌ノ安定性並ニ不安定性凝集素ノ研究殊ニ絮片ノ大小、兩凝集素ノ成因並ニ理化學的影響ニ就テ』にして、參考論文は、(1)「コクチヂユム」「オビフオルメ」ノ研究、(2)人類及爬蟲屬ニ於ケル寄生性鞭毛蟲ノ「デモンストラチオン」、(3)一二寄生性原生動物ノ「デモンストラチオン」其他獨逸文の原著あり。博士の壯齡今や知命に入る五歳、臨床家として成功の位地を占め悠々たり。

◇

林　廣吉　△靜岡市住吉町二ノ一七に在る林醫院は、林廣吉博士の診療所にして、皮膚科泌尿器科を專門とす、充實せる內部の設備と相俟つて診療手術の評判良く、當地診療界に卓然として拔群の位地を占む。博士は東北帝大（專門部出身）系の斯科專門家にして、恩師遠山及び佐藤兩教授に就きて斯學の蘊奧を究め、又井上教授に師事して醫化學を研究し、東北帝大より學位を獲得せる名醫博たるに耻ざる一人物也。

△博士は大正四年東北帝大醫學專門部卒業後、直ちに同部皮膚泌尿器科教室に入り、遠山教授、佐藤助教授の指導を受く、同七年三月福島縣湯本町私立入山病院勤務、同八年九月宮城縣氣仙沼町私立飯田病院轉勤、同十二年五月再び舊教室に復歸して遠山教授に就き研究を續け、傍ら醫化學教室にて井上教授の指導を受く、同十五年十二月同教室を辭し學位を受領す、爾來現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「皮膚感受性ニ關スル研究」にして、(1)「アルカリ」代謝、皮膚並ニ血液ニ於ケル「アルカリ」分布ノ狀態ト皮膚感受性、(2)皮膚感受性ト水素「イオン」濃度トノ關係ニ就テ、(3)日本漆ニ對スル皮膚感受性ニ關スル研究の三篇より成れり、參考論文は、(1)諸種角質內ノ「アルカリ」及「アルカリ」土類ニ就テ附角化機轉ニ對スル知見補遺、(2)鯨皮膚ノ組織學的研究の二篇なるが、他にも論著少からざるものあり。

△博士は德島縣板野郡堀江村の人、明治廿二年生る、當年不惑に入る七歲也。眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、其の今日ある篤學は博士の閱歷に盡きて躍如たるものあり。開業拮据、既に拾年有餘、其の篤き聲望を博し、今日の成功を贏得たるは、學識、手腕は言はずもがな、臨床に熱心にして克く誠意と親切とを盡せる努力の賜物たるべし。趣味としては研究と醫療そのものにあるが如く、勵精餘念なき前途は猶遼遠たり、幸に自重加餐を祈るや切也。

◇

荒瀧　實　△北海道旭川市一條通九丁目に堂々の風容を構え、泌尿科、婦人科、腎臟病科專門を以て卓然頭角を拔き、健實味橫溢せる荒瀧病院あり。院長は泌尿科の大家荒瀧實博士にして、內部の設備整ひ、博士自ら得意のメスを揮ひ、外に新進の三好仁、藤村雄吉等の學士あり、診療手術の好評と相俟つて拔くべからざるの盛況を呈す。博士は慈惠醫專出身の篤學者にして、嘗て米國に遊び研鑽大に得る所あり、歸朝後北海道帝大より學位を獲得せる名醫博として既に江湖に著聞す。

△博士の學歷より閱歷を概述すれば、小樽中學校を經て、大正元年東京慈惠會醫專を卒へ、直ちに北海道區立札幌病院外科に勤務、秦勉造博士の指導を受け、同六年五月辭職して旭川市現住所にて病院を開設す、同十二年四月私費渡米、ヒラデルヒヤ市ペンシルベニヤ醫科大學ウエスター研究所に入りドナードソン教授に就て解剖學研究、同十四年五月よりペンシルベニヤ醫科大學病院にてマツケンニー教授及トーマス教授に就て泌尿器病學研究、後ちジョンス、ホプキンス大學、コロンビヤ大學、ハーバード大學、ミネソタ大學等を見學し、同十四年十月歸朝、再び診療に從事し今日に至る、昭和二年三月學位を受領す。現在は青少年教育に全力を盡しつゝあり、現に、少年團日本聯盟評議員として活躍し、昭和八年八月歐洲ハンガリア國に開催せられたる第四回少年團世界大會に、少年團日本聯盟より日本代表として參加を命ぜられ、滯歐半歲、其間歐洲各國及北米の各醫科大學病院の視察を了へて昭和八年十二月歸朝す。

△學位主論文は「白鼠ノ生後腎臟發育ニ就テ」にして、(1)白鼠ノ腎臟ニ於ケル糸球體數及皮質、髓質ノ發育ニ就テ、(2)扁側腎臟摘出ニ於ケル殘留腎臟ノ發育ニ對スル實驗的研究、(3)扁側腎臟水腫ニ於ケル殘留腎臟ノ發育ニ對スル實驗的研究の三篇より成り、原著は英文なり、參考論文は、(1)尾閭骨部先天性雜腫瘍ノ稀有ナル一例ニ就テ、(2)開腹ニ於ケル皮膚創中ノ細菌檢査ニ就テ、(3)脊椎破裂症ニ就テ、(4)顎骨琺瑯上皮腫ニ就テ、(5)本邦製「サルヴルサン」ノ使用法並ニ副作用ニ就テの五篇、其他の論著枚擧に遑あらず。

△博士は小樽市色内町の人、明治二十一年生る。學究的溫厚の紳士にして、成功せる臨床家としての篤學と成業とは、既に氏の閲歴に歴然として輝き博士の前半生史をして光彩陸離たらしめたり。今は年齒不惑に入る八歳、精力主義の人にして學識、手腕、人格共に愈々圓熟の域に達し、好箇の臨床家として一段の貫祿を備ふ。殊に博士の最も特徴とする所は、診療に臨むや熱心にして、誠實と親切とを盡し、患者をして信頼と尊敬との念を深からしむる點にあり。平生几帳面にして篤行、恭讓禮節を重んじ、時務を缺ぐことなく、同情に富み能く人を愛す、篤き聲望を博し、今日の成功あるも蓋し其の性格の反映なるを想はしむ。研究以外の趣味としては寫眞を好み、繪畫を能くす。當世博士界中、學德兼備せる醫博人物として推奬に値す。

◇

黒田通　△千葉醫科大學助教授にして皮膚科泌尿器科學者たる黒田通博士は、千葉醫專の出身、學位は千葉醫大より獲得せる篤學の士也。主論文は「角膜種痘兎疫ニ關スル實驗的研究」にして、(1)家兎角膜種痘後血清内免疫體ノ出現ニ就テ、(2)角膜種痘後皮膚免疫ノ發現ニ就テ、(3)角膜種痘後牛痘毒ノ血行内侵入ニ就テ、(4)角膜種痘ノ際ニ於ケル結膜ノ態度の四篇より成れり。之を總括するに、博士のなしたる實驗成績は、痘毒を角膜に接種せば痘毒は主として角膜を通過して血行に移行し痘毒滅殺素を發生し皮膚も亦免疫性を獲得するものなりとの決論に到達すと云ふ。

△更に學歴より見たる博士は、獨逸協會學校を經て、大正五年千葉醫專を卒へ、引續千葉縣立病院醫員を命ぜられ、同十二年四月任千葉醫大助手、皮膚科泌尿器科教室勤務、昭和二年一月同大學講師囑託となり、同年七月學位を受領す、次で任同大學助教授、以て今日に至れり。

△茨城縣結城郡山川村の人、黒田昌惠醫博の弟にして、明治二十年生る。眞面目なる學者タイプの士、肥軀强健にして、福德圓滿なる風貌に威嚴を藏し溫容を包み、光頭は其の明晰を語り一層の愛嬌を示す。賦性穩健謹直、謙抑偏に先輩の助力を說き、敢て學者として自己の才學を衒はず、淡々として己れを虛うし、寛厚克く人を容れ學生を愛撫す其の態度の眞摯にして熱情あり溫味ある奥床しさは、人をして其の人格を敬慕せしむるの德を有す。研究は博士の最も趣味とする所にして亦他事を顧みるの暇なきが如し。春秋猶豐富、幸に健康と共に、益々精研活躍あらん事を望むや切也。千葉市本町二ノ一五七三に住む。

◇

西谷長三　△京都診療界は近時醫博人物に富む、玆に推奬品隲せんとする西谷長三博士は、大阪醫大の出身にて、京都帝大より學位を獲得せる錚々たる皮膚科の專門大家にして、特に細菌學の造詣深し。診療所は京都市河原町三條上ル東入に在り、嘖々たる評判を聞く。主論文は「諸種細菌毒ノ輸尿管内注入ニ因スル腎臓並ニ腎盂ノ變化ニ就テ」にして、外に、(1)腎盂粘膜ノ抗原吸收ニ關スル實驗的研究、(2)腎盂ニ注入セラレタル抗體ノ運命ニ就テ、(3)腎盂内細菌注入ニ因スル造血臓器ノ病理組織學的變化ニ就テ、外數篇の參考論文あり。指導教授は京大教授清野謙次及び京都府立醫大教授中川清の兩博士にして、主として微生物學及び皮膚科學を專攻せり。學識と共に多年の經驗を有し、今や獨特の領域に年次發展しつゝある前途は刮目に値す。

△京都の人、明治三十年生る。大正十年大阪醫大の出身にして、京都帝大醫學部微生物學教室を經て、京都府立醫大皮膚科教室にて研究せる結果、昭和二年七月京都帝大より學位を受領せり。學究的溫厚の紳士にして、臨床家として

の特徴を具備す。一度び其の謦咳に接せんか、歡待能く親切を盡し、舉指悠容として迫らず、快活にして能く話し能く談ず、其の態度の眞摯にして紳士的なるは頗る好感を覺えしめたり。其の穩健篤實なる性格は自ら患者をして信頼と敬慕の念を起さしむるの德を有す。趣味としては洋樂殊にセロの演奏に秀で、近來書道を始む、桂洞は其號也。博士の春秋猶頗る豐富にして、輝しき前途は洋々たり。

◇

池上豐　△東京市神田區美倉町四に著名なる池上泌尿科あり、皮膚科、性病科、泌尿器科の大家池上豐博士經營の私立醫院也。開業拮据十年餘に垂んとし、既に堅實なる獨自の地盤を獲得して、好評嘖々の裡に超然たる位地を占む。博士は金澤市の人、明治二十三年生にして、明治四十四年金澤醫專を卒へ、大正二年五月任臺灣總督府醫院醫員、六年十二月任同府技師、七年二月任厦門醫院皮黴科醫長、九年二月任八幡製鐵所病院皮黴科部長、十年十一月任海軍醫官、十一年四月任南洋廳醫院醫官、十四年一月京都帝大醫學部專修科入學、昭和二年四月京都帝大にて學位受領、爾來横濱市にて開業、神奈川縣囑託たりしが、其後東上、現住所に移轉開業今日に至る。スポーツを趣味す。壯齡今や四十有六歳、臨床家として最も活躍時代にて手腕圓熟す。

△學位主論文は『實驗的「フランベシア」ノ研究』にして、(1)實驗的「フランベシア」ノ臨床的及病理組織學的研究(2)同免疫學的研究、再感染ニ關スル研究、(3)同免疫學的研究の四篇より成る。參考論文、(1)「フランベシア」ノ臨床的及病理組織學的知見補遺、特ニ本病ニ現ハルル粟粒立疹ニ就テ、(2)「フランベシア」ノ臨床的及病理組織學的研究、外拾數篇あり。

◇

重松平吾　△福岡市柳橋町と久留米市日吉町に重松病院あり、泌尿器科、皮膚科、性病科專門病院として兩地診療界に斷然頭を拔く、院長は重松平吾博士にして、斯界の重鎭也。又た副院長として本田利秋醫學士あり、開業茲に二十年に垂んとし、福岡には昭和七年六月病院と住宅とを新設せり、古き歴史と相俟つて內部の設備充實し、今や牢乎として拔くべからざる地盤を有す、特に博士の最も得意とする膀胱疾患及び尿道狹窄に至りては、博士獨特の評判と共に他の追隨を許さゞるの概あり。現に日本皮膚科學會評議員たり。殊に特筆すべきは博士の篤學にして、氏は醫術開業試驗出身より奮起して志を立て、研學切磋、終に克く九大教授高木繁博士に就きて泌尿科及び同後藤元之助博士に就きて醫化學の蘊奥を究め、兩教授指導の下に論文完成の結果、九州帝大より學位を獲得して斯界近來の名醫博たる榮冠を擔へるは、立志傳的美談として表彰に値す。其の全二十章より成る浩瀚なる學位論文は、如何に精研の該博なるかを語るものにして、既に學界に其の學問的價値を認めらる。當世博士界中、異彩に富む醫博人物として、茲に推奬するに吝ならざる者也。

△顧みて博士の今日る學歴及び閲歴を公開すれば、明治四十三年醫師試驗合格、大正三年十月九州帝大醫學部醫務介補を命ぜられ、皮膚科教室勤務、同五年九月より久留米市にて開業今日に至る、其間同八年日本皮膚科學會評議員に擧げられ、同十二年一月鐵道省囑託醫を命ぜられ、其後同十三年九月九州帝大醫學部專攻科入學、高木（泌尿科）、後藤（醫化學）兩教授の指導を受く、昭和二年十月學位受領と同時に九大を退學し、爾來再び診療に從事す、同七年六月福岡市柳橋に病院と住宅とを新築し、副院長本田利秋學士と共に兩病院を經營しつゝあり。

△學位主論は「尿閉ノ實驗的研究」にして、外に參考論文として、(1)尿閉私考、(2)輸尿管移植部位ノ撰定移植前後ニ於ケル血液及尿ノ化學的定量並細菌ノ上昇傳染ニ就テ、(3)「ワクチン」療法ニ就テ、(4)後尿道疾患ト洗滌膀胱鏡ニ就テの四篇あり。

△感想として「貧困の中に人となり、克己精勵あらゆる困難と戰ひ、炎熱天を焦す夏の日も、朔風膚を刺す冬の日も

怠らず、惰まず向上研學に精進し、業績の完成に努力を續けたること年久し、後藤、高木兩教授の指導を受けたることを感謝すると共に、肝膽相照したる大木遠吉伯爵が業績の完成前に逝去せられし事は一生の恨事にして感慨無量なり」云々と、述べられたる一片は、氏が苦學奮鬪の跡を如實に物語るものにして懦夫をして起たしむるの感あり、以て頂門の一針として銘すべく、後日境遇を同うするものあらば、此の精神氣慨に學ぶべき也。

△博士は佐賀縣神埼郡三田川村の人、明治廿年生る、佐賀縣出身の維新の元勳大木喬任氏の血緣にある氏は好後繼者遠吉伯と肝膽相照すること年久しく、遠吉伯にして今日世にありせば、氏は醫政家としての希望と實現とを見たるならむに、氏が業績ならざる前に伯の物故せられたるは惜みても猶餘りあることにして、今更思出深きことならん。氏の今日ある立志傳的篤學の跡は、既に博士の前半生史に輝きて光彩陸離たるものあるを見る。今は腕の冴え盛りにて學識、手腕、人格共に圓熟して一段の貫祿を加へ、最も重望せらるゝ得意時代に在り。而かも學成り名を成すの今日、少しも已れの才學を衒ふなく、謙遜にして偏に恩師先輩の助力を說き、淡々として只管己れを虛うして能く人を愛す、其の紳士的奧床しき態度は眞に德操の士に非ればこゝに至るを得ず。研究以外業餘の趣味としては馬を愛し、常にサラブレツト種の愛馬を飼育して子供等と共に樂しむ風あり。

◇

森　涼　△神戸市北長狹通り五ノ七七に皮膚科、泌尿器科專門を以て著聞する森醫院あり、院長は新進にして斯科界近來の大家として名聲を博せる森涼博士也。猶外に同博士の經營せる病理細菌試驗所にては神戸市及び兵庫縣下の一般開業醫より病理細菌血淸學的檢査の依賴に應じつゝあり。兩々相俟つて近時著るしく向上發展の域に進み、日增盛況を呈しつゝあるは頗る矚目に値す。博士は千葉醫專出身の篤學者にして、在勤中兵庫縣立病院病理科醫長中院孝圓博士に師事して病理學を專攻し、後又大阪醫大教授佐谷有吉博士の下に皮膚、泌尿器病學を專攻して、學位は京都帝大より獲得せる少壯の名醫博也。今や獨特の手腕を發揮して獨自の舞臺に活躍する所、博士の得意や想ふべき也。

△顧みて博士の今日ある學歷及び閱歷を概述すれば、千葉縣師範附屬小學校、縣立千葉中學校を經て、大正十年千葉醫專を卒へ、同年八月兵庫縣立神戸病院病理科醫員となり、辭職後大阪醫大皮膚泌尿器科教室にて佐谷教授の指導を受け、昭和二年十一月學位受領後、現住地にて開業今日に至れり。

△學位主論文は「脂肪質試食ガ動物體硬組織ニ及ボス影響ノ形態學的研究」にして、(1)脂肪質試食家兎及家鷄ノ骨組織ノ變化ニ就テ、(2)脂肪質試食家兎及家鷄ノ骨變化ノ病理組織學的發生論、(3)脂肪質試食家兎ノ齒牙及其支持組織ノ變化ニ就テ、(4)「ビタミン」A投與ガ脂肪質試食家兎ノ骨變化ニ就テ、の四篇より成り、參考論文は、(1)流行性腦炎ノ組織學的研究、(2)血栓有機化ノ生體染色ニ據ル研究、(3)血液組織球ノ生理的存在ニ就テ、外七篇あり。

△博士は千葉市の出身、明治三十三年生る。年齒未だ三十有六歲にして、少壯の意氣に燃え、研究心旺盛也。篤學者にして日頃懸命の努力精進を續け、研鑽に餘念なく、今は手腕漸く壯熟して最も得意の時代に入り、熱心克く臨床に勵しみ、同時に同業者たる醫師仲間の便宜を圖り盡瘁に餘念なきは甚だ多とすべき也。人と爲り溫厚にして篤實、謙遜にして少しも已れの才學を誇らず、寬容にして人に厚うし己を虛うする淡々たる態度は其の人格を敬慕せしむ。

◇

竹之內辰四郎　△新潟市東堀前通七に於て皮膚科及び泌尿器科を標榜して開業せる竹之內辰四郎博士は、新潟醫大派の名醫博にして、斯科の大家として名聲を博し、開業拮据數年の今日、既に牢固たる獨自の地盤を開拓して一流の位地を占む。博士は新潟縣中蒲原郡白根町の人、明治二十五年生にして、縣立新潟中學を經て、大正五年新潟醫專を卒へ、直ちに同校附屬醫院に於て皮膚科泌尿器科を見學す、それより陸軍一年志願兵として步兵第五十八聯隊に入

營、同七年六月任新潟醫專助手、同校附屬醫院皮膚科泌尿器科教室勤務、同九年任豫備陸軍三等軍醫、同年新潟縣地方病豫防委員囑託、同十一年新潟醫大副手囑託、同十三年任同學助手、同附屬醫院皮膚科泌尿器科教室に勤務す、昭和二年六月新潟醫大より學位を受領す、次で現住所にて開業今日に至る。當年不惑に入る四歳、手腕圓熟、臨床家として最も得意時代に在り。

△學位主論文は、(1)白癬ニ關スル研究補遺、特ニ新潟地方ノ白癬性疾患ニ就テ、(2)各種「トリコフイチン」ノ白癬性嚢水腫手術ノ際ニ偶然發見セル「フイラリア」母蟲結節ニ就テ、(3)輸尿管黴毒ノ稀有ナル症例、(4)新潟縣下ノ地方病俗稱「ガメ」ノ研究、(5)毳毛部黃癬ノ研究等なり、其他論著夥多。

◇

加門英夫　△京都市高倉四條下ルに加門醫院あり、性病、皮膚病、泌尿器病並に外科を以て著聞す。院長加門英夫博士は、京都府立醫專の出身にて京都帝國大學より學位を得たる新進の名醫博として令名あり。主論文は「鷄胎兒臟器組織培養ノ成長ニ及ボス諸種ノ藥物及ビ色素ノ影響ニ就テ」にして、外に參考論文六篇あり。今や獨特の手腕を發揮するところ、診療手術の好評と相俟つて年次發展向上しつゝあり。多士濟々たる京都醫博界中に逸色せる一人物にして、斯科の新進大家として推奬するに吝ならざる也。

△岡山縣の出身にて解剖學の權威たる加門桂太郎博士（前京都帝大教授）の長男にして、明治二十九年生る。大正十一年京都府立醫專を卒へ、直ちに同校助手を命ぜられ、藥物學教室に勤務し、翌十二年六月京都帝大醫學部無給雇となり藥物學教室に入り、尾崎教授指導の下に藥物學を研究し、昭和三年二月京都帝大より學位を受領す、同月續いて京都帝大醫學部皮膚科、泌尿器科教室に副手として勤務、松本教授の下に研究す、同六年十一月轉じて京都府立醫大副手として產科婦人科一般を研究す、同七年夏以降は專ら現住所に開業し今日に及ぶ。

△當手漸く不惑に達し、少壯の意氣と共に手腕愈々圓熟の域に入り、今は最も活躍奮鬪の全盛時に在り。尊父の衣鉢を受け高潔にして敦厚、臨床に熱心にして克く誠實と親切とを以てす。以て其の爲人を窺はれ、高邁なる人格を敬慕せしむ。

◇

長尾慶吉　△京都診療界は近時頗る醫博人物に富む、長尾慶吉博士は東大系の出身にて、京都帝大より學位を獲得せる新進の名醫博として其の手腕を認められ、現に烏丸通五條下ル東側に診療所を設け、其の專門とする皮膚科、泌尿器科（特に淋病、梅毒）を標榜して日々診療に勵しみ、診療手術の好評と相俟つて年次頭角を顯はし成功の域に在り。主論文は「皮膚病糸狀菌ニ關スル研究」にして五篇より成り、參考論文としては、(1)主論文ノ補遺（二篇）(2)皮膚塗擦ニヨル抗體產生ニ就テ、(3)「ワクチン」注射ニヨル家兎血淸ノ理化學的臨床ノ變化、外六篇あり。指導教授は故土肥慶藏博士、淸野謙次博士、松本信一博士等、何れも斯界の權威なり、その今日ある博士の得意や想ふべき也。

△石川縣金澤市の人、明治二十八年生る。大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同部皮膚泌尿器科教室に入り土肥慶藏博士の指導を受け、同十三年十一月京大大學院に入學し、昭和三年四月學位を授與せらる、更らに同四月より京大皮膚科教室に入りて研究を續行し、昭和五年四月辭職の上現住所に於て開業今日に至る。

△學究的溫厚の紳士にして、當年不惑に入る一歳、少壯の意氣益壯也。臨床家として今は働盛にて最も得意時代に在り。平生「醫は仁術也」をモットーとして、臨床に熱心勵精し克く誠實と親切とを以て終始す。猶春秋頗る豐富なれば、折角の努力奮勉を望むや切也。研究以外には純日本趣味にして、演劇、音樂を好む。

長谷川　宗憲　△東京帝大醫學部講師にして、兼ねて東京警察病院皮膚科泌尿器科醫長たる長谷川宗憲博士は、東大系の皮膚科泌尿器科學者にして、特に絲狀菌病學、黴毒學を最も得意とし、母校の恩師故土肥慶藏教授、遠山郁三教授、高橋明教授の指導を受くる所厚く、母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。現在は前記官職の外尙日本皮膚科學會理事、日本泌尿器科學會評議員として斯道啓發の爲め努力盡瘁しつゝあり。

△愛知縣丹羽郡西成村西大海道長谷川宗七郎の長男にして、明治二十八年生る、二高を經て、大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに附屬醫院皮膚科泌尿器科教室に入る、同十五年二月學術研究の爲め東大より臺灣に出張を命ぜられ四月歸任、昭和二年五月金澤醫大講師として赴任、同三年八月東京帝大より學位受領、同年十二月金澤醫大辭職、同四年二月東京帝大醫學部講師囑託、皮膚科泌尿器科教室勤務現在に及ぶ、同四年三月より五年五月迄泉橋慈善病院皮膚科泌尿器科部長、同四年三月東京警察病院開設せらるゝや招かれて皮膚科泌尿器科醫長に就任現在に及ぶ。

△學位主論文は「臺灣ニ於ケル皮膚絲狀菌病並ニソノ病原菌ニ就テ」にして、參考論文は、「熱帶覆盆子腫ニ就テ」なるが、其他發表せる論文多數あれど「潛伏黴毒」は皮膚科學會宿題報告にして博士會心の作なるが如し。

△好箇の臨床家たるは既に博士の前半生の閱歷の證明する所なり。學究的溫厚の紳士として高邁なる氣品を備え、當年漸く不惑に入る一歲、而かも少壯にして研學の念猶靡勃として禁ぜず、切磋琢勵甚だ勉むる所あり、その潑剌たる前途は更に大に期待せらる。研究以外の趣味としては運動を好み、殊に漕艇の技に長ず、うべなる哉、東大對抗競漕選手として大いに活躍し名漕手たりしなり、著書「ボート」（改造社大正十五年）あり、又花卉栽培を愛好す。東京市牛込區南山伏町一七に住む。

◇

石丸一　△大阪市北區眞砂町二四に皮黴科、泌尿器科を專門として堂々の陣を張り、著名なる石丸醫院あり、院長石丸一博士の經營にして開業古く、既に半乎たる地盤を開拓して日增盛況を呈し、今や成功の位地に在り。博士は德島縣立德島中學校、三高を經て、大正八年京都帝大醫學部を卒へ、同十三年四月京都帝大より學位を受領せる皮膚病黴毒學及び泌尿器病學科專門の名醫博也。

△學位主論文は『皮膚科領域ニ於ケル「ヒヨレステロール」トノ關係、(2)實驗的「キサントマトーゼ」ニ就テ』にして、(1)各種皮膚疾患ト「ヒヨレステリネミ極メテ微量ノ血淸ヲ以テセル、ワツセルマン氏反應、(2)「日ノ病」ニ就テ、(3)「キサントーム」ニ就テの三篇より成る。參考論文は、(1)ニ就テ、(4)所謂汗孔角化症ニ就テ、(5)所謂痣狀皮膚炎ニ就テ、(6) A Contribution to the study of epithelial movement. The corneal epithelium of warm-blooded animals in tissue culture. (7)爪甲技線狀色素斑(Pigmontalio striceta unguium) ニ就テ、(8)所謂異型魚鱗癬 (Ichthgosis parabyfica) ニ就テ、(9)小學校生徒ノ皮膚病檢査成績ニ就テ、等なり、其他論著夥多。

△博士は德島縣那賀郡立江町字大江町の人、明治二十三年生る。多趣味の人にして洋畫、音樂、登山、テニス、其他の運動を好む、禁酒會員にあらざるも酒は飲用せず、煙草を好む。年齡今や不惑に入る六歲、年壯の意氣と共に學識手腕共に圓熟し最も得意時代に在り。

◇

布施四郎　△九州醫學專門學校教授、兼皮膚科泌尿器科醫長布施四郎博士は、九州帝大系の新進にして、皮膚科泌尿器科界現代の權威者たる母校の恩師旭憲吉教授、高木繁教授指導の下に斯學の蘊奧を究はめ、母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。今は多年の蘊蓄を傾倒して專念學生の指導に務め、本職の外學年指導、運動部長、市醫師會理事、佛教青年會長等を兼ね、斯道啓發の爲め奮盡活躍する所あり。九州醫專の年次完成に向上しつゝある

は學界の爲め慶幸とする所にして、斯間博士の貢獻的努力の存在を認め其の勞を多とせざるを得ず。

△博士は京都府立第一中學校、第四高等學校を經て、大正十二年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部皮膚科泌尿器科教室勤務、昭和三年九州醫學專門學校の新設に當り教授として赴任し現在に及ぶ、其間昭和三年十二月九州帝大より學位を授與せらる。

△學位主論文は「聯珠毛ノ研究」にして、參考論文は、(1)胃癌切除ニ因リ全治セル黑色表皮腫ノ一例(最初ノ第一例)(2)內分泌性痤瘡其他なるが、他の論著中「線狀皮膚炎」は博士快心の論文なり、本症は九州、臺灣等に多く旭教授の始めて報告せるものにして、原因全く不明なりしが、其が一の昆蟲「アヌバアリガタハネカクシ」に因る事を確めたり。其後本症の研究に着手せるもの數名あり、學位論文の出來たるもの一兩名ありと聞く。

△博士は滋賀縣伊香郡七郷村唐川布施孫一郎四男、明治二十八年生る、當年漸く不惑に入る一歲、少壯の意氣益壯んにして向學の精神に燃え、切磋卓勵、今猶精研甚だ勉むる所あり。殊に博士の最も特徵として見るべきは、成すべき事と思へば飽迄成さんと努力し、徹底的に成し遂げずんば止まぬ氣慨を有す、その代り爲すべからずと思へばさつさ〳〵と手を引く點にあるか。研究以外の趣味としてはスポーツを好み、又た音樂を愛好す。春秋猶豐富にして研鑽に餘念なき前途は、洋々として博士の將來を語るに餘裕綽々たり、切に自重加餐を祈る。旭憲吉博士は岳父に當る。久留米市櫛原町四六に住む。

◇

江原猪知郎

△津山市戸川町に皮膚科泌尿器科を以て有名なる江原病院あり、院長は江原猪知郎博士也。市の中央部に堂々たる陣容を構え、當地方診療界に於ける儼然たる一大勢力たり。病院の敷地は四百二十坪、建坪二百坪にして外觀の美と相俟つて內容遺憾なく充實す、就中最も完備せるは手術室にして其他診療室、處置室、X光線室、物療室(ラヂウム、人工太陽燈二臺、石英燈チアテルミノ三臺、ソラックス光線)等の施設全く完備す、病室は二十室あり、外に附屬溫泉、サンルームを有す、サンルームの中には四期草花爛漫として咲き亂るゝなど以て知るべき也。

△津山市中之町の人、明治三十三年生る。岡山醫專の出身にして、大正十二年六月卒業直ちに陸軍三等軍醫に任ぜらる、翌十三年三月より岡山醫大皮膚泌尿器科醫局入局、現九州帝大教授皆見省吾博士指導の下に研究、昭和四年二月岡山醫大より學位受領、爾來岡山醫大を辭し本籍地に於て開業今日に至る。

△學位主論文は「ヘルペス」ノ研究にして九篇より成る。參考論文は、(1)癩ノ早朝診斷、(2)黴毒ノ脊髓炎反應、外十七篇あり。「ヘルペス」の研究は近時極めて盛となり本邦に於ても、數多之に關する論文あるも、博士は帶狀單純兩「ヘルペス」をあらゆる方面より研究し其の病原體の同一なることを確め之と水痘との病原體比較研究に及び延いて腦炎の病理に論及し全九篇に及ぶ。其他癩の電氣的早期診斷法は興味あり、先天、後天黴毒の脊髓炎檢査に於ては其の症例數多檢査方法の數多比較等本邦にては比なし。

△「醫界に於て或は醫業の困難を云々するもの數多ありと雖要之至誠一貫仁術を施すことによりて余は未だ曾て醫業經營の困難を云々せることなし、艱難玉汝は余の一貫せる心條なり」云々、とは氏の感想の一片なり。少壯氣鋭にして手腕漸く壯熟の域に入り、今は働盛にて至誠一貫をモットーとして、終始克く努力奮鬪する人也。故に人或は時に云ふ融通性なしと、而かもその正直一徹にして艱難玉汝を一貫せる博士の心條は、克くその今日の成功を產める基にして、其の精神氣慨こそ尊ぶべき博士の長所と見るべき也。若し夫れ其の診療手術に至りては、卓越せる手腕と相俟つて近鄕既に嘖々たる定評あり。業餘は乘馬を愛好して其の日の心勞を慰する風あり。

◇

森山儀六

△滿鮮診療界の一勢力たる日赤朝鮮本部病院に皮膚科泌尿器科醫長として、森山儀六博士のある

は言はずもがな、氏は長崎醫大系の新進にして、母校の恩師駒屋銀治博士に親炙して皮膚科泌尿器科の蘊奥を究はめ學位主論文『血行性家兎絲狀菌性疾患ニ於ケル「アレルギー」ノ研究』及び參考論文、(1)「サルヴルサン」皮膚炎患者血清ノ受動的移行ニ就テ、(2)所謂臘梨頭ノ研究（第一、二、三回報告）、(3)ベツク氏類狼瘡ノ病菌ニ就テ、(4)諸感病癬ノ知見補遺外十二篇を提出して、長崎醫大より學位を獲得せる後、直ちに朝鮮醫界に進出して獨特の手腕を發揮し、今や斯科專門の名博士として信望を博し活躍する所あり。

△長崎縣東彼杵郡上波佐見村森山顯の長男、明治三十二年生にして、大正十二年長崎醫專を卒へ、直ちに副手として長崎醫大に勤め、十三年助手に任ぜられ引續皮膚科泌尿器科教室に勤め、昭和四年五月迄研究に從事し學位を得、同年同月現職に就任今日に至る。

△未だ少壯にして新進の氣象に富み、手腕漸く壯熟の期に入る。賦性溫和にして敦厚、快活にして患者に親しみ人を愛す、蓋し臨床家としての特徴を具備する學究的紳士と云ふべき也。今年齒漸く三十有七歳、春秋頗る豊かにして、前途猶洋々たるは更に大に待望せらる。切に自重加餐を祈る。京城府竹添町三ノ三に住す。

◇

傍島亘

△福岡市天神町五五に天神病院あり、皮膚科、泌尿器科を以て著聞し、斯科を以て當地診療界に超然たる位地を占む。院長は斯科の大家傍島亘博士にして、博士の經營に成り開業拮据拾年に及ぶ。博士は一高を經て大正三年九州帝大醫學部を卒へ、同年十二月任海軍々醫中尉、爾來横須賀海軍病院附、軍艦日進乘組、第十七驅逐隊附、第二驅逐隊附、大正三四年戰役從軍（印度洋警備）等に歷任して、大正六年任海軍々醫大尉、其後海軍機關學校附、特務艦關東乘組（日獨戰役動務）地中海派遣、舊獨逸潛水艦軍醫長（日獨戰役動務）、横須賀海軍工廠附等に歷任す、大正九年十月叙勳五等授双光旭日章、同十年十二月豫備役被仰付、大正十年十二月九州帝國大學醫學部副手を囑託せられ皮膚科學教室勤務、昭和二年四月同辭任、次で製鐵所病院皮膚科長囑託、昭和二年七月九州帝大にて學位を受領す、其後現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「先天性禿髮症ノ研究」にして、參考論文は、(1)尿ノ結氷點降下度ト比重トノ關係ニ就テ、(2)皮膚疾患ニ對スル「ラヂウム」療法、(3)福岡地方ニ於ケル兒童ノ凍傷ニ就テ、(4)血族結婚ト皮膚疾患、(5)急性尿道淋ニ對スル「チオノール」銀ノ効果ニ就テ、(6)新嘉坡方面ニ於ケル「デング」熱ノ臨床的觀察、等なり。其他論著夥多。

△博士は、明治二十一年東京市日本橋區箱崎町四丁目一番地に生る。多年海軍々醫界に活躍して幾多の功績を殘し、診療界に躍進して以來獨自の地盤を築き、今や悠々たる位地を占め、仁術の爲め最善を盡すに努力勵精日も尚足らざるの概あり。趣味としては各種運動、室内遊戯及び映畫演劇の批判等を好む。好箇の臨床家として玆に推奬し敬意を表す。

◇

山本俊平

△京大系の新進にして錚々たる皮膚黴毒學、泌尿器病學者として知らるゝ山本俊平博士は、現に京都帝大醫學部講師として皮膚科泌尿器科教室に勤務の傍ら、大阪女子高等醫專教授として附屬病院（京阪沿線瀧井驛前）皮膚科泌尿器科にも兼務し、日々學生の指導と診療と研究とに勤しみつゝあり。博士は京大教授松本信一博士の愛弟子にして多年恩師の親しき指導を受け、主論文『「スピロヘーター」ノ染色ニ關スル研究』外參考論文九篇を提出して母校より學位を獲得せる所謂京大派の名醫博たる一人物として其の存在を認められ、其の新知識と併せて臨床的手腕は既に定評あるが如く、獨特の領域に躍進しつゝあるを聞く。而かも未だ少壯にして有爲の前途は猶洋々として豫測すべからざるものあり、今後の精研努力と相俟つて更に大に期待せらる。

△靜岡縣田方郡伊東町岡山本藤五郎の二男にして、明治三十一年生る。大正十三年京都帝大醫學部卒業、直ちに同學

部皮膚科泌尿器科教室に入る、副手、助手を經て、現に京都帝大醫學部講師たり、昭和四年十月母校より學位受領、同七年四月より大阪女子高等醫專教授を兼務す。

△學者肌の人としての博士や、年齒未だ三十有八歲にして少壯の意氣益壯也。志操堅實、熱心なる研究家にして、今は只管醫育と臨床と研究とに全力を捧げて熱心之れに當り、敎壇と云はず、臨床と云はず、熱情と誠實とを以て終始す、其の態度の眞摯にして熱あり力あるは、將來ある博士の後半生史を語るに餘裕綽々たるものあり。私宅は京都市左京區田中飛鳥井町七に在り。

◇

脇元秀義　△競爭最も激烈なる帝國診療界に對峙する浪速診療界の現狀を對比し見るに、多士濟々として群雄割據の奇觀なしとせず。此間に介在獨立して一家を成すも亦た容易ならんや、須く此の環境を物色打診して著者が近來成功の一人者として玆に推奬品隲せんとするは脇元秀義博士也。卽ち博士の經營せる皮膚科、泌尿器科脇元病院は大阪市西區江戸堀南通一丁目（市電江戸橋停留所東入）に堂々の陣容を構へ、充實せる內部の設備整ふ。博士は熊本醫大系に屬し學位は京都帝大より獲得せる名醫博にして、皮膚科、泌尿器外科を專門とし、特に泌尿器外科を最も得意とし、腎臟機能檢査、膀胱鏡、尿道鏡檢査に特技を有す。其の玲瓏たる技術的手腕の好評は、氏が溫厚篤實なる性格と、兩々俟つて益々人氣を焙り、歲と共に日々繁榮の盛況を呈しつゝあるは囑目に値す。

△宮崎市の人、明治廿九年生にして、大正八年熊本醫科大學卒業後、直ちに大阪回生病院に就職し、同十年大阪華陽堂病院副院長となる、斯間院長井尻辰之助博士に師事して造詣する所あり、同十五年京都帝大醫學部皮膚科泌尿器科教室專修科に入學し、皮膚科泌尿器科を專攻す、昭和五年二月學位受領、同年華陽堂病院を辭し開業今日に至る。

△學位は京都帝大より獲得せるが、指導敎授は藤波鑑、淸野謙次、木村廉、松本信一等の諸博士にして、完成せる學位論文は「諸種ノ細菌毒素注入ニ因ル脂肪物質研究」ガ主論文にして、七篇の參考論文あり。卽ち(1)畢丸、攝護腺精液ノ臟器特異性ニ關スル研究（三編）、(2)溶血現象ニ關スル知見補遺（三編）、(3)Trypanosoma gambiense 接種家兎諸臟器ノ糖原質ニ關スル研究、(4)Trypanosoma 病ノ血糖ニ及ボス影響、(5)血糖量ノ變化ヨリ觀タル二、三藥物ノ比較、(6)網狀織內皮細胞ニ關スル知見補遺、(7)組織體外培養ニ因ル脂肪物質ノ研究等これなり。著書としては、(1)性病、(2)通俗皮膚病の話等あり。其他多くの論文を發表して、學界に貢獻する所あり。

△感想に曰く『醫師は其本職を守り「醫は仁術なり」をモットーとすれば可なり』云々と、至言々々、以て銘すべきも也。學究的篤學の紳士にして、當年漸く不惑に達し、少壯にして進取の氣象に富み、手腕壯熟、今は最も活氣全盛の時代に在り。拮据勤勉、精力主義の活動家にして、平生刀圭甚だ多忙なるに拘はらず、飽迄眞面目なる臨床家として立ち、「醫は仁術也」をモットーとして終始し、誠實と親切とを以てす、其の態度の眞摯にして溫味あるは、自ら其の高邁なる爲人を物語るもの也。業餘の趣味としては、乘馬（關西愛馬會員）、登山、スポーツ觀賞（何技に限らず）などを好み、書道（京都田中米城に就き）は南溪と號す。

◇

尾形貞男　△帝都醫博界は競爭激烈にして恰も群雄割據の異觀を呈す、而かも各科博士に就ての認識を得んとするも亦た必要ならずや。玆に紹介せんとする尾形貞男博士は、泌尿科を標榜して新宿驛前三好野橫入に開業し、日々診療に勵しみつゝあり。學系より觀たる博士は千葉醫專の出身にして、大正三年同校卒業後、同年十二月任海軍軍醫少尉、同五年海軍軍醫中尉、同八年海軍軍醫大尉に任昇、同十一年休職となる、同十二年橫濱濟生會病院外科、同十三年東京市深川療養所外科勤務、同十五年千葉醫大皮膚泌尿器科敎室に入り、昭和五年同醫局を辭す、同年五月千葉醫大より學位を受領し、翌六年より現地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「千葉地方ニ於ケル白癬ノ研究」にして、參考論文は、(1)淋毒性副睾丸炎ノ「エレクトラルゴール」局所注射療法、(2)皮角症ノ一例、(3)顏面播種狀粟粒樣狼瘡ニ就テ、(4)ボラチー氏培養基ニ就テ等なり。群馬縣の人、明治二十四年生る、當年四十五歲也。

◇

吳　元　錫　△朝鮮診療界は近來博士人物に富む、玆に推奬品隲せんとする京城府堅志洞七吳元錫病院長吳元錫博士は、皮膚科泌尿器科の新進大家として京城醫博界に重きを爲す一人物たるを至囑す。病院は現代式洋風の二階建煉瓦造（昭和七年新築）にして、新裝の結構外美と相俟つて內容充實し、手術室及び光線療法の設備あり。博士自ら日々診療に勵しみ、診療手術の好評は益々人望を集中して門前常に賑ふ。博士は京城醫專出身の篤學者にして、東大より學位を獲得せる所謂東京帝大派の名醫博として其の存在を認められ、殊に朝鮮出身者中の代表的學者たるは特筆稱讃に値す。

△博士は大正八年京城醫專卒業、直ちに忠淸北道淸州慈惠醫院勤務、同九年京都帝大醫學部辻內科勤務、同十年慶尙南道統營郡に開業、同十一年朝鮮總督府醫院醫員、同十五年京城醫專助敎授兼任、昭和三年京城帝大醫學部助手、同年京城醫專講師囑託、同年東大に學位論文提出、同五年七月學位受領、同論文は大正十三年より昭和三年に至る迄、朝鮮總督府醫院研究室及び京城帝大醫學部大澤藥物學敎室に於て研究せるものなり、昭和六年七月以來京城府內に開業今日に至る。專門は皮膚科泌尿器科にして、指導敎授は辻寬治、渡邊晋、廣田康、片岡八束、大澤勝博士等なり。

△學位主論文は「水銀劑ノ利尿作用機轉ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)「インスリン」ノ藥物學的知見補遺、(2)植物性「リポイト」ノワ氏反應ニ於ケル抗元性、圓形脫毛症ノ原因的知見補遺、(3)皮膚浸出液ノ毒性ニ就テ等なり。

△博士は朝鮮黃海道延白郡銀川面道南里にして吳世彰の長男、明治三十一年生る。學究的溫厚の紳士にして、其の今日ある篤學は既に氏の閱歷よくこれを語り、博士の仁術に一段の光彩を放てり。年齒漸く三十有八歲にして、今は手腕壯熟の時代に入る。熱心なる臨床家として多大の聲望を博し、猶春秋に富む前途の活躍を一層期待せらる。賦性穩健篤實にして、診療に臨む態度の眞摯且つ熱情あり、和氣溫情の靄々たるものあるは、博士の性格の表れにして高邁なる人格を敬慕せしむ。

◇

阿　久　津　勉　△帝都診療界に於て神田區淡路町二ノ二七に在る阿久津病院と云へば、歷史ある泌尿器科界のリーダーたることは世人周知の如し。院長は斯界の先覺者たりし故阿久津三郎博士の嗣子阿久津勉博士也。博士は東京市の人、明治三十年生にして、大正十三年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに附屬醫院泌尿器科に勤め、同十五年藥理學敎室に轉じ研究に從事す、學位論文「腎炎ニ於ケル蛋白尿ノ實驗」を提出して、昭和五年八月母校より學位を獲得せる名醫博也。斯父にし斯子ありとは博士の如きを云ふ乎。亡父の名譽を恥しめず、昔日の繁榮を持續して牢乎拔くべからざる今日の地盤を有するは祝福すべき也。住宅は本鄕區妻戀町一〇に在り。

◇

新　井　嗣　雄　△東京市淀橋區百人町三ノ二六三に開業せる新井嗣雄博士は、其の專門とせる泌尿、性病科を標榜し時代に則し專ら經費輕減をモットーとして診療界淨化の爲に躍進しつゝあり。博士は群馬縣群馬郡大類村の出身、明治二十八年生れにして、大正七年東北帝大醫學專門部卒業、同時に海軍々醫に任官、昭和三年三月軍醫大尉を以て豫備役に編入、爾來慶應義塾大學醫學部助手となり、皮膚泌尿器科敎室に入り笹川、北川兩敎授の指導を受くる事三ケ年、後病理細菌學敎室に轉じ草間敎授指導の下に泌尿生殖器病理を研究する事二ケ年に及ぶ、終に昭和六年二月慶

大より學位を受領せり。

△主論文は「所謂特發性腎出血ノ本態ニ就テ」にして、參考論文は、(1)淋毒性尿道側骨炎ノ病理ニ就テ、(2)所謂腎盂靜脈逆流現像ノ病理組織學的研究其他三篇あり。年齒不惑に入る一歲、少壯にして今は腕の冴え盛なれば、最も得意の時代なるべし。

◇

村上甫　△帝都城東區龜戸共立病院に皮膚科、泌尿器科を擔任しつゝある村上甫博士は、明治四十二年東京帝大醫科大學卒業後、陸軍々醫となり、爾來累進して昭和二年一等軍醫正を以て現役を退く、其間殆ど衞戍病院附又は衞戍病院長として各科に趣味を有するも、殊に外科、性病、泌尿、皮膚科を擔當し診療に從事せり、退職後傳染病研究所に入り宮川教授指導の下に研究し、退所後阿久津博士の下に泌尿科の教導を受く、昭和六年三月東京帝大より學位を授與せられたり。

△學位論文は「非經口的肝細胞注入ノ肝臟機能ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究」と題する一篇なり。東京市の人にして、明治十七年生る。當年知命に入る二歲、元氣旺盛、力行主義の勤勉家にて仁術を本分とし、其の臨床に立つや熱心甚だ務め、誠實と親切とを以て終始す。賦性高潔にして功名榮達には恬澹として顧みず、人に接するに快活にして溫情の掬すべきものあるは、好箇の臨床家として敬意を表すべき也。東京市淀橋區諏訪町一〇八に住宅あり。

◇

森部庫司　△久留米市日吉町二丁目六十九番地に於て實地診療中の森部庫司博士は、森部病院長として其の專門とせる皮膚科、性病科、泌尿器科の領域に邁進して獨特の手腕を揮ひ、圓熟練達せるメスの評判良く、開業日猶淺きにも拘はらず、漸次獨自の地盤を擴張して益々發展の盛況を呈しつゝあり。學系よりすれば大阪醫大出身の新進にして、九州帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。研鑽多年、主として母校の恩師櫻根孝之進博士（皮、泌）を始め、大阪の井尻辰之助博士（皮、泌）、九州帝大教授故旭憲吉博士（皮、泌）、同高木繁博士（泌尿器外科學）、同石原誠博士（生理學）、同板垣政參博士（生理學）、同高安愼一博士（溫泉治療學）等々に就き斯學の蘊奧を究め、經驗豐富にして臨床に堪能なり。今や當地診療界に於ける斯科の新進大家として囑望せらるゝ所深し。

△博士は大正十二年大阪醫大卒業後、直ちに九州帝大醫學部皮膚科黴毒學教室に入りて研究、次で同大學生理學教室に轉じ一般生理學及び血淸學研究、更に同大學皮膚科、泌尿器科學教室に於て主として泌尿器科を專攻し、昭和五年以來高知市高知病院皮膚科泌尿器科長として就任せり、同六年五月九州帝大より學位受領、同九年一月高知病院を辭し、久留米市にて開業今日に至れり。

△學位主論文は「筋蛋白質ノ血淸學的研究」にして二篇より成り、參考論文として、(1)攝護腺肉腫ノ一例、(2)家兎野兎及アマミ黑兎間ノ血淸學的識別ニ就テ、(3)日本產甲蟹ノ血液ノ機能、(4)抗體價ノ周期的變動ニ就テ、外英文一篇あり。

△博士は福岡縣朝倉郡大福村長淵の人、明治二十九年生る。今年齒漸く不惑に達す、眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、好箇の臨床家として當年の意氣を以て起ち、其の專門に至つては學深淵にして多年の經驗に富み、今猶學術の研究に對する熱心と、患者に對する眞摯にして親切なる態度とは、良醫としての價値を高むる所以にして、今日の聲望を博するも亦偶然ならざるを思ふ。多趣味の人にして旅行、登山を好み、圍碁をたしなみ、又俳句を時にひねる。賦性謹直恪勤、快活にして人を愛し能く人に親しまる。春秋猶頗る豐富にして、勵精餘念なき前途の發展は更に大に待望せらる。

◇

窪田歷三郎　△秋田市小泉病院に於て得意の皮膚科、泌尿器科を擔當しつゝある窪田歷三郎博士は、東京慈惠醫科續篇（皮膚科、泌尿器科）

醫專（大正十一年卒業）の出身にして、卒業後海軍々醫を志し、大正十一年海軍々醫少尉に任官、十三年中尉、十五年大尉に昇進せしも、病氣のため職を退き、昭和二年より北海道帝大醫學部皮膚科泌尿器科教室に入り、勤務の傍ら志賀亮教授指導の下に專念研究に沒頭し、六年十一月北海道帝大より學位を得、次で北海道帝大醫學部講師として學生指導の傍ら研究を續行しつゝありしが、其後職を辭して現職に就任せり。たま〳〵氏の感想を述べて曰く「自分は不肖なるにも拘らず研究に際し多年鞭打ち御指導の勞をとられたる恩師志賀亮先生の御芳志に對して深甚の感謝の意を捧ぐるものである」云々。恩師に對する恩顧と敬崇の念に溫きは、その爲人を物語るもの也。

△學位主論文「腎臟結核發生病理ニ關スル實驗的研究」にして、二篇より成る。參考論文として、(1)ホーン氏結核菌培養證明法ヲ腎臟患者尿ニ應用シタル成績及ソノ速達法ニ關スル知見、(2)紫外線、X線、ラヂウム線ノ結核菌ニ及ボス影響ニ就テ、(3)攝護腺肉腫ノ症例增補、(4)レツクリングハウゼン氏病ニ於ケル貧血性母斑ニ就テ、(5)生鷄卵內ニ於ケル結核菌、癩菌、釀母菌竝ニ「スピロヘータ」ノ態度ニ就テ、(6)「アブロヂール」ニヨル經靜脈性「ピエログラフイー」ニ就テ一報、二報等あり。

△博士は青森市の人窪田駿吉の三男にして、明治二十九年生る。居常の趣味としてはスポーツに多大の興味を有し、又た園藝を嗜なむ風あり。賦性謹直にして禮儀正しく、應答善く人を納得せしむるの德を有す、久しく病床にありしも今は健康舊に復し、日々精勤、孜々として專門の診療に勵みつゝあり。切に自重加餐を祈る。秋田市楢山表町六二に住む。

◇

武市利雄　△宮崎縣立病院に皮膚科部長として新進の武市利雄博士あり。長崎醫專の出身にて、九州帝大教授石澤、高木兩博士指導の下に研究の結果學位論文を完成せり。卽ち主論文が「副生殖腺上皮ノ細胞學的研究」、參考論文が、(1)膿毒血淸反應ノ臨床成績、(2)攝護腺肥大症ニ於ケル「ラヂウム」療法ノ經驗、(3)輸尿道上皮ニ於ケル「グリコゲーン」ニ就テの三篇にして、學位は九州帝大より獲得せり。臨床的經驗に富み、今や獨特の新手腕を發揮して名醫博たるの名を馳せ內外の信望を博す。而かも未だ少壯にして精研に餘念なく、輝しき前途は猶洋々として遼遠なるかを思はしむ。

△更にその學歷及び閱歷を紹介すれば、博士は大正十一年長崎醫專卒業、次で九州帝國大學醫學部皮膚科泌尿器科教室（主任旭教授、高木教授）にて實地研學、翌年宮崎縣立病院に赴任、昭和四年四月より昭和六年三月迄九大醫學部に留學を命ぜられ、石澤（解剖學教室）、及高木（皮泌科教室）兩教授の指導を受け、論文を提出して昭和七年一月學位を授與されたり。

△博士は德島縣美馬縣貞光町の人、明治三十一年生る。當年三十有八歲の少壯にして意氣益壯也。學究的溫厚の紳士としての品格を備え、手腕壯熟、今は働盛にて、臨床に熱心勵精亦他事を顧みず、患者をして信賴と敬慕の念を起さしむるの德望を有す。趣味は俳句と卓球とにあり。宮崎市元宮町三二に住む。

◇

鴛海元則　△京城府本町四ノ一一二にて、皮膚科、泌尿器科、性病科を標榜して開業せる鴛海元則博士は、長崎醫專出身にして、大正八年卒業後、九州帝大醫學部皮膚科教室介補として勤務の傍ら研究に從事し、翌九年長崎縣立病院皮膚科勤務、昭和二年京城帝大醫學部生理學教室にて研究、同七年二月長崎醫大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は「生活體ノ刺戟効果ニ就テ」にして、外に參考論文四篇あり。大分縣の人、明治二十七年生れにして當年四十有二歲也。開業拮据、孜々營々として臨床に勵精努力し、今や手腕愈よ圓熟の域に入り一段の重望を加ふ。平生の趣味としては醫療と研究との外何等の道樂を求めず、「醫は仁術也」をモットーとして、一意專心、其の天職に

一路邁進する熱誠の士也。

◇

鈴木才助　△名古屋診療界に於ける私立病院中の一勢力たる楠病院は、世人周知の如く院長楠太博士の經營にして、中區桑名町二ノ四に在り、結構宏壯、完備せる內部の設備と相俟つて卓然群を拔く。鈴木才助博士は副院長として克く院長を輔佐し、卓越せる新手腕は楠博士の篤き聲望と共に益々人氣を集め、楠病院をして今日の隆盛をあらしめたるもの、博士の力亦與つて尠からず。博士は愛知醫大出身の衞生細菌學者にして、特に免疫學の造詣深く、專門は皮膚科、花柳病科を以て立ち、恩師大庭士郎博士に就きて研鑽大に得る所あり、名古屋醫大より學位を獲得せる新進の醫博也。

△博士は昭和二年愛知醫大卒業後、直ちに名古屋市私立楠病院に勤務、同四年辭職の上名古屋醫大衞生細菌學教室に入り、同七年迄研究に從事し、同年六月名古屋醫大より學位を受領す、爾來再び楠病院に復歸し副院長として診療に從事し今日に至る。

△學位主論文は「牛及び犬胎兒臟器ニ於ケル所謂胎生期性抗原並ニ臟器特異性ニ就テ」にして、參考論文は、(1)黴毒患者血淸ノ低溫度ニ於ケル抗補體作用ニ就テ、(2)黴毒患者血淸並ニ腦脊髓液ニ對スル腦及睪丸酒精越幾斯ノ抗原性ニ就テ、(3)胎生期血球並ニ人AB血球注射ニヨル家兎血淸ワ氏反應ノ上昇ニ就テの三篇なり。

△感想の一片を披瀝して曰く「現代醫師は科學に立脚し大衆治療本位に眞面目なる醫師たらざれば吾人醫師は社會の非難の的となり、醫師の危機を脫する能はず」云々。出身地は愛知縣渥美郡伊良湖岬村にして、明治三十一年生る、年齒漸く三十有八歲也。少壯氣銳にして研究心に富む、學究的溫厚の紳士也。研究と醫療とに趣味を集中して亦他事を顧みず、拮据黽勉、熱誠克く臨床に勵しみ、患者に對する態度の眞劍にして熱情あり、誠意、親切にして溫味あるは、博士の長所として殊に評判良し。以て其の性格の一斑を窺はれ、同時に高邁なる人格を敬慕すべき也。名古屋市南區豐田町堤添三六九二に住む。

◇

鶴井保　△大阪市住吉區旭町二丁目二一に鶴井皮膚科泌尿器科醫院あり、院長鶴井保博士の經營、外容結構にして諸般の設備整ひ內容充實す。學系は大阪醫大派の學流を汲む名醫博にして、母校の恩師佐谷有吉博士に親炙して造詣する所あり、研鑽多年の經驗と共に今や手腕圓熟し、玲瓏たる診療、手術の好評は益々人氣を吸收して隆々たる盛況を呈しつゝあり。

△顧みて博士の學歷、閱歷を公開すれば、大正十五年大阪醫大を卒へるや、母校に止りて中川教授につき生理學を、櫻根教授につき皮膚科泌尿器科を專攻し、昭和二年より六年迄大阪市立市民病院皮華科に勤務す、昭和六年大阪帝大醫學部大學院に入學す。學位論文「腎臟膿瘍ノ實驗的研究」を完成して、昭和七年七月母校より學位を受領せり。

△博士曰く「臨床家は常に疾病の治療乃至豫防に就ては完璧を期すべく、ために醫學の趨勢に就ては特に留意すべきは勿論之を實際自己のものにせむ不斷の努力を吝まざることを望む之れ第一なり、第二には藥品の精製低廉を望む、ために製造家にあつては誇大なる宣傳費等の無用なる冗費を省き、醫家に在ても亦必要以上の廣告費用を省き以て醫療の輕減を計るべく、第三には醫師道德の向上を切望す」云々。健實なる臨床家の銘とすべき也。

△博士の出身地は愛媛縣伊豫郡松前町にして、明治三十二年生る、當年三十有七歲也。年齒と共に手腕漸く壯熟して今は最も得意の時代に入る、其の診療に臨むや熱心にして只管仁術を以て任じ、患者を待つに誠意親切を以てすとの評判也。賦性溫厚にして篤實、謙抑己を持して人を愛す、居常また人に對するに應答の禮を厚くし、時務を見るに同情と理解とを以てす、其の眞摯にして寬容なる態度は、臨床家としての特徵を具備するを喜ぶ。

◇

三輪春雄

△官海に遊弋勵精して、十有餘年一日の如く地方診療界の爲め、活躍奮盡し來りし三輪春雄博士は、曩に衞生技師愛知縣立稻永病院長を勇退して以來、名古屋市西區新道町三ノ三三を卜して獨立開業し、其の專門とする皮膚科、泌尿器科を標榜して立てり。手腕、聲望相俟つて大衆より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは多幸とせざるを得ず。博士は愛知醫專の出身にして血淸化學の造詣深く、專門としては皮膚科泌尿器科の領域を以てす、學位は名古屋醫大より獲得せる名醫博として遇せらる。感想の一片を披瀝して曰く「朗かな常識的な社會が望ましい、都會人は此頃大分神經的になつてゐる」云々。

△博士は愛知縣立第一中學校を經て、大正九年愛知縣立醫學專門學校卒業、同十一年愛知縣技手拜命今日に至る。其間母校の恩師田村春吉敎授。堀田一雄敎授、大島福造助敎授等指導の下に血淸化學及び皮膚科泌尿器科を研究し、昭和七年十月名古屋醫大にて學位を受領せり。

△主論文は『肺臟の「コレステリン」ニ對スル態度』にして、第一篇肺臟ノ「コステリン」分解作用、第二篇窒息ノ際ニ於ケル動脈血「コレステリン」量ニ就テの二篇より成る、參考論文は、(1)瀉血ニヨル血液「コレステリン」量及血糖ノ變化、(2)「インズリン」ノ家兎血液「コレステリン」量ニ及ボス影響、(3)卵巢良性腫瘍患者ノ血液「コレステリン」量ニ就テ、(4)產褥初期ニ於ケル人乳「コレステリン」量ニ就テ、(5)腎臟膿瘍ノ實驗的研究補遺、(6)筋肉中ニ刺入セラレタル折鍼ノ運命ニ就テ等。

△博士は名古屋市の人、故秀直の三男にして、明治三十年生る、當年三十有九歲、少壯の意氣益壯にして研究心に富み、獨立の活舞臺に奮鬪努力する所あり、氏の得意や想ふべき也。診療に臨むや熱心にして克く誠實と親切とを以てす、其の篤き信望を博せるも亦た偶然ならざるを思はしむ。文學趣味豐富にして文才に長ず、人に對するに應答禮を厚ふし、其の尺牘又た雅趣あり情味に富む。

◇

瀧川浩一郎

△大阪市西成區北吉田町二五に皮膚科、泌尿器科、性病外科を以て群を拔き、評判嘖々たる瀧川醫院あり。斯科界の新進大家、豫備陸軍一等軍醫たる瀧川浩一郎博士の診療所にして、開業拮据數年、新裝せる內部の設備整ひ、博士自ら日々臨床に勵しみ、診療手術の好評と相俟つて近來著るしく發展し、今や牢乎として拔くべからざる地盤を有す、蓋し成功と云ふべき乎。博士は新潟醫專出身の篤學者にして、東大敎授高橋明、大阪帝大敎授佐谷有吉、同助敎授谷村忠保等諸博士に就き皮膚科泌尿器科學を、大阪帝大敎授笠原道夫博士に就き小兒科學を、同中川知一博士に就き生理學を研究し、大阪帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。診療界に進出して以來獨自の舞臺に活躍し、旣にして克く今日の地盤を築き上げたるもの、博士の得意や想ふべき也。

△博士は大正八年新潟醫專卒業後、直ちに任同校附屬醫院皮膚科助手、同年九月陸軍衞生部見習醫官として入隊、同九年三月任陸軍三等軍醫、同十年三月北滿派遣の爲大阪港出發、同十一年十二月任二等軍醫、同十二年五月內地歸還、昭和二年三月任一等軍醫、同年十二月依願豫備役被仰付、同時に大阪醫大副手並に同附屬醫院醫員拜命、同四年三月依願同副手並に醫員被免、同年四月大阪醫大專攻生として入學、同六年五月同大學廢止大阪帝大醫學部專攻生に編入せらる、同七年十月學位受領、其間大正十一年西伯利亞出兵事件の功勞に依り金貳百五拾圓を賜ふ、現に正七位たり昭和七年十月大阪帝大より學位受領、以來現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は、(1)尋常性白斑ニ關スル研究にして（第一報）、(2)同（第二報）、(3)同（第三報）、(4)同（第四報）の四編より成り、參考論文は、(1)腎臟結核ノ臨床的觀察、(イ)第一編腎臟結核ノ統計研究ト手術成績、(ロ)第二編腎臟結核患者ノ剔出腎病理解剖組織學的所見ト臨床所見、(ハ)結核腎剔出後ニ於ケル膀胱結核病竈ノ經過、(ニ)結核腎

剔出ノ肺臓結核病竈ニ對スル經過ニ就テ、(2)狼瘡狀毛瘡ニ就テ、(3)尋常性白斑ニ關スル研究、(4)所謂結核疹發生ニ關スル一考案（實驗的研究）、(5)フオツクス、フオアタイス氏病ニ就テ、(6)色素性毒麻疹ニ就テ等なり。

△醫界達觀として感想を述べて曰く「方今醫學的研究は概ね動物實驗に流れ臨床的方面の等閑に附せらるゝ趣あり。而して一朝學位獲得の曉は一轉して人類臨床の大家となり動物臨床醫家となる者有るを聞かず摩可不思議の第一たらずや。更に吾人皮泌科に於ては法網之を許さゞるの徒の平然と業に從ふ者ありと聞く、法網是を許すも他宗より出でて黄白の爲め敢て之れを爲すの徒あり、腕に依らず口舌と看板に依りて治療せらるゝに於ては天下の患者はたまつたものにあらず」云々。

△博士は長野縣更級郡東福寺村醫師瀧川辰二の長男、明治二十六年生る。學究的溫厚の紳士にして、篤學者たり、其の今日ある學歴は博士の前半生史に盡きて餘蘊なし、殊に多年陸軍々醫界に活躍して殘せる功績は言はずもがな、實地の經驗を積みて玉成せる手腕振りは大なる收獲たるを失はず。今は分別盛にして年齒漸く不惑有三、年壯の意氣益壯にして研究心に富み、學識、手腕、人格共に圓熟の佳境に入り最も得意の時代に在り。殊に體軀强健にして志操堅實、診療に臨むや忠實、熱心にして克く誠實と親切とを盡し、其の態度の眞面目にして誠意あるは評判にて、博士の特徴として傳へられ篤き信望を博す。多趣味の人にして野球、水泳、劍道を能くし、犬の喧嘩を好む、又酒殊に日本酒を嗜しむ。

◇

池田　統治郎　△神戸市神戸區中山手通三丁目に皮膚科及び泌尿器科を以て著聞する池田病院あり、池田統治郎博士の經營にして、開業拮据十年餘に垂んとする今日、多年の聲望と相俟つて獨自の地盤を堅め、博士獨特の手腕の好評は益々遠近の人氣を吸收して今や超然たる位地を占む。博士は九州帝大醫學部の出身にして、大正十三年卒業後大阪華陽堂病院勤務、院長井尻辰之助博士の指導を受くること三年、學位論文を提出して昭和七年十月大阪帝大より學位を受領せり、次で現住所にて病院開設一般診療に從事し居れり。

△學位主論文は「腎被膜ノ神經支配　附腎被膜剝離術ニ關スル知見補遺」にして、參考論文は、「皮膚白血病」及び「尿道白斑」外七編あり。其他論著夥多。博士は佐賀縣佐賀郡東與賀村大字下古賀の人、池田大生の二男にして、明治二十九年生る、學究的溫厚の紳士にして、當年四十歳也。漸く不惑に達して手腕愈よ圓熟の域に入り、少壯の意氣と共に日々臨床に勵精して亦他事を顧みず、一意專心、醫は仁術也を以て任じ誠意誠實を盡す。而かも猶春秋頗る豐富なれば、拮据勤勉、精研に餘念なき前途は更に囑望せらる。

◇

千本　信次　△臺北市京町一ノ五二に千本内科皮黴科醫院あり、皮膚科、性病科を專門とし、病床十個其他内部の設備を整へ、斯科を以て斷然頭角を表はす私立醫院たり。院長は皮黴科の大家千本信次博士にして、博士經營の下に自ら診療に勵精努力し、博士獨特の技術的手腕は、多年の聲望と相俟つて多大の信望を博し、當地診療界に於て拔くべからざる盛況を呈す。博士は東北帝大專門部（大正五年）出身の皮黴科學者として錚々たるものにして、研鑽多年の後、學位論文を提出して昭和八年二月京都帝大より學位を得、名醫博として其の學識、手腕を認められ、今や臺灣診療界に最も囑目せらるゝ斯科の大家と爲す。

△學位主論文は「臺灣產毒蛇ノ毒素ノ血淸學的研究」にして、參考論文は、(1)手掌乾燥性皮膚炎、(2)淋毒性副睪丸炎ノ食鹽水注射療法、(3)蛇毒ノ家兎血像、赤血球抵抗力、並ニ血液凝固ニ及ボス影響ニ就テ等なり。

△博士は東京市小石川區大塚坂下町の人、明治二十五年生る。臨床家として起ちて以來、拮据黽勉、孜々營々として診療に勵しみ、他に何等の道樂を求めず、一意專心仁術を以て任じ、今日の位地と聲望とを贏ち得たるもの也。年齒

今や不惑に入る四歳、年壯の意氣と共に手腕愈よ圓熟し、臨床家として最も活躍すべき時代にして氏の得意や想ふべき也、研究以外にはスポーツと音樂とに趣味を有す。春秋猶頗を豐富なるの秋、折角の奮闘努力を望むや切也。

◇

德田 道太郎　△東京市豐島區巣鴨七丁目一七一九に皮膚科泌尿器科を專門とせる德田病院あり、院長德田道太郎博士の經營也。博士は慈惠醫專出身の篤學者にして、スイス、ベルン大學のドクトル、メヂチーネを有す、嘗て恩師坂口勇博士の篤志に依りて歐洲に遊學するや、ベルン大學のウヰルドボルツ、ウヰンのブルンム、ベルリンのブシユケ、リヒテンベルヒの許に泌尿科研學、歸朝後引續き副院長として坂口病院に勤務中、慈惠醫大より學位を獲得せる名醫博たる一人物也。恩師坂口院長の諒解の下に開業日尚淺きも、專ら親切、誠實をモットーとして努力勵精せる結果、卓越せる手腕は犀利なるメスの評判と相俟つて益々人氣を吸收し、年次獨自の地盤を開拓して堅實なる發展を遂げつゝあり。

△博士は大正十一年東京慈惠醫專を卒へ、順天堂病院の皮膚泌尿科に勤務、引續き坂口勇博士の坂口病院に轉勤、大正十五年同病院より歐洲留學を命ぜられ、昭和二年歸朝後引續き坂口病院副院長として勤務、昭和八年四月慈惠醫大より學位受領後、同年十月恩師坂口院長の諒解の下に表記に小院を開き今日に至る。斯間內地にての指導は恩師坂口勇博士と慈大教授浦本政三郎博士なり。

△學位主論文は、(1)心臟ノ期外收縮ノ高サニ及ボス電氣緊張ノ影響ニ就テ、(2)心筋ノ恢復過程ニ就テ特ニ房室ノ所謂恢復曲線ト不應期トニ就テノ研究」の二篇にして、外に參考論文二篇あり。

△たま〳〵感想の一片を述懷して曰く「小生今日あるは恩師坂口勇先生の御薫陶、慈大教授浦本先生の御指導と且母の不遇中に拘らず絶へざる慈愛且勉學輔達によることを朝夕心に銘じてをります」云々、以て博士の心境を察せらる。

△博士は神奈川縣三浦郡浦賀町荒卷四〇八、德田百六の長男にして、明治廿七年生る。人と爲り篤實穩健にして、學究的溫厚の紳士として、高邁なる品格を備え、寛厚にして克く人を愛し人に親しまるゝ德を有す。殊に診療に臨み態度の眞摯にして熱情あるは、好箇の臨床家としての特質を具備す。

◇

村上 立男　△福山市鍛冶屋町に皮膚科、泌尿器科を以て著名なる村上醫院あり、院長村上立男博士經營の診療所にして、專門醫院としての新裝せる內部の設備を整へ、博士自ら日々診療に從事す、開業日尚淺きにも拘はらず氏が熱誠なる經營振りと、博士獨特の技術的手腕とは多大の信望を博し、年次堅實なる發展振りを示しつゝあり。博士は岡山醫大派の一新勢力と見るべき少壯博士にして、診療界に躍進して益々其の手腕を發揮せんとする前途は大に囑望せらる。

△博士は昭和三年岡山醫大卒業後、引續き五年間同大學附屬醫院皮膚科、泌尿器科助手として勤務の傍ら研究に從事し、同八年五月學位を受領し、同年六月より現地に開業せり。

△學位主論文は「皮膚科領域ニ於ケル血淸蛋白ノ研究」にして三篇より成る。參考論文は「皮膚科泌尿器科方面ヨリ觀察セル血液「コレステリン」量ニ就テ」他十一篇あり。指導教授は岡山醫大教授根岸博士にして、皮膚科、泌尿器科を專攻せり。

△博士は岡山市湊の人、明治三十六年生にして、當年未だ三十有三歳の少壯也。學究時代學理と共に臨床の實地を修得し、今や獨立して自由に其の手腕を發揮し得る活躍の時代に入れり。拮据黽勉、「醫は仁術也」をモットーとしての勵精振りは、學究的臨床家としての博士の將來の大なるを物語るもの也。趣味としてはスポーツ、演劇、寫眞等を好

む。將來有爲の資に富む少壯博士、切に自重加餐を祈ると共に、折角の奮鬪活躍あらん事を。

◇

藤田裕　△東京慈惠會醫科大學講師として附屬醫院皮膚科に新進の藤田裕博士あり。慈惠醫大出身の皮膚科學者にして、卒業迄は實吉純郎博士に就き內科學を攻め、次で恩師浦本政三郎博士に就きて心臟生理學を專攻し、母校より學位を獲得せる斯科界近來の少壯醫博也。學位論文は旣に學界に定評あれば贅せずもかな、大學卒業後五年目に同期生高田眞博士に次で學位を得たるは、頭腦明晰にして研學に熱心なるかを語り、今猶恩師士肥章司博士指導の下に學理と共に臨床に勵み、孜々として精研に餘念なき前途は、軈て那邊に展開するや頗る囑目に値す。

△博士は昭和四年東京慈惠會醫大卒業後、引續き母校に止まりて勤務の傍ら研究に從事し、初めは內科學を實吉教授に、次で生理學教室にて浦本教授の指導を受け、今猶講師として皮膚科教室に勤務の傍ら士肥教授指導の下に研究に沒頭しつゝあり。斯間學位論文提出の上、昭和八年八月同大學より學位を受領せり。

△學位主論文は「心臟ノ代償休憩期ニ就テ」にして、(1)室ニ就テノ實驗、(2)房ニ就テノ實驗、(3)竇及ビ筋性自働搏動ヲナシツヽアル室ニ就テノ實驗の三篇より成り、外に參考論文三篇あり。

△博士は福井縣坂井郡棗村藤田一の二男にして、明治三十六年生る。學究的學者タイプの少壯紳士にして、年齒未だ三十有三歲、新進の意氣潑剌として研究心に燃え、志操堅實、向學の精神欝勃として禁ぜず、其の今日あるは博士の學歷に盡きて餘蘊なく、光彩陸離として博士の面目を語るに充分なるが、而かも猶學を錬り腕を磨くに餘念なく、日夜倦むことを知らず懸命に努力精進しつゝある前途は、博士の將來を語るに餘裕綽々たるものあり、將來有爲の新人物として玆に多大の敬意を表し、更に向後の精研活躍と相俟つて大に未來の大成を期待せんとす。東京市四谷區鹽町三ノ四四に住む。

◇

坂本久雄　△水戸市鐵砲町一一四〇に皮膚科、泌尿器科專門を以て新裝せる坂本醫院あり。光線科(紫外線、赤外線)等は母校教室と同樣ハノビア會社製品を備え、其他努めて一般の治療設備は母校教室の方針に象れり。院長坂本久雄博士は、千葉醫大出身の新進にして、恩師佐藤邦雄博士に就きて皮膚科學の蘊奧を究め、母校より學位を獲得せる少壯の名醫博也。該博なる學位論文は旣に學界に定評なれば言はずとがな、研鑽多年、蘊蓄せる學識と共に臨床に經驗を積み、研究室を退いて診療界に精進するや、拮据黽勉、獨自の境地を開拓して牢乎たる地盤を築き、今や獨特の手腕を發揮して益々遠近の人氣を吸收し、當地診療界に於ける一流の位地を占む。

△博士は水戸高校の出身にして、昭和三年千葉醫科大學を卒へ、直ちに同大學皮膚科泌尿器科教室入局、同六年二月藥物學教室へ轉勤、同八年四月再び皮膚科泌尿器科教室に歸へる、同年八月同大學にて學位を授與せらる、翌九年五月表記の場所に醫院開業今日に至る。

△學位主論文は「實驗的腎炎ニ於ケル血壓ニ就テ」にして、參考論文は、(1)マイニツケ氏清澄反應及ビカーン氏反應ノ臨床實驗並ニワ氏反應トノ比較成績、(2)大正十二年ヨリ昭和二年ニ至ル皮膚泌尿器科新來患者ノ統計的觀察の二篇なり。其他論著夥多。

△博士は茨城縣行方郡香澄村大字牛堀二番地坂本勝太郎の五男にして、明治三十四年生る。資性溫厚篤實、眞面目なる學究的少壯の紳士にして、凛々としたる容貌は學者タイプの威風を有し、高邁なる品格を備ふ。其の今日ある閱歷は光彩陸離として博士の前半生史を飾り、博士の面目の躍如たるもの其間に窺はる。年齒未だ當年三十有五歲にして新進の意氣に燃え、今は腕の冴え盛にして最も得意時代に入る。殊に博士の特徵として傳へらるゝは、刀圭甚だ多忙にして席を溫むるに暇なしと雖も、「醫は仁術也」をモットーとして、唯だ眞劍に熱心に忠實に診療に臨み、誠意誠

實飽くまで親切を盡す點にあるが如し。

◇

田谷利男　△北海道帝大派の一新勢力と見るべき、皮膚科、泌尿器科の新手腕家田谷利男博士は、自己の專門を標榜して競爭激烈なる帝都の診療界に割據躍進せり。博士經營の田谷醫院は、品川區西品川三ノ八七三に在り、新裝せる病室(定員七名)其他設備成り內容充實す。氏が經營振りの周到誠實なると、博士獨特の技術的手腕の好評とは、年次獨自の地盤を開拓して益々人氣を吸收しつゝあり。學系よりすれば北大に屬し、母校の恩師志賀亮教授及び太黑薫教授の指導を受け、皮膚科、泌尿器科及び醫化學を專攻し、母校より學位を獲得せる斯科界近來の少壯醫博也。

△博士は大正十五年北海道帝國大學醫學部卒業、同學皮膚科泌尿器科教室勤務、旭川市向井病院外科泌尿科醫長、北大醫化學教室助手、東京青山野崎病院主任等に歷任して後現住所に開業せり、昭和八年九月學位を受領す。

△學位主論文は「Chlordepotsトシテノ組織殊ニ皮膚ニ就イテ」にして、外に參考論文六篇あり。論著中「淋病黴毒ノ病理ト治療ノ新傾向」は博士會心の作にして、最も得意のものと見るべき也。

△博士は栃木縣上都賀郡西方村大字金崎の人、田谷貢及び田谷誠博士の弟にして、明治三十四年生る、學究的少壯紳士にして、年齒未だ三十有五歲也。臨床家として少壯の意氣を以て起ち、手腕漸く壯熟して今は最も活躍の時代に入る。向後の勵精努力と相俟つて前途の發展や大に期待するものあらん。研究以外にはテニスと麻雀とを趣味し、又克く讀書して精研修養に力む。將來有爲の臨床家として玆に推奬す。

◇

中村敏郎　△慶應義塾大學醫學部講師として附屬病院皮泌科醫局に新進の中村敏郎博士あり。慶大出身の皮膚科泌尿器科學者にして、恩師故笹川正男博士に就きて皮膚科學を、同小林六造教授に就きて細菌學を專攻し、母校より學位を獲得せる少壯醫博也。學歷より觀れば福岡縣立中學明善校、石川縣立金澤第一中學校、青山學院中學部を經て、慶應大學豫科に入り、昭和四年同大學醫學部卒業後、皮膚科泌尿器科教室に助手となり、側ら大學院に入りて絲狀菌病學を專攻し、故笹川及び小林兩教授の指導を受け、昭和七年大學院を退學し、翌八年十月母校にて學位を受領す、同九年一月講師に任ぜられ皮膚科學を講ず。專攻は皮膚科學、泌尿器科學なるが、特に皮膚科學を得意とす。

△學位主論文は「絲狀菌病ニ就テ」にして、(1)臨床的方面ヨリ觀察シタル絲狀菌病、(2)病原菌ニ關スル二三ノ新知見(3)生物學的研究補遺の三篇より成る。外に參考論文は「結核腎剔出後ニ於ケル血尿ニ就テ」の一篇あり。

△博士は東京市四谷區右京町中村定吉の次男にして、明治三十五年生る。學究的學者タイプの少壯紳士にして、年齒未だ三十有四歲、新進の意氣潑剌として研究心に燃え、志操堅實、向學の精神欝勃として禁ぜざるものあり、大學卒業後引續き研鑽に餘念なく、今や其の蘊蓄を傾倒して母校の教壇に起ち、日夜倦むことを知らず懸命に努力精進しつゝあり、將來有爲の新人物として洋々たる前途を待望すべき也。趣味としては寫眞を能くし、ドライヴを好む。東京市大森區田園調布四ノ一九二に住む。

◇

藤垣喜重郎　△京都市中京區蛸藥師通河原町東入に於て自宅開業、其の專門とせる外科、皮膚科、性病科を以て名聲を博し、京都帝大派の名醫博として、大衆より多大の信頼と尊敬とを受けつゝある藤垣喜重郎博士は、京都府立醫專の出身にして、恩師たる京都府立醫大教授故河村叶一博士に就いて外科學を、又京大教授松本信一博士に師事して皮膚病學並に黴毒學を專攻せり。今や斯科の大家と仰がれ、堅實なる地盤の上に年々歲々拔くべからざる繁榮を持續しつゝあり。

△博士は小學校卒業後、農業の傍ら獨學にて大正三年二月專門學校入學者檢定試驗合格、同十一年五月京都府立醫專

卒業後、母校附屬療病院醫員拜命、外科第一部勤務、同十三年十月京都府立醫大附屬醫院副手拜命、河村外科勤務、其後助手となり昭和二年七月退職、同五年三月京都帝大醫學部皮膚科教室に入り松本教授指導の下に研究、同八年八月京都帝大にて學位を授與せらる。斯間大正十三年四月より現住所に於て夜間診療所を開き、昭和八年六月まで繼續せり、其後は一般開業を行ひ今日に至る。

△主論文は「パラビオーゼ、ラツテ」ニ於ケル實驗的再歸熱ノ受働免疫ニ就テにして六篇より成り、參考論文は、(1)三頭接合「ラツテ」ニ於ケル實驗的再歸熱ノ經過並ニ免疫ニ就テ、(2)實驗的再歸熱ニ於ケル脾臓自家移植ノ影響ニ就テ、(3)實驗的再歸熱ニ於ケル脾臓切除ノ影響ニ就テ、(4)實驗的再歸熱ノ經過並ニ免疫ニ及ボス影響ニ就テ(Ⅰ)正常「ラツテ」ニ於ケル場合、(6)同(Ⅱ)脾臓剔出「ラツテ」ニ於ケル場合、(7)「パラビオーゼ、ラツテ」ヲ以テセル甲狀腺剔出ノ毛髮發育ニ對スル影響ニ就テ、(8)「パラビオーゼ、ラツテ」ニ於ケル甲狀腺剔出ノ皮膚創傷ニ及ボス影響ニ就テ、(9)實驗的「ラツテ」再歸熱ニ於テ接種量ノ多寡ガ病症並ニリーケンベルベ氏反應ニ及ボス影響ニ就テ、(10)「パラビオーゼ、ラツテ」ニ於ケル性週期ニ就テ、(11)授乳ノ長短ガ分娩後ニ發現スル白鼠性週期ニ及ボス影響ニ就テ、(12)白鼠ニ於ケル卵巣移植ガ性週期ニ及ボス影響ニ就テ等の十二篇なり。

△博士は岐阜縣山縣郡大桑村市洞の人、藤垣喜八の二男にして、明治廿三年生れの學究的年壯の紳士也。その今日ある立志傳的閲歴は博士の前半生史これを語りて余蘊なし、殊に博士の年少時代農業の傍專ら獨學にて中學の課程を獨修し、專門學校入學者の資格を得たるが如きは、既に篤學者としての範を示すに足り、加ふるに醫專卒業後は晝間勤務の傍ら夜間診療を行ひながら、研究貫行せる百折百撓の努力は頂門の一針として特筆に値す。今は年齢漸く不惑に入る六歳、年壯の意氣益々壯んにして手腕、人格共に圓熟の域に入り最も得意の時代にあり。研究以外別に趣味を有せざれども、誠實と親切とをモットーとして、熱心克く診療に盡し、以て其の天職たるを樂しむの士也。

◇

山之内　秀三

△海軍々醫中佐山之内秀三博士は、海軍燃料廠平壤鑛業部々員にして、平壤鑛業部醫務課長たり。博士は長崎醫專出身の皮膚科、泌尿器科學者にして、特に泌尿器科は博士の最も得意とする所なり。指導教授は長崎醫大の駒屋銀治教授にして、研鑽三ケ年餘の後『「レントゲン」寫眞上ニ於ケル正常腎盂輸尿管像ニ就テ』の主論文及び下記の參考論文を完成し、長崎醫大より學位を獲得せり。

△博士は宮崎縣立都城中學校（明治四十五年）を經て、大正五年長崎醫專を卒へ、同年任海軍々醫少尉、海軍々醫學校に乙種學生を拜命、同十年任軍醫大尉、同十四年軍醫學校高等科學生を被命、翌十五年任軍醫少佐、昭和六年任軍醫中佐、同四年軍醫學校選科學生を被命、皮膚科、泌尿器科專攻、斯間軍艦加賀、陸奥の各軍醫長、佐世保海軍病院皮膚科、泌尿器科々長を歴任、同五年より長崎醫大にて研究に從事し、同八年九月同大學にて學位を授與せられ、爾來現職に在り。

△參考論文は、(1)「レントゲン」寫眞上ニ於ケル健康腎臓ニ現出スル所謂腎盂靜脉逆流ノ影像、(2)乳糜血尿症ニ於ケル所謂腎盂靜脉逆流ノ影像、並ニ其ノ影像ヨリ見タル腎盂内藥液注入ニヨル本症ノ治療法ニ就テ、(3)膀胱内切除術ヲ施セル膀胱憩室ノ一例ニ就テ、(4)靜脉注射ニヨル「ウロセレクタン」ノ腎盂輸尿管像ニ就テ、(5)原發性攝護腺肉腫ノ一例、(6)グラウイツ氏腫瘍ノ二例、(7)邦人男子腎臓ノ「レ線寫眞」上ノ位置ニ就テ（共著）等なるが、就中主論文の正常腎盂輸尿管像に就ての研究は、博士の最も得意とするものにして、其の學問的價値は既に學界に認められ嘖々たる定評あるを聞く。

△博士は鹿兒島縣囎唹郡岩川町の人、山之内岩吉の二男にして、明治二十七年生なれば、當年不惑に入る漸く二歳、

年壯の意氣益々壯んにして手腕、人格共に圓熟の域に達し最も活躍の時代に在り。謹嚴勵精の人にして、責任感に强く、常に職務と研究とを唯一の趣味として亦他事を顧みず、業餘猶孜々として精研に余念なきは、洋々たる前途を待望せしむ。朝鮮平安南道大同郡秋乙美面寺洞里平壤鑛業部官舍に住む。

◇

伊藤嘉夫　△福岡縣若松市立若松病院皮膚科醫長たる伊藤嘉夫博士は、九大派の一新勢力と見るべき新智識にして、醫博中の最少年として氣焰を揚げ、至誠以て公に奉ずるの念を以て、一意專心其の職務に勵精努力し、民衆治療界の爲め貢獻しつゝあり、而かも年齒未だ少壯にして潑剌たる前途を有し、向後の活躍と相俟つて將來の大成を期待せらる。

△氏の學歷より觀れば、昭和五年三月九州帝大醫學部卒業、同年五月同學部皮膚泌尿器科教室にて研究、同九年五月市立若松病院皮膚科醫長就任、同年六月九州帝大より學位を受領し今日に至る。斯間指導は高木繁教授（泌尿器科）皆見省吾教授（皮膚科）に受け、皮膚科泌尿器科を專攻し、特に黴毒科を得意とす。

△學位主論文は『「アヲバアリガタハネカクシ」及線狀皮膚炎ノ研究』にして、參考論文は、(1)關節黴毒、(2)丹毒ノ療法、(3)線狀母班、(4)フルニエー氏陰部電擊性壞疽（二篇）、(5)線狀皮膚炎稍高度ノ症例、(6)持久性隆起紅班線狀皮膚炎ノ原因等なり。他に、(1)「サルワルサン」疹トワ氏反應、(2)「サルワルサン、アグラヌロチトーゼ」、(3)尿閉ト脊髓黴毒、(4)淋毒性角化症、(5)色素性乾皮症ト腦疾患、(6)疥癬ノ療法(7)苔癬ノ診斷及治療、(8)線狀皮膚炎等の論著あるも黴毒に關するもの多し。

△感想に曰く「教室を一度出で實驗診療に從事すると研究的態度は次第に遠ざかり事務的となり、我流の診斷、治療に賴る傾向がある。從つて一般醫に對する斯界の指導及び研究心を啓發する機關が是非必要と信ずる、これは外國の例によつてもいいが、當局から强制的にでも醫師の研究、向學の機關の成立を希望する。此意味に於ても醫師の國家試驗も必要ではあるまいか」云々。

△氏は福岡縣三潴郡大川町小保の人、伊藤酉之助の長男にして、明治三十七年生る。學究的少壯の紳士、年齒未だ三十有二歲也。研究心に富み向學的精神醫勃として禁ぜざるものあり、氏の感想はよくこれを語り博士の心境を察せらる。一般に官公立病院の醫師が開業醫に比して事務的であり、患者に不親切の傾向あるやを懸念せる博士は、官公立病院にありて常に開業醫的態度を以て患者に接し、誠意誠實を以て親切を盡しつゝあるは博士の長所とすべき也。研究以外には芝居を趣味し、煙草を好む。將來有爲の資に富む少壯醫博の前途、多事益々多望なるの秋、切に自重加餐を祈る。福岡縣若松市濱八番町五丁目閑二番地に住む。

◇

松本九郎　△長崎醫專の出身にて、名古屋醫大より最近學位を得たる松本九郎博士は、目下名古屋醫大皮膚科泌尿器科教室研究生として研究續行中なるが、近く研究完了を俟つて開業の豫定なりと聽く。氏は學校卒業後、醫官又は部長として殖民地の醫院に勤め、或は開業醫として多年實地の經驗を積み、卓越せる手腕を有し獨特の技術的技能に長ず、軈て診療界に再び躍進せんとする前途の展開は頗る囑目に値し、大に期待せらる。

△氏は廣島縣立忠海中學校を經て、大正七年長崎醫專を卒へ、自大正八年四月至同十三年二月南洋廳醫院醫官拜命、自大正十三年六月至同十五年二月朝鮮慶尙北道立金泉病院外科部長拜命、自昭和二年至同五年十二月迄現地にて開業同六年一月長崎醫大副手拜命、法醫學教室勤務、同八年五月同大學皮膚科泌尿器科教室に轉勤、同年十二月名古屋醫大助手拜命、皮膚科泌尿器科及び物理療法科勤務今日に至る、同十年一月名古屋醫大より學位を受領す。斯間、長大法醫學教授淺田一博士、長大皮膚科泌尿器科教授駒屋銀治博士、名大皮膚科泌尿器科教授田村奉吉博士に師事して、

法醫學及び皮膚科泌尿器科を專攻せり。

△學位主論文は「血球沈墜ノ要約ニ就テ」にして六篇より成る。參考論文は、(1)失血死ノ經過時間的觀察（一篇）、(2)各種動物血清ノ物理學的研究（一篇）、(3)饑餓時ニ於ケル血球沈墜速度及其上清液ノ物理學的影響（一篇）、(4)「ホルモン」ノ血球沈墜速度ニ及ボス影響（二篇）等なり。氏の論著中殊に「血球沈墜速度ノ本態」に關しては學界に貢獻せしもの尠からず。

△感想に曰く「各大學總て競爭的に未製品を博士として社會に出だすと言ふ事は現行學位令の一大缺陷にして粗製濫造の非難を受くるも又無理からぬ次第である、故にかゝる惡弊を矯正するには如何にしても審査權を中央に來し審査員は主務所に於て、其都度任命すべきである、さすれば最も公平優秀なる博士を出だす事が出來、從つて一般國民に裨益且つ尊敬せらるるならんと信ず、現行學位令の存する限り將來益々不祥事件の頻發又止むを得ない事である」云々。

△氏は廣島縣豐田郡大崎南村字明石方の人、松本和右衞門の七男にして、明治廿五年生る。學究的溫厚の紳士、年齒漸く四十有四歲にして年壯の意氣に燃え、研究心潑剌として止まず、今猶精研に餘念なく孜々として倦むことなし。賦性篤實敦厚、情に脆く慈愛心にあつく、義俠心に富みて能く人を愛し能く助く、己を持するに薄く功名に恬澹たり强ゐて言へば正直にして稍や短氣の嫌なしとせず。研究以外には歌舞劇、圍碁、園藝などを趣味として業餘を樂しむ。軈て開業醫として再び診療界に奮起せんとする向後の活躍は、博士の將來を物語らんとするものとして大に待望すべき也。名古屋市西區田幡町一丁目五〇九に住む。

◇

石津俊　△東大派の新人にして皮膚科泌尿器科學者として學界へ躍進せる石津俊博士は、東京帝大醫學部皮膚科泌尿器科教室に勤務研究の傍ら、帝國女子醫專教授及部長として皮膚科泌尿器科を擔任し學生指導の任に當り、希望ある女子醫育界の將來に向つて大に俟つ所あらんとす。潑剌たる氏の前途や頗る春秋に富む、將來有爲の少壯醫博としての氏の向後の活躍を期待して止まず。氏の學歷より觀れば、大正十四年三月第八高等學校卒業、同年四月東京帝大醫科入學、昭和四年三月東京帝大醫學部皮膚科泌尿器科教室に入り今日に至る、同十年一月東京帝大にて學位を受け、同年三月兼ねて帝國女子醫專皮膚科泌尿器科教授及部長となる。斯間遠山郁三教授に就て皮膚科を、高橋明教授に就て泌尿器科を專攻せり。

△學位主論文は「癩性禿頭ニ就テ、特ニ其ノ組織學的研究」にして、參考論文は、(1)靜脈注射腎盂撮影法（第一報ヨリ第九報マデト其ノ他一篇、合計拾篇）、(2)尿比重ト尿成分トノ關係ニ就テ（第一報）、(3)癩性脫毛ニ就テ特ニ其ノ臨床的觀察等なり。

△氏は靜岡縣より東京市に轉籍せり、石津松太郎の三男にして、明治三十六年生る。學究肌の少壯紳士にして、年齒未だ三十有三歲也。熱心なる研究家として知られ、切磋卓勵、自己專門の研究と併せて女子醫育の爲め不斷の勵精努力を續け、大に將來に俟つあらんとする熱誠の士也。賦性穩健篤實、意志强固にして物に動せず、事を處するに眞摯にして熱心なり、人に對しては謙遜自抑して自已の才學を衒はず、己を虛うして人に厚く、その淡々たる態度の奧床しさは人に親しまるゝ德を有す、今は唯だ醫育と研究とに趣味を集中して亦他事を顧みざるの概あり。幸に健康と共に、折角の精研努力あらん事を望むや切也。本郷區駒込千駄木町五〇に住む。

◇

相羽昭　△新潟醫大派の學流を汲み、新進なる皮膚科泌尿器科學者として最近學位を獲得せる相羽昭博士は、新潟醫大皮泌科教室に勤務の傍ら研究に沒頭しつゝあり。年齒未だ少壯にして醫博中の最少年なれば、精研に余念なき前途は遼遠にして、軈て展開せんとする今後の高踏活躍は刮目を以て大に囑望せらる。

△氏の學歴より見れば、熱田中學、八高を經て、新潟醫科大學卒業後、引續き同大學生理學教室に次で皮膚泌尿器科教室に勤務、昭和十年八月同大學にて學位を授與せられ今日に至る。斯間、横田武三教授指導の下に生理學を、橋本喬教授指導の下に皮泌科を專攻せり。

△學位主論文は「大腸ノ運動」にして、參考論文は「輸尿管ノ運動及ビソノ電氣曲線」なり。氏の論著中の「輸尿管ノ運動生理」は氏の會心の作にして、博士の最も得意とするものと見るべき也。

△氏は愛知縣知多郡有松町桶狹間の人、相羽誠一郎の男、明治三十八年生にして年齒未だ三十有一歳の年少也。學究肌の少壯學者にして、研究は氏の最も趣味とする所、今は唯だ熱心に自己の專門領域に就ての研鑽に一路邁進し、驍て診療界に躍出せんとする修養に余念なく奮勵努力しつゝあり。研究以外には宗教哲學を愛し、經濟的低腦兒を以て自ら任じ、概念聯合に卓拔なる能力を有す。將來有爲の資に富み、前途洋々たるの秋、幸ひ健康にして、醫博界の爲め益々精研發奮あらん事を望むや切也。新潟市學校町二番町渡邊みよ方に假寓。

◇

長濱繁

△東京市神田區神保町二ノ三六に、泌尿生殖器病科を專門とせる醫學博士、ドクトル・メヂチネ長濱繁あり。氏は現日本醫科大學の前身の出身にして、明治四十年卒業後、翌四十一年東京帝國大學醫學部外科教室に介補として勤務し、其後京都帝國大學、泉橋慈善病院等に於て皮膚病、黴毒科、泌尿生殖器科を研習し、大正元年九月より同五年まで東京帝國大學選科生として入學、主として皮膚科、泌尿生殖器病科を研修、同六年歐洲諸國に留學し、主として瑞西ベルン醫科大學藥物學、醫化學教室に於てビュルギー教授に就き藥物學を、ネーゲリー、ブロツホ教授に親炙して皮膚科、泌尿生殖器科を專攻、同七年ドクトルの學位を得、同八年歸朝す、同九年より泉橋慈善病院病理部研究生となり、福士政一博士の指導を受け、昭和二年まで睾丸の研究に從事す、同三年慶應醫科大學に論文を提出して學位を獲得せる篤學の名醫博也。

△氏の學識、手腕に至つては既に世評にある如く、研鑽多年の修養と相俟つて實地の經驗に富み、氏獨特の手腕は今や自由にその特色を發揮し、開業拮据二十年餘の歴史と共に堅實なる地盤を築き、嘖々たる好評の裡に永年の繁榮を持續しつゝあり。一方又社會的位地よりすれば、日本皮膚科學會評議員、日本泌尿器病學會評議員にして、其他日本醫師會議員、東京醫師會理事、神田區醫師會常務理事、日本醫師協會理事の職に在りて醫界に重きを爲し、更に又元神田區會議長、現東京府會議員を初め、神田區の總ゆる公共の事に携はり、其の要職を一身に荷ひ聲望高し、昭和十二年衆議院議員總選擧に際し、惜くも次點にて當選圈を逸したるも、何れは國家の選良として神田區より選出さるゝ日も軈て近き將來にあらん。

△學位論文は(一)脂肪注入ニ依ル睾丸ノ組織學的變化、(二)「コレステリン」睾丸、(三)麻醉劑ノ混合作用（蛙ニ就テノ實驗的研究）、(四)麻醉劑ノ混合作用（臨床的研究）の四篇なるが、博士語つて曰く「便宜上睾丸の研究となつてゐるが、これは睾丸が進化の度を異にする老細胞と若い細胞の集合で構成され生活體脂肪新陳代謝の研究には好都合だからで、種々研究の結果腦出血、血壓亢進症等の發生原理や若返り法等にも論及した、論文は昭和三年日本病理學會で發表した三百頁ばかりのものですが、それでも五年ばかりかゝつて兎や白鼠を三千頭も殺してしまつた」云々。

△感想に曰く「醫人は所謂醫者根生から目醒めて一度結束社會人と云ふ意識を持つべき秋にして、現代醫人の重大なる使命は日本民族の健康水準の向上に一大努力を傾倒することと思ひます」云々。

△氏は福岡縣久留米藩士長濱繁三の三男、明治十六年福島縣安積郡に生る。學究的敦厚の紳士にして、溫情に富み人情に脆く、學者タイプの風貌に氣品を備ふ。臨床家として其の今日ある學識、手腕、人望は既に氏の前半生史よくこれを語りて餘蘊なし。壯齡漸く知命有五、元氣旺盛、今は最も得意時代にて老熟の域に入り一段の貫祿を加ふ。濤堂は

其號也。碁、將棋が嫌ひ、酒は一滴も飲まず、芝居も好まず、强ひて趣味と云へば書畫、植木いぢり位か、溫泉にでも行つて武勇傳でも讀むのを唯一の樂みとし、また田園生活は最も希望する所なるが如し。長男繁美は醫師にして慶大藥物學教室に入り、阿部教授の指導を受け研究中の處、昭和十一年五月研究を終り阿部教授の指圖に依り、恩賜財團濟生會芝病院外科醫局に勤務中。長女登代子は司法官鈴木重雄に嫁す、外に二女、二男、三男は未だ學修中なり。

◇

德富光磨　△佐世保市宮地町一三七に皮膚科、泌尿器科を標榜して多年の聲望を扶植し、今や卓然として頭角を抜き名實相伴ふ德富醫院あり、院長德富光磨博士の主宰主營する診療所にして、開業古く既に二十數年の歷史を有し、博士獨特の手腕は益々其の特技を發揮して餘す所なく、診療手術の好評と共に一流の位地を占め、牢乎として動かすべからざる地盤を有す。氏は九州帝大出身の臨床家として錚々たるものにして、經驗豊富、多年開業の傍ら切磋研學の結果、母校より學位を獲得せる臨床醫博たる名に恥ぢず、今や九州刀圭界を繞る皮膚科、泌尿器科の老大家としての威嚴を保持す。

△學歷及び閲歷を概括すれば、明治三十一年水俣尋常高等小學校卒業、同三十六年熊本縣立中學濟々黌卒業、同四十一年熊本第五高等學校卒業、大正元年十二月九州帝國大學醫科大學卒業、卒業直後同大學皮膚科副手拜命、同三年六月佐世保市に皮膚科、泌尿器科醫院開業、昭和十年十一月學位受領。斯間主として九大教授高木繁博士、同大野章三博士、同助教授本間富之助博士の指導を受け、皮膚科及び泌尿器科領域に於ける臨床的研究を爲す、殊に尿道鏡術の臨床上應用に就ては、其効果を高むべく十數年來最も苦心研究しつゝある所にして、他人の追隨を許さず氏の最も得意とする所也。

△學位主論文は「尿道鏡ノ臨床應用例ニ就テ」にして、外に參考論文十六篇あり、(1)「クリービング、デイスイーズ」ノ一例、(2)攝護腺液ノ臨床的研究、(3)乳兒臭素疹ト乳兒丹毒、(4)尿道舟狀窩部及ビ外尿道側管ニ於ケル硬性下疳、(5)極メテ稀有ナル女子會陰部及ビ外陰部帶狀疱疹、(6)疼痛ヲ主トスル膀胱ノ「イローゼ」、(7)臨床的經驗ト黴毒血淸診斷、(8)尋常性天疱瘡治驗例、(9)壞疽性深膿疱ノ二例並ニ其病原菌ニ就テ、(10)興味アル尿閉ノ一例、(11)所謂面疔ノ臨床經驗、(12)大人水痘ノ一例、(13)臨床的淋菌染色ニ就テ、(14)尿道鏡的手術ノ効果ヲ左右スル條件ニ就テ、(15)「チオール」銀ノ尿道鏡的應用ニ就テ、(16)慢性壽麻疹ト「アルカリ」療法　等なり。

△感想に曰く「酒を飲みたるあと醉にまかせて診療するのは如何なるものかと存候切めて診療室に於て丈けは醒めてもらい度きものに御座候」云々。自然を愛好し、不自然を嫌惡するは、氏が趣味を物語るものにして、自ら氏の心境を察せらる。氏は熊本縣葦北郡水俣町濱三一三二德富長敬の長男にして、明治十六年生る。學究的溫厚の紳士にして眞面目なる臨床家としての性格を備へ、精研修養相俟つて常に自ら品格の陶冶に力め、人格高邁也。氏が一開業醫より奮起してその今日を成せるは、既に博士の前半生史よくこれを語るが如く、頂門の一針として其の堅志篤學を稱讚すべき也。壯齡今や知命に入る五、多年の經驗と俟つて學識、手腕共に圓熟の域を超越して一段の貫祿を備へ、老大家としての威嚴を存す。居常の一端を見るに、二六時中何時にても眠り得るかわりに、早起きが出來ず時々短氣になることありと聽く。健康にして元氣甚だ旺盛、今は最も得意時代にて、終始一貫、「醫は仁術也」の本分を盡し、以て自已の天職なるを樂しむ熱誠の士也。

◇

森岡寛　△沼津市大手町一六八に森岡病院あり、皮膚科、泌尿器科を以て著聞し、當地方診療界を風靡す。院長森岡寛博士は日本醫大專門部出身の新進にして、皮膚科、泌尿器科を專門とし、研鑽多年、經驗豊富にして獨特の手腕を有す。最近東京慈惠會醫科大學研究科に於て、寺田教授指導の下に細菌學專攻の結果、學位を獲得せる

臨床醫博として頓に其の名聲を博す。學究生活より診療界に轉向して以來、開業拮据日尚淺きも、熱心克く親切丁寧をモットーとせる診療振りと、玲瓏たる診療手術の好評とは、兩々相俟つて遠近の人望を吸收し、繁榮歳と共に向上發展の順境に在り。

△更に氏の學歴及び閲歴を概括すれば、大正十年三月獨逸學協會學校中學卒業、同年四月日本醫學專門學校豫科入學昭和二年三月日木醫科大學專門部卒業、同年四月財團法人泉橋慈善病院皮膚科、泌尿器科に醫局員として入局、同三年三月同病院血清檢査室主任兼務を命ぜらる、同五年七月同病院同科醫局長並に看護婦産婆養成所講師を命ぜらる、同六年二月研究のため依願退職、同年四月東京慈惠會醫科大學研究科に入學、寺田正中教授の指導を受け、細菌學專攻、同九年八月同研究科修了、爾來現住所に於て醫院開業、同十一年五月學位を授與せられ今日に至る。

△學位主論文は「バンク氏猩紅色白癬菌ノ免疫學的研究」にして、(1)第一篇注射免疫、(2)第二篇接種及ビ豫防接種試驗、(3)第三篇接種抗體産生　の三篇より成る。參考論文は、(1)バンク氏猩紅色白癬菌ノ異性抗原ニ就テ、(2)バンク氏猩紅色白癬菌ノ酵素ニ就テ、(3)尿浸潤ニ就テ、(4)腎臓結核ニ就テ　等なり。

△氏は靜岡縣駿東郡大岡村木瀬川三五一、九世醫業嗣續者森岡幹の長男にして、明治三十五年生る。溫厚なる學究的少壯紳士にして、年齒未だ三十有六、清新の意氣益壯にして研究心に富み、今は眞摯にして忠實なる臨床家として起ち漸く圓熟せる手腕と不撓不屈の精神とを以て不斷の努力奮闘を續け、誠心誠實を以て仁術の爲め最善を盡しつゝあり。春秋猶頗る豐富なれば、洋々たる前途の大成大に期待せらる。賦性穩健篤實、寛厚能く人を愛し同情に富む。學究以外には旅行と乘馬に趣味を有す。沼津市外大岡村に本宅あり。家庭には、兩親、弟妹三人あり。

◇

鈴木　時之助

△大阪市南區千年町に結構堂々の陣容を構へ、皮膚科、泌尿器科の病院として、浪速隨一の稱ある華陽堂病院に副院長として鈴木時之助博士の在るは今更言ふ迄もなし。院長は斯科界の泰斗井尻辰之助博士にして創業古く、既に二十年近き歴史を有し、殊に泌尿科方面の患者多く、斯科界に於ける覇王たるの偉觀を呈す。宜なる哉、院長を補佐するに鈴木副院長のあるは、唇齒輔車の如くにして和衷協同の範を示すに足り、師弟の美德を表彰すべきに値す。學系より言へば、鈴木博士は新潟醫專の出身、皮膚科、泌尿器科を專門とし、特に泌尿器科を最も得意とする錚々たる臨床家にして、嘗て歐米各國を遊歴見學し、院長井尻博士の厚意に依り、大阪帝大醫學部皮膚科、泌尿器科教室にて研究の結果、大阪帝大より學位を得、斯科界近來の臨床醫博として名實共に並び稱せられ、圓熟せる博士獨特のメスの評判は、院長多年の德望と相俟つて、内外多大の信望を博し絶好のリーダーたり、蓋しその今日あるも眞面目なる氏が努力研鑽の賜ものなるを想はしむ。

△氏の學歴及び閲歴を摘載すれば、大正九年五月新潟醫學專門學校卒業、直ちに母校皮膚科、泌尿器科教室に入りて高橋明教授の指導を受け、後ち歐米諸國を視察遊歴す、大正十三年八月大阪華陽堂病院に就任、副院長代理を經て昭和七年五月同病院副院長となる、同年六月華陽堂病院より大阪帝大醫學部皮膚科、泌尿器科教室へ留學を命ぜられ、佐谷有吉教授指導の下に皮膚科、泌尿器科學を專攻す、同十一年七月學位を授與せらる。斯間主として指導を受けたるは佐谷有吉教授、長橋正道教授、高木耕三教授、高橋明教授、井尻辰之助博士、谷村忠保博士等にして、諸氏の親しき薫陶に負ふ所亦尠しとせず。

△學位主論文は『「レ」線放射ニヨル腎臓ノ變化ノ實驗的研究』にして、其一組織學的變化並ニ生體染色所見ニ就テ、其二細胞學的研究特ニ Plastosomen ノ所見ニ就テ、其三腎臓結核ニ對スル「レ」線放射ノ治癒的影響ニ關スル實驗的研究の三篇より成る。外に參考論文として、(1)縫合針及ビ縫合絲ヲ核トセル膀胱結石ニ就テ、(2)外科瘻孔及創面ノ土肥氏參硫膏療法、(3)新蒼鉛驅黴劑「ミラノイエン」ノ臨床的觀察(井尻辰之助博士共著)、(4)急性脚氣ニヨル尿閉、附

之ニ偶發セル纖維素尿、(5)余等ノ臨床ニ於ケル膀胱腫瘍症例報告(井尻辰之助博士共著)、(6)陰莖整形性硬結ニ就テ、(7)巨大ナル陰囊血腫ノ一例、(8)尿道異物ニ就テ等八篇あり。

△氏は千葉縣山武郡片貝町鈴木岩次郎の次男にして、明治三十一年本籍地に生る。學究的溫厚の紳士にして、誠實なる臨床家として、社會より多大の信用と尊敬とを受けつゝある氏の今日あるは、既に博士の閲歷に歷然たる如く躍如として氏の面目を語るに足る。年齡より言へば當年漸く不惑に達し、少壯の意氣益壯にして、既に圓熟せる手腕は益々冴え、今は最も得意時代にて、勵精奮鬪、餘念なき活動振りは、猶春秋に富む將來の大成を期待せらる。賦性篤實にして溫情に富み、寬厚能く人を愛し、又能く人に親しまる。學究以外には古建築に趣味を有し、時に又旅行を樂しむ。大阪回生病院內科の菅野寬博士は義兄に當り、家族は妻芳子との間に一男一女あり。大阪市南區鰻谷東之町二一に住む。

眼科

林雄造

△長崎醫科大學教授にして眼科學擔任の首席たる林雄造博士は、京都帝大系の出身にして、東北帝大より學位を獲得せる眼科學者として錚々たる一人物にして、今や眼科學界の權威として最高學府に囑目せらるゝ教授團の一員たり。今や醫育と研究とに趣味を集中して亦他事を顧みず、多年の蘊蓄を傾倒して、一意專心、誠意誠實を以て教壇に起ち、諄々と說き懇々と講義す、其の眞摯なる態度の熱あり力ある所に林眼科の大なる存在と共に、其の特色を發揮す。

△博士は鳥取市豆腐町の出身、明治二十四年生にして、鳥取縣立第一中學校、三高を經て、大正六年京都帝大醫科大學を卒へ、副手として同大學附屬醫院に勤め、同八年東北帝大に轉じ同大助手となる、翌九年任東北帝大助教授、醫學部眼科教室勤務、同十二年六月東北帝大より學位受領、同年依願本官を辭し、倉敷中央病院眼科醫長として就任、次で現職に任命今日に至る。

△學位主論文は「虹彩脫出ヲ伴ヘル穿孔性角膜缺損ノ治癒ノ機轉ニ關スル實驗的研究」(獨文)、參考論文に、(1)家兎眼ニ於ケル眼球乾燥症ニ關スル實驗的研究、(2)「エゼリン」ノ健康眼ニ及ボス影響、(3)水晶體摘出眼ノ視機能、(4)水晶體摘出眼ノ視機能、(5)眼窩內腫瘍ノ壓迫ヲ受ケタル眼ノ組織的所見等あり、他にも論著多し。

△眞面目なる學究の人にして、又臨床家として多年の經驗を有す。資性篤實溫厚、謙遜家にして自ら持するに薄く、恬澹無慾にして克く人を愛し、毀譽褒貶の如き毫も意に介せざるが如し。年齡漸く不惑に入る六、年壯の意氣と共に

正に活躍の時代にあれば、洋々たる前途は更に期待せらる。

◇

鹿兒島　茂

△熊本醫大教授にして、眼科界現代の一權威たるべき鹿兒島茂博士は、千葉醫專の出身にして、明治三十九年同校卒業後、直ちに東京帝大教授河本重次郎博士に就き眼科學研究、同四十年より四十四年まで大牟田市に於て開業、同四十五年東京外國語學校獨乙語科入學、大正三年同校を卒へ、同三年より十年まで東京帝大病理學教室にて眼科病理學並に一般病理學研究、同六年千葉醫專奬學會より業績優秀に付金牌並に賞狀を受く、同九年千葉醫專附屬醫院眼科副醫長囑託、同十二年千葉醫大專門部講師並に同附屬醫院眼科副醫長囑託、同年六月東京帝大より學位受領、同年任千葉醫大專門部教授、同時に同學附屬醫院眼科醫長を命ぜらる、同十三年三月眼科學研究の爲め滿二年間獨、英、瑞、米諸國へ留學を被命、同十四年十月歸朝、同十五年任公立大學教授、補熊本醫大教授、同年東京帝大教授緒方知三郎博士學士院賞受領に際し共同作者として授與式參列招待を受く。

△學位主論文、(1)『「ヴイタミン」A缺乏症（眼乾燥症）ノ實驗的研究』、(2)『「ヴイタミン」A缺乏ト佝僂病トノ關係ニ就テ』、參考論文、(1)角膜周邊ニ於ケル溝形成（周邊溝角膜炎並ニ角膜周邊部擴張症ニ就テ）、(2)表存性周邊角膜炎ノ三例並ニ其病理解剖學的知見附周邊溝角膜炎トノ關係、(3)角膜出血ニ於ケル前房血液採物質ノ分光器的及化學的知見、(4)脚氣ニ於ケル眼ノ解剖學的變化（特ニ視神經ノ變化ニ就テ）、(5)脚氣ニ於ケル三叉神經ノ變化ニ就テ、外二篇あり。

△久留米市日吉町鹿兒島始の長男、明治十五年生る。篤學者にして大正十二年には緒方知三郎博士外三名と共に論文優秀なりとして日本病理學會より第一回ウイルヒョウ賞金及賞狀を受け、又千葉猪鼻奬學會より學術研究補助として金參百圓を受く、翌十三年には外國留學に付赤坂離宮に於て　攝政宮殿下に拜謂を賜ひ、次で　賢所參拜被仰付など、博士の面目躍如たるものあるを見る。次で瑞國ベルン大學に學ぶやジーグリス教授及びジュルギー教授に就て眼科學及び眼科藥物學を專攻せり。歸朝後新知見と多年の蘊蓄を披瀝して教壇に起ち、熱誠克く學生の指導に當り內外の信望を博す。趣味として世界各國紙卷煙草の箱を蒐集す、亦風變の道樂と云ふべき乎。中島實醫博は義兄（妻の兄）に當り、平和なる家庭は妻田鶴子との間に一男あり。熊本市水前寺今七三六に住す。

◇

得能孝平

△高松市七番町に得能眼科病院あり、院長得能孝平博士は京大出身の眼科學者にして、斯科界の御大淺山郁次郎教授の愛弟子として知られ、元岡山醫大名譽教授故上坂熊勝博士に師事して間腦殊に第一視覺中樞の研究を爲し、又嘗て獨逸に留學するや、伯林大學眼科教授クリユツクマン博士に就きて研鑽大に得る所あり。母校より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。深遠なる學殖と共に、臨床に多年の經驗を有し、今や獨自の舞臺に活躍するところに博士獨特の手腕益々展ぶ。

△富山縣西礪波郡吉江村得能通孝の四男、明治十二年生る。石川縣立第一中學、四高を經て、明治三十九年京都帝大醫科大學を卒へ、翌四十年一月同學助手拜命、眼科教室に入り淺山博士に師事す、同年十二月日赤香川支部病院眼科醫長に就任、大正十年十月より十二年八月迄岡山醫大解剖學教室に入り上坂博士指導の下に研究す、同十二年九月渡歐、主として伯林大學眼科教室にて研究、次で獨逸國內諸大學を歷遊し翌十三年五月歸朝復職す、其間同年四月學位を受領す、大正十五年六月同支部病院長に就任、昭和二年三月辭職、同年十月開業して今日に至る。

△學位主論文は「哺乳動物ノ第一視覺中樞ニ於ケル視神經纖維ノ分佈狀態ニ就テ」にして、參考論文は、(1)半球視覺中樞部ヨリ第一視覺中樞ニ至ル遠心視覺纖維ノ分佈狀態ニ就テ、(2)視覺中樞路ノ起首部ニ就テ、(3)猿ノ第一視覺中樞ニ於ケル視神經纖維ノ分布狀態ニ就テ、(4)家兎ノ視神經牀核ニ就テの四篇なり。

△文學博士得能文は博士の兄にして、嘗て岩手縣知事たりし法學士得能佳吉は弟なり、學究的溫厚の紳士にして、年齒今や知命に入る六、元氣旺盛にして學識、手腕、人格共に老熟の域に入りて一段の貫祿を加ふ。診療に臨むや甚だ熱心にして眞劍、克く誠意誠實を以てし、飽くまで親切を盡す。蓋し其の今日あるまでに學を錬り腕を磨くに餘念なかりしは言はずもがな、常に德操の堅持を心掛け自ら精神の修養を怠らざりし事實は見逃すべからざるものあり。居常暇を得れば謠曲を語り以て情操の修養に力め、又繪畫をよくし藝術を愛好す。妻直子は故藥、工學博士高峰讓吉の姪にして二男四女あり、清福圓滿にして團欒たり。

◇

足利陸朗　△多士濟々たる陸軍々醫界に於ける一異彩として玆に推奬品隲せんとする足利陸朗博士は、陸軍一等軍醫正にして、現に第九師團軍醫部長の職にある一人物也。博士は大阪高醫出身の眼科學者にして、京大派の巨目、市川（清）教授に師事して斯學の研鑽を積み、解剖學は京大教授小川（睦之助）及舟岡（省吾）兩博士の指導を受けて京都帝大より學位を得たり。陸軍に出仕して以來多年軍醫界に奮鬪活躍し至誠一貫、益々奉公の念を以て斯界の爲め奮盡勵精しつゝあるは、爲國家欣幸とする處也。

△博士は明治四十年大阪府立高醫を卒へ、同四十一年任陸軍三等軍醫、同四十三年任二等軍醫、大正三年任一等軍醫其間補歩兵第八聯隊附、和歌山衞戍病院附、同十一年任三等軍醫正、補大津衞戍病院長兼歩兵第九聯隊附、同十三年補會寧衞戍病院附、自十年至十三年公務の傍ら京都帝大眼科學教室及解剖學教室にて研究に從事し、同十四年十二月學位を受領す、同年補第十九師團軍醫部員、同十五年補奈良衞戍病院長兼第三十八聯隊附、昭和五年金澤衞戍病院長に昭和七年現職に補せられ今日に至る。

△學位主論文は「視器ノ解剖的研究」にして、(1)涙道ノ解剖（涙道ノ全徑路ニ就テ組織學的檢索ヲ試ム）、(2)眼組織ニ於ケル「カリウム」の分布（眼諸組織ニ於ケル「カリウム」ノ分布ヲ顯微化學的ニ證明ス）、(3)邦人ニ於ケル眼面積、眼位置及角膜亂眼ノ研究、の三篇よりなる。參考論文は、(1)近視ノ原因ニ就テ、(2)一種ノ視野檢査法ニ依ル綠內障視野計測ノ結果ニ就テ、其他十三篇あり。他にも論著不尠。黃班及血管暗點ノ研究、(3)余ノ視野檢査法ニ依ル綠內障視野計測ノ結果ニ就テ、其他十三篇あり。他にも論著不尠。

△博士は京都府士族川越賢滿三男、明治十九年の出生にして大阪市西淀川區大和田町足利三一に養はる。當年知命に達す、覇氣滿々、剛健の氣魄に富み精力甚だ旺盛也。其今日ある閲歷は博士の前半生史に盡きて躍如たるものあるを思はしむ。人に對する居常能く應答の禮を重んじ尺牘また雅趣豐かにして親切なるは多とすべく、人と爲り溫恭にして寛厚、能く人を容れ部下を愛撫す、高邁なる人格は人をして敬慕の念を起さしむ。春秋猶豐富、幸に爲國家自重加餐を祈るや切也。金澤市下本多町六ノ二に住む。

◇

瀨木本雄　△名古屋市中區門前町六丁目に古き歷史を有する瀨木眼科病院あり、眼科界の老大家ドクトル、メヂチーネ瀨木本雄博士の經營にして、開業拮据三十數年を閲し、今や牢乎拔くべからざる地盤を有す。院長瀨木本雄博士は名古屋醫大の前身愛知醫學校出身の篤學者にして、東大醫學部攝科に學び、又嘗て獨逸に遊學するや、ミュヘン大學にて、研鑽大に得る所あり、歸朝後論文を東京帝大に提出して學位を獲得せり。

△主論文は毛染藥（白髮染）の眼に及ぼす影響に就て研究せるものにして、外に參考論文として、(1)前葉膜ノ「レプラ」腫ニ就テ（獨文五篇）、(2)靜岡縣榛原郡下ニ棲息スル野鼠耳殼內寄生赤蟲ニ就テ、(3)地方病「秋疫」ノ眼症狀ニ就テの三篇あり。要するに博士は坊間販賣する毛染藥が屢々眼の炎症を惹起するの事實に注意し、毛染藥に因りて起りたる一例の眼炎を檢査し、其の一種特有なる症狀を呈する事を述べて之れに白髮染性結膜炎及び白髮染性角膜炎なる名稱を附し、尙ほ坊間販賣する所の毛染藥につき化學的試驗を施し其の主成分は「パラフエニーレンヂアミン」及

び過酸化水素液なることを確め、此の各々につきて動物試驗を行ひ、眼に對して最も有害なるは此の二種の藥の混合によりて生ずる所の物質即ち「ヒノンデイミン」なるべきを論證せり。

△三重縣桑名郡古美村の人、明治七年生る、同二十九年愛知醫學校卒業後、東京帝大醫科大學撰科、介補を經て、同三十六年名古屋市に開業、同四十二年獨逸國に私費留學し、ミュヘン大學にてドクトルの學位を得、大正元年歸朝以來從前通り再び開業に從事し、傍ら醫學の研究を續け、同十四年三月學位を受領せり。

△博士は開業の傍ら具に辛酸を嘗め、獨學力行、研究に努力精進して克く學位論文を完成して學位を得たる不撓不屈の精神は頂門の一針として學ぶべき也。老齢今や耳順に入る二歳、壯健にして今猶仁術の爲勵精努力しつゝあるは範とするに足る。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、又運動を好む。夫人せき子は國漢の中等教員免狀を有し又女醫として院務及び家政を處理し、長男本立博士は目下東京市立大久保病院眼科醫長、東京市技師たり、又好繼ありと云ふべし。

◇

梶川甚一　△神戸診療界は近時醫博人物に富む、神戸區花隈町五四四眼科梶川病院長ドクトル、メヂチーネ梶川甚一博士の如きは、斯科界の大家として推奬せざるを得ず。博士は金澤醫專の出身にして、嘗て墺國ウイン大學にてフツクス教授指導の下に眼科學を研究し、歸朝後慶大より學位を獲得せり。

△主論文は「交感神經ノ興奮傳導ニ就テ」にして、(1)麻醉部位ニ於ケル興奮傳導、(2)寒冷及溫熱ニヨル神經麻痺部位ノ長サトノ關係、(3)麻醉部位ニ於ケル大小興奮波ノ運命ヲ論ズ、(4)小興奮波「サブノルマン、インプルス」ノ麻醉部位傳導の四篇より成る。參考論文に獨逸文の原著三篇あり。

△顧みて其の學歴及び閲歴を概括すれば、明治四十二年金澤醫專を卒へ、直に同校助手として眼科教室に勤め、東京帝大河本博士につき眼科學を研究す、大正十年一月より十三年十一月迄獨米留學、主として墺國ウイン大學にて研究歸朝後慶大醫學部生理學教室にて研究中、同十四年四月學位受領、爾來神戸市にて開業今日に至る。

△廣島縣比婆郡比和町の人、明治十七年生れなれば、當年知命に入る二歳、平生健康にして精力甚だ旺盛也。學究的眞面目なる好紳士にして、其の今日ある篤學は博士の前半生史に盡きて精彩を添ふ。今は多年の經驗と共に手腕愈々圓熟して最も重望せられ、殊に臨床に甚だ熱心にして、患者に對する懇切なる態度と、眞摯にして熱情ある誠意とは極めて評判良く、其の高邁篤實にして寛容なる人格は大に尊敬せらる。學生時代よりの讀書家にして、今猶克く内外專門の書を渉獵して精研に餘念なく、また近來特に旅行を樂しむ、博士や春秋猶豐富、切に自重加餐を祈る。

◇

矢田清一郎　△沼津市五本松に在る矢田眼科病院と、靜岡縣三島町に在る矢田眼科分院と、熱海町にある熱海病院とは、何れも矢田清一郎博士の經營主宰する所にして、嘖々たる評判は其の地方を風靡し、斯科界獨歩の觀あり。

博士は京大出身の眼科學者にして、大學院在學中恩師市川清博士に就きて斯學の蘊蓄を究め、母校より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。學位論文は、絲内障の原因に就ての實驗的研究にして「マノメーター」を改善して我國に於て初めて眼壓曲線を微細に描記せしむる事に成効し、現今眼科學會に於ける實驗的眼壓研究の基礎となれるものなり。

△即ち主論文は「眼壓ト循環器係トノ關係ニ就テノ實驗的研究」と題し、(1)眼壓測定法ニ就テ、(2)大血管ニ於ケル行血停止ノ眼壓ニ及ボス影響ニ就テ、(3)液體ノ靜脉内注入並ニ出血ノ眼壓ニ及ボス影響ニ就テ、(4)血管ヨリ注入セル藥物ノ眼壓ニ及ボス作用ニ就テ、の四篇より成り、參考論文は、(1)摘出蛙眼ノ瞳孔ニ對スル滲透壓並ニ藥物ノ作用ニ就テ、(2)「ノイリン」ノ藥物的研究補遺、(3)最近十年間我教室ニ於テ網膜剝離ニ對シテ行ヘル後部葦膜圓鋸法ノ統計的觀察の二篇なり、他に論著夥多あり。

△博士は靜岡縣立韮山中學、八高を經て、大正八年京都帝大醫學部を卒へ、同十年八月同學部眼科教室に入つて研究同十一年三月大學院入學、同十四年二月岡山縣倉敷中央病院眼科醫長に就任、同年七月學位受領、同十五年三月靜岡縣三島町に矢田眼科病院を開設し、昭和二年六月更に沼津市に矢田眼科病院を建築せり、こは當時我國に於る眼科專門の病院としては設備構裝の點一二を爭ふものにして之を本院となし、從來の三島町にある病院を分院として一般診療に從事し、昭和八年四月湯の街熱海に熱海病院を建設し今日に至る。尙沼津本院副院長の三條かの子女史は京都帝大に論文を提出し昭和九年七月學位を獲得せり。

△感想に曰く『眼科の專門家として余は「トラコーマ」の藥物的治療法卽ち梅毒に於ける「サルバルサン」の如きものゝ現出を希望し又自らも努力研究して居るがまだまだ、醫師として又一市民として考へる事は醫療費の高價な事だ、然し藥や經營費が高い故醫師其者に罪はないが、宣しく醫療國營となる事を希望して居る、さすれば澤山の貧窮者は今日より多く救はれる事だらう、尙又現今は特に邪教迷信の案外根强くして醫療は元より他の方面に於てもそれに迷はされる小羊の多い事だ何とか之等の盲せる人を開眼させてやる施政はないものか』云々。

△靜岡縣田方郡田中村矢田忠庸長男、明治廿六年生る。學究的溫厚の紳士にして、年壯の意氣に燃え研究心に富む、今は分別盛にてロイド眼鏡姿の風貌に愛嬌を浮べ、凜々としたところに學者らしき威嚴を藏す。旅行好にて時に名所又は溫泉地に淸遊するを樂しみとし、極貧者の救助を道樂とす、又秀才教育に趣味を持ち數名の秀才を高等の學校に入れ、鄕里近傍の小學校に矢田奬學會を設置せり。居常の趣味としては碁及び和洋の音樂を愛好す。

◇

末盛進

△神戸市下山手通五ノ二六に末盛眼科醫院あり、新興せる末盛進博士の診療所也。開業拮据數年繁榮藏と共に益々向上發展の盛況を呈す。博士は新潟醫專出身の眼科學にして、京都帝大より學位を獲得せる篤學の名醫博也。臺灣醫專教授として久しく醫育界の爲め盡瘁し、歐洲留學より歸朝後間もなく教職を辭して以來、診療界に精進し、今や獨特の手腕を發揮しつゝある前途は益々賴母し。

△廣島縣高田郡秋越村醫師末盛一江の長男、明治二十五年生れにして、廣島縣立三次中學校を經て、大正五年新潟醫專を卒へ、同年十月京都帝大附屬醫院醫員介補を命ぜらる、同六年七月臺灣總督府醫專講師として赴任し、同時に日赤臺灣支部醫院醫員を命ぜらる、同九年八月任日赤臺灣支部醫院眼科醫長心得、同十年八月任臺灣總督府醫專助教授、同十一年四月任同上醫專教授、同年九月臺灣地方病及傳染病調査臨時委員を被命、同十二年五月同上醫院眼科醫長となる、同十四年八月歐洲各國に留學を被命、同年同月學位受領、同十五年十一月歸朝と同時に復職す、昭和三年二月依願職を辭し現住地に於て開業今日に至る。

△主論文は『眼瞼及眼窩ニ於ケル肺「ヂストマ」寄生ノ病理』に關する研究なり、卽ち脫囊直後の幼蟲又は種々なる發育期にある肺「ヂストマ」を以て犬、家兎の眼に就き試驗を行ひ前房硝子體及網膜の出血葡萄膜睫膜等の破壞病變等臨床上并に鏡檢上興味深き成績を得たり、然れども之等の實驗に於ては人間に見らるゝ眼球突出蟲樣囊腫形成は之れを證明し得ざりしを以て、更に人間の眼窩の構造に能く類似せる眼窩を有する猿を選び種々なる發育の狀態にある本蟲を以て試驗し遂に眼球突出蟲樣囊腫形には相當に發育を遂げたる蟲の移入並に完全に閉鎖されたる眼窩の必要條件なる事を知り得たり。參考論文は、(1)蛔蟲感染初期ニ於ケル眼病變ニ就テ、(2)結膜ニ及ボス蛔蟲有毒性物質ノ作用の二篇なり。

△篤學者にして其の今日ある閱歷は博士の前半生史に鄭きて精彩を放つ。年齒不惑に入る漸く四歲、年壯の意氣旺盛にして、今は學識、手腕、人格共に益々圓熟の佳境に入り、活躍の全盛時に在り。學者タイプの風貌を備へ、眞面目なる裡に溫情を藏す。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、研究以外には常に德操を堅持して自ら品性の陶冶に力

むる風あり。

竹内正夫　△京都府福知山町に眼科及び内科を專門として、再び其鄕里に開業せる竹内正夫博士は。京都帝大系の年壯學者にして、大學院在學中市川淸教授に眼科學を、辻寛治教授に就きて內科學を專攻し造詣する所深し。其後象牙の塔に人と爲り、教授として長崎醫專に眼科學を講ぜしが官を辭して以來獨立の舞臺に活躍し、年來の聲望と相俟つて堅き地盤を有す、診斷の評判は其遠近に嘖々たるを聞く。一面又た福知山體育協會を設立し、自らリーダーとして體育の指導奬勵とスポーツ精神の普及に專念努力し、今後共終生の事業として該運動に盡力せんとす。治療方面と併せて向後の活躍を望むや切也。

△京都府福知山町竹內正紀の長男、明治二十四年生れにして、兵庫縣立第一中學、三高を經て、大正五年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學副手として眼科學教室に勤務し市川教授に師事す、同七年內科學教室に轉じ辻教授の指導を受く、同八年鄕里福知山に開業二年の後、同十一年一月京都帝大大學院に入學し再び市川、辻兩教授の下に眼科、內科を專攻す、同年八月任長崎醫專教授眼科學擔任、同十四年官を辭し、同年八月京都帝大より學位を受領す、爾來再度鄕里にて開業今日に至る。

△學位主論文は『網膜並ニ脈絡膜ノ化學的組織』にして、(1)酵素ニ就キテ、(2)「アミノ」酸ニ就キテ、の二篇より成る參考論文は、(1)蛋白尿性網膜炎ニ就キテ、(2)白內障手術ノ時期ニ就キテ、(3)麻痺狂患者剖檢ノ際得タル視神經內脂肪物質ノ顯微化學的檢索、(4)交感性眼炎ノ一稀例、(5)人眼網膜ノ生體染色ニ就キテ、(6)進行性黃斑部變性症ト色素性網膜炎トノ連鎖手、(7)近視眼ニ就テ、(8)視神經ニ出現スル脂肪質ノ實驗的研究の八篇なり。他にも論著夥多あり。

△年齒漸く四十有五歲、年壯銳氣に富み、學究的臨床家として今は最も圓熟せる腕盛に在り。スポーツに多大の趣味を持ち、斯道奬勵の爲め盡瘁活躍する所あり、現に主宰する福知山體育協會に目下會員六百名を算し益々發展隆興の域にあり。而して居常人に對するに應答の禮意缺ぐことなく、親切にして理解と同情とを以て終始す、平生多忙なる臨床家にしてその眞摯なる態度は紳士的也。

◇

佐藤達彌　△札幌鐵道病院長兼眼科醫長佐藤達彌博士は、長野縣北佐久郡中津郡佐藤爲太郎の長男、明治二十四年に生る、長野縣立野澤中學、七高造士館を經て、大正七年東京帝大醫科大學を卒へ、爾來副手として東京帝大眼科教室並に附屬醫院に勤め河本重次郎博士に師事、同九年任鐵道醫、札幌鐵道病院眼科醫長を命ぜらる、同十三年北海道帝大醫學部病理學教室にて研究、同十四年札幌鐵道病院副院長兼眼科醫長、同年十月學位受領、昭和二年六月鐵道省より在外研究員を命ぜられ、十月一日出發渡歐、主として獨逸、墺太利に於て眼科診療の實際を研究し、更に米國を見て昭和五年二月歸朝す、同年二月一日從五位に陞敍、昭和七年八月札幌鐵道病院長兼眼科醫長を命ぜられ以て今日に至る。

△主論文は「眼諸組織ノ特異性ニ關スル病理學的研究」にして、參考論文は、(1)近視眼特ニ其視力ニ就テノ統計的觀察、(2)結膜及ビ眼瞼澱粉樣變性ノ症例、(3)節骨竇「ムコツエーレ」ノ一例、(4)眼窠膿瘍並ニ蜂窠織炎ニ就テ、附テーン氏裏炎外五篇あり。學位は北海道帝大より獲得せり、

△感想に曰く「逐年醫師は增加し過剩の時期も遠からず其經濟的脅威も追々と迫まる趨勢にあるも邊土にありては尙充分なる醫療を求められざる狀態にある。此間に處しては官公衞生醫療機關の整備發達と共合理的統制は尤も重大なる意義を有するものと考へらる、之に就ての私見は他日に讓ることゝする」云々。讀書家にして今猶精研に餘念なし福德圓滿の風姿に溫容を藏し、其態度の眞實にして紳士的なるを慶ぶ。札幌市北八條東四丁目鐵道官舍に住す。

◇

伊藤信次　△東京市足立區千住大川町四八に伊藤眼科醫院あり。伊藤信次博士の經營にして、開業拮据數年に及び今日に至れるものなるが、內部の設備整ひ、診療、手術の好評は益々民衆の人氣を吸收し、今や牢乎として拔くべからざる地盤を築き、年々歲々向上發展の域に在り。博士は千葉醫專出身の篤學者にして、京大敎授市川淸博士に就きて研鑽、「實驗的網膜視神經結核」に關する鴻大なる學位論文を完成して、京都帝大より學位を獲得せる年壯の名醫博也。

△博士は大正五年千葉醫專卒業、同十一年二月より十三年九月まで京都帝大醫學部眼科敎室にて研究、同十三年九月日赤兵庫支部姫路病院眼科醫長として赴任、同十五年三月學位受領、同年九月臺灣總督府醫院醫長兼臺灣總督府醫專敎授拜命、眼科學を擔任せり、昭和三年九月職を辭し現住地にて眼科開業今日に至る。

△東京府南足立郡花畑の出身、明治二十七年生る。篤學者として其の今日ある閱歷は、博士の面目を語るに充分なり。今は分別盛にて年齒漸く不惑に入る二歲、年壯の意氣益々壯にして日夜倦むことを知らず、熱心克く臨床に精進して誠實と親切とを盡し、患者をして信賴と尊敬の念を深からしむる點は、博士の長所と見て可也。人と爲り穩健篤實にして、和氣溫情に富み、謙遜家にして己れを虛うする態度は尊ぶ可し。

◇

畑文平　△現代眼科界に於ける一權威として最高學府に勢力を有し、現に眼科敎授として岡山醫大に其人ありと嘱目せられつゝあるは畑文平博士なり。博士は東大系の耆宿河本（重次郎）眼科に巢立ちたる一秀才にして、大學院在學中は恩師三田、石原兩敎授の指導を受けて眼科に關する血淸化學を研究の末、卒業と共に學位を得たる錚々たる學者として學界既に定評あり。

△顧みて其學歷を問見するに、博士は一高を經て、大正五年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに副手として附屬醫院勤務河本重次郎博士指導の下に眼科學一般研究、同七年十二月廣島縣立病院眼科部長被命、廣島縣產婆看護婦養成所講師嘱託、同十一年依願解職、同年六月東京帝大大學院に入り、同年十一月日本醫專敎授、附屬醫院眼科部長兼任す、同年三月學位受領、同年五月任岡山醫大敎授、眼科學講座擔任今日に至る。其間昭和二年より文部省在外研究員として三年間獨逸、墺太利及北米合衆國に在留し、昭和六年より岡山醫學會編輯主幹として岡山醫學會雜誌の經營に任ず。

△學位は大學院卒業に依り東京帝大より獲得せるが、主論文は「眼ト腎肝ヨリ諸臟器トノ關係ニ就テノ血淸化學的研究、併テ前房水ノ理化學的特性ニ關スル實驗的補遺」にして、參考論文は、(1)甘汞ノ涙液ニ因ル變化並ニ其ノ眼局所作用ノ「メハニスムス」ニ就テノ實驗的研究、(2)多發血管病ノ出現ヲ特異トスル一稀有滲出性網膜變性症ノ臨床的並病理的解剖的知見、(3)內眼病殊ニ硝子體溷濁症ニ對スル硝子體吸出法ノ應用知見の三篇なり。他に著書として(1)新眼科學(二卷、(2)屈折及調節異常學、(3)失明豫防讀本等あり、外論著夥多。

△感想に曰く「元來獨逸醫學を主なる母胎として成育した吾が國の醫學も、世界大戰後獨自の發達を來し、世界醫學界の水平線上に颯爽たる威容を示す樣になつたのは、日本人の負けじ魂と旺盛なる研究心の賜である。數千に上る醫學博士の輩出も決して偶然ではない。之れからは本邦に於ける業績を大に外國に認識させ萬國の大衆をして日光の惠の露に浴さしめる樣努力するのは吾々の責務でなければならない」云々。日本醫學界の爲め潑剌たる氣を吐けると共に、將來日本の學者として採るべき態度の廣且つ大なるに與す。

△博士は濱松市廣澤町の人、明治二十三年東京にて生る、當年四十有六歲也。溫厚の學者にして識見に富み、志操堅實、子弟思ひにして後進に厚く人をして敬慕せしむるの德を有し、人格崇高也。讀書家にして文雅の趣味あり、人に對するに、應答禮意缺ぐことなく、其尺牘穩健にして情潤掬すべきものあるは喜ばし。春秋猶豐富なれば、幸に健康と共に自重加餐を祈り、學界將來の爲め益々精研盡瘁あらんことを切望す。自宅は岡山市五番町十に在り。